

史跡松山城跡

－ 史跡整備等に伴う遺構確認調査等総括報告書（平成 13 ～ 29 年度） －

2022

松 山 市
松 山 市 教 育 委 員 会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター

し せ き ま つ や ま じ ょ う あ と

史跡松山城跡

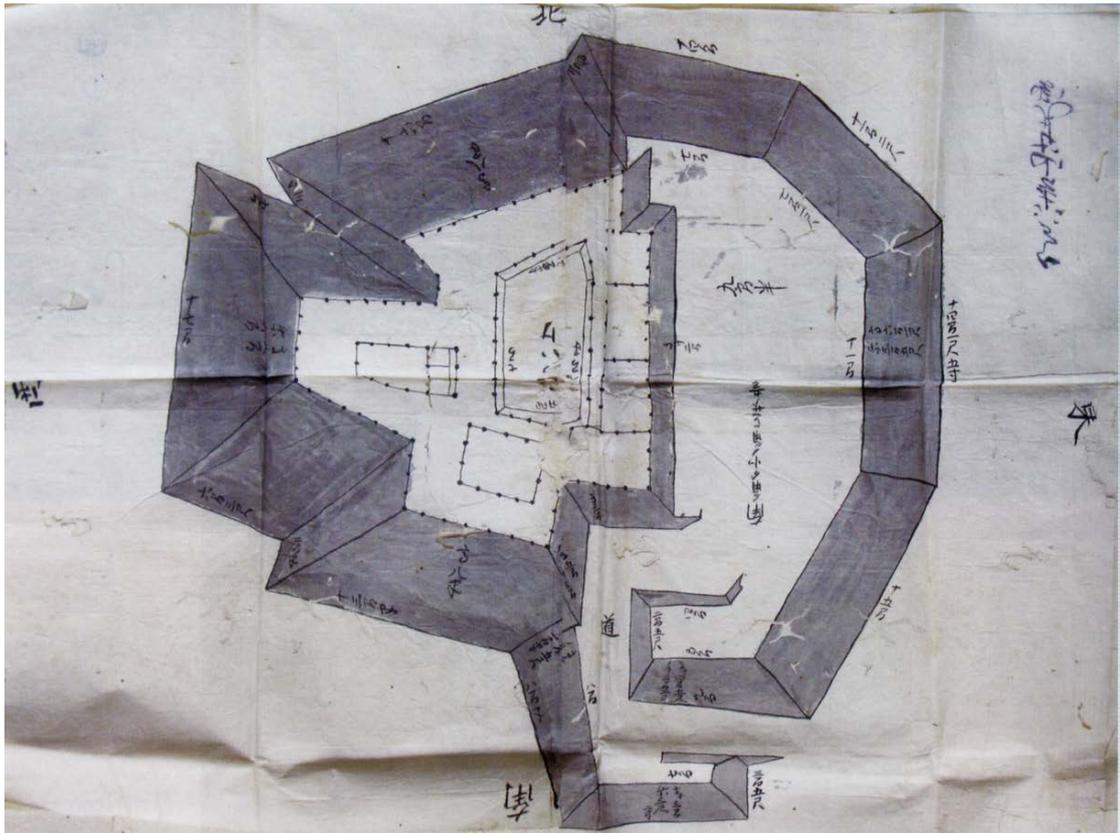
－ 史跡整備等に伴う遺構確認調査等総括報告書（平成13～29年度） －



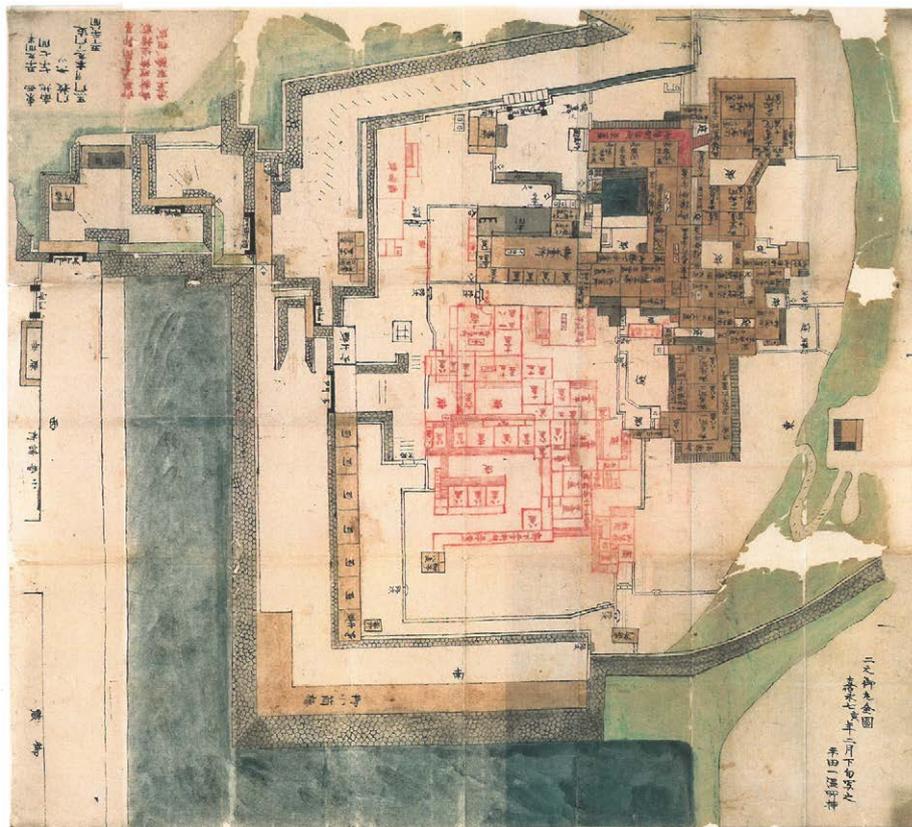
2022

松 山 市
松山市教育委員会

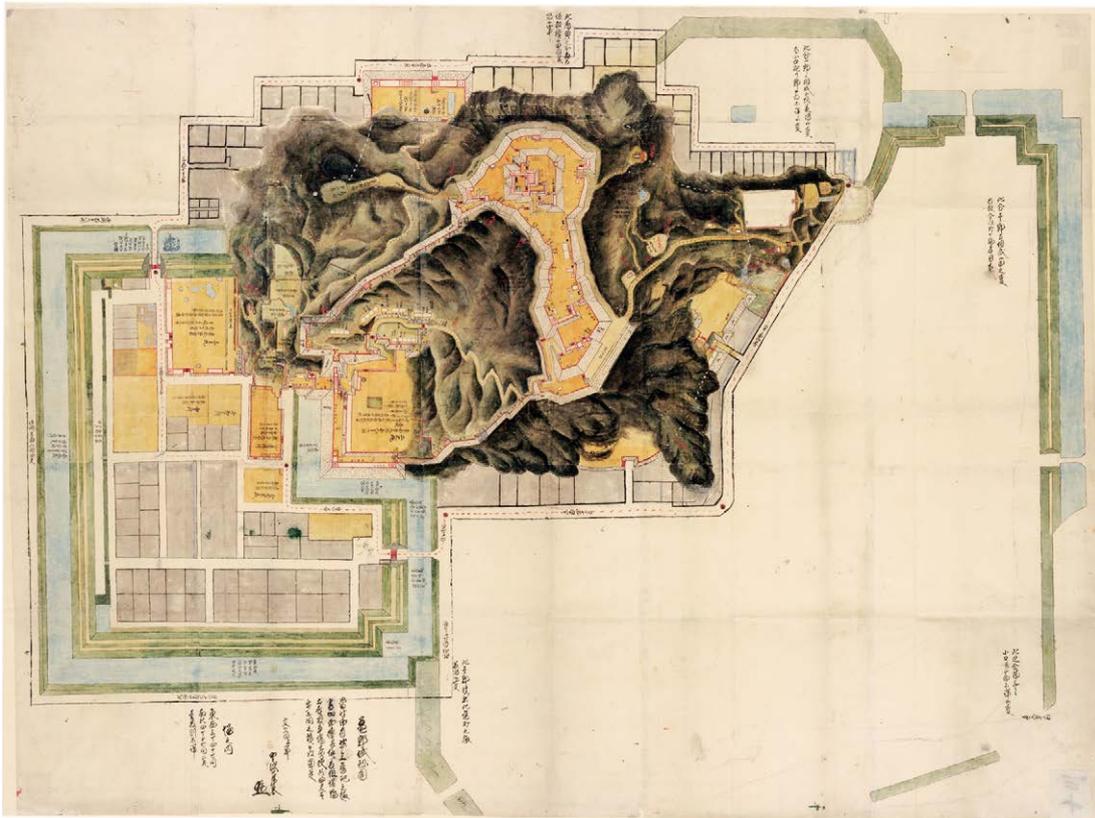
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター



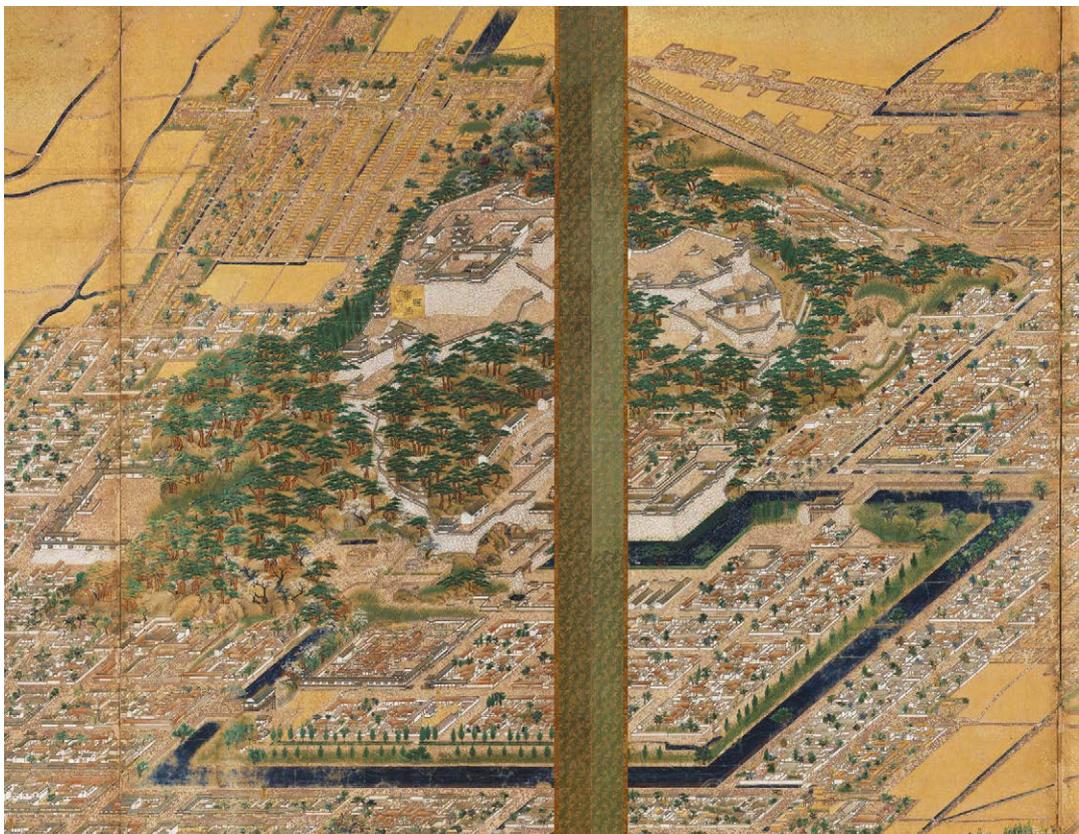
卷頭図版 1 与州松山本丸図 (甲賀市水口図書館蔵)



卷頭図版 2 二之御丸全図 (伊予市談会蔵)



巻頭図版 3 亀郭城秘図 (伊予史談会蔵)



巻頭図版 4 松山城下図屏風 (一部抜粋、愛媛県歴史文化博物館蔵)

序 言

本書は、平成13年度から29年度までに行った史跡松山城跡の整備や災害復旧に伴う遺構確認調査などの総括的な報告書です。

松山城は、江戸時代初期に戦国武将の加藤嘉明が築城を始め、その後城主になった蒲生忠知と松平氏が完成させた城郭です。現在も天守などの建造物や石垣、土塁、堀などが当時の形状をほぼ留め、昭和25(1950)年に天守などが重要文化財に、昭和27(1952)年には国史跡に指定されました。現在、本丸跡は松山市を代表する観光地として、二之丸跡は史跡庭園として、また堀之内の三之丸跡は愛媛マラソンや松山まつりなど様々なイベントに活用されています。

このように、史跡松山城跡の価値は誰もが認めるところであり、加えて近年の発掘調査などから、新しいことが明らかになっています。このうち、今回は本丸跡の防災設備整備や二之丸跡の芸予地震災害復旧や三之丸跡(堀之内)の整備などで実施した平成13年度から29年度までの調査成果を御報告します。

調査の結果、本丸跡では、これまで絵図でしか知られていなかった築城時の天守の遺構が発見されたほか、二之丸跡では、石垣裏の古墳や門の石垣の改修跡が確認されました。また、三之丸跡では、縦横に走る道路跡や馬場、侍屋敷跡などとともに陶磁器などの多くの武士の生活道具が出土しました。

このような多くの成果が得られたのは、市民の皆様の日頃からの文化財調査への御理解、そして、史跡松山城跡整備検討専門委員会をはじめ関係者の皆様の御協力によるものと、心から感謝申し上げます。これらの成果等は、来年度から開始する予定の「史跡松山城跡 城山公園(堀之内地区)第2期整備」はもちろん、今後の整備にも活かしていきたいと考えています。

結びに、本書が文化財保護や教育普及活動に貢献できれば幸いに思います。

令和4年3月

松 山 市 長
野 志 克 仁

例 言

1. 本書は、松山市が松山市教育委員会に依頼又は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に委託し、平成13年度から平成29年度までに実施した史跡松山城跡の史跡整備及び災害復旧に伴う遺構確認調査、試掘調査及び工事立会の概要をまとめた総括報告書である。

2. 編集・刊行組織は、以下の通りである。(令和3年4月1日現在)

松山市役所	市長	野志 克仁
	副市長	梅岡 伸一郎・松原 剛史
都市整備部	部長	白石 浩人
	推進官	石井 朋紀
公園緑地課	課長	兵藤 一馬
	副主幹	金浦 正臣・西村 直人
松山市教育委員会	教育長	藤田 仁
事務局	局長	井出 修敏
	次長	西村 秀典
文化財課	課長	二宮 仁志
	主幹	高橋 秀忠
	副主幹	楠 寛輝
(公財)松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田 元広
	事務局長	片山 雅央
	事務局次長兼施設管理部長	杉野 公典
	埋蔵文化財センター所長兼考古館館長	梅木 謙一
	主査	吉岡 和哉
	嘱託	大西 朋子

3. 各調査の報告は、文化財課の楠と公園緑地課の西村(直)が執筆し、編集は西村(直)が行った。

4. 本書掲載の写真は、調査・立会担当者と文化財課の楠、埋蔵文化財センターの大西が撮影した。

5. 各調査地の位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を使用した。

6. 本書で使用した標高値は海拔高を示し、座標値は日本測地系である。

7. 本書で使用した土色は、農林水産省監修の『新版標準土色帖』に準拠した。

8. 遺構は、以下の略号で記した。

SA: 柵・堀 SD: 溝 SE: 井戸 SK: 土坑 SP: 柱穴 SX: 性格不明遺構

9. 遺構の測量は、調査担当者とその指示のもと補助員及び作業員、並びに委託業者が実施した。

10. 遺物の実測及び掲載図の製図は、調査担当者、楠及び西村の指導のもと、原 富美、越智田 美紀、篠原 綾が実施した。

11. 本書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターに保管・収蔵している。

12. 調査及び整理に際に、以下の方々又は機関より、ご指導・ご協力を賜った。(敬称略)

伊予史談会、愛媛県歴史文化博物館、甲賀市、史跡松山城跡整備検討専門委員(内田 九州男、江崎 次夫、大窪 健之、小林 範之、下條 信行、高瀬 哲郎、田中 哲雄、藤本 史子、三浦 正幸)、井上 淳、井汲 隆夫、石岡ひとみ、大橋 康二、栗田 正芳、高田 徹、乗岡 実

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1	5. 三之丸跡 6・12 次調査	125	
第 1 節	調査に至る経緯	1	6. 四国がんセンター解体に伴う試掘調査	135	
第 2 節	調査・整理組織	3	7. 四国がんセンター宿舎・擁壁解体に伴う試掘調査	139	
第Ⅱ章	遺跡の立地及び環境	4	8. 市営野球場・同庭球場観客席解体・土塁保護に伴う試掘調査	143	
第 1 節	立地	4	9. 三之丸跡 7・8・10 次調査	150	
第 2 節	歴史的環境	4	10. 三之丸跡 9 次調査	164	
第Ⅲ章	調査の概要	8	11. 三之丸跡 11 次調査	168	
第 1 節	本丸地区の調査	8	12. 三之丸跡 13・15 次調査	174	
1.	本丸跡芸予地震災害復旧事業に伴う試掘調査・本丸跡 2・3 次調査	10	13. 三之丸跡 14・16・17 次調査	181	
2.	本丸跡 4 次調査	20	14. 三之丸跡 18・19 (1 区)・20 次調査	195	
3.	本丸跡 5・6 次調査	23	第Ⅳ章	まとめ	210
4.	本丸跡 7・8 次調査・本丸防災設備等整備事業に伴う工事立会	33			
5.	東雲口登城道整備工事に伴う確認調査	42			
6.	城の内 2・4・5 号墳	46			
第 2 節	二之丸地区の調査	54			
1.	二之丸跡 4 次調査・二之丸跡芸予地震災害復旧事業に伴う工事立会	56			
2.	槻門跡 1・2・3 次調査	65			
3.	黒門跡 1・2・3・4 次調査	72			
第 3 節	三之丸地区の調査	80			
1.	県営ラグビー場跡地試掘調査・三之丸跡 1・2 次調査	82			
2.	三之丸跡 3 次調査	94			
3.	三之丸跡 4 次調査	104			
4.	三之丸跡 5 次調査	115			

第 I 章 はじめに

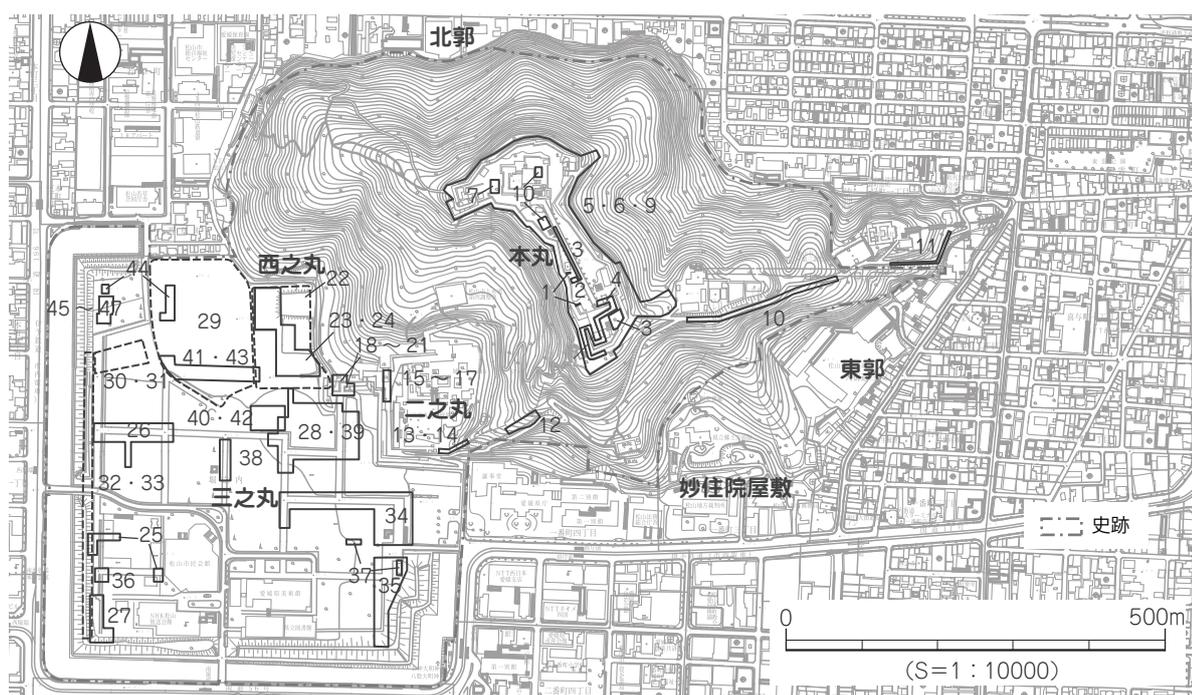
第 1 節 調査に至る経緯

本書は、平成 13（2001）年度から平成 29（2017）年度にかけて、文化庁国庫補助事業として、松山市が史跡松山城跡内で行った試掘調査や確認調査の成果の概要を総括した報告書である。

この間、松山市では、平成 12（2000）年に策定された、三之丸跡を対象とした「城山公園（堀之内地区）整備計画」を踏まえ、三之丸跡に所在した野球場や競輪場、庭球場、プールといった市営スポーツ施設や四国がんセンターなどの郊外への移転と跡地の整備を進め、平成 22（2010）年、三之丸跡南側の第 1 期整備を終えた。今回の報告する調査の過半は、この第 1 期整備と、今後予定している三之丸跡北側の第 2 期整備に先立ち、その基礎データとなる江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容等を把握するために行ってきたものである。なお、調査にあたっては、史跡内であることを踏まえ、必要最小限の範囲とすることに特に留意した。

一方、松山市では、平成 13（2001）年の芸予地震により、二之丸跡（特に石垣）を中心に生じた被害の復旧や、東雲口登城道や県庁裏登城道の整備、本丸跡における消火設備等の整備など、三之丸跡以外でも様々な整備事業を進め、それらに先立っても、被害原因や設備の設置に伴う埋蔵文化財への影響等を把握するために調査を行ってきた。また、令和元年には、史跡の管理団体として、今後の史跡の管理・活用・整備の基本的な考え方をまとめた「史跡松山城跡保存活用計画」を策定した。

以上のように、これらの調査は史跡内全域にわたり、件数は 47 件に上る。そこで、本報告書では、本丸地区（本丸跡に加え山腹の東雲口登城道や県庁裏登城道を含む）、二之丸地区（二之丸跡に加え周辺の黒門跡や槻門跡を含む）、三之丸地区（三之丸跡に加え隣接する西之丸跡を含む）の 3 地区に分けた上で、関連のある調査は一括するとともに、遺構・遺物については各調査における代表的なものを抽出して報告する。



第 1 図 調査区位置図

調査に至る経緯

地区	調査地	調査回数ほか	調査年度	調査目的	調査組織	近世の用途	主な遺構	備考	位置図 番号
本丸地区	本丸跡	災害復旧に伴う試掘調査	H13年度	災害復旧	市教委	本城	石垣裏込め、盛土	芸予地震	1
		2次調査	H14年度	災害復旧	市教委	本城	石組溝	芸予地震	2
		3次調査	H15年度	災害復旧	市教委	本城	石組溝	芸予地震	3
		4次調査	H17年度	環境整備	市教委	本城	石組溝		4
		5次調査	H23年度	防災対策	市教委	本城	石組溝、建物縁石、門跡、暗渠、盛土		5
		6次調査	H24年度	防災対策	市教委	本城	石垣、石組溝、門跡、池跡、土坑		6
		7次調査	H27年度	防災対策	市教委	本城	柱穴、盛土		7
		8次調査	H27年度	防災対策	市財団	本城	柱穴		8
		防災設備整備に伴う工事立会	H27・28年度	防災対策	市教委	本城	石組溝、石垣栗石層		9
	東雲口登城道	確認調査(史跡内)	H16年度	環境整備	市教委	城道	遺物包含層(弥生時代)		10
		確認調査(史跡外)	H16年度	環境整備	市教委	神社	土塀基礎	史跡外	11
		城の内古墳群	2・4・5号墳	H17年度	環境整備	市教委	山林	古墳(竪穴式石室、横穴式石室、周溝)	
二之丸地区	二之丸跡	4次調査	H14年度	災害復旧	市教委	御殿	石列、石組溝、礎石、門跡、古墳(横穴式石室)	芸予地震	13
		災害復旧に伴う工事立会	H15年度	災害復旧	市教委	御殿	石垣	芸予地震	14
	櫓門跡	1次調査	H16年度	災害復旧	市教委	門	石垣、礎石	芸予地震	15
		2次調査	H17年度	災害復旧	市教委	門	石垣、礎石、土坑	芸予地震	16
		3次調査	H17年度	災害復旧	市教委	門	石垣裏込め	芸予地震	17
	黒門跡	1次調査	H18年度	保存修理	市教委	門	石垣、柱穴		18
		2次調査	H19年度	保存修理	市教委	門	石垣		19
		3次調査	H19年度	保存修理	市教委	門	石垣		20
		4次調査	H20年度	保存修理	市教委	門	石垣、堀、柱穴		21
三之丸地区	三之丸跡	県営ラグビー場跡試掘調査	H13年度	環境整備	市教委	園地(西之丸)	石組溝		22
		1次調査	H14年度	環境整備	市教委	園地(西之丸)	石垣、石組溝、井戸		23
		2次調査	H15年度	環境整備	市教委	園地(西之丸)	石垣、石組溝、礎石、土塀基礎		24
		3次調査	H16年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	道路、石組溝、土坑、土塁		25
		4次調査	H16・17年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	道路、石組溝、土坑		26
		5次調査	H17年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	道路、土塁、池、排水口		27
		6次調査	H18年度	環境整備	市教委	役所、侍屋敷、通路	石垣(小普請所)、道路、石組溝、堀、土坑		28
		四国がんセンター解体に伴う試掘調査	H18年度	施設解体	市財団	御殿、門	石垣(北御門)、石組溝、土塁		29
		四国がんセンター宿舍解体に伴う試掘調査	H18年度	施設解体	市教委	侍屋敷、通路	(未検出)		30
		四国がんセンター宿舍擁壁解体に伴う試掘調査	H19年度	施設解体	市教委	侍屋敷、通路	道路、石組溝、馬場土手		31
		野球場観客席解体に伴う試掘調査	H18年度	施設解体 保存修理	市教委	土塁	土塁		32
		庭球場観客席解体に伴う試掘調査	H19年度	施設解体 保存修理	市教委	土塁	土塁		33
		7次調査	H19年度	環境整備	市教委	役所、侍屋敷、通路	道路、石組溝、堀、土坑、柱穴		34
		8次調査	H19年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	道路、石組溝、石組柵		35
		9次調査	H19年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	道路、石組溝		36
		10次調査	H20年度	環境整備	市教委	役所、侍屋敷、通路	柱穴、石列、土坑		37
		11次調査	H20年度	環境整備	市教委	侍屋敷、通路	石組溝、廃棄土坑		38
		12次調査	H20年度	環境整備	市教委	役所	石垣(小普請所)、石組溝		39
		13次調査	H21年度	環境整備	市教委	侍屋敷	石組溝、土塀基礎、池状遺構、井戸、土坑		40
		14次調査	H21年度	環境整備	市教委	御殿	石垣(御殿)、石組溝		41
15次調査	H22年度	環境整備	市教委	侍屋敷	礎石、井戸、土坑、柱穴		42		
16次調査	H25年度	環境整備	市財団	御殿	石垣(御殿)、道路		43		
17次調査	H26年度	環境整備	市財団	御殿	石垣(御殿)、石組溝、道路、土塁、土坑		44		
18次調査	H27年度	環境整備	市財団	侍屋敷、通路、馬場	石組溝、土塀基礎、道路、馬場土手、土坑		45		
19次調査	H28年度	環境整備	市財団	馬場、通路	馬場土手、土坑、柱穴		46		
	20次調査	H29年度	環境整備	市財団	馬場、通路	石組溝、馬場土手、土坑		47	

表1 松山城跡調査履歴(本報告書掲載分)

第2節 調査・整理組織

1 松山市（平成13～令和2年度、各年度4月1日時点）

市長 中村 時広（H13～H22）、野志 克仁（H23～R2）

助役・副市長 松崎 茂（H13～15）、稲葉 輝二（H13～24）、木村 俊介（H16～18）、
岡本 誠司（H19～22）、山口 最丈（H23～26）、遠藤 美武（H25～27）、西泉 彰雄（H27～30）、
梅岡 伸一郎（H28～R2）、北澤 剛（H31・R2）

都市整備部長 森岡 覺（H13・14）、富岡 保正（H15・16）、長野 喜久男（H17・18）、中村 雅男（H19）、
石丸 通（H20・21）、古鎌 靖（H22）、福本 正行（H23・24）、山崎 裕史（H25～27）、青木 禎郎（H28）、
川口 学（H29・30）、高松 和昌（H31）、横本 勝己（R2）

副部長・企画官・推進官 吉金 幸次（H13・14）、長野 喜久男（H15）、片山 正直（H16）、
由井 政治（H17）、勝谷 雄三（H18～21）、越智 誠（H22）、桃枝 幹太（H23・24）、
町田 徹（H25・26）、高松 和昌（H27・28）、玉井 良二（H28）、栗原 隆典（H29・H31）、
松本 真也（H30）、石井 朋紀（R2）

公園緑地課長 野本 辰男（H13～15）、目崎 泰久（H16・17）、榊田 二郎（H18）、
土居 繁（H19・20）、糸山 茂樹（H21・22）、川口 学（H23～25）、高松 和昌（H26）、
玉井 弘幸（H27・28）、大西 仁（H29～H31）、尾崎 隆輝（R2）

城山整備担当調整官 松浦 武彦（H16～18）、駒澤 正憲（H19）、森田 俊一（H20～22）

2 松山市教育委員会（平成13～令和2年度、各年度4月1日時点）

教育長 中矢 陽三（H13～16）、土居 貴美（H17～20）、山内 泰（H21～24）、
山本 昭弘（H25～28）、藤田 仁（H29～R2）

事務局長 大西 正氣（H13）、武井 正浩（H14・15）、久保 浩三（H16）、石丸 修（H17～20）、
藤田 仁（H21・22）、嶋 啓吾（H23・24）、榊田 二郎（H25・26）、前田 昌一（H27・28）、
津田 慎吾（H29）、家串 正治（H30）、白石 浩人（H31）、矢野 博朗（R2）

次長・企画官 川口 岸雄（H13・14）、一色 巧（H13）、遠藤 宗敏（H15）、丹生谷 博一（H16）
仙波 和典（H17～20）、古鎌 靖（H21）、勝谷 雄三（H22）、渡部 満重（H23・24）、梶川 明彦（H25）、
隅田 完二（H26・27）、杉本 威（H28・29）、高田 稔（H30・H31）、西村 秀典（R2）

文化財課長 馬場 洋（H13・14）、八木 方人（H15）、篠原 忠人（H16・17）、
家久 則雄（H18～21）、駒澤 正憲（H22～24）、若江 俊二（H25～29）、沖広 善久（H30）、
渡部 浩典（H31・2）

3 （公財）松山市文化・スポーツ振興財団（平成25～令和2年度、各年度4月1日時点）

理事長 一色 哲昭（H25）、中山 紘治郎（H26～30）、本田 元広（R1～R3）

事務局長 中西 真也（H25～29）、片山 雅央（H30～R2）

次長 中野 忠（H25）、紺田 正彦（H26・27）、橋 昭司（H28・29）、高木 祝二（H30）、大野 昌孝（H31）、
杉野 公典（R2）

部長 玉井 弘幸（H25・26）、渡部 広明（H27・29）、梶原 信之（H28）、小田 克己（H30）、片上 俊哉（H31）、
杉野 公典（R2）

埋蔵文化財センター所長 田城 武志（H25～27）、村上 卓也（H28～30）、梅木 謙一（H31・R2）

第Ⅱ章 遺跡の立地及び環境

第1節 立地

松山平野は、瀬戸内海西部の伊予灘と、瀬戸内海中部の燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置し、重信川・石手川・小野川の3大河川をはじめとする大小の河川の沖積作用によって形成された幾つかの扇状地と氾濫原からなっている。表層の地質は重信川の南北で大きく異なり、北部は領家花崗岩帯に属し、主として中生代に貫入した古期領家花崗岩類で形成される。南部は重信川と中央構造線の間、後期白亜紀に形成された海成堆積層である和泉層群、さらにその南には変成岩帯である三波川帯が帯状に分布する。

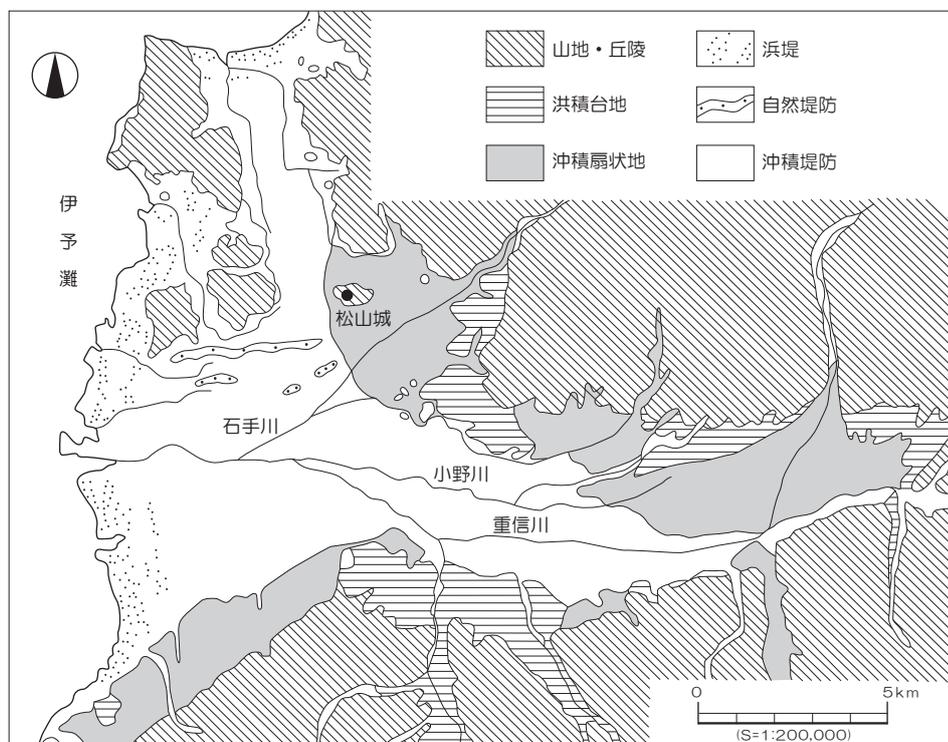
なお、松山城跡は、石手川扇状地上の独立丘陵である勝山やその南西麓に位置する（第1図）。

第2節 歴史的環境

松山城跡が位置する石手川扇状地周辺では、連綿とした遺跡の展開を確認することができる。ここでは遺構・遺物が確認される縄文時代以降の遺跡分布を概観する（第2図）。

縄文時代

後期では、道後城北地区の文京遺跡11次調査や道後城北RNB遺跡で、遺構や遺物包含層が確認されたほか、近年調査された道後湯之町遺跡2次調査でも、数多くの土坑や石器が確認されるなど、



第1図 松山平野の地形概要図

集落の存在が想定される。

晩期では、道後今市遺跡や持田町三丁目遺跡で確認された土坑や土器は、一括資料として高く評価されている。その他、岩崎遺跡などでも、後・晩期の遺物が出土しており、集落域の面的な広がりが注目される。

弥生時代

前期前半では、道後城北地区の文京遺跡 4 次調査で確認された松菊里型住居をはじめ、先述の持田町三丁目遺跡で確認された前期前半～後半の墓域（土坑墓・木棺墓・土器棺墓）や、小壺や石剣の副葬事例などは、県内でも稀少な事例として注目される。

中期に入ると遺跡数や分布域が拡大し、岩崎遺跡や祝谷地区に所在する祝谷大地ヶ田遺跡 3～8 次調査では、数百基の土坑群が確認されており、その評価が注目される。中期中葉になると扇状地上から丘陵部にかけて遺跡が展開し、祝谷地区や北部の姫原地区などの丘陵斜面でも集落が密集する様相を呈する。そのような中、祝谷六丁場遺跡で確認された埋納された状態の平形銅剣や、祝谷畑中遺跡で確認された同時期の大規模環濠や弥生土偶などは、特筆すべき成果である。

また、中期後半～後期にかけて、道後城北地区の文京遺跡や松山大学構内遺跡で拠点集落の存在が確認されたことや、終末期にかけて、勝山西麓に所在する若草町遺跡で、大型墳丘墓に伴う外来系を含めた多量の土器や、包含層資料ながら重圈日光鏡が出土したことなどは、当該期の歴史を論じる上で欠かせない事例となっている。

古墳時代

集落遺跡については、弥生時代と比べ、扇状地上ではやや希薄となるが、石手川左岸に展開する樽味遺跡群では、前期～後期にかけて竪穴建物をはじめとした集落が連綿と展開する。特に注目されるのは、樽味四反地遺跡 6・8・13 次調査で確認された超大型の総柱の掘立柱建物 3 棟で、首長居館の可能性が指摘されている。

古墳の展開については、高縄半島南西麓の丘陵上には、御幸寺山古墳群や常信寺山古墳群など、数多くの後期古墳群が分布しており、松山城跡の所在する勝山の東・南斜面でも、東雲神社古墳群や城の内古墳群など、横穴式石室等を内部主体とする群集墳の存在が確認されている。一方、祝谷地区では、近年の発掘調査で中期後半に遡る前方後円墳が新たに確認された（祝谷 9 号墳）。馬蹄形周壕を有しており、墳丘斜面や周壕内面には全面に葺石がみられ、周壕内からは馬形埴輪を含む多量の埴輪が出土するなど、後続する後期群集墳の展開を考える上で注目される。

古代

道後地区では、白鳳期の古代寺院跡である湯之町廃寺・内代廃寺の存在が知られており、湯築城跡東側に位置する内代廃寺では、複弁八弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦が出土している。また、道後湯月町遺跡や岩崎遺跡で出土している畿内産の可能性のある暗文土師器は、近接する岩崎遺跡で、区画溝や緑釉・灰釉陶器、土馬など、役所に関係している可能性が高い遺構・遺物が確認されていることと合わせて注目される。一方、道後城北地区では、文京遺跡 25 次調査で、流路中より多量の赤色塗彩土師器や施釉陶器、奈良二彩などが出土しているほか、近接する松山大学構内遺跡 6 次調査でも、赤色塗彩土師器のほか石帯が出土するなど、周辺に当時の「温泉郡」に関する役所施設が存在していたことが想定される。



- 1.松山城本丸跡 2.松山城二之丸跡 3.松山城三之丸跡 4.東雲神社遺跡 5.松山城東郭跡 6.松山城北郭跡
 7.カツバタ遺跡 8.若草遺跡 9.番町遺跡 10.清水町遺跡 11.松山大学構内遺跡 12.松山北高等学校遺跡
 13.道後城北RNB遺跡 14.文京遺跡 15.道後一万遺跡 16.道後北代遺跡 17.道後今市遺跡 18.道後町遺跡
 19.持田本村遺跡 20.持田三丁目遺跡 21.持田町遺跡 22.岩崎遺跡 23.樽味高木遺跡 24.樽味四反地遺跡
 25.枝松遺跡 26.内代廃寺 27.湯築城跡 28.道後姫塚遺跡 29.道後冠山遺跡 30.道後湯月町遺跡
 31.道後鷺谷遺跡 32.湯之町廃寺 33.土居窪遺跡 34.祝谷畑中遺跡 35.祝谷本村遺跡 36.祝谷西山遺跡
 37.祝谷大地ヶ田遺跡 38.祝谷丸山遺跡 39.祝谷六丁場遺跡 40.祝谷六丁目遺跡 41.祝谷アイリ遺跡
 42.山越遺跡 43.影浦谷古墳 44.姫原遺跡 45.辻町遺跡 46.南江戸上沖遺跡
 (囲みは包蔵地)

第2図 調査地と周辺遺跡分布図 (S=1:25,000)

中世

道後今市遺跡では、複数回わたる調査がなされており、弥生期～古墳期に加え、主に13～14世紀にかけての土坑墓や溝など、当時の集落が確認されているほか、同遺跡南側の道後町遺跡では、約1町四方の方形区画溝が検出され、当時の条里区画を示す貴重な事例となっている。また、道後城北地区の文京遺跡18・25次調査などで、複数の水田が確認されている。一方、道後町遺跡の東には中世河野氏の居城である湯築城跡が存在し、外堀と土塁に囲まれた南側エリアには、上級武士および家臣団居住区が展開していた様子が明らかとなっている。なお、湯築城周辺では、『伊予湯築古城之図』には、上市・今市などの地名がみられることから、当時、市が形成されていたことが推定される。

近世

勝山山頂に所在する松山城本丸跡や西南山麓の二之丸跡・三之丸跡、隣接する番町遺跡などでは、多数の遺構・遺物が確認されており、文献や絵図等とも合わせて検討が行われ、道路や武家屋敷等の具体像やその変遷などが明らかとなるなど、貴重な成果が上がっている。

【参考文献】

- 相原浩二ほか1991「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 相原浩二ほか1994「若草町遺跡3次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 相原秀仁ほか2009「樽味四反地遺跡-12次・13次調査-」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 梅木謙一2001『東雲神社遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 愛媛県史編さん委員会1986『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県
 岡田敏彦ほか1985『道後今市遺跡』愛媛県教育委員会
 加島次郎ほか2004「樽味四反地遺跡8次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報16』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 栗田茂敏1992「文京遺跡4次調査」『道後城北遺跡群』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 栗田茂敏2006『番町遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 河野史知2017「松山城三之丸跡19次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報29』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 小玉亜紀子2003『樽味四反地遺跡-6次調査- 弥生時代～古墳時代初頭編』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 作田一耕ほか2017「祝谷大地ヶ田遺跡5・6・7次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報29』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 柴田圭子ほか2000『湯築城跡-第2・3・4分冊-』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 田崎博之ほか2007『文京遺跡Ⅴ-文京遺跡18次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 多田仁ほか1994『道後今市遺跡Ⅹ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 寺嶋信三ほか2002『道後町遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 土井光一郎ほか1996『若草町遺跡Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 土井光一郎ほか2000『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 中野良一ほか1998『湯築城跡-第1分冊-』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 西尾幸則1989「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
 西村直人2019『松山城三之丸跡13次・15次調査』松山市・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 橋本雄一ほか2018「松山城三之丸跡20次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報30』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 兵頭勲ほか2008『番町遺跡2次』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 松山市史料集編集委員会1980『松山市史料集 第1巻 考古編』松山市
 松山市史料集編集委員会1987「考古編Ⅱ」『松山市史料集 第2巻』松山市
 真鍋昭文ほか1995『持田町三丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 真鍋昭文ほか2002『土居窪遺跡2次・祝谷畑中遺跡・祝谷本村遺跡2次』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 宮内慎一ほか1999『岩崎遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 宮内慎一ほか2008『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 宮内慎一ほか2018『道後湯之町遺跡2次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 宮崎泰好1991『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 宮本一夫ほか1990『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 宮本一夫ほか1991『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 三好裕之ほか2005『道後町遺跡Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 山之内志郎ほか2007『松山大学構内遺跡Ⅳ-6次調査地-』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 吉田広ほか2009『文京遺跡Ⅵ-文京遺跡25次調査-』愛媛大学埋蔵文化財調査室

第Ⅲ章

第1節 本丸地区の調査

ほんまるあとげいよじしん
1. 本丸跡芸予地震災害復旧事業に伴う

試掘調査・本丸跡2・3次調査

所在地 松山市丸之内
 期 間 試掘：平成14年1月18日～同年3月30日
 2次：平成14年9月19日～同年11月15日
 3次：平成16年1月6日～同年3月31日
 面 積 試掘：約29㎡、2次：約42㎡、3次：約35㎡
 担 当 栗田正芳

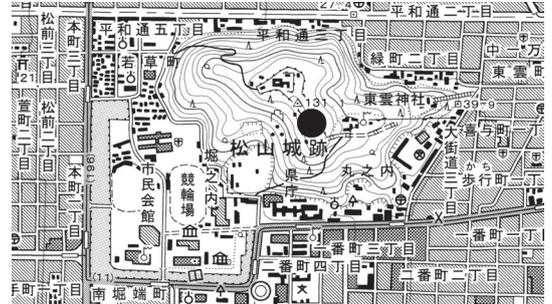


図1 調査地位置図

経 過 松山城は、平成13年3月24日に発生した芸予地震や同年6月の大雨により大きな被害を受けた。そのため、松山市では被害状況の把握に努めるとともに、「史跡松山城跡災害復旧検討委員会（当時）」を立ち上げ、その復旧に向けた整備方針を検討する一方、文化庁等の関係機関と協議を行い、被害の著しかった二之丸石垣南面や巽櫓台石垣、櫓門北続櫓台石垣の修理、本丸周辺で複数発生した地割れや陥没等の復旧を実施することを決めた。それに伴い、本丸跡では、地割れや陥没等の状況の把握と原因の究明を目的に、被害箇所を試掘調査（平成13年度）と、その結果を踏まえた江戸期の遺構の確認調査（2次：平成14年度、3次：平成15年度）を実施した。

遺構・遺物 試掘調査：馬具櫓南側の陥没発生箇所（T1）、太鼓櫓北側の地割れ等発生箇所（T2）、隠門東側の地割れ等発生箇所（T3～9）の3箇所にてトレンチ調査を実施した（図2）。その結果、馬具櫓南側のT1（図3・4、写真1・2）では、陥没発生箇所は、戦後、トレンチ西側の本丸石垣西面に沿って設けられた、転落防止用手すりの支柱基礎の掘り方部分で、埋土は、コンクリート片や瓦礫が混じる極めて締まりの悪いものであった。本丸広場の雨水が集中する場所でもあり、長年の雨水の流入に伴い造成土が徐々に流出していたところに、芸予地震による強い揺れやその後の長雨が致命傷となり、陥没が発生したものと考えられる。一方、掘り方の東側で確認された江戸期の盛土は、締りが良く、今回の陥没は及んでいなかった。ただし、過去の地震によるものと考えられる地割れ痕跡が確認された。なお、江戸期の盛土からは、瓦や江戸中期の肥前や瀬戸美濃等の陶磁器が出土した（図10）。太鼓櫓北側のT2（図5・6、写真3～5）では、地割れ等発生箇所は、昭和47年、トレンチ西側の本丸石垣の解体修理に伴い、江戸期の盛土が削られた後、再盛土された部分で、埋土は、造成土と栗石が互層となる締まりの悪いもので、栗石層には空隙が確認された。長年の雨水の流入に加え、芸予地震による強い揺れやその後の長雨により再盛土が圧縮され、地割れや地盤沈下が発生したものと考えられる。一方で、再盛土の東側で確認された江戸期の盛土は、小さな石や瓦を混ぜた土と灰を混ぜた土が版築状に互層となる叩き締められたもので、極めて締まりが良く、今回の地割れ等は及んでいなかった。ただし、過去の地震によるものと考えられる地割れ痕跡が確認された。なお、江戸期の盛土からは、瓦や江戸中・後期の肥前や瀬戸美濃等の陶磁器が出土した（図10）。隠門東側のT3～9のうち、T3（図7・8、写真6～8）では、地割れ等発生箇所は、昭和22年、トレンチ南側の本丸石垣南面の解体修理に伴い、江戸期の盛土が削られた後、栗石で埋められた部分で、栗石層には空隙が確認され

た。長年の雨水の流入に加え、芸予地震による強い揺れやその後の長雨により、栗石層が圧縮され、地割れや地盤沈下が発生したものと考えられる。一方で、栗石層の北側で確認された江戸期の盛土は、T2とも共通性のある、小石や瓦を混ぜた土が互層となる叩き締められたもので、極めて締まりが良く、今回の地割れ等は及んでいなかった。ただし、過去の地震によるものと考えられる地割れ痕跡が確認された。T4～9では、明治期以降のかく乱が著しく、期待された隠門の雨落溝や門周辺の江戸期の排水設備を確認することはできなかったが、全てのトレンチでT3と同様に江戸期の盛土が確認され、T4では、過去の地震によるものと考えられる地割れ痕跡も確認された。また、T4の江戸期の盛土からは、鯨瓦等の瓦や江戸中・後期の瀬戸美濃等の陶磁器が出土した（図10）。

以上、3箇所でのトレンチ調査の結果、芸予地震による本丸での地割れや陥没等の被害は、全て昭和期の石垣修理工事や史跡整備工事に伴う盛土等の範囲内で発生しており、昭和期の盛土等の締め固めの不十分さが最大の要因であることや、そこへの雨水排水の集中も影響していることが明らかとなった。また、興味深いのは、江戸期の盛土は、昭和期の盛土とは対照的に丁寧に締め固められており、被害は発生しなかった一方で、過去の地震による地割れ痕跡は確認されるとともに、江戸中・後期の遺物が出土することである。これらのことは、本丸は、築城以降、江戸期の間になくとも1回は改修され（T1とT2・3の土質の違いは改修された時期の違いを示している可能性がある）、その後、昭和期までの間に、この良く締め固められた盛土に地割れが発生するほどの大きな地震を経験したことを示しており、不明な点の多い本丸の歴史を考える上でたいへん興味深い。

2次調査（図9、写真9～12）：試掘調査の結果、野原櫓から巽櫓にかけての範囲に、地割れや陥没が集中したことは、地震に加えて雨水排水の集中が影響しており、それを早急に改良する必要性が明らかとなったことから、この範囲に設けられている本丸石垣西面の石樋へと繋がる、江戸期の排水設備の確認を目的に調査区を設定した。その結果、石樋へと繋がる東西方向の石組溝が確認された。幅約25cmで、両側には加工された花崗岩が用いられており、末端の石樋付近は暗渠であったと考えられる。なお、遺物については、江戸期全般の肥前や瀬戸美濃、備前等の陶磁器が出土した。

3次調査（図9、写真13～16）：2次調査で確認された東西方向の石組溝の東側延長を確認することを目的に調査区を設定した。その結果、2次調査の調査区すぐ東側で、東西方向の石組溝と接続する南北方向の石組溝が確認された。東西方向の石組暗渠とは異なり、幅50～60cmで、地山（岩盤）をU字状に掘り、多くは抜き取られていたものの、両側には自然石が並べられていた。溝内は多量の円礫と明治期以降の瓦で埋まっており、同時期の陶磁器も出土した。江戸期には天守に続く大手道の側溝であったものが、明治期以降に暗渠へと改変され、最終的には東西方向の溝とともに排水機能を失ったものと考えられる。

小 結 以上のように、試掘調査及び2回の確認調査を通じ、不明な点の多い江戸期の本丸についての重要な知見を数多く得られるとともに、地割れや陥没等の原因を把握することができた。

本丸地区の調査

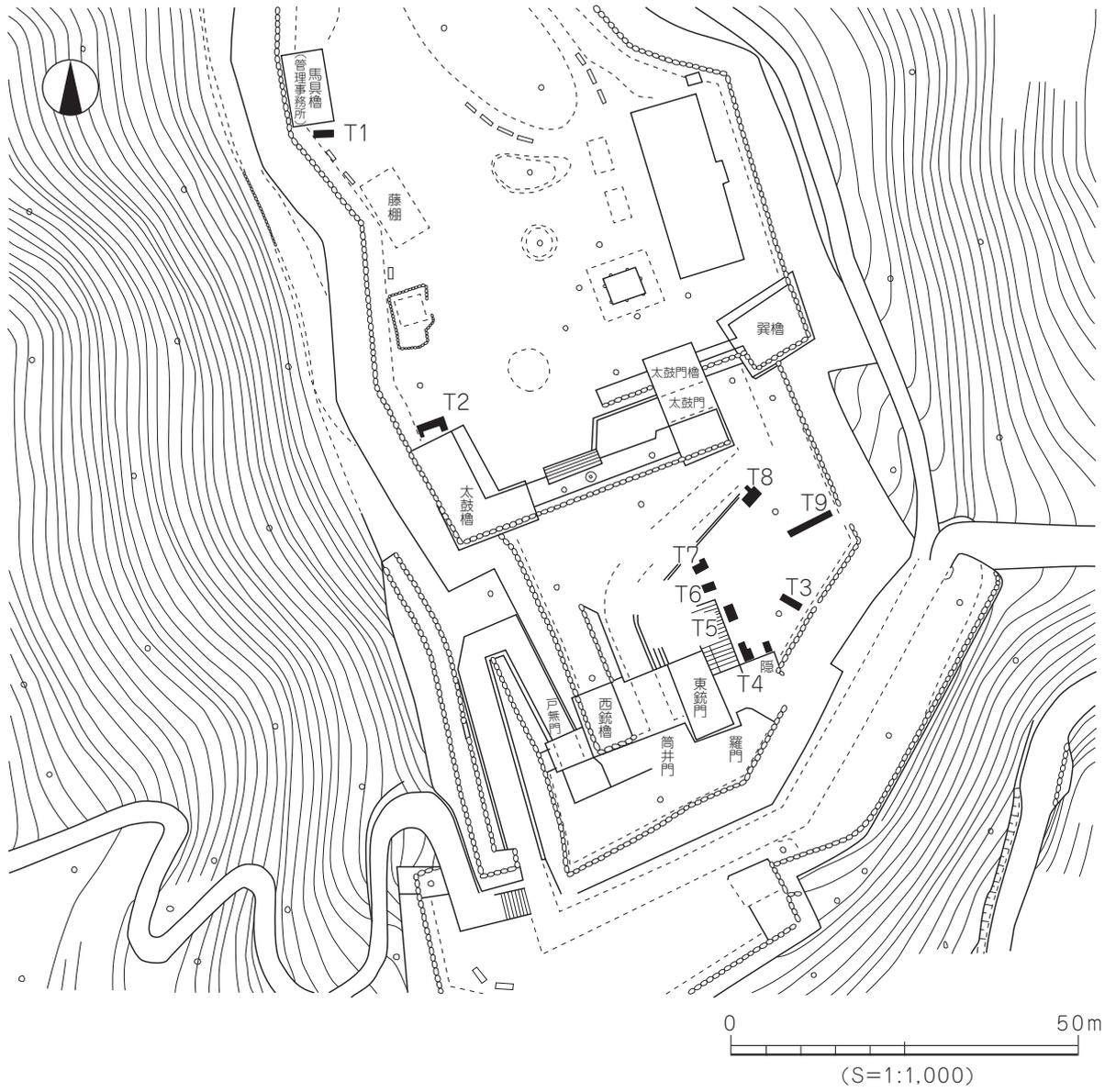


図2 試掘トレンチ位置図

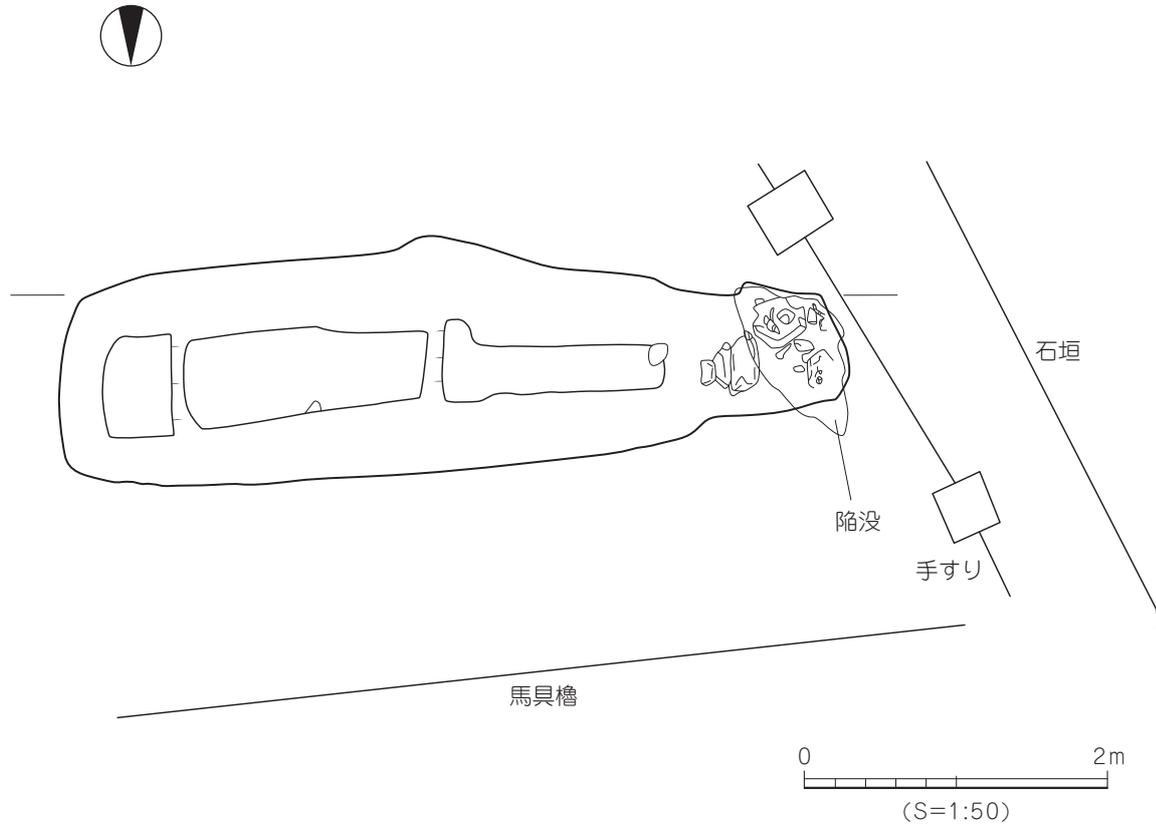


図3 試掘 T1 平面図

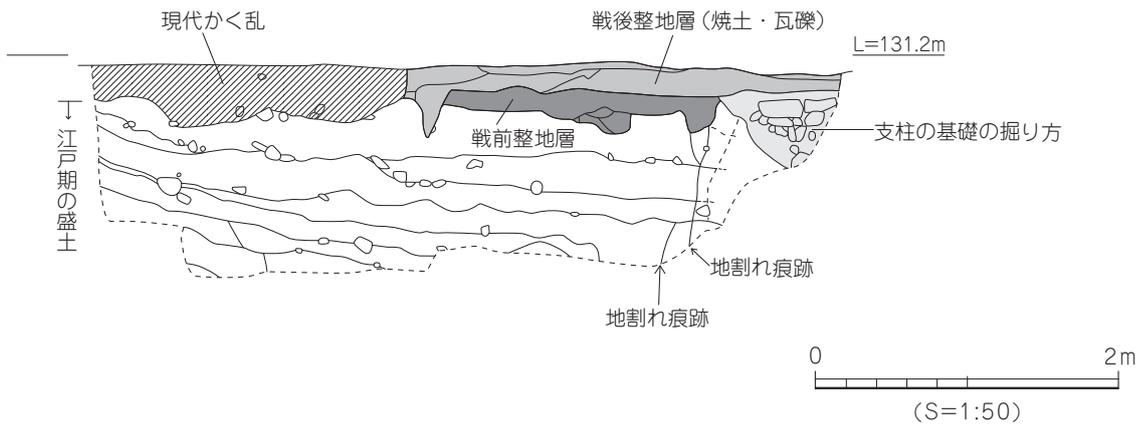


図4 試掘 T1 南壁断面図

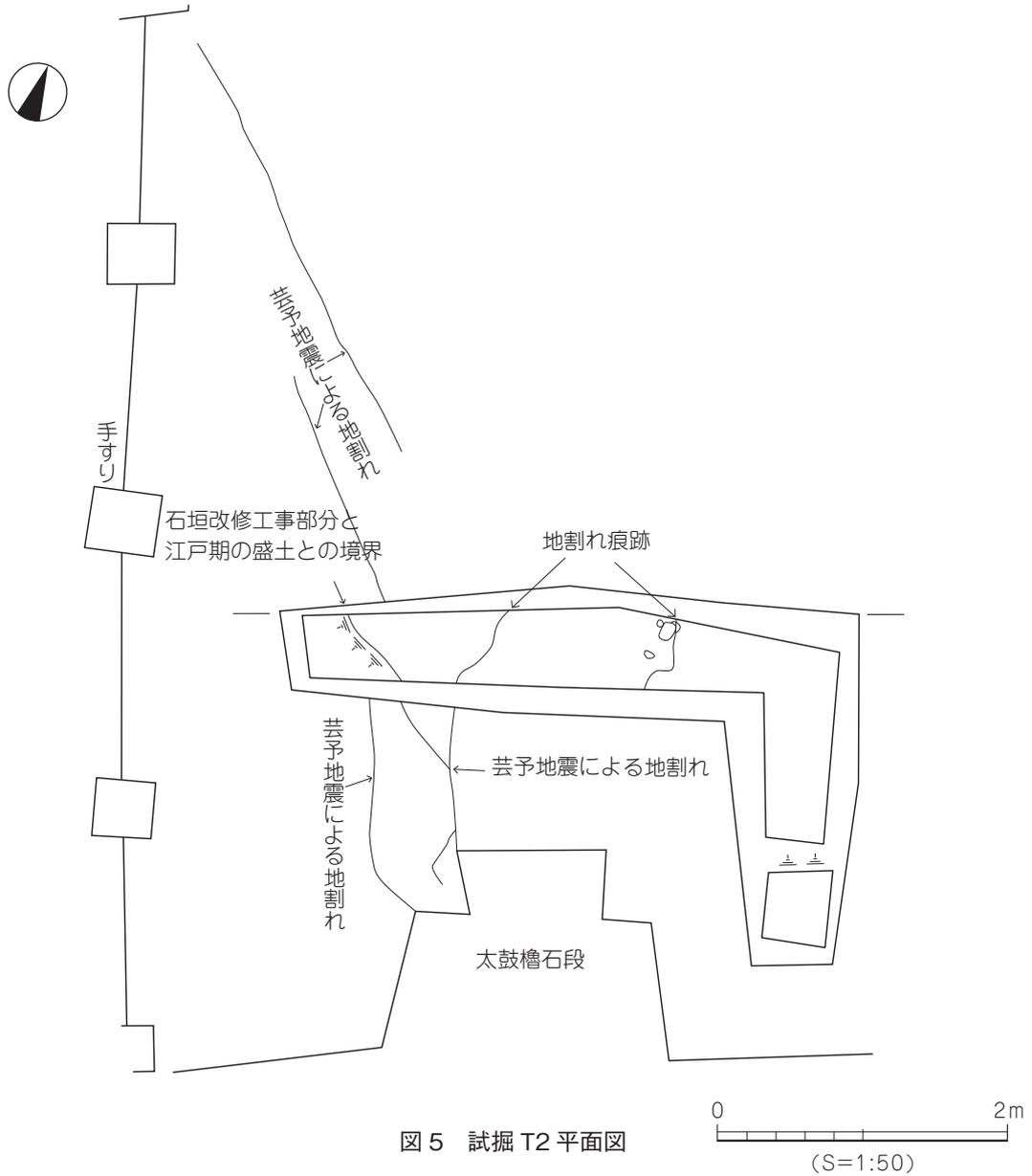


図5 試掘 T2 平面図

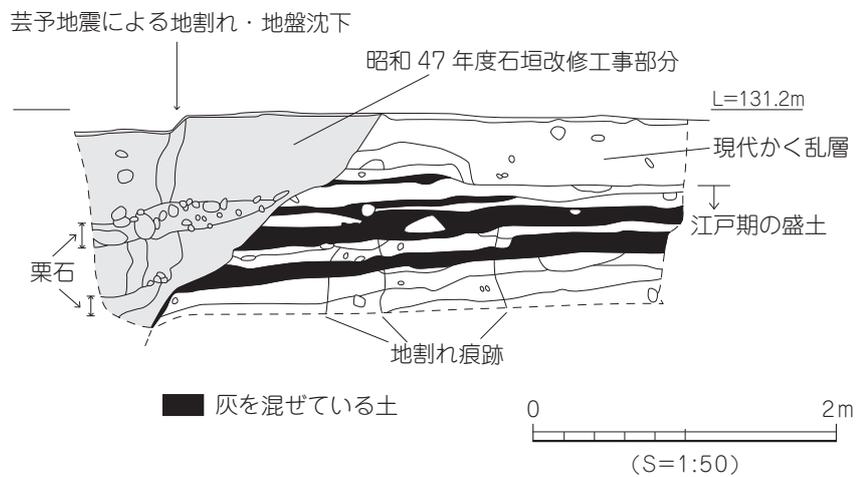


図6 試掘 T2 北壁土層図

史跡松山城跡

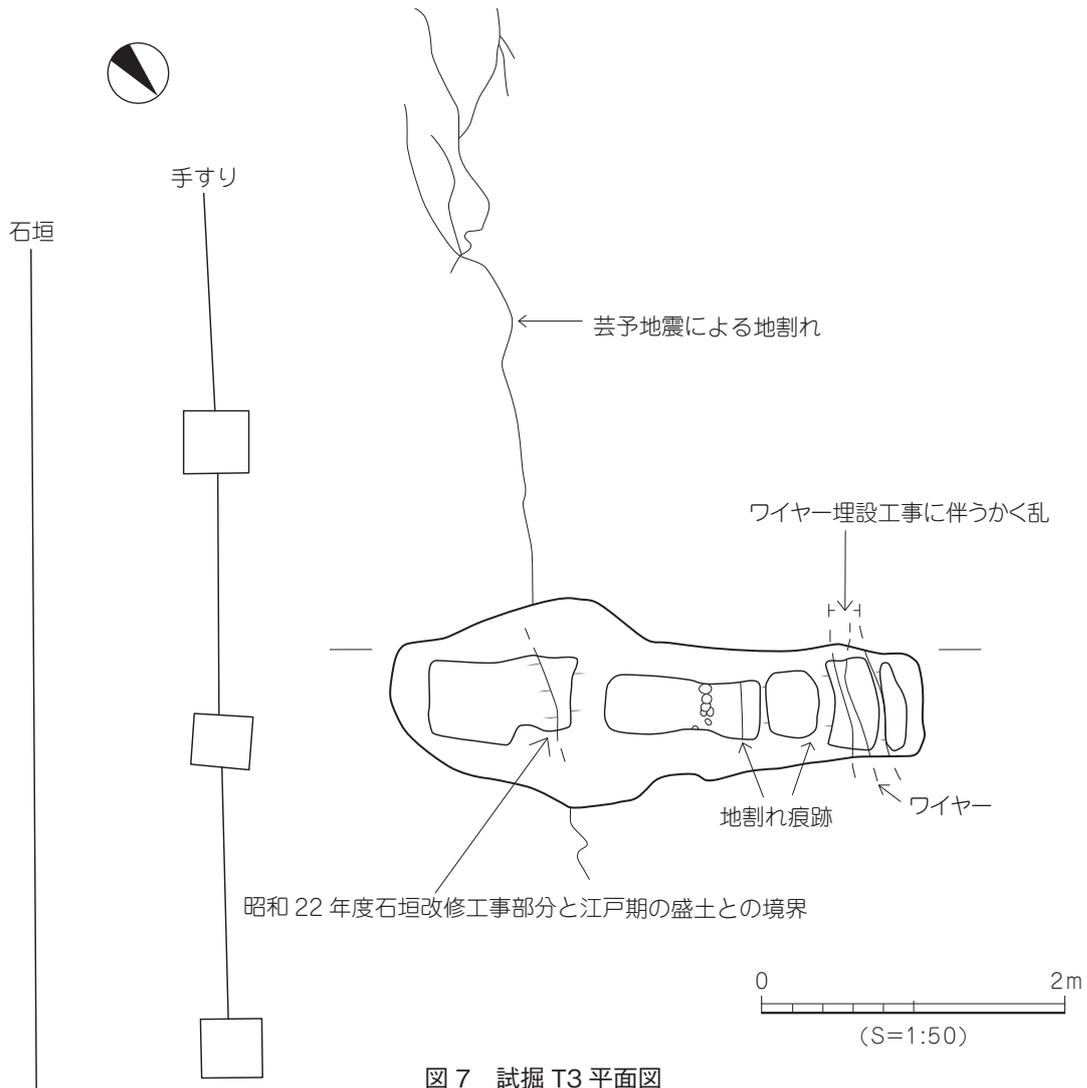


図7 試掘 T3 平面図

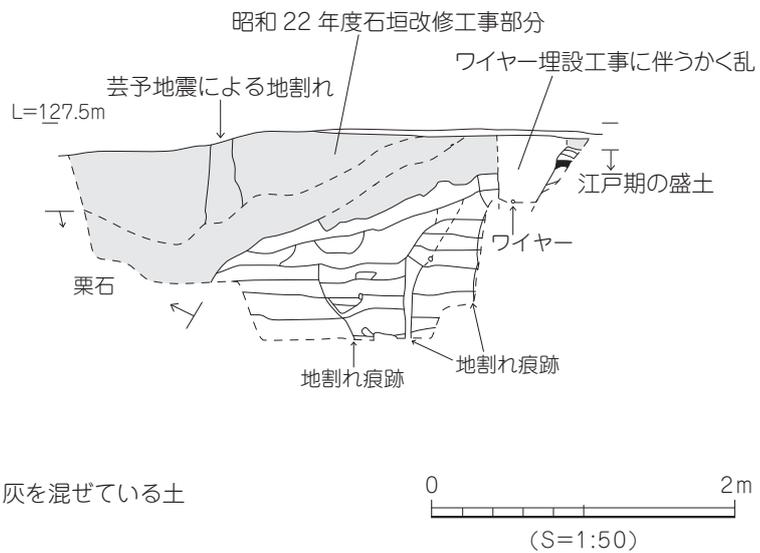


図8 試掘 T3 南壁断面図



写真1 試掘 T1 調査前陥没状況 (北より)



写真2 試掘 T1 コンクリート片出土状況 (北より)



写真3 試掘 T2 調査前地割れ・地盤沈下状況 (北より)



写真4 試掘 T2 北壁地割れ確認状況 (南より)



写真5 試掘 T2 版築状の江戸期の盛土 (南より)



写真6 試掘 T3 調査前地割れ・地盤沈下状況 (東より)



写真7 試掘 T3 南壁地割れ確認状況 (東より)



写真8 試掘 T3 南壁地割れ痕跡確認状況 (東より)

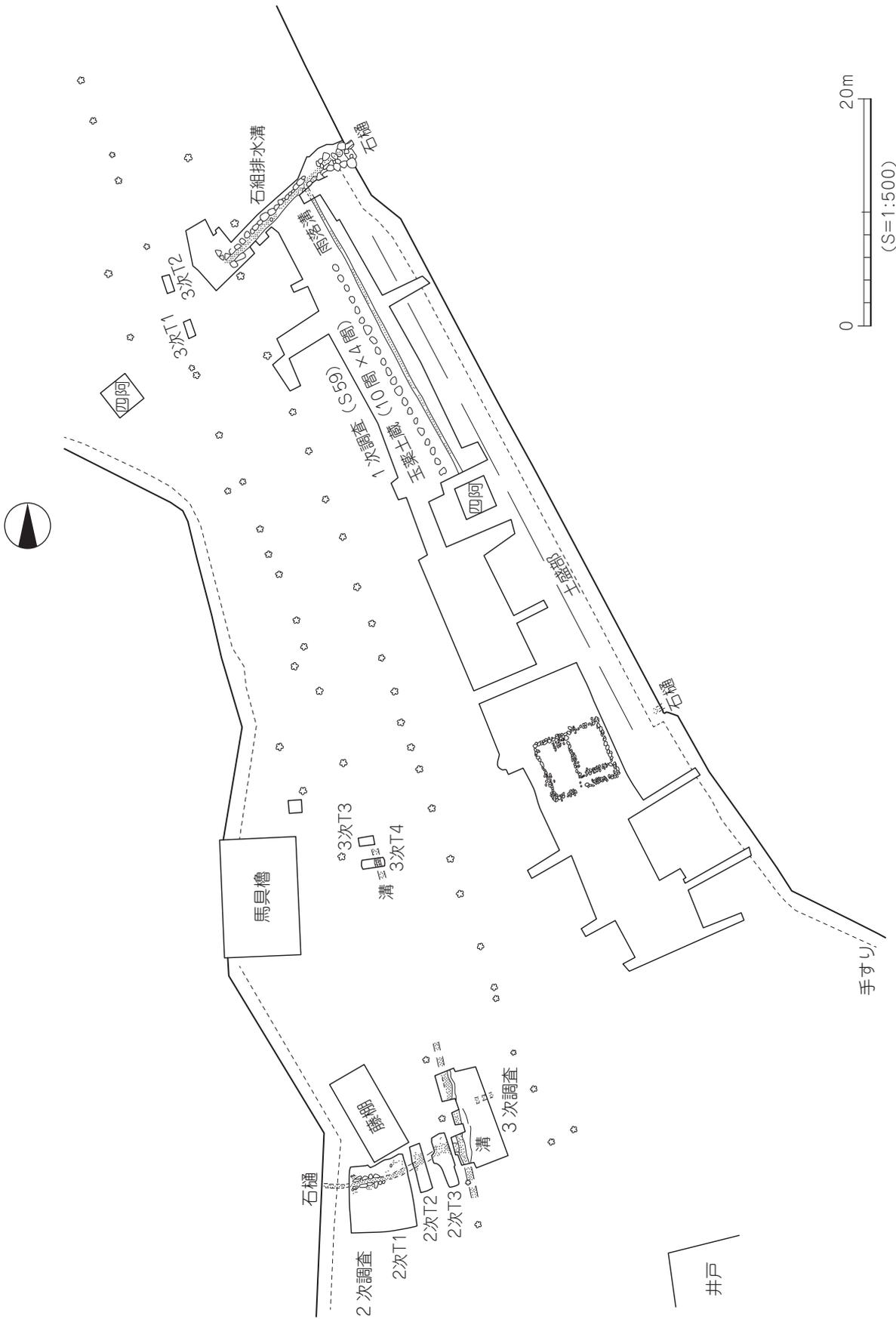


図9 2・3次調査区位置図



写真9 2次T1完掘状況(東より)



写真10 2次T1石組溝確認状況(東より)



写真11 2次T1石組溝確認状況(北より)



写真12 2次T2・3石組溝確認状況(東より)



写真13 3次石組溝確認状況(北より)



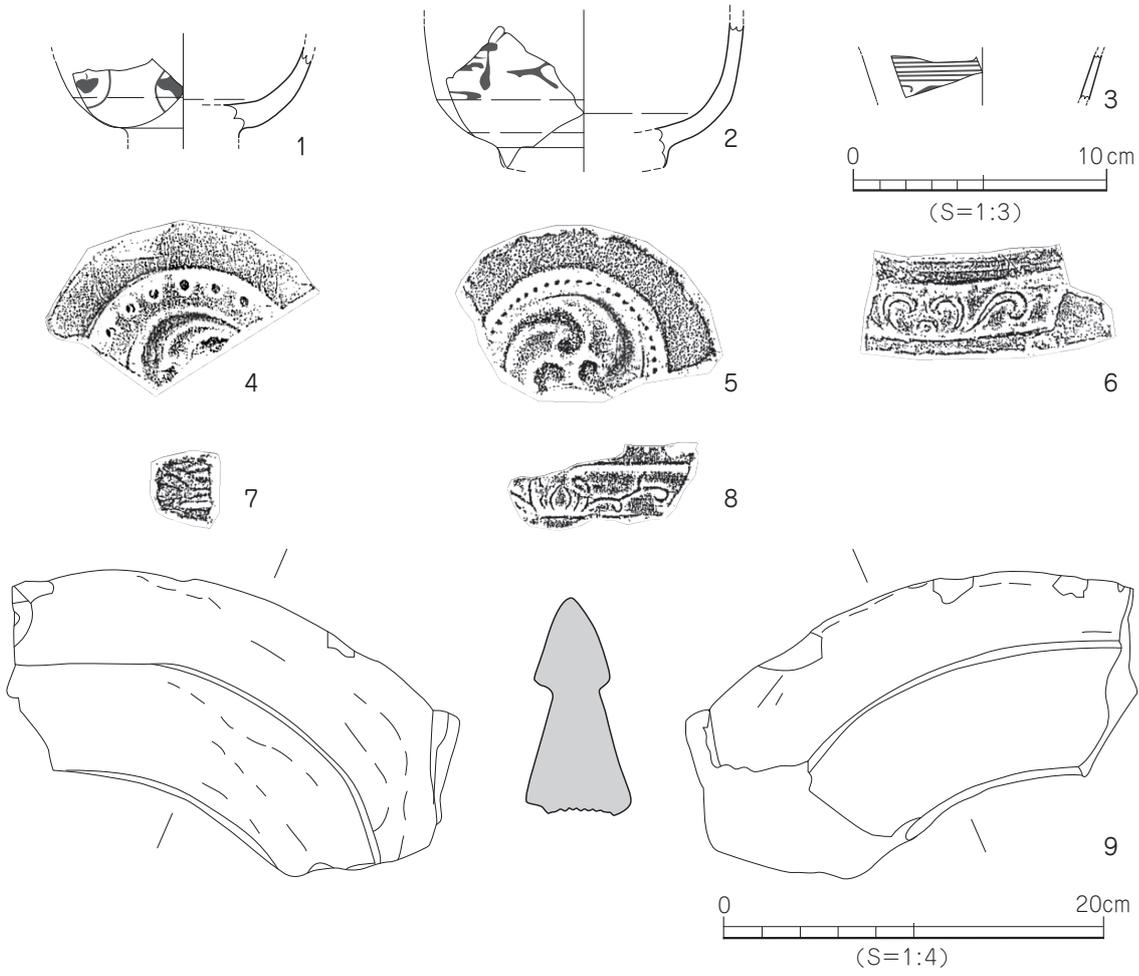
写真14 3次石組溝確認状況(東より)



写真15 3次石組溝接続部確認状況(東より)



写真16 3次T4石組溝確認状況(北より)



1・4～7：試掘 T1 出土

2・3・8：試掘 T2 出土

9：試掘 T4 出土

図 10 出土遺物実測図

ほんまるあと 2. 本丸跡 4 次調査

所在地 松山市丸之内

期 間 平成 17 年 12 月 5 日～同年 12 月 18 日

面 積 約 50m²

担 当 武田尊子

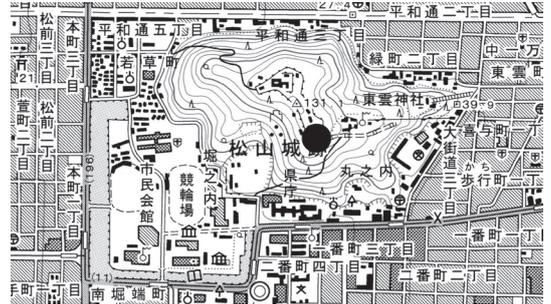


図 1 調査地位置図

経 過 松山城本丸の揚木戸門跡から本丸広場までの登城道では、昭和 63 年度に施工された全面のコンクリート舗装やその経年劣化が、史跡景観を阻害するだけでなく、通行への支障を生じさせていたことから、再整備工事を実施することとなった。それに伴い、江戸期の登城道や側溝等を把握するため、現在の登城道に 6 箇所 (T1～6) のトレンチを設定し、事前の確認調査を実施した (図 2)。

遺構・遺物 T1 (写真 1～3) では、江戸期の登城道の整地層は確認されなかったものの、トレンチ全域で地山 (岩盤) が確認された。また、この地山の南端には地山を掘り込んだ側溝、本丸石垣南面の裾部にあたる同北端には、地山を石垣方向掘り込んで拳大～人頭大の円礫を充填した石垣の根固めが設けられていたことから、この地山部分は江戸期の登城道であったと考えられ、その場合の道幅 (側溝を含む) は約 6m となる。T2 (写真 4) では、コンクリート直下のトレンチ全域で黄褐色の砂質土層が確認された。地山の直上に薄く張られており、江戸期の登城道の整地層と考えられる。また、整地層や地山との関係から、現在の登城道の両端 (東西) の側溝も江戸期からのものが踏襲されていると考えられ、その場合の道幅は約 5.5m となる。T3～6 (写真 5～8) では、共通の特徴を持つ土層を 2 層確認した。一方は明黄褐色の砂質シルト層で、白色、黒色、黄褐色のブロックと少量の砂岩小礫を含み、もう一方はにぶい黄橙色の砂質シルト層で、黄橙色のブロックが混じる。両層からは年代を示す遺物は出土していないものの、両層とも治期以降の造成土層よりも下のレベルで確認されていることや、T5 では、にぶい黄橙色の砂質シルト層を補うように明黄褐色の砂質シルト層が堆積し、両層によって平坦面が形成されていることから、この 2 層は江戸期の登城道の整地層 (構築のための造成土を含む) であると考えられる。当該整地層の両端は、多くのトレンチで明治期以降のかく乱の影響を受けていたが、T3 では、整地層や地山との関係から、T2 と同様に現在の登城道の両端 (南北) の側溝も江戸期からのものが踏襲されていると考えられ、その場合の道幅は約 5.5m となる。なお、遺物については、ほとんどが明治期以降の造成土層からの出土で、大半が瓦であったが、T4 では、江戸後期の西岡焼の染付の碗が出土した (本丸跡 7・8 次・工事立会 図 8)。

小 結 以上のように、今回の調査を通じ、全てのトレンチで本丸の登城道に関連する遺構が確認され、T1～3 では道幅 (側溝を含む) が 5～6m 程度であることが確認された。それにより、現在の登城道が江戸期のものを概ね踏襲していることも確かめられるなど、江戸期の本丸の登城道についての重要な知見を数多く得ることができた。

史跡松山城跡

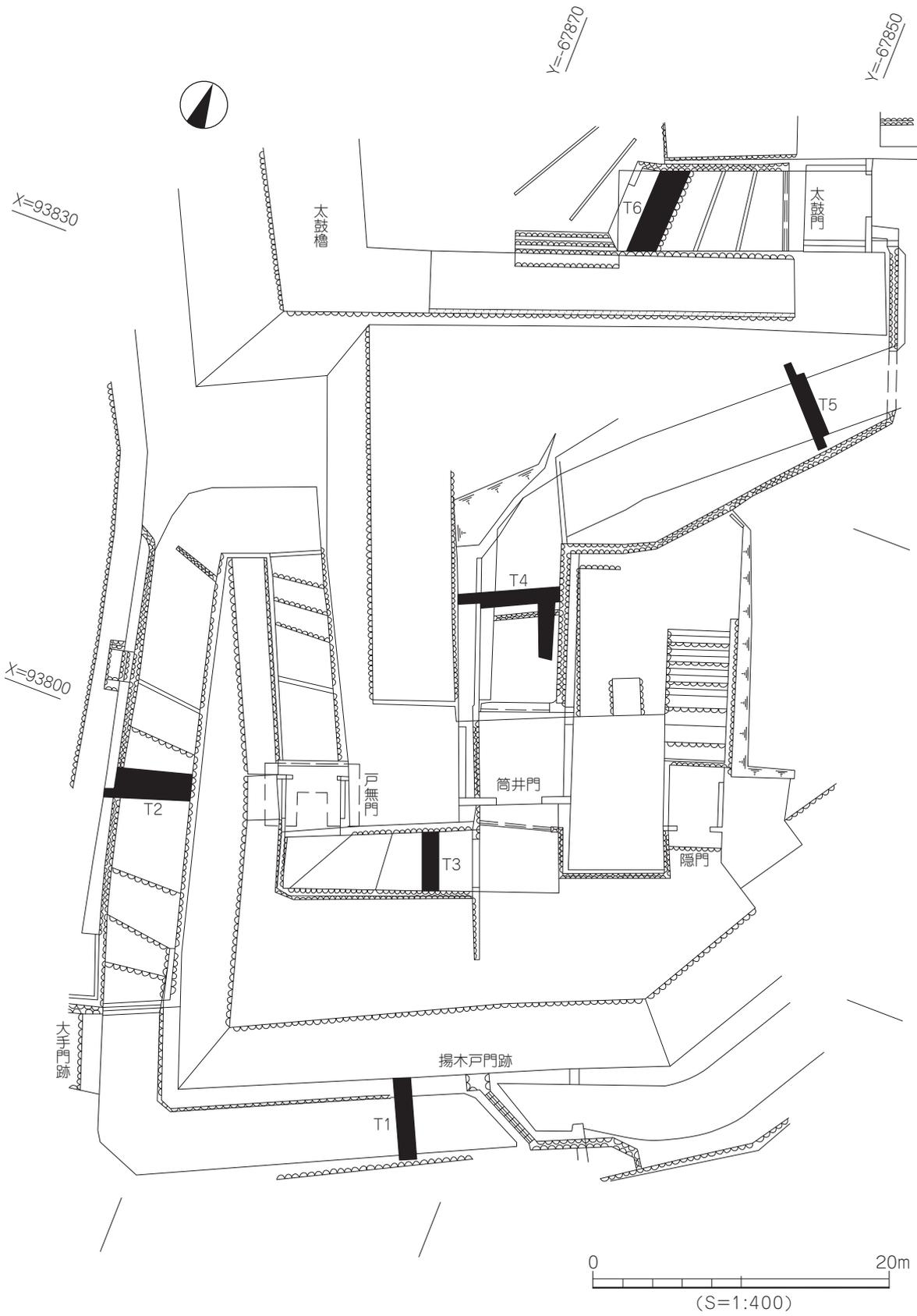


図2 トレンチ位置図

本丸地区の調査



写真1 T1 完掘状況 (南より)



写真2 T1 南端側溝確認状況 (南より)



写真3 T1 北端石垣根固め確認状況 (南より)



写真4 T2 西側完掘状況 (北西より)



写真5 T3 北側完掘状況 (南より)



写真6 T4 東側完掘状況 (北東より)



写真7 T5 北側完掘状況 (東より)



写真8 T6 調査状況(1北より)

ほんまるあと 3. 本丸跡 5・6 次調査

所在地 松山市丸之内
 期 間 5次：平成23年9月1日～平成24年1月31日
 6次：平成24年9月11日～平成25年2月28日
 面 積 5次：約148㎡
 6次：約130㎡
 担 当 西村直人

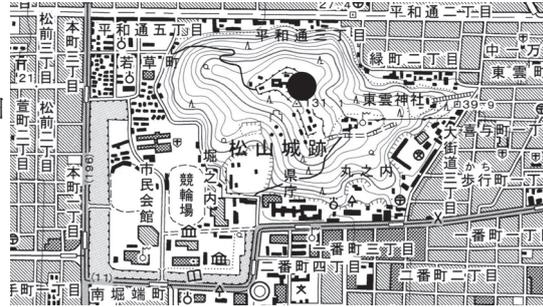


図1 調査地位置図

経 過 松山城本丸跡防災設備等整備工事に伴う遺構確認調査である。調査区は、主に新規防災施設の設置箇所に5次調査で10トレンチ(24箇所)、6次調査で13トレンチ(13箇所)を設定した(図2)。

遺構・遺物 石組溝などの排水関連の遺構、石垣及び石垣に関する遺構、櫓跡及び門跡、鍛冶関連遺構が確認された。

石垣(図3・5・6、写真1～7)：5次T1・T2・T5～8、6次T2・T8～11・T13で確認された。本丸南東石垣裾の5次T1で検出した根石を含めた石垣4段は、下部になるほど勾配が緩くなり、根石部分は傾斜角約55度を測る。築石は花崗岩割石の乱積みで、表面は調整されていない。間詰石は密に充填される。掘方は築石面から約100cm控え、埋土は硬く締まる粘質土である。一方、本丸東石垣裾の5次T2では、盛土が厚く、根石及び地山の検出に至らなかったが、築石4段半が確認された。石積方法、表面調整ともに上部の石垣と同様で、覆土から17世紀後半頃の陶器が出土したことから、構築時は表出していたが、後に盛土により嵩上げされたと考えられる。また、5次T8及び6次T8では石垣の本壇石垣の根石が確認された。掘方は約110cm控え、栗石が充填される。

本壇北側の5次T5、北石垣裾の5次T8では栗石群が確認された。当初は本丸北石垣の裏込石や本壇石垣構築後に不要となった裏込石の廃棄跡、地固めへ転用跡などとみたが、両トレンチから滴水瓦が出土したことや、後の工事立会の成果や絵図との比較検討により、築城期の本壇(旧天守曲輪)石垣の裏込石と判断した(P38を参照)。

本壇南裾の6次T11では、本壇石垣の補強石垣(はばき石垣)が確認された。この石垣は、元禄以降の複数の絵図に描かれており、とりわけ幕末の本壇南部石垣の修理箇所を示した絵図「松山城本壇修理計画図」(図8)には「腰巻」と記される。確認できたのは根石1段のみで、再確認(昭和48年確認)した本壇石垣の根石ともども、盛土に据えられる。つまり、本壇南西部の地盤は、谷を埋立てた造成地で、地耐力が弱い可能性が高く、これが「腰巻」を築かなければならない理由、また幕末の石垣改修の原因と考えられる。天守中庭の6次T10で確認された北から南に傾斜する切土跡及び本壇の東西両石垣にみられる南北の石積の違いは、まさしくこの本壇南部石垣の改修跡とみられ、籠城時の生命線たる溜池を壊してまで行われていることから、この改修が大規模かつ重要であったことが分かる。また、石垣改修跡は待合番所跡の6次T2でも確認された。

小筒櫓跡：5次T6では、「小筒櫓跡」に関連するとみられる溝と整地土、小規模な土坑が確認された。溝は石垣天端の墨線に並行し、内部に拳大の石が点在する。整地土は溝と石垣の間にのみ貼られる。文献記録との比較により、溝は基壇石積跡、整地土は基壇整地土、土坑の一部は礎石跡と考えられる。

中仕切門跡（写真 8・9）：5 次 T8 では、仕切門の石組溝と礎石跡、布石跡が確認された。石組溝は東西方向で、北は 3 石 1 段、南は 2 石 1 段が残るのみであるが、天端が揃うため、元から 1 段の溝とみられる。幅 25cm、深さ 16cm を測る。また、礎石跡は一辺 75cm を測り、検出位置から主柱に当たるとみられ、西に布石の抜き跡が続く。また、本壇石垣の角石の根石も確認された。

中ノ門跡（図 5、写真 10）：6 次 T1 では、中ノ門の礎石と布石跡、整地土が確認された。門礎石は、北側 2 石が約 50cm×約 70～90cm の長方形、南側 2 石が一辺約 50cm の正方形で、高さは両者とも 24 cm 以上を測る。礎石の間隔は、東西約 320cm、南北約 210cm で、石材は全て花崗岩である。礎石等の数や配置、大きさなどから、北を表とする高麗門と考えられる。南東の礎石の堀方から 18 世紀後半以降の陶器が出土したため、江戸時代後期に改修を受けた可能性がある。そのほか釘や乳金具が出土した。

水受け・石組溝（図 6、写真 11～13）：5 次 T4 及び 6 次 T8・T11・T12 で確認された。このうち 5 次 T4 と 6 次 T8 の石組溝は一連の遺構で、本壇東石垣の水口から排出された雨水等をさらに本丸の東へ排出するための排水路である。水口直下の 6 次 T8 では、水を受ける中央の石と側石からなる内径約 125cm の「水受け」が確認され、石組溝はこの南東に接続する。石組溝は幅 35cm 前後で、西から東へ傾斜し、石垣天端手前の 5 次 T4 で階段状の敷石により暗渠化し、本丸北東石垣の水口に繋がる。両遺構とも築造時の掘方が確認できないことから、石垣築造時の造成・整地に伴い設置されたと考えられ、造成土中から古相の近世瓦が出土したこと及び石垣の編年から、設置時期は松平氏入封時（寛永期）である可能性が高い。

暗渠（写真 14）：本丸南東石垣の水口直下の 5 次 T1 及び 6 次 T7 で確認された。締りの弱い砂質土と拳大の石が埋まった幅 30cm の溝に、木質を残す釘が先端を内側に向けて一定の間隔で出土した。木槓が設けられていたと推測される。

鍛冶遺物廃棄土坑（図 4、写真 15）：待合番所跡の 6 次 T2 では、炭化物とともに鉄滓（鍛冶滓）や羽口、炉壁などが廃棄された長径約 90cm、短径約 70cm の土坑が 4 基確認され、土坑周囲で鍛造剥片が採取された。土坑が被熱・還元していないことから、炉跡ではないと判断した。土坑の数から、周辺で複数回にわたって鍛冶が行われたと考えられるが、操業時期を特定し得る遺物は出土していない。土坑の覆土（整地土）から 18 世紀後半の波佐見焼の陶胎染付碗が出土した。

盛土（写真 16）：5 次 T3 では、郭（曲輪）造成に伴う盛土を確認した。緩い尾根の基底面（礫岩風化土）上にシルト質土と砂質土を交互に急勾配で重ねた盛土で、厚さ最大 120cm を測る。近世瓦や中世土師器を含み、全体として締まりが弱い。上面は平坦であるが、天端がやや盛り上がり、平面形は楕円形を呈することから、本丸北東尾根に連続する小さな曲輪の一つと思われる。遺構表面で滴水瓦が出土した。

小 結 以上のように、本調査では本丸の造成、修理及び排水に伴う遺構を多く確認することができた。特に本壇から本丸外にかけての排水経路の一端、これまで不明であった小筒槽、並びに中仕切門及び中ノ門の位置や範囲等、そして本壇の溜池、「腰巻石垣」をはじめとする石垣の補強・改修跡や盛土などの土木遺構を確認できたことは、本丸の縄張りや工事の過程を知る上で貴重な成果である。一方、滴水瓦やコビキ A（古相の粘土板切離し痕）を持つ丸瓦が、本壇周辺の複数の調査区から出土したことは、本丸建物の成立時期と意義を考える上で貴重である。

史跡松山城跡



図2 トレンチ位置図

本丸地区の調査

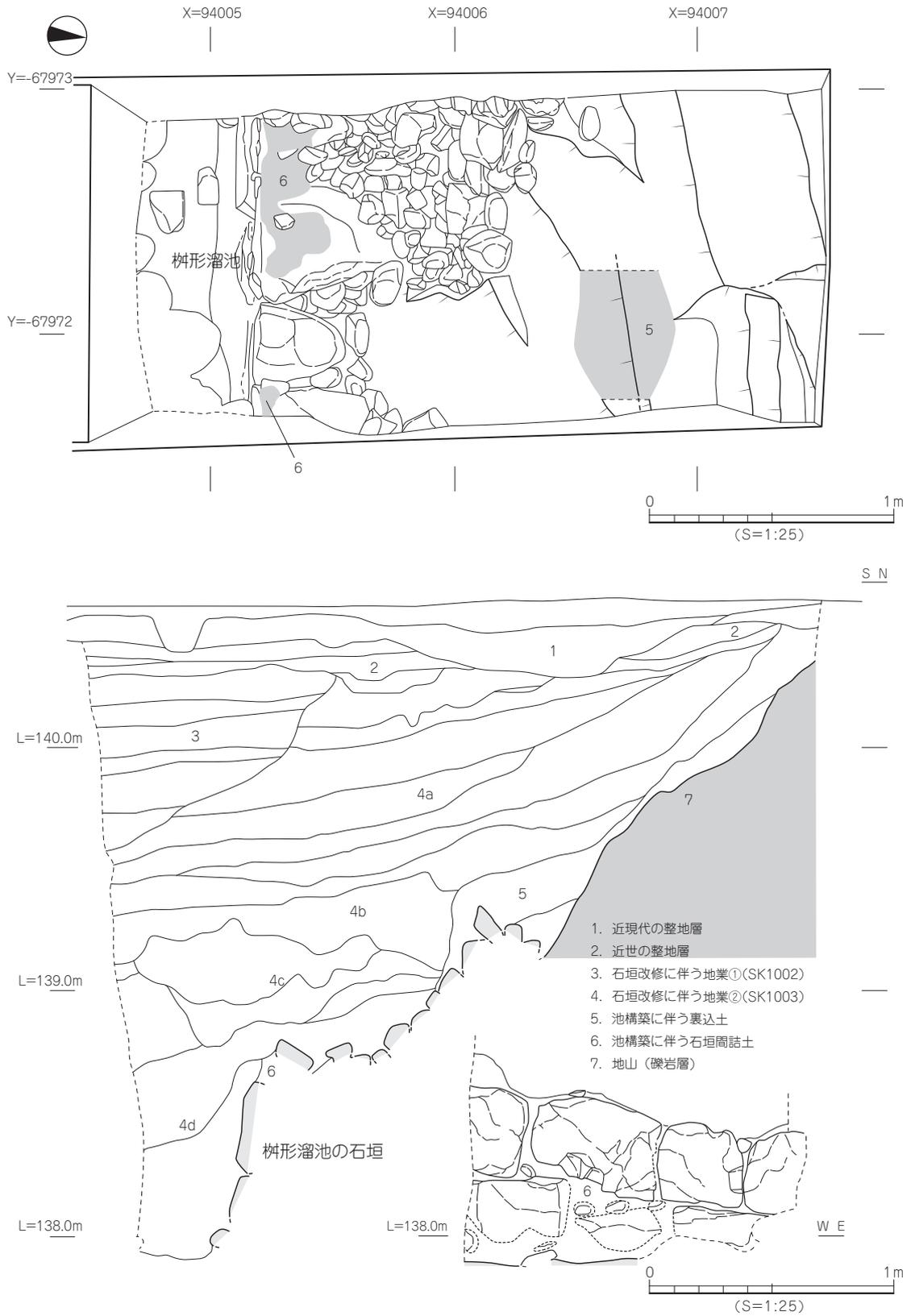
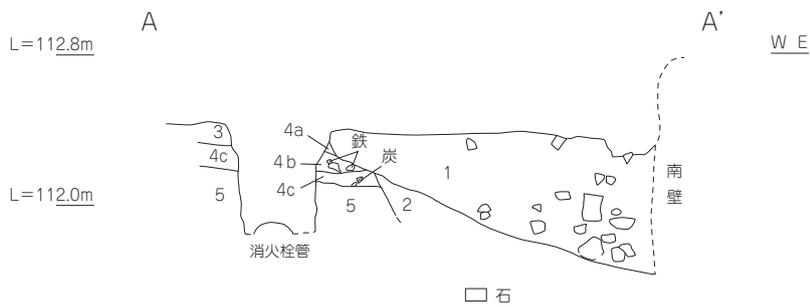
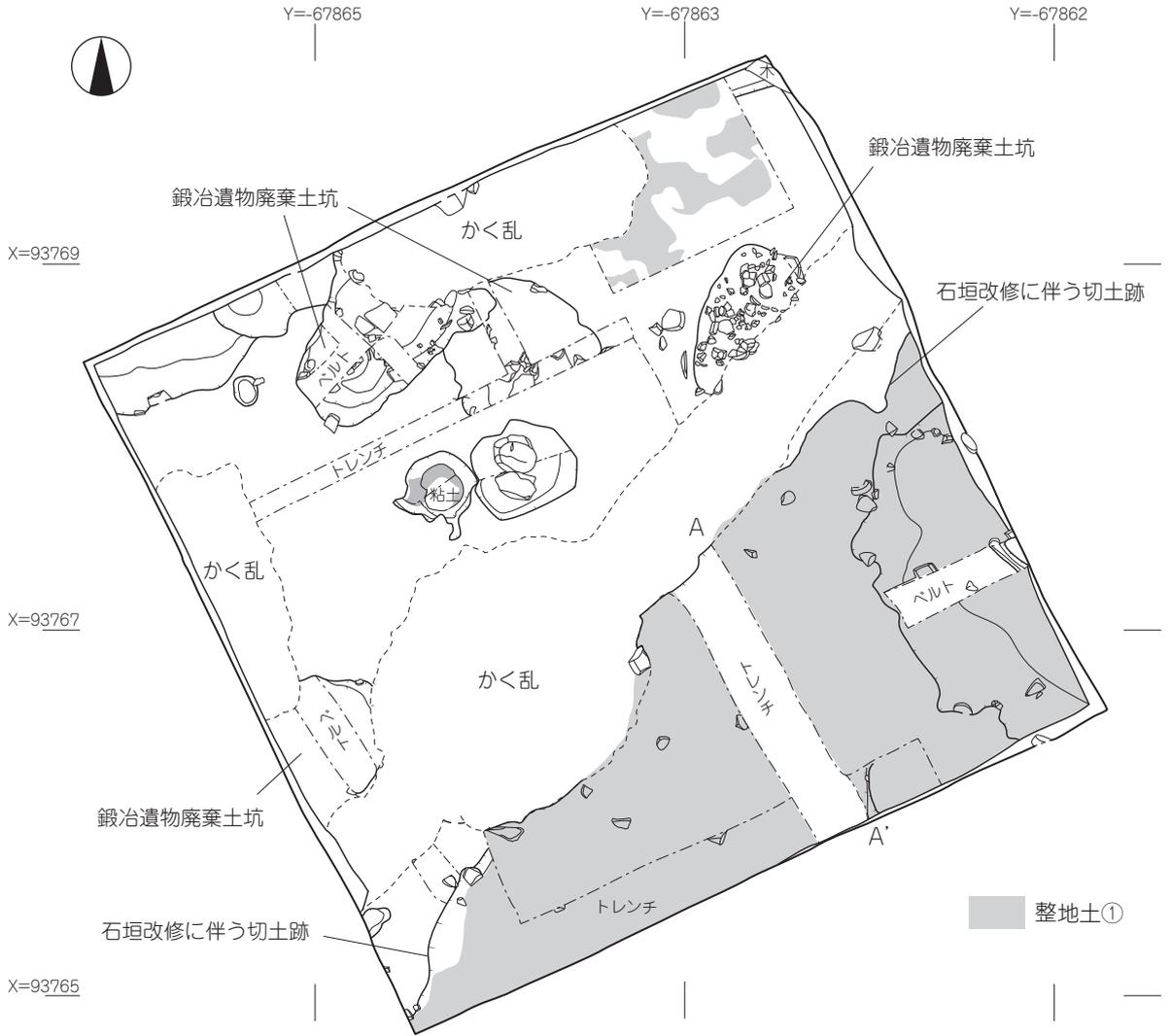


図3 6次 T10 平断面図

史跡松山城跡



1. 淡黄色シルト [2.5Y8/4] 石垣改修に伴う埋土 (整地土①)
2. 黄褐色シルト [2.5Y5/3] 石垣改修に伴う埋土
3. にぶい黄色砂質土 [2.5Y6/3] 整地土②
- 4a. 暗灰黄色砂質土 [2.5Y5/2] 灰・炭化物・焼土を少量含む、鉄滓出土
- 4b. 黒褐色灰層 [2.5Y3/1] 灰・炭化物・焼土を多量に含む、鉄滓出土
- 4c. 灰黄色砂質土 [2.5Y6/2] 灰、鉄滓出土
5. 灰黄色粘土 [2.5Y7/2] シルト

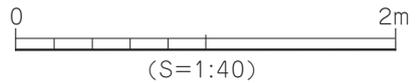
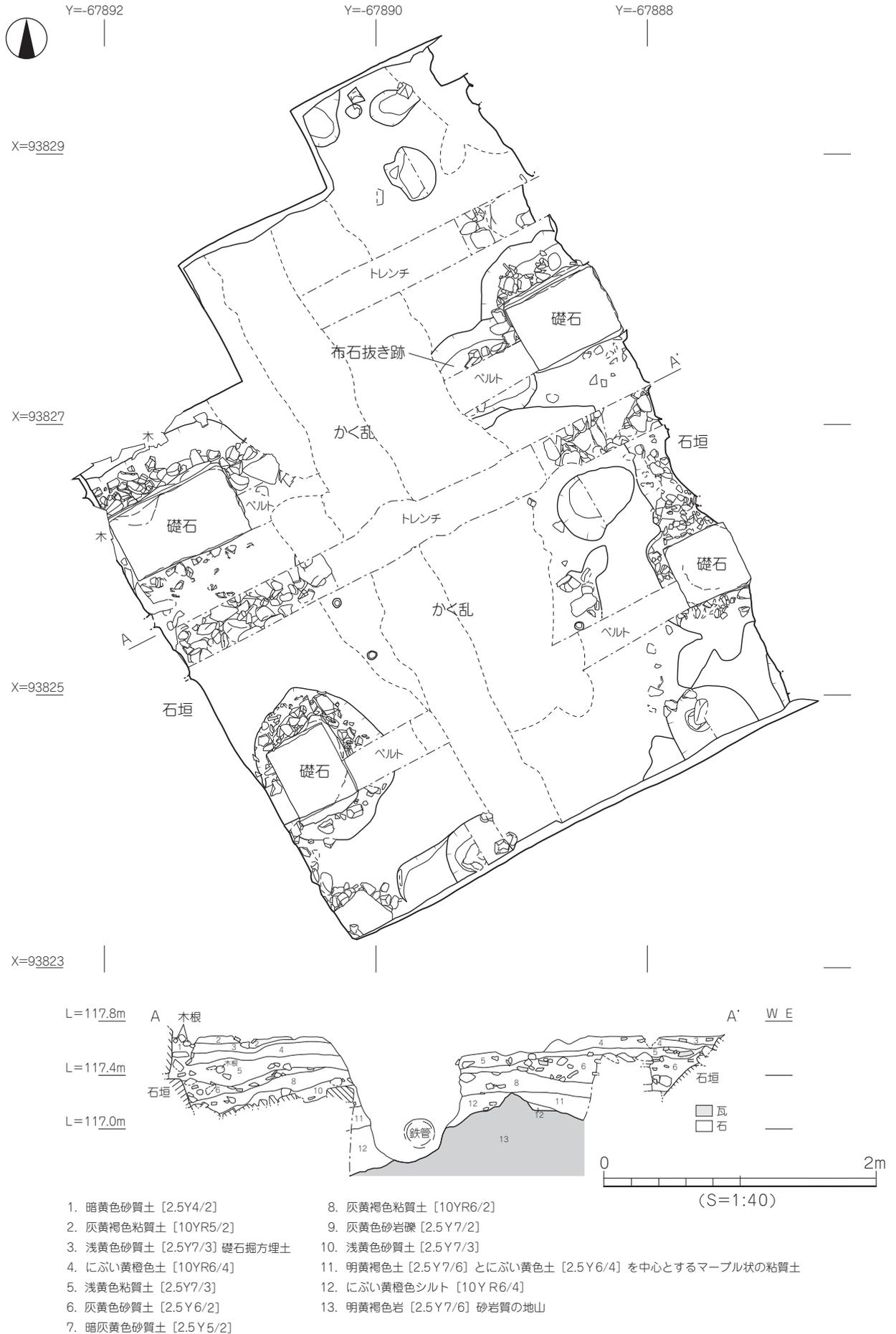


図4 6次 T2 平断面図

本丸地区の調査



- | | |
|----------------------------|---|
| 1. 暗黄色砂質土 [2.5Y4/2] | 8. 灰黄褐色粘質土 [10YR6/2] |
| 2. 灰黄褐色粘質土 [10YR5/2] | 9. 灰黄色砂岩礫 [2.5Y7/2] |
| 3. 浅黄色砂質土 [2.5Y7/3] 礎石掘方埋土 | 10. 浅黄色砂質土 [2.5Y7/3] |
| 4. にぶい黄橙色土 [10YR6/4] | 11. 明黄褐色土 [2.5Y7/6] とにぶい黄色土 [2.5Y6/4] を中心とするマーブル状の粘質土 |
| 5. 浅黄色粘質土 [2.5Y7/3] | 12. にぶい黄橙色シルト [10YR6/4] |
| 6. 灰黄色砂質土 [2.5Y6/2] | 13. 明黄褐色岩 [2.5Y7/6] 砂岩質の地山 |
| 7. 暗灰黄色砂質土 [2.5Y5/2] | |

図5 6次T1中ノ門図

史跡松山城跡

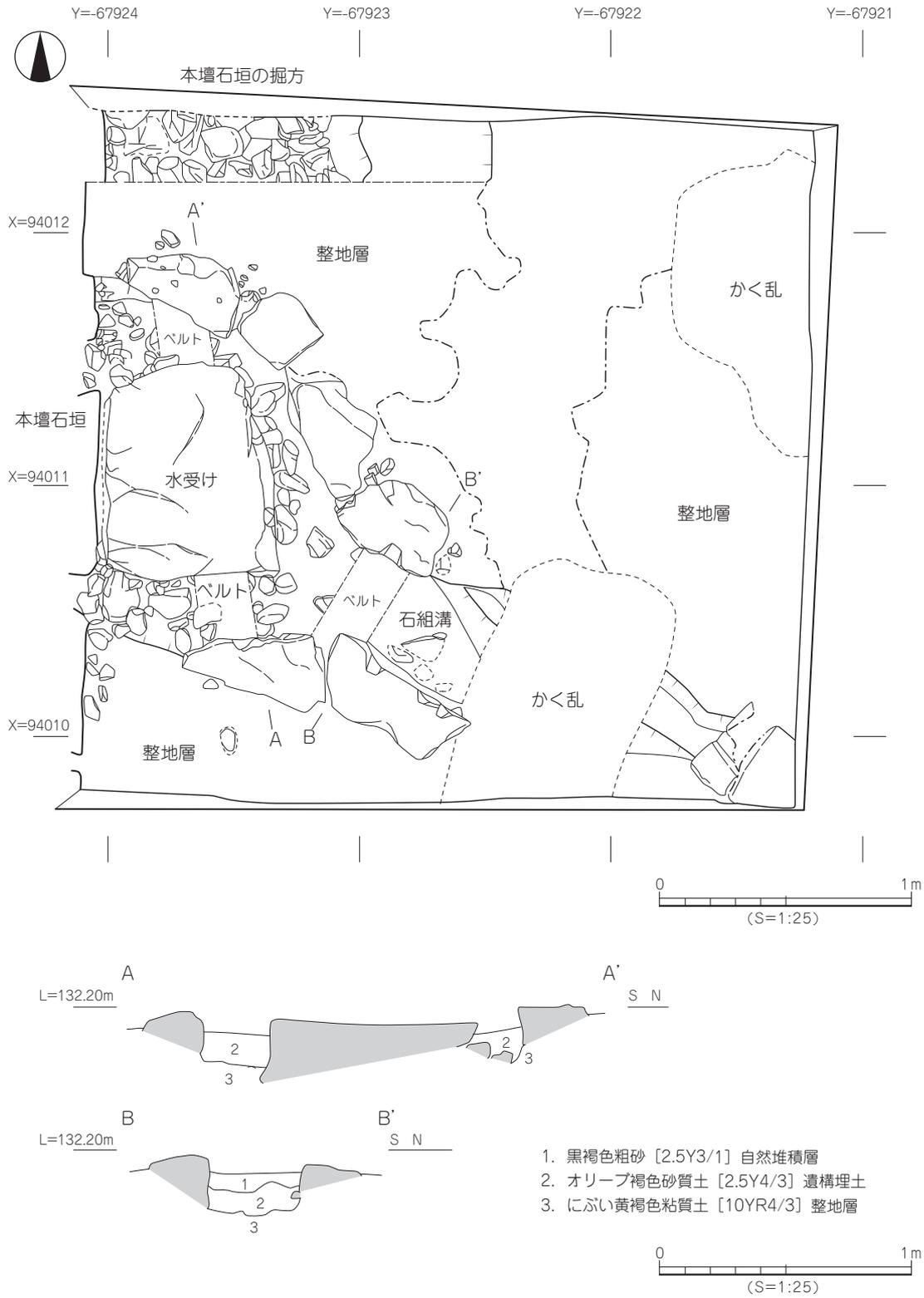


図6 6次T8平断面図

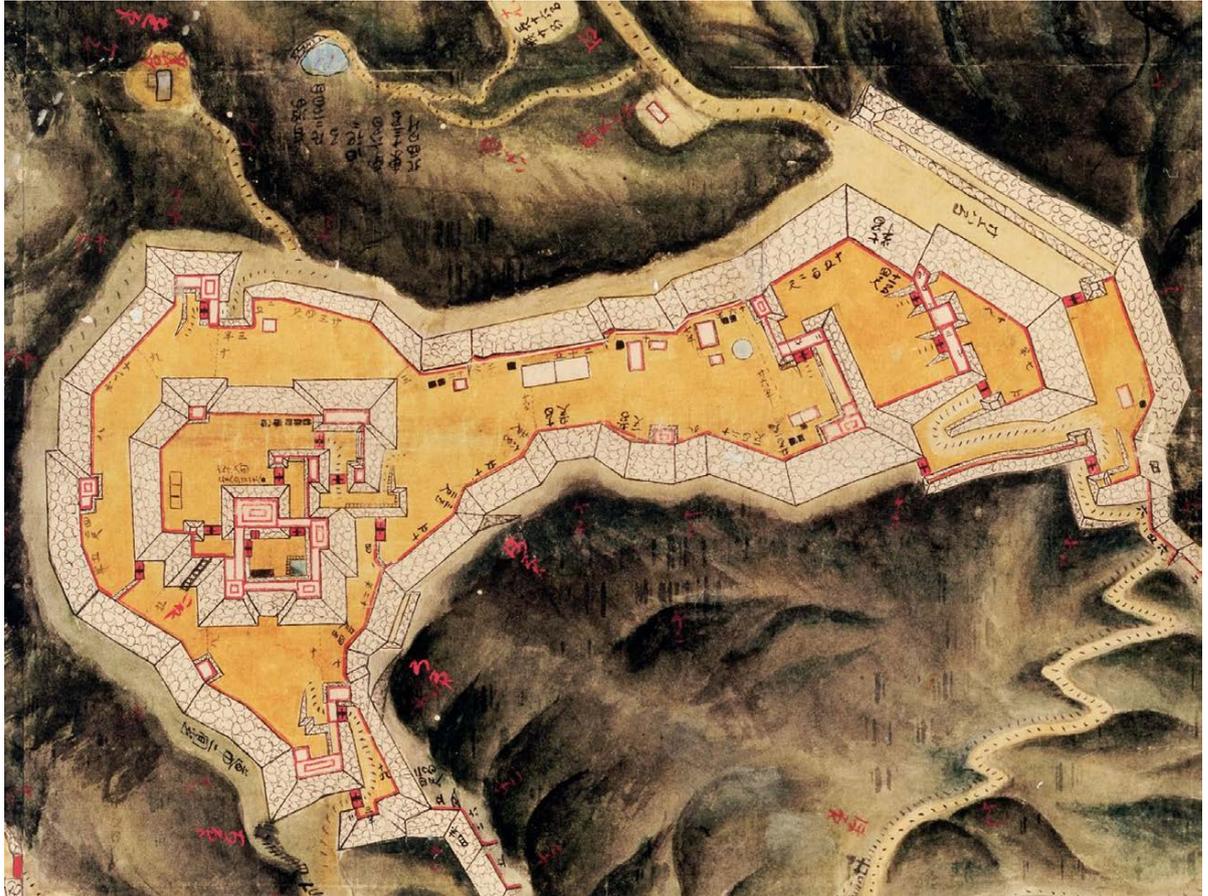


図7 亀郭城秘図 (部分・伊予史談会 蔵)

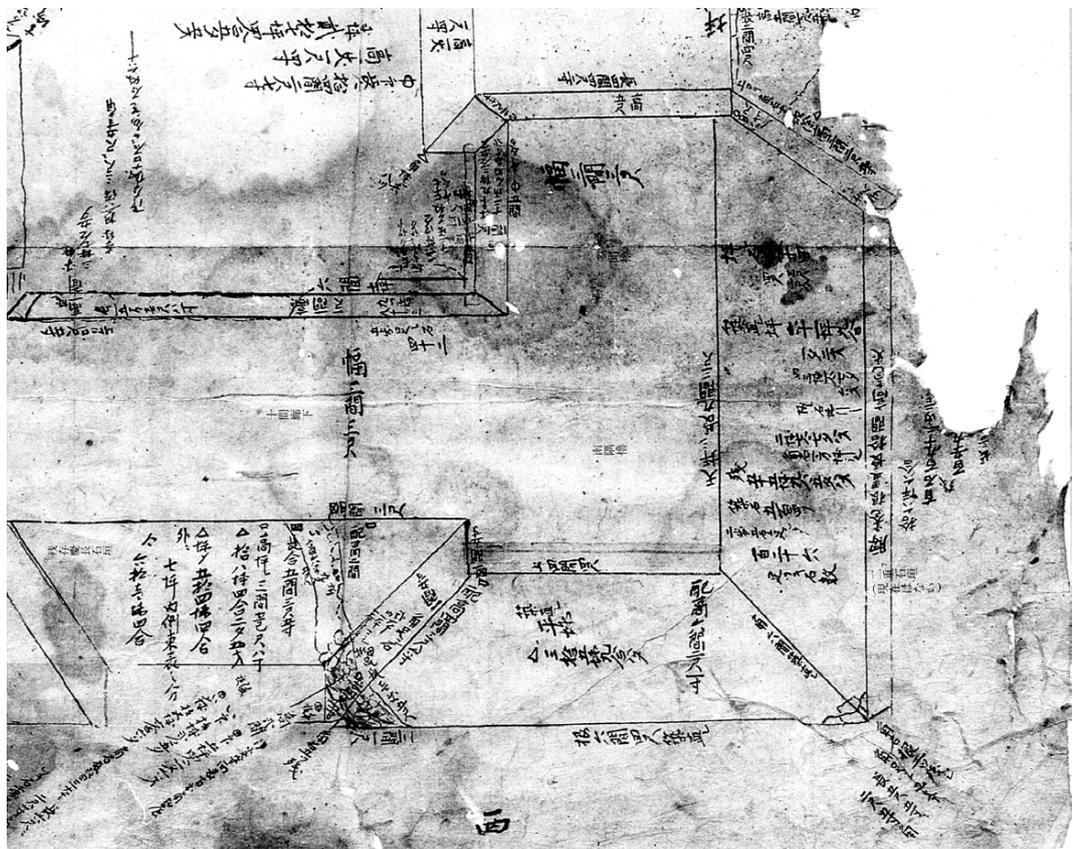


図8 松山城本壇修理計画図 (部分、個人蔵) ※『松山市史料集』第13巻付図より転載



写真1 5次 T1 本丸南東裾石垣 (東より)



写真2 5次 T2 本丸東裾石垣 (南より)



写真3 5次 T5 栗石群 (北東より)



写真4 6次 T11 腰巻石垣と本壇南石垣 (南西より)



写真5 6次 T11 本壇南石垣根石 (南西より)



写真6 6次 T10 (北) 切土跡と溜池石垣 (北より)



写真7 本壇東石垣にみられる石垣改修痕 (東より)



写真8 5次 T8 石組溝 (南西より)



写真9 5次T8本壇北石垣隅角部根石(西より)



写真10 6次T1中ノ門礎石(北より)



写真11 6次T8遺構検出状況(南西より)



写真12 5次T4石組溝(南東より)



写真13 6次T12石組溝(西より)



写真14 5次T1暗渠(南東より)



写真15 6次T2廃棄土坑群(東より)



写真16 5次3T出土滴水瓦

ほんまるあと
4. 本丸跡 7・8 次調査・

本丸防災設備等整備事業に伴う工事立会

所在地 松山市丸之内
 期 間 7次：平成27年5月11日～同年6月19日
 8次：平成27年11月16日～同28年1月29日
 工事立会：主に平成27・28年度
 面 積 7次：約145㎡、8次：約230㎡
 担 当 7次：楠寛輝・西村直人
 8次：山本健一
 工事立会：楠寛輝・西村直人・新原佑典

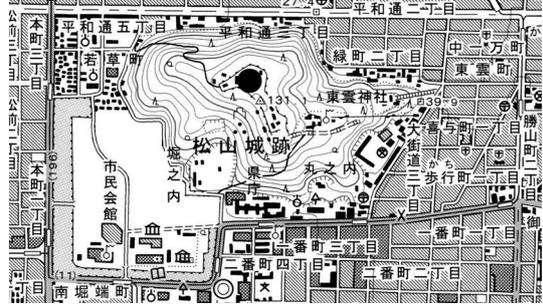


図1 調査位置図

経 過 本丸跡7・8次調査は、松山城本丸防災設備等整備工事に伴い、事業での整備が必要な各種防災設備の設置箇所を決めるために行った事前の確認調査である。これまでに同様の目的で実施してきた5・6次の確認調査の成果を踏まえ、7・8次調査では、これまで確認調査が実施できていなかった1～3号水槽等の予定地（全て江戸期の絵図では建造物等は描かれていない場所）に調査区を設定した（図2）。また、実際の工事施工（掘削）に伴う工事立会を実施した。

遺構・遺物 7次調査（図3、写真1・2）：本丸西側の2号水槽の拡幅予定地に調査区を設定した。調査の結果、江戸期の整地層、盛土、柱穴1基（SP14）、小穴13基（SP1～13）が確認された。整地層は、地山（岩盤）の上面で確認され、北側では後世のかく乱によって多くは失われていたものの、標高の低い南側では比較的多く残存しており、同層からは江戸後期の砥部焼の端反碗が出土した（図7）。調査区南端で確認された盛土は、地山が北から南に大きく下がる斜面を埋めたもので、斜面は、人為的な切土の可能性も考えられるが、東西方向に伸びており、東に近接する本壇南隅櫓台石垣下へと続いている可能性が高い。また、盛土は、調査区の南に位置する乾門東続塀続東折曲り塀下の石垣の裏盛土となっている。これらのことから、盛土中から年代を示す遺物は出土していないものの、過去の調査成果も踏まえると、本壇石垣の南西部は、地山ではなく盛土上に構築されている可能性が高い。なお、斜面で確認された柱穴は、埋土が盛土と近似しており、盛土の施工に関係するものと考えられる。小穴は、13基のうち7基が南北にほぼ等間隔に並ぶ。廃絶時期は、埋土に焼土や漆喰片が含まれることなどから、本壇西側の建造物が放火により焼失した昭和8年以降と判断できるものの、構築時期については不明である。なお、松山城の所在する城山の地山の地質は、山頂（＝本壇）付近を境に北側が花崗岩、南側が和泉層群の砂岩や礫岩であることが知られているが、調査区の中央付近で、砂岩と礫岩との境界（北：礫岩、南：砂岩）が確認された。

8次調査（図4、写真3～10）：連立式天守中庭東側の新設配管の埋設予定地（1区）では、江戸期の整地層、切土、溝跡1条等が確認された。整地層は、人為的に削平された地山上面の不陸を整正するように、地山上面に薄く張られていた。なお、切土は、調査区南側の地山が南に向けて大きく削られたもので、後に埋め戻されていた。中庭西側の6次調査のT10でも同様の地業が確認されており、これらは、幕末の天守等の再建に合わせて、本壇石垣南側が積み直されたことに伴うものであると考

えられる。溝跡は、整地層の下で確認され、幅、深さともに40cm程度で、東西方向に伸びており、6次調査のT10で確認された池跡へと続いていた可能性がある。本壇の天神櫓西側の1号水槽の拡幅予定地(2区)では、江戸期の整地層、土坑1基(SK1)、柱穴9基(SP1~9)等が確認された。整地層は、後世のかく乱によってかなり失われていたものの、調査区全域にわたって確認された。柱穴は、整地層の下で確認され、9基のうち6基が2~3m程度の間隔で石垣を囲むように東西・南北方向に並んで確認された。また、径が50~70cm程度、地山をほぼ垂直に近い角度で深さ70~100cm程度掘られていること、埋土からは天守台石垣に使われている花崗岩の破片が出土することなど、共通の特徴を有しており、天守(天守台石垣を含む)の改修に伴う足場等の可能性も考えられる。本丸の券売所南側の3号水槽の拡幅予定地(3区)では、江戸期の整地層は確認されたものの、かく乱が著しかったこともあり、その他の遺構は確認されなかった。

工事立会(図5・7、写真11~13):松山城本丸防災設備等整備工事に係る配管等の掘削(既存配管埋設部分の再掘削を原則)に対し、平成27・28年度を中心に継続的に立会を行った。その結果、本丸の北側から東側にかけての範囲で石垣の栗石層が確認された。栗石層は、ほぼ全て円礫(河床礫)で構成されており、城内の他の石垣との違いは見られず、また、このような栗石層は、過去に周辺で行われた5次調査のT5(写真14)やT8でも確認されている。これら考古学的に栗石層が確認された場所が、「与州松山本丸図(図6)」等に描かれた、現在の本壇とは形状が大きく異なる、築城段階のものとされる本壇と整合的であることである。つまり、今回確認された栗石層は、松平定行による寛永年間の改修によって現在の形となる以前の、加藤嘉明による築城段階の本壇の石垣の栗石層である可能性が考えられる。また、本丸北側では、現存しない中仕切門の礎石も確認された。

小 結 以上のように、2回の確認調査や工事立会を通じ、築城段階の本壇の形状をはじめ、松山城の歴史を考える上で欠くことのできない重要な知見を数多く得ることができた。また、目的であった本丸防災設備等整備工事予定地の埋蔵文化財や既存配管等の状況が把握できたことから、それを踏まえた設備の配置等、工事内容の変更が可能となり、工事の埋蔵文化財への影響を最小限にすることができた。

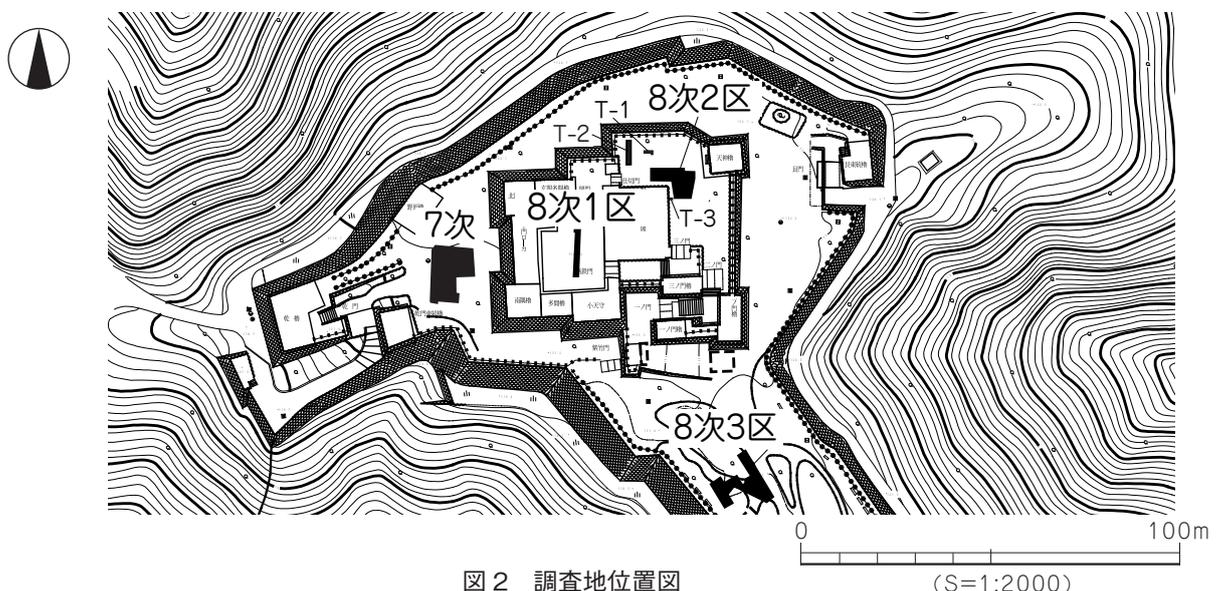


図2 調査地位置図

史跡松山城跡

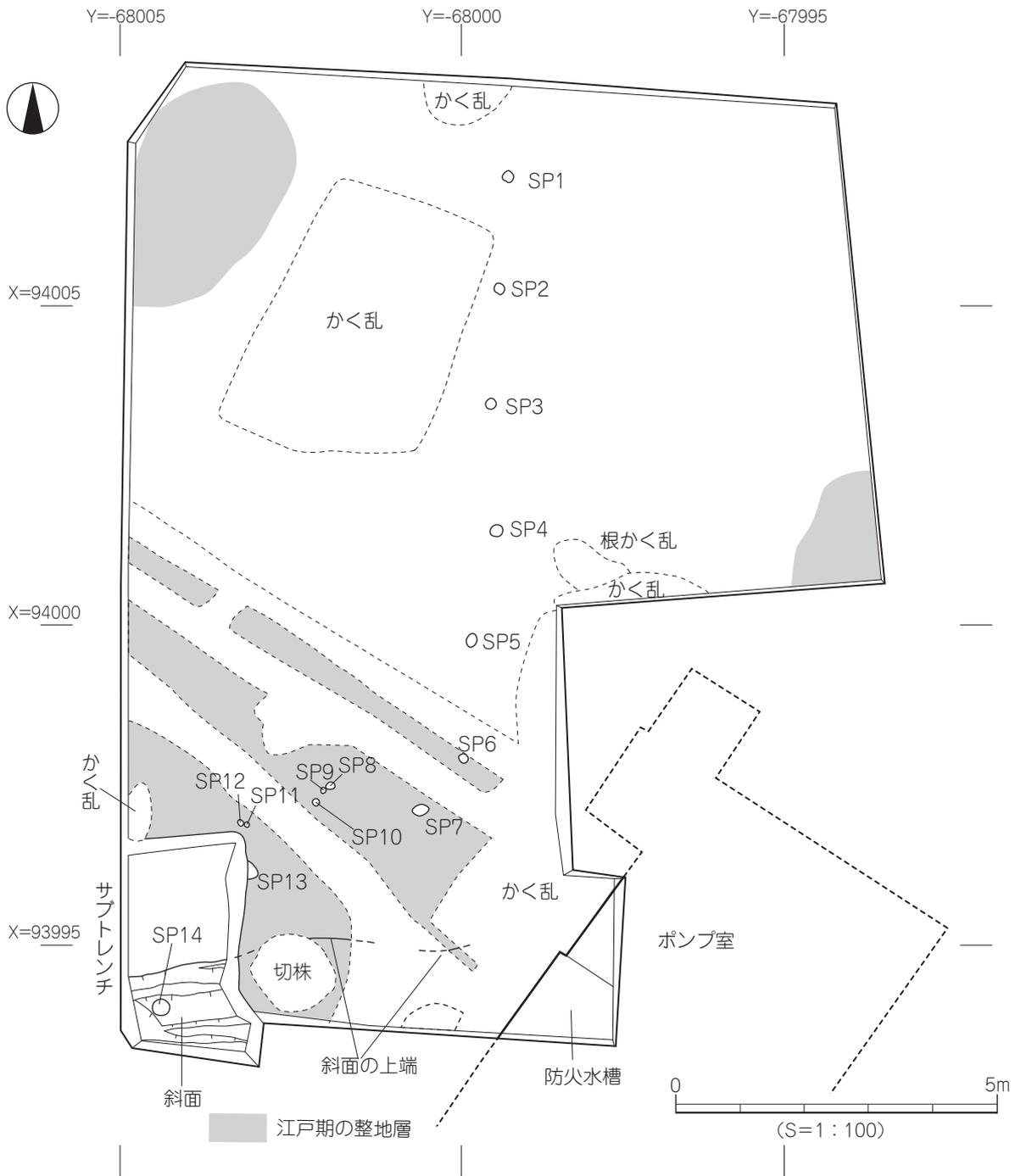


図3 7次調査遺構配置図



写真1 7次完掘状況（北東より）



写真2 7次盛土・斜面・柱穴（➡）確認状況
（左：北西より 右：東より）



本丸地区の調査

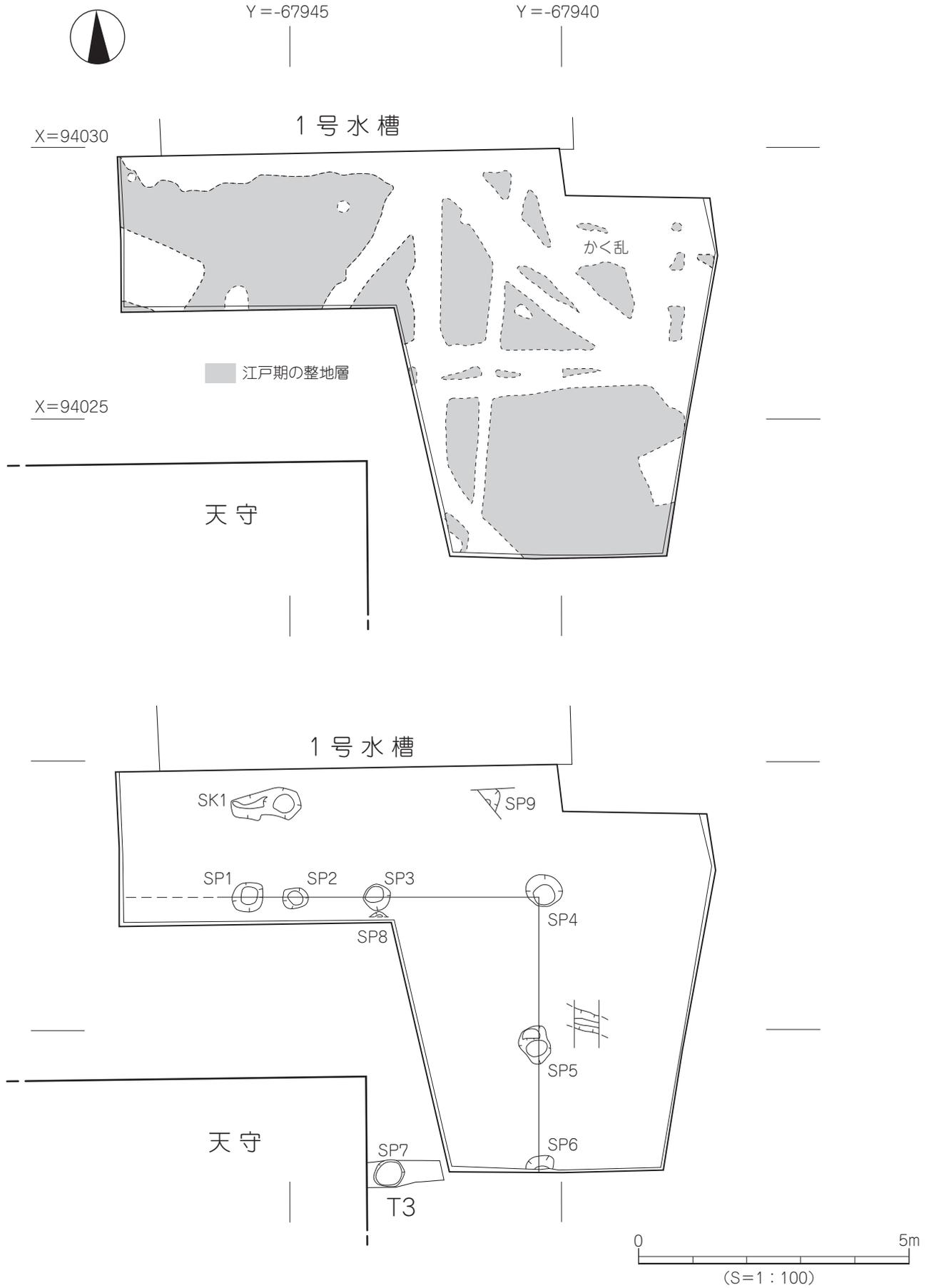


図4 8次2区遺構配置図(上:整地層確認状況、下:柱穴確認状況)



写真3 8次1区南部完掘状況（北より）



写真4 8次1区南側地山切土状況（北西より）



写真5 8次2区完掘状況（南より）



写真6 8次2区完掘状況（西より）



写真7 8次2区柱穴の並ぶ様子（北東より）



写真8 SP3完掘状況（北東より）



写真9 8次3区中央部整地層(➡)確認状況(南より)



写真10 8次3区中央部完掘状況（東より）

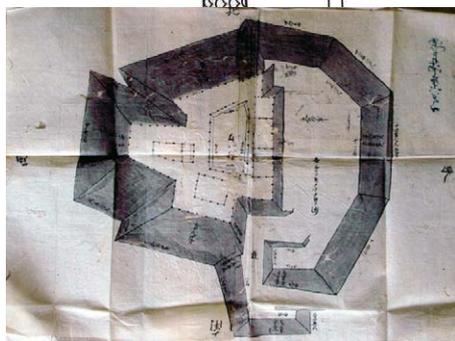
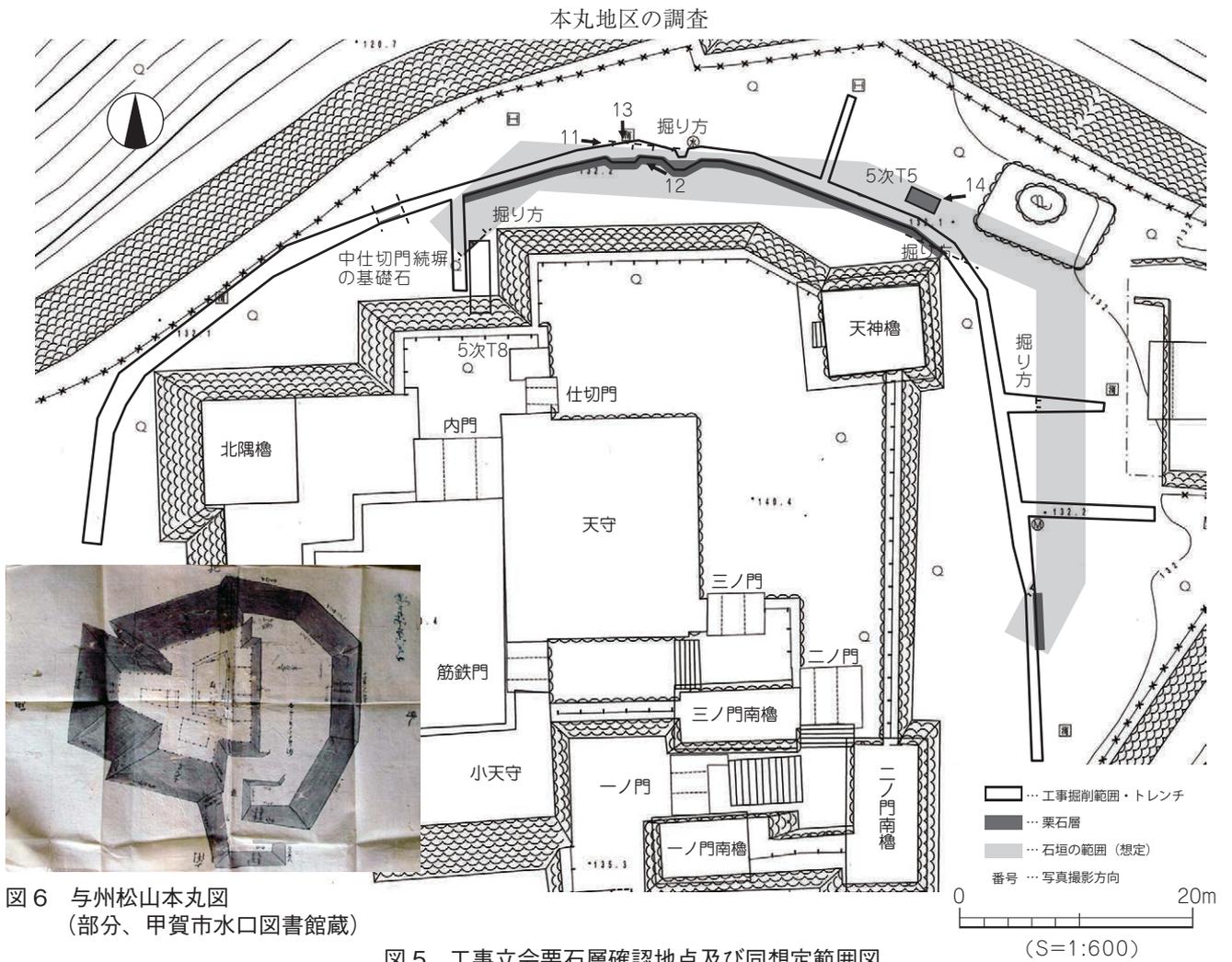


図 6 与州松山本丸図
(部分、甲賀市水口図書館蔵)



写真 11 工事立会栗石層確認状況 (西より)



写真 12 工事立会栗石層確認状況 (東より)



写真 13 工事立会栗石層確認状況 (北より)



写真 14 5次T5栗石層確認状況 (北東より)

史跡松山城跡

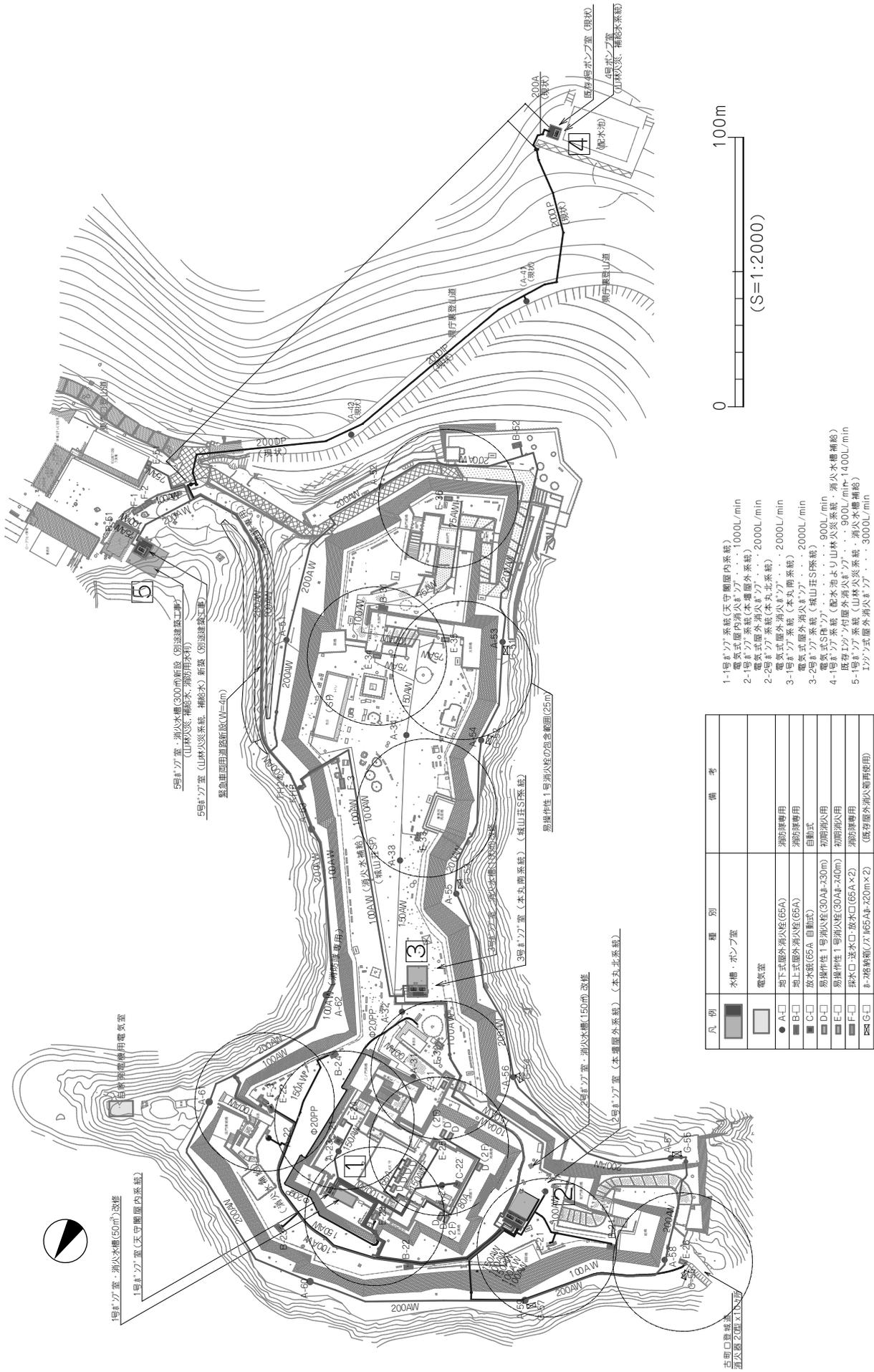


図7 松山城本丸防災設備等整備工事配管経路図

本丸地区の調査

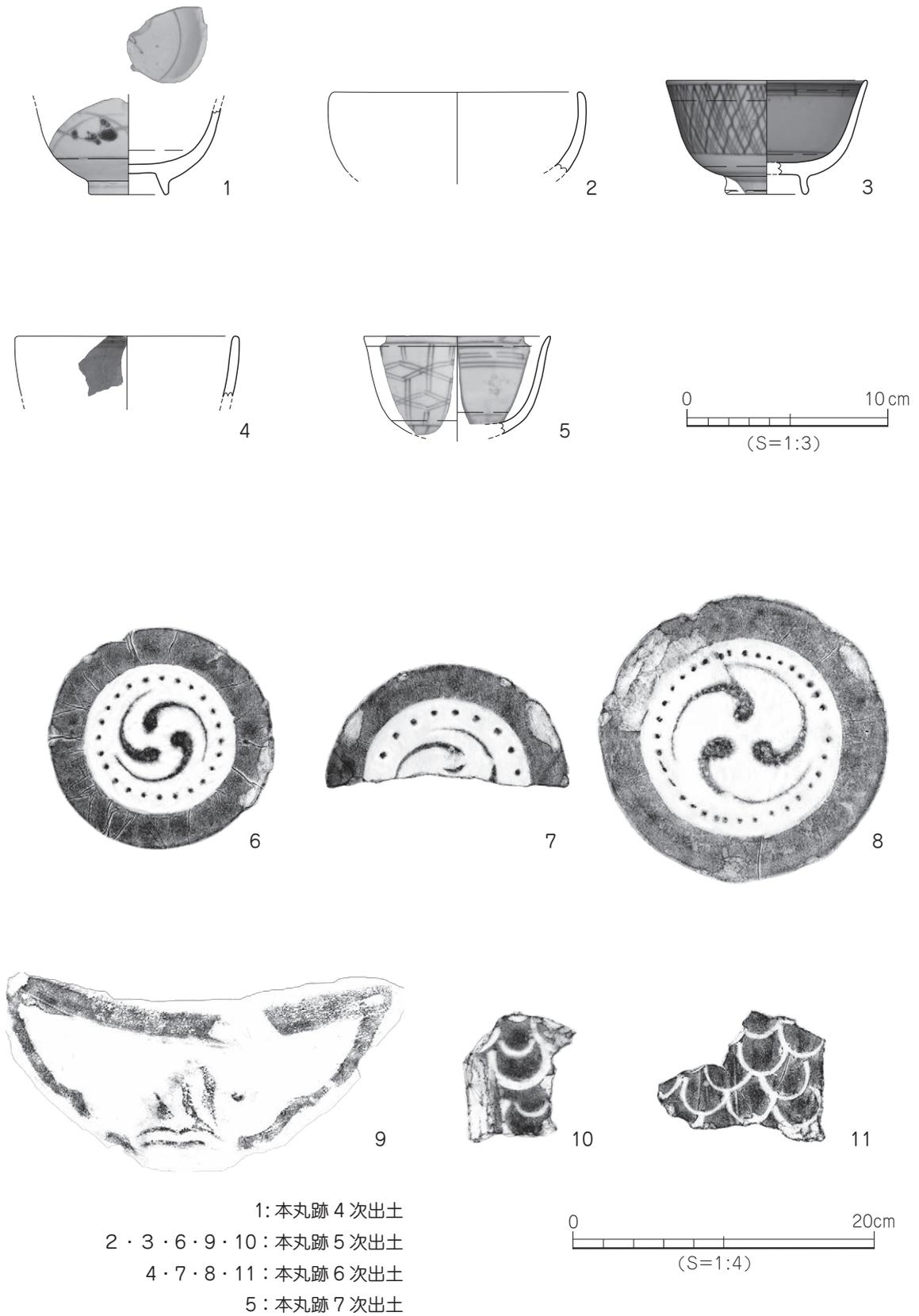


図8 出土遺物実測図

史跡松山城跡

表1 本丸跡出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	4次 T4B 2層	磁器	碗	—	[4.3]	3.9	透明	染付	西岡?、被熱?
2	5次 T2 2層	陶器	碗(呉器手?)	(12.4)	[4.0]	—	透明		肥前(京焼風陶器)
3	5次 T5 4層	磁器	碗(端反)	(10.0)	5.7	(4.0)	透明	染付	肥前、襷文
4	6次 T2 3層 (SK4上)	陶器	碗	(11.0)	[3.5]	—	透明	染付	肥前、陶胎染付
5	7次 南西サブト レ内黄色整地層	磁器	碗(端反)	(9.3)	[4.8]	—	透明	染付	砥部?、籠目文?

表2 本丸跡出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
6	5次 T8 SP1	14.5	10.0	2.3	2.4	右卷三巴	24	0.7	灰	良好	○	
7	6次 T1 礎石1 掘方	(15.6)	(10.8)	2.5	—	左卷三巴	(20)	0.6	灰・淡黄	良好	○	
8	6次 T10 SK3 4f層	18.7	13.0	2.7~3.0	2.5	左卷三巴	35	0.6	灰・ 灰オリーブ	良好		大型

表3 本丸跡出土遺物観察表 その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
9	5次 T3a	25.5	(10.9)	22.2	(18.0)	1.0~1.7	1.6~2.0	灰黄・黄灰	良好		三頭波文	滴水、面取
10	5次 T3a かく乱	—	—	—	—		3.1	暗青灰	良好	○	鱗	鮭(鱗)
11	6次 T10 SK3 4f層	—	—	—	—		1.7~2.3	暗青灰	良好		鱗	鮭(鱗)

5. 東雲口登城道整備工事に伴う確認調査

所在地 松山市丸之内
 期間 史跡内：平成16年8月20日～同年10月15日
 史跡外：平成16年11月18日～同年12月22日
 面積 史跡内：約91㎡、史跡外：約40㎡
 担当 史跡内：岸見泰宏
 史跡外：楠寛輝・山中菊乃

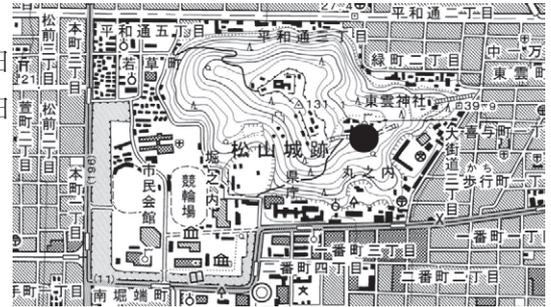


図1 調査地位置図

経過 松山城では、本丸まで車両で登ることが可能な管理道は県庁裏登城道しかなく、災害時における緊急車両の通行や日常の維持管理に支障を来していたことから、東雲口登城道の再整備工事を実施することとなった。それに伴い、江戸期の登城道等を把握するため、現在の登城道や登城道沿いの斜面を対象に、史跡内7箇所（T1～7）、史跡外9箇所（T1～9）、計16箇所のトレンチを設定し、事前の試掘調査を実施した（図2）。なお、史跡外の調査については、周知の埋蔵文化財包蔵地内であることから、文化財保護法第94条の通知（平成16年度137号）に基づいて実施した。なお、東雲口登城道の登り口は、当初は現在のロープウェイ駅舎付近だったが、ロープウェイ等の建設により登城道の一部が通行できなくなったことに伴い、現在の東雲神社境内へと付け替えられたと考えられている。

遺構・遺物 史跡内（図2）：全てのトレンチで、明治期以降のかく乱の影響等もあり、江戸期の東雲口登城道に関わる遺構・遺物は確認できず、現在の登城道が江戸期の登城道を踏襲しているかどうかを確かめることはできなかった。なお、登城道上に設けたT1～5のうち、岩盤が露出していたT4を除いた全てのトレンチで、明治期以降の造成土の直下で弥生土器を含む黒色土層が確認された。東側山麓の東雲神社遺跡では弥生時代中期の遺構が確認されており、明治期以降のかく乱の影響を考慮する必要はあるが、登城道北側の長者ヶ平にも、弥生時代の遺跡が存在している可能性は高いと考えられる。

史跡外（図2・3、写真1～8）：登城道には、絵図等から東雲神社の土塀の存在が想定され（図4）、事前の踏査でも土塀基礎石垣が部分的に露出していたことから、トレンチはこれらを踏まえて設定した。その結果、全てのトレンチで土塀基礎の石垣が確認された。石垣は幅約50cmで、T4で確認された隅角部から南北方向に36m、東西方向に68m以上続いており、T8・9では、くり抜き式の石樋も確認された。石垣は切石積で、精加工の花崗岩が用いられている。城内で確認できる切石積の石垣は、他に本壇石垣の南側、嘉永年間（1850年前後）の改修範囲が挙げられるが、東雲神社は、天保11（1840）年に現在地に移設されたとされていることから、この土塀基礎石垣は、城内で最古の切石積の石垣と考えられる。

小結 以上のように、今回の試掘調査を通じ、史跡外では幕末に現在地に移設された東雲神社の土塀基礎石垣が広く確認されるなど、東雲口登城道の変遷や東雲神社についての重要な知見を数多く得ることができた。

史跡松山城跡

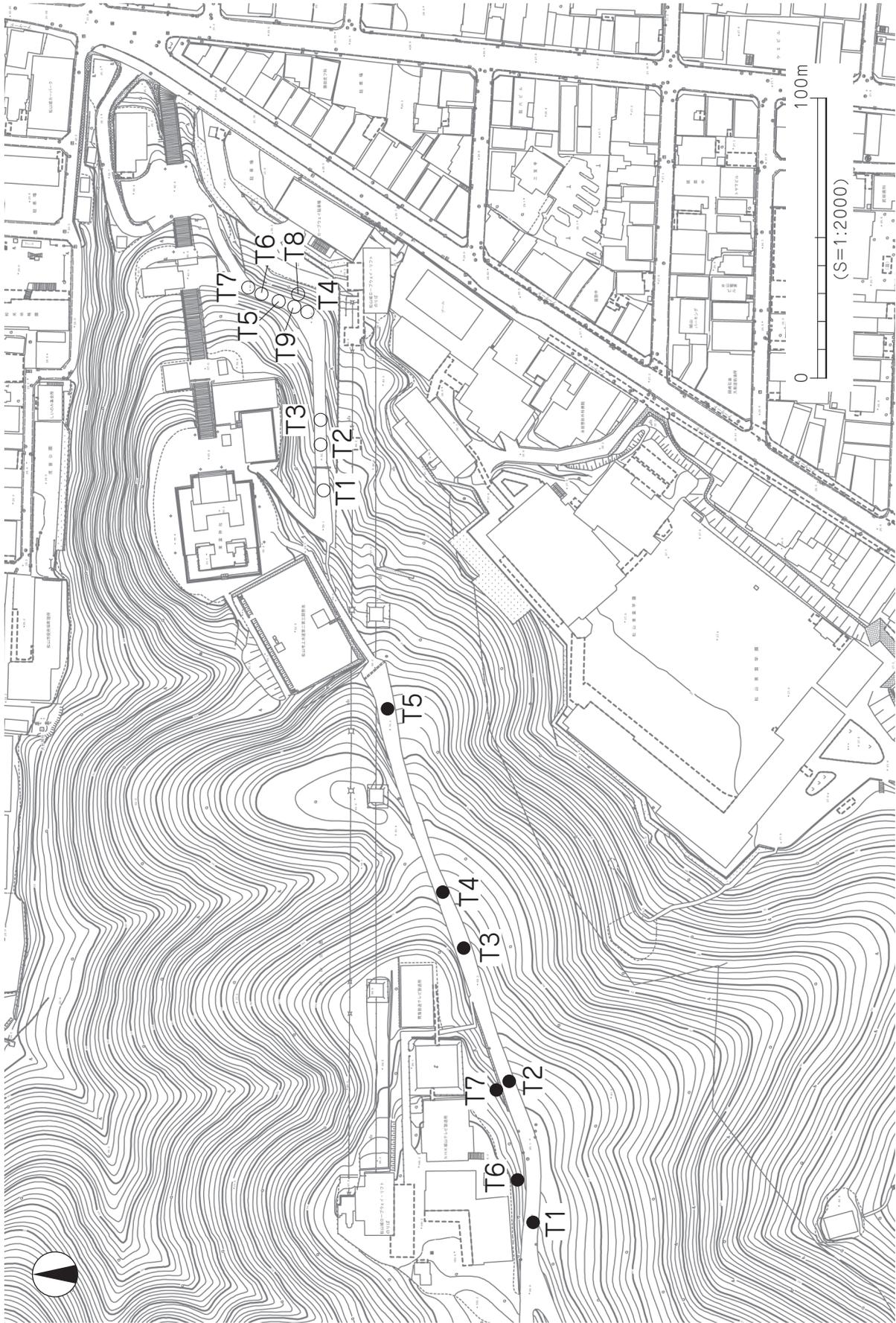


図2 調査位置図 (●：史跡内、○：史跡外)



図4 亀郭城秘図（東雲神社部分、文久4〔1864〕年、伊予史談会蔵）



図3 史跡外遺構配置図



写真1 史跡外 T1 土塀基礎石垣検出状況 (西より)



写真2 史跡外 T2・3 土塀基礎石垣検出状況 (西より)



写真3 史跡外 T4 土塀基礎石垣検出状況 (西より)



写真4 史跡外 T4 土塀基礎石垣検出状況 (南より)



写真5 史跡外 T4 土塀基礎石垣検出状況 (東より)



写真6 史跡外 T8 石樋検出状況 (東より)



写真7 史跡外 T8・9 石樋検出状況 (北より)



写真8 史跡外 T9 石樋検出状況 (西より)

6. ^{しろ} ^{うち} 城の内 2・4・5号墳

所在地 松山市丸之内

期 間 平成17年4月25日～同年9月30日

面 積 約80㎡

担 当 武田尊子

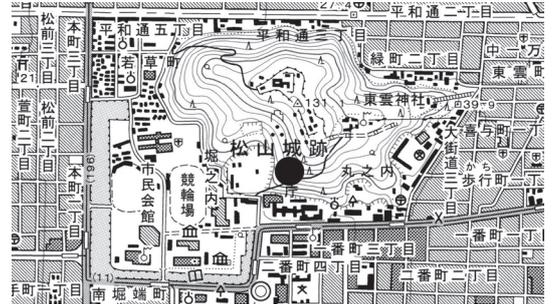


図1 調査地位置図

経 過 松山城の県庁裏登城道は、明治末期に勝山の斜面を切って設けられたが、道沿いの斜面崩落の危険性等が指摘されていたことから、再整備工事を実施することになった。県庁裏登城道の所在する勝山の南斜面は、松山市内でも有数の古墳密集地として知られており、登城道沿いの斜面には、登城道の整備に伴い部分的に破壊された古墳の石室が開口していることが知られていた。そこで、まず工事の影響範囲である登城道沿いの斜面について、事前の踏査を行ったところ、既知の2号墳に加え、新たに2基の古墳（4・5号墳）の石室が確認されたことから、計3基の古墳の確認調査を実施した（図2・3）。

遺構・遺物 2号墳（図4・5、写真1～4）：石室は、主軸をN-67°-Wにとり、現状は長軸1.5m、短軸0.65m、高さ約0.8mで、墓壙は墳丘を掘り込んで構築されている。天井部は、長さ約1mの結晶片岩や柱状の流紋岩等を石室に架け、その石材間には40～60cm程度の川原石を充填している。ただし、樹根によって石室全体が南西に傾いており、天井部の礫はおおよそ原位置を留めていない。壁体は主に角のとれた幅10～40cm程度の川原石を用い、基底部には礫の直面を見せるように並べ、それより上は小口積みで7段程度積んでいる。石室内には、貼床と石室が樹根に破壊された際の崩落土2層が堆積しており、床面直上に礫等は見られない。墳丘には、石室を起点に2本のトレンチを設定した。その結果、2本とも根かく乱により墳丘裾のラインは検出できなかったが、墳丘を切り、登り石垣に並行する北側の排水溝を境に、石室側と石垣側で岩盤の高さや土層が大きく異なることが確認され、排水溝付近が墳丘裾である可能性が高いと考えられたことから、2号墳は直径約6.5mの円墳と推定される。なお、石室内の崩落土からは、須恵器（提瓶、短頸壺、短頸壺の蓋、坏蓋）各1点、刀子1点、ガラス小玉約20点、碧玉製管玉4点が出土し、出土した須恵器の年代は6世紀後半と考えられる（図10）。

4号墳（図6・7、写真5・6）：登城道によって切られ、石室の横断面が登城道沿いの斜面に露出していた。墳丘と考えられる地形の高まりは残っていない。石室は、主軸をN-39°-Wにとり、現状は長軸2.5m、短軸1.1m、高さ約1.2mで、墓壙は岩盤を掘り込んで構築されている。天井部は残っていない。壁体は主に幅30～60cm程度の砂岩の角礫を用い、基底部には直面を見せるように並べ、それより上は小口積みとなっている。石室の幅（短軸）や壁体の積み方から横穴式石室と考えられる。石室内には、床面（岩盤）上に5層の崩落土が堆積しており、床面直上に礫等は見られない。墳丘には、石室を起点にトレンチを設定した。その結果、石室の検出面から上は、中世の遺物を含む土層が確認され、中世以降のかく乱で墳丘や石室天井部が削平されていた。なお、石室内の崩落土からは、須恵器（台付

鉢、坏身)、土師質土器(皿)などの完形品が各1点、鉄釘約36点が出土した。出土した須恵器の年代は7世紀前半、鉄釘は形態から江戸期以降のものと考えられる(図10)。

5号墳(図8・9、写真5・7・8):登城道によって切られ、樹根の下にあった石室側壁の一部が、城道沿いの斜面に露出しており、斜面には円墳と考えられる地形の高まりが残っていた。石室は、主軸をN-95°-Wにとり、現状は長軸2.35m、短軸0.62m、高さ0.56mで、墳丘と並行して構築されている。石室の形態は不明で、天井部は残っていない。壁体は角のとれた10~30cm程度の川原石の乱積みで、床面直上には棺台と考えられる礫4石が遺存していた。墳丘には、石室を起点にトレンチを設定した。その結果、周溝等の遺構は確認できなかったものの、墳丘と考えられる土層が確認された。それを踏まえると、5号墳は直径約11.5mの円墳と推定される。なお、石室の奥壁の床面直上からは、須恵器(広口壺、短頸壺)の完形品が各1点が出土した。出土した須恵器の時期は6世紀前半と考えられる。

小 結 今回の調査では、県庁裏登城道沿いの斜面に3基の古墳が確認されただけでなく、それらが6~7世紀にかけての異なる時期に構築されたことが明らかとなるなど、松山城築城に先立つ、古墳時代の勝山の歴史についての重要な知見を得ることができた。

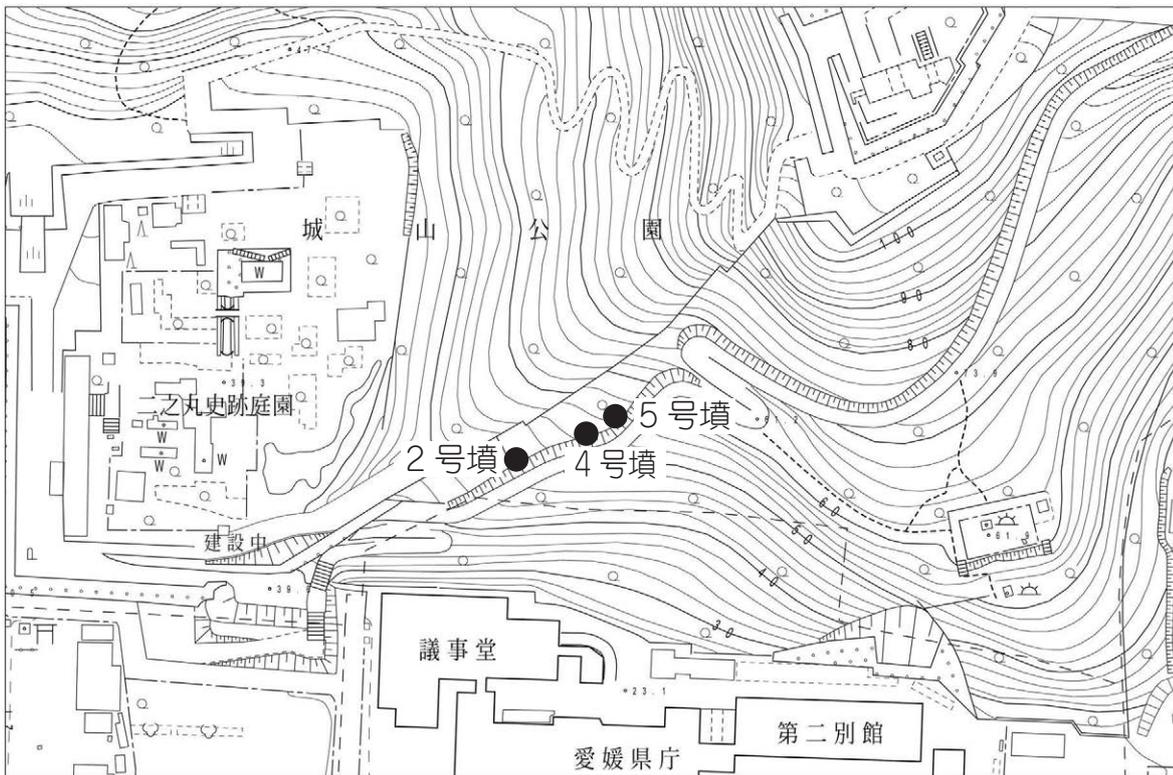


図2 調査地位置図

本丸地区の調査

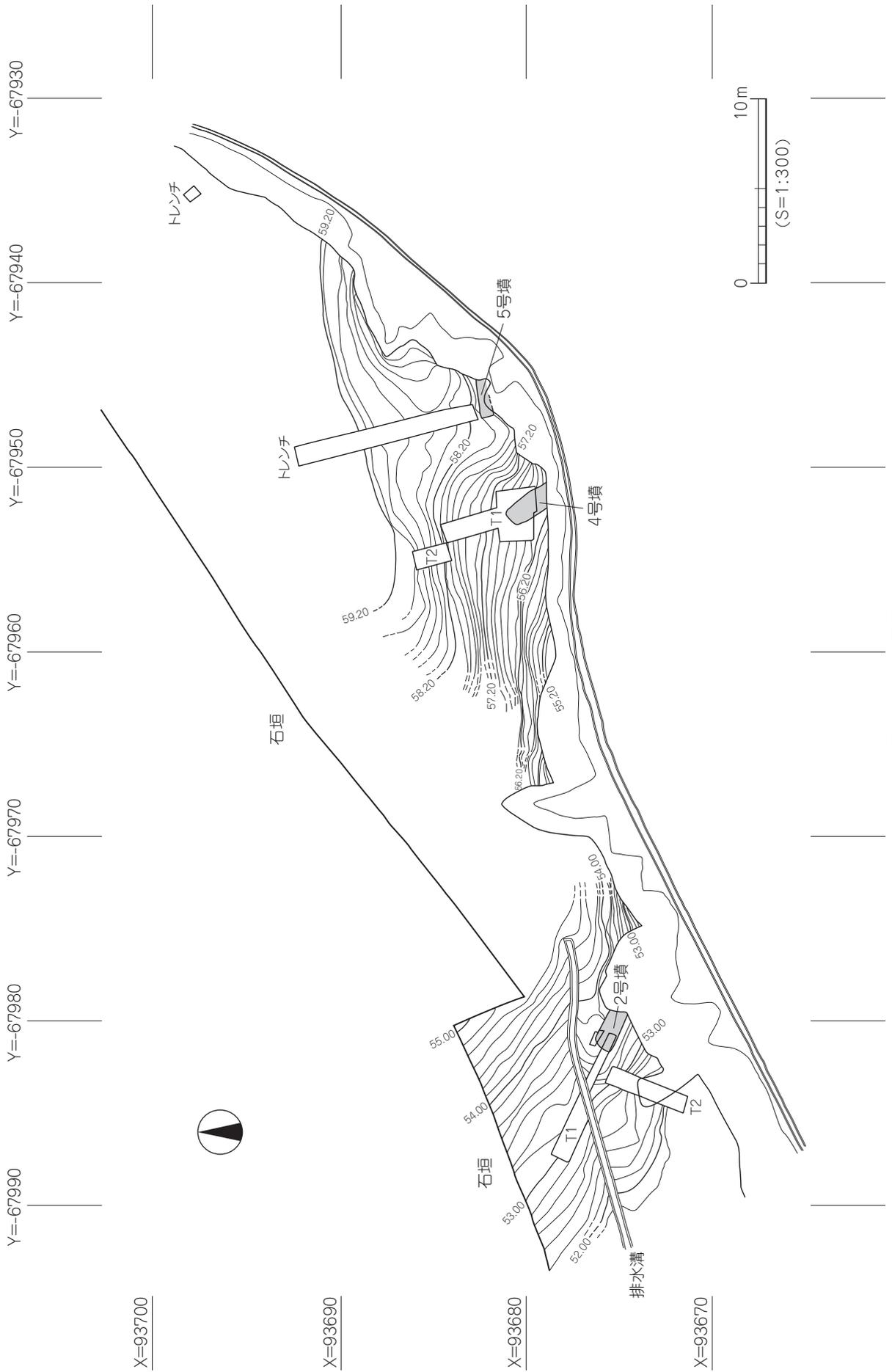


図3 遺構配置図

史跡松山城跡

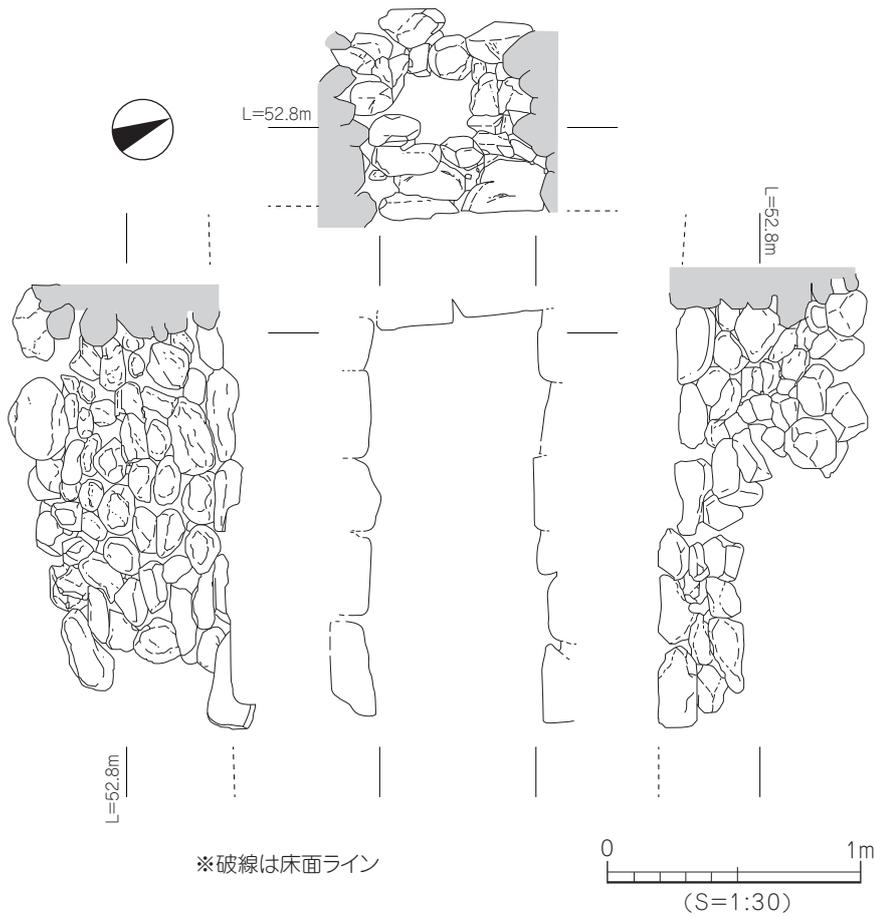


図4 2号墳石室実測図

- 1:腐植土
- 2:にふい黄橙色砂質土 樹根を多く含む。
- 3:にふい黄橙色砂礫土 20cm程度の角礫を含む。
- 4:浅黄橙色砂質シルト 均質で硬く締まる。
- 5:黄橙色砂質土 均質で締まりがない。

(2号墳墳丘)

- ①浅黄橙色砂質土 きめが粗く1~2cm程度の礫を多く含む締まりがない。
- ②浅黄橙色砂質土 きめが粗く3cm程度の礫を多く含む締まりがない。
- ③浅黄橙色砂質土 きめが粗く1~2cm程度の礫を多く含む硬く締まる。
- ④明黄褐色砂質土 決りが粗く7cm程度の礫を含み締まりがない。
- ⑤明黄褐色砂質土 3mm程度の礫を含み締まりが弱い。
- ⑥浅黄橙色砂質土 ⑤に類似。硬く締まる。
- ⑦黄橙色砂質土 1~3mm程度の礫を含み締まりが弱い。
- ⑧黄橙色砂質土 ⑦に類似する。きめが粗いが硬く締まる。

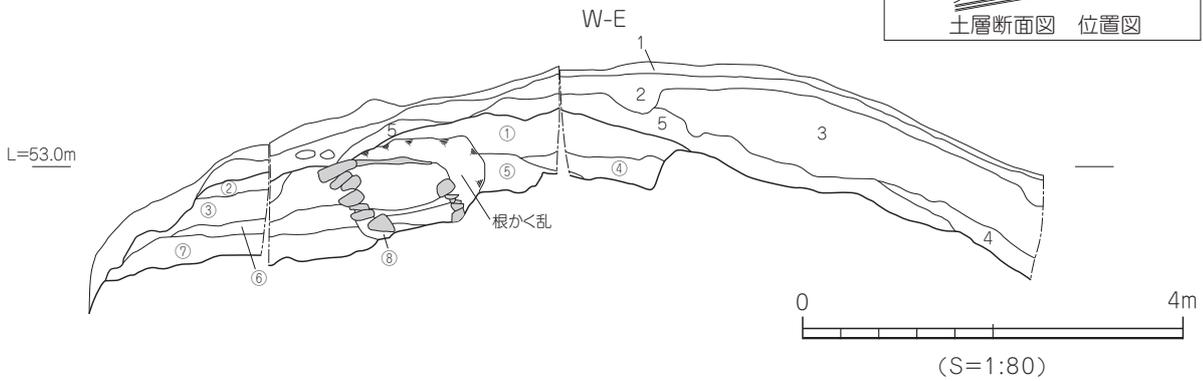
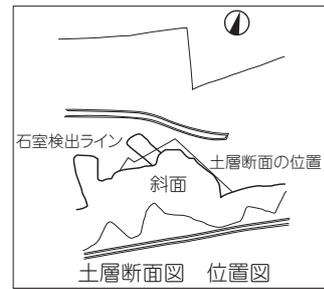


図5 2号墳墳丘断面図

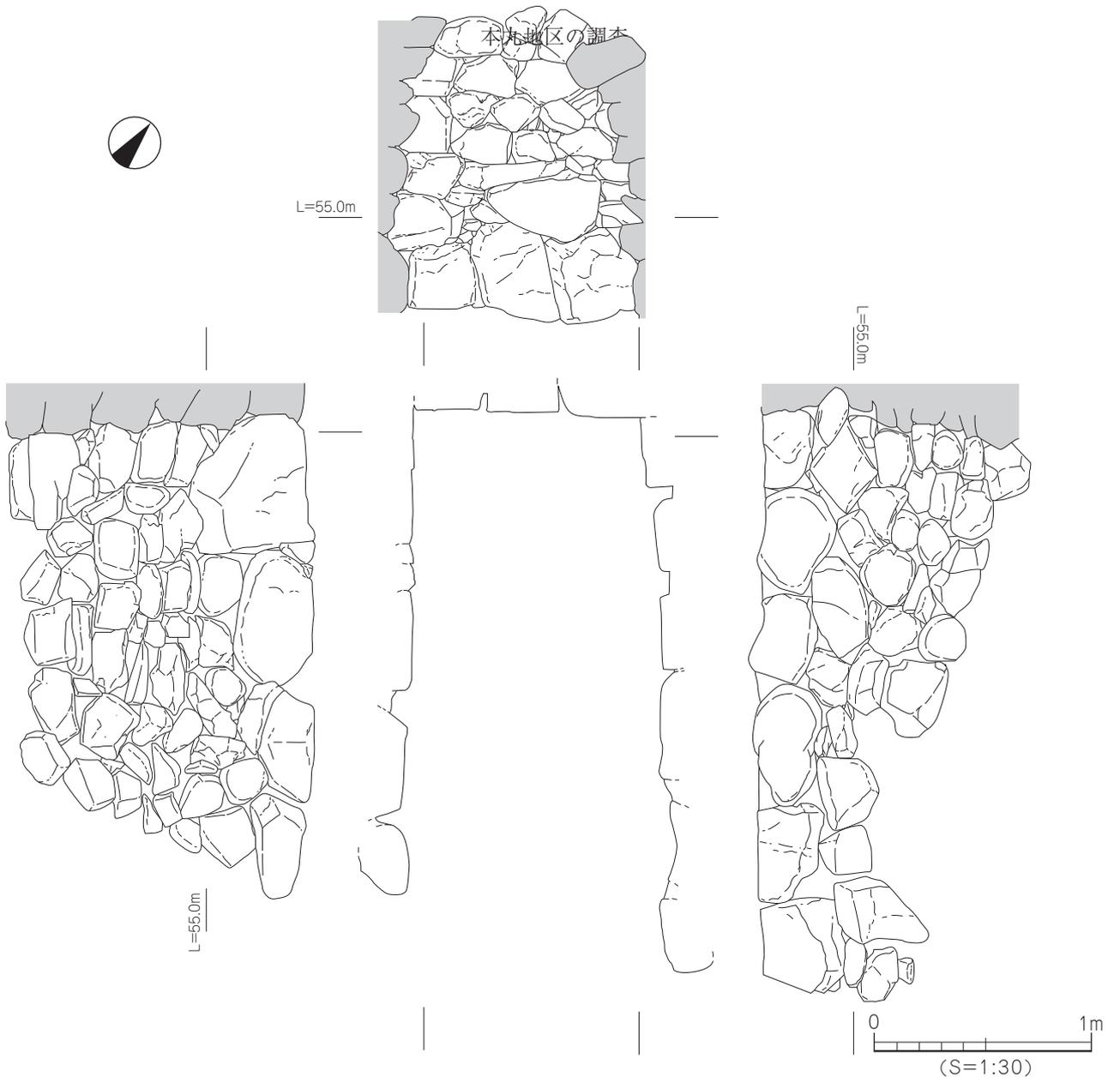


図6 4号墳石室実測図

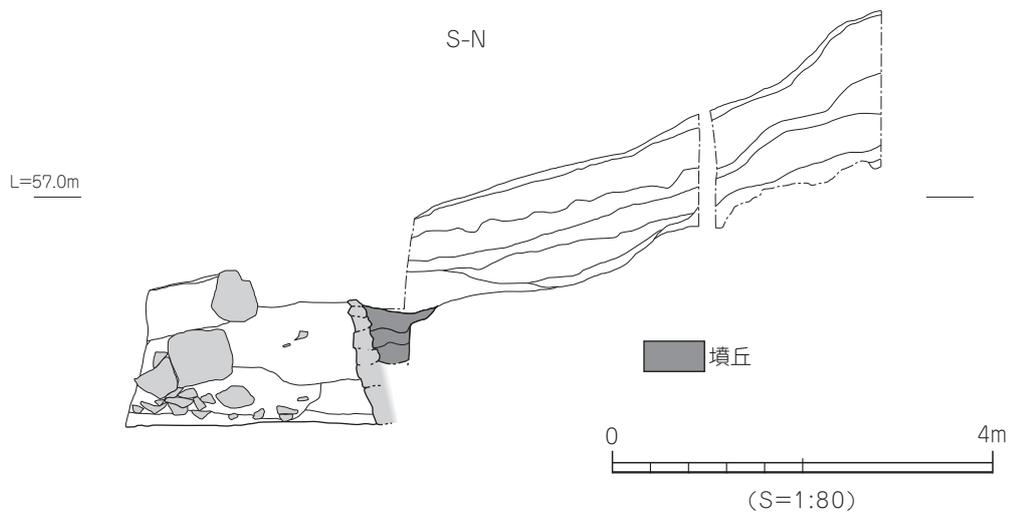


図7 4号墳墳丘断面図

史跡松山城跡

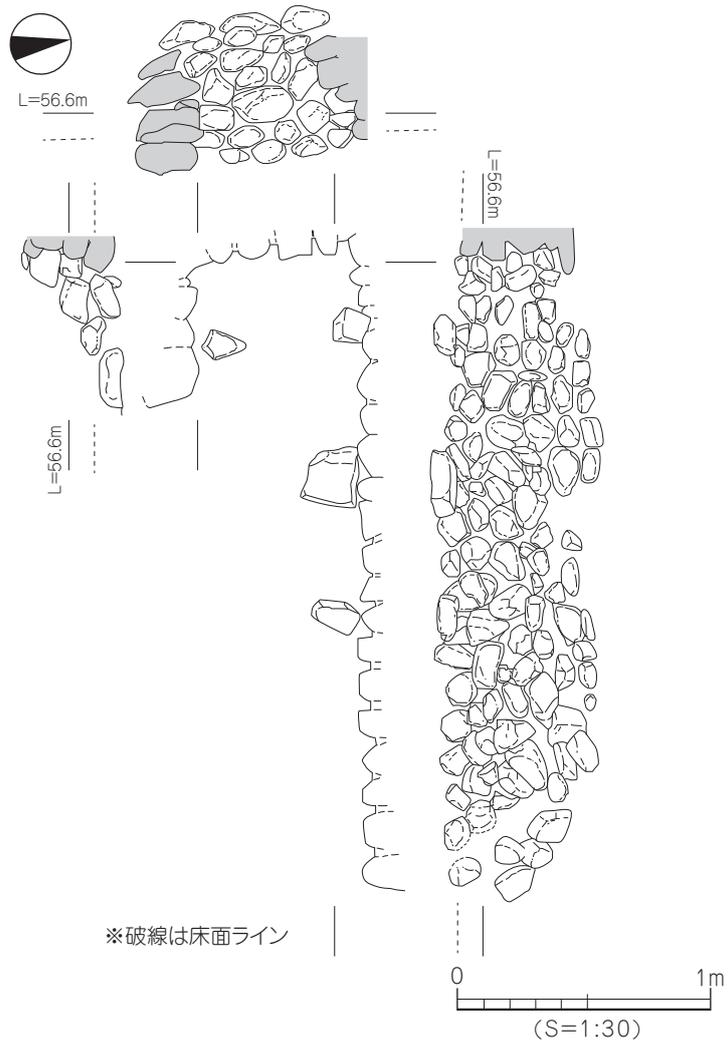


図8 5号墳石室実測図

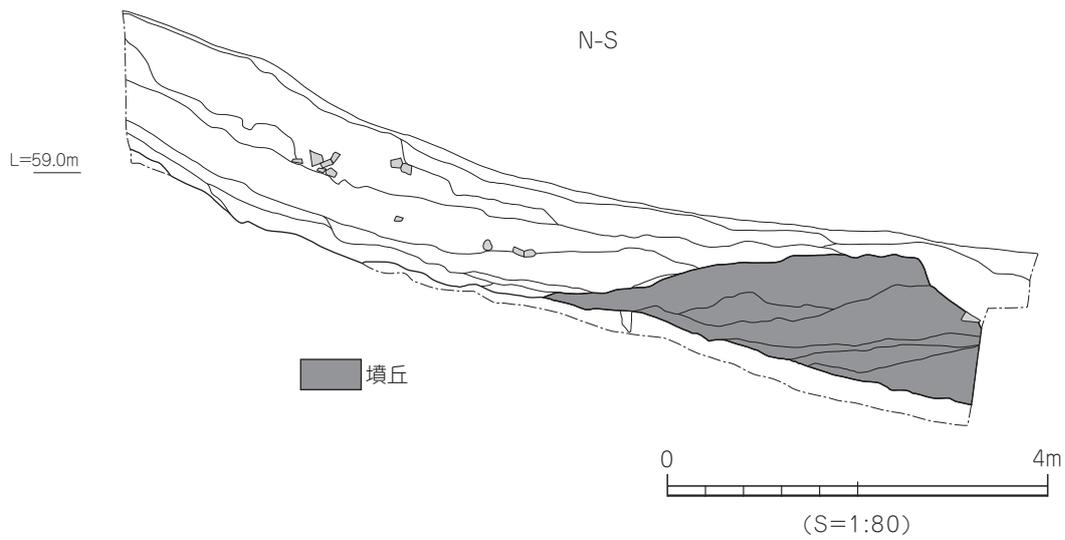


図9 5号墳墳丘断面図



写真1 2号墳調査状況（南東より）



写真2 2号墳天井部検出状況（北東より）



写真3 2号墳石室遺物出土状況（南西より）



写真4 2号墳石室完掘状況（南東より）



写真5 4・5号墳完掘状況（南東より）



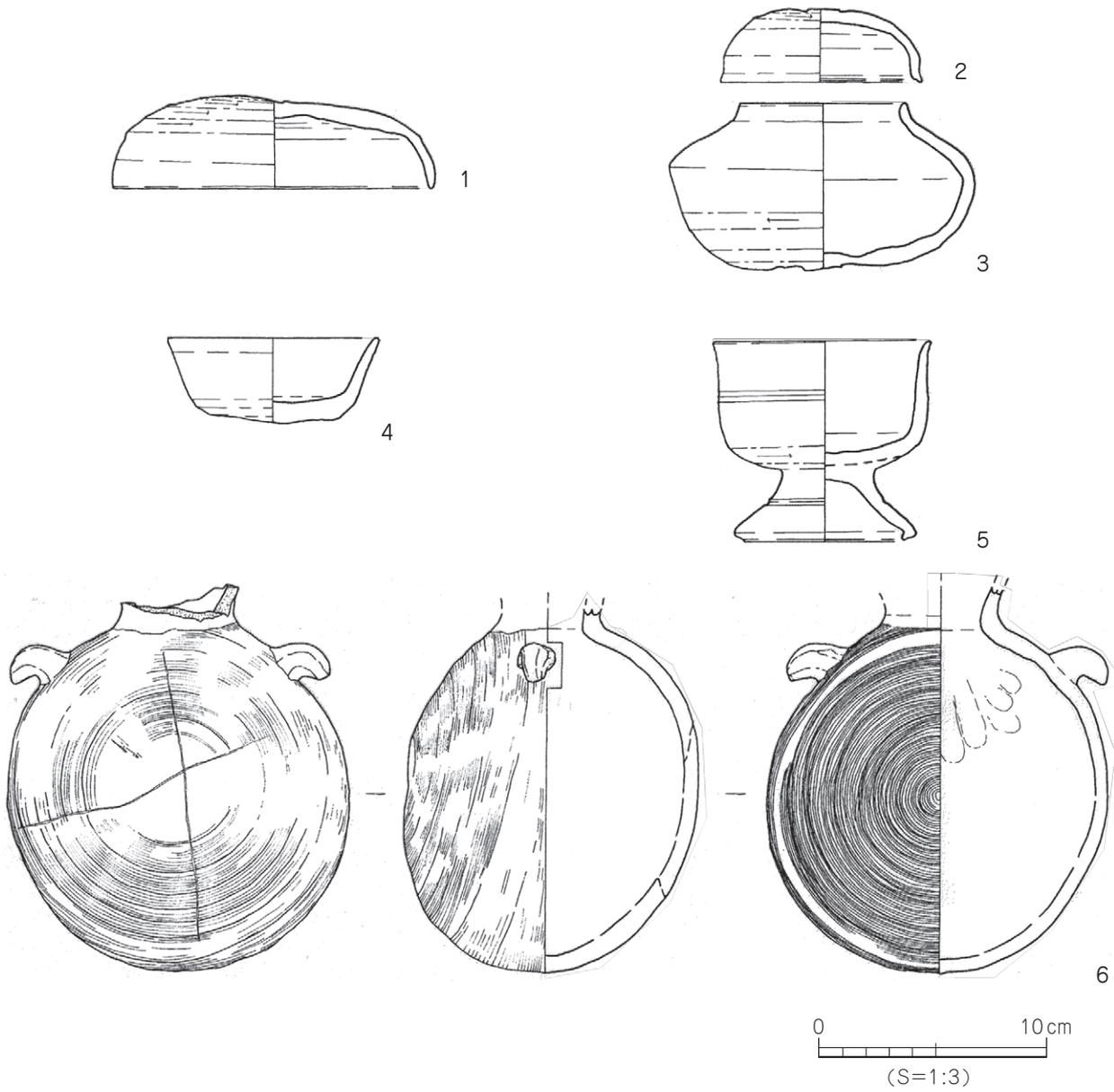
写真6 4号墳石室完掘状況（南東より）



写真7 5号墳石室遺物出土状況（東より）



写真8 5号墳石室完掘状況（東より）



1 ~ 3 · 6 : 2号墳石室出土
4 · 5 : 4号墳石室出土

图 10 出土遺物実測図

第2節 二之丸地区の調査

にのまるあと
1. 二之丸跡 4次調査・

げいよじしん
二之丸跡芸予地震災害復旧事業に伴う工事立会

所在地 松山城丸之内
期 間 4次：平成14年4月18日～同15年3月31日
工事立会：平成15年度
面 積 4次：約500㎡
担 当 栗田正芳・篠田久恵

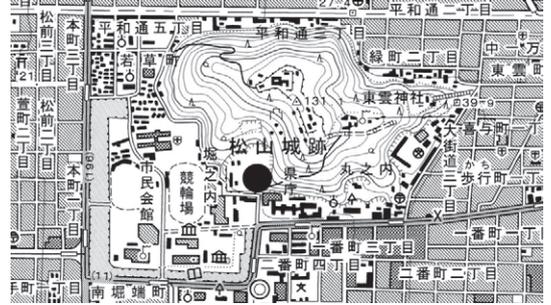


図1 調査地位置図

経 過 松山城跡は、平成13年3月24日に発生した芸予地震や同年6月の大雨により大きな被害を受けた。そのため、松山市では被害状況の把握に努めるとともに、「史跡松山城跡災害復旧検討委員会（当時）」を立ち上げ、その復旧に向けた整備方針を検討する一方、文化庁等の関係機関と協議を行い、被害の著しかった二之丸石垣南面や巽櫓台石垣、櫓門北続櫓台石垣の修理、本丸周辺で複数発生した地割れや陥没の復旧等を実施することを決めた。それを受けて、平成13年度から4ヶ年をかけて、二之丸石垣南面と巽櫓台石垣の修理工事を実施することとし（写真15・16）、それに伴い、事前の石垣上面等の確認調査を実施した（図2）。また、両石垣の解体に伴う工事立会を実施した。

遺構・遺物 巽櫓台石垣（図3、写真1～4）：上面では、柱穴6基、土留石列2条が確認された。柱穴は、石垣南面に沿って概ね等間隔（約2.3m）で並び、各柱穴の平面形状は楕円形で、長軸は90～130cm、短軸は40～100cm、深さは50～70cmを測る。柱穴跡内には、南の石垣南面から北方向に下傾して柱痕が残り、径は約18cm（6寸）、長さは50～80cmを測る。以上のことから、これらの柱穴は、石垣南面に沿って設けられていた土塀の控柱のもので、石垣上面には巽櫓は建てられていなかったと考えられる。このことは、幕末の絵図で、巽櫓が巽櫓台石垣から南登り石垣を東へ少し登った場所に描かれていることや、その場所には、櫓台に相応しい石垣が現存していることも整合的である。また、一部の柱痕にはわずかながら柱材が遺存しており、同定の結果、ヒノキ属であった。なお、石垣上面や盛土からは滴水瓦等の瓦が出土している。石垣西面裾部では、北面の延長部付近で東西方向の武者走石列、南側の二之丸石垣南面に沿って柱穴2基が確認された。なお、石列の被覆土からは瓦や釘が出土している（図6）。また、石垣北面の解体の際に「。」の墨書のある積石が確認されている。

二之丸石垣南面（図4、写真5～8）：上面では、2・3次調査において確認されている東西方向の石組水路跡、2時期の番所跡、門跡等が確認された。番所跡は、古段階は礎石建ちで、それが廃絶した後、瓦を多量に含む土で整地した後、腰石を西・北側に巡らせた礎石建ちの新段階のものに建て替えられたと考えられる。また、古段階の番所跡の検出面より下層には、鞆の羽口・鉄滓・炭を多量に含む整地層があり、陶磁器では肥前の呉器手碗が出土していることから、江戸中期以降に新段階のものに建て替えられたと考えられる。

城内の3号墳（図5、写真9～14）：二之丸石垣南面の解体の際に、石垣の内部で確認された。城山

の丘陵斜面に造られた古墳で、横穴式石室を伴い、石室の東側で確認された周溝から、直径約10～12mを測る円墳と推定される。玄室部分と天井石1石が良好に遺存していたが、羨道部や前庭部は、江戸期の石垣構築に伴い削平され、現存していなかった。玄室の規模は、玄門側で幅1.6m、奥壁側で幅約2.1m、長さ2.4m以上、高さは1.5m以上を測る。玄門部は、南側に位置し両側に立石が並ぶ両袖式で段構造をもっている。玄室部の調査は、現状保存される天井石より奥壁側は対象とせず、玄門部から天井石までを対象として実施し、須恵器（坏蓋・短頸壺・長頸重・甕・平瓶・鼎型壺）、土師器碗、鉄製品（鞘尻金具・釵子・鉄鎌）、金銅製品（双龍環頭、耳環）などが出土した。なお、玄室内部の土層は版築状を呈し、そこからは15世紀後半の土師器小皿・杯が出土した。このことは、松山城築城に伴う石垣構築の際に、発見された古墳の石室を丁寧に埋め戻したことを示唆しており、築城に携わった人々の古代人に対する畏敬の念すら感じさせる。また、近世城郭を築城する際、障害となった古墳のほとんどは解体・破壊されたと考えられる中で、石垣内部から古墳が確認される事例は、全国的にも極めて珍しいものだろう。なお、墳丘からは須恵器（杯身・高杯）が、墳丘を覆う江戸期の盛土からは青磁碗・備前焼壺・渡来銭などが、その上の江戸期の改修に伴う盛土からは軒平瓦が出土している（図7・8）。

小 結 以上のように、今回の調査を通じて、巽櫓台石垣上面に櫓が建っていなかったことや、二之丸石垣南面石垣の構築に伴い古墳が意図的に埋め戻されたことが確認されるなど、不明な点の多い江戸期の二之丸についての重要な知見を数多く得ることができた。



写真1 巽櫓台石垣上面完掘状況（東より）



写真2 巽櫓台石垣控柱穴1検出状況（西より）



写真3 巽櫓台石垣土留石列1検出状況（南より）



写真4 巽櫓台石垣西面裾部武者走石列検出状況（東より）

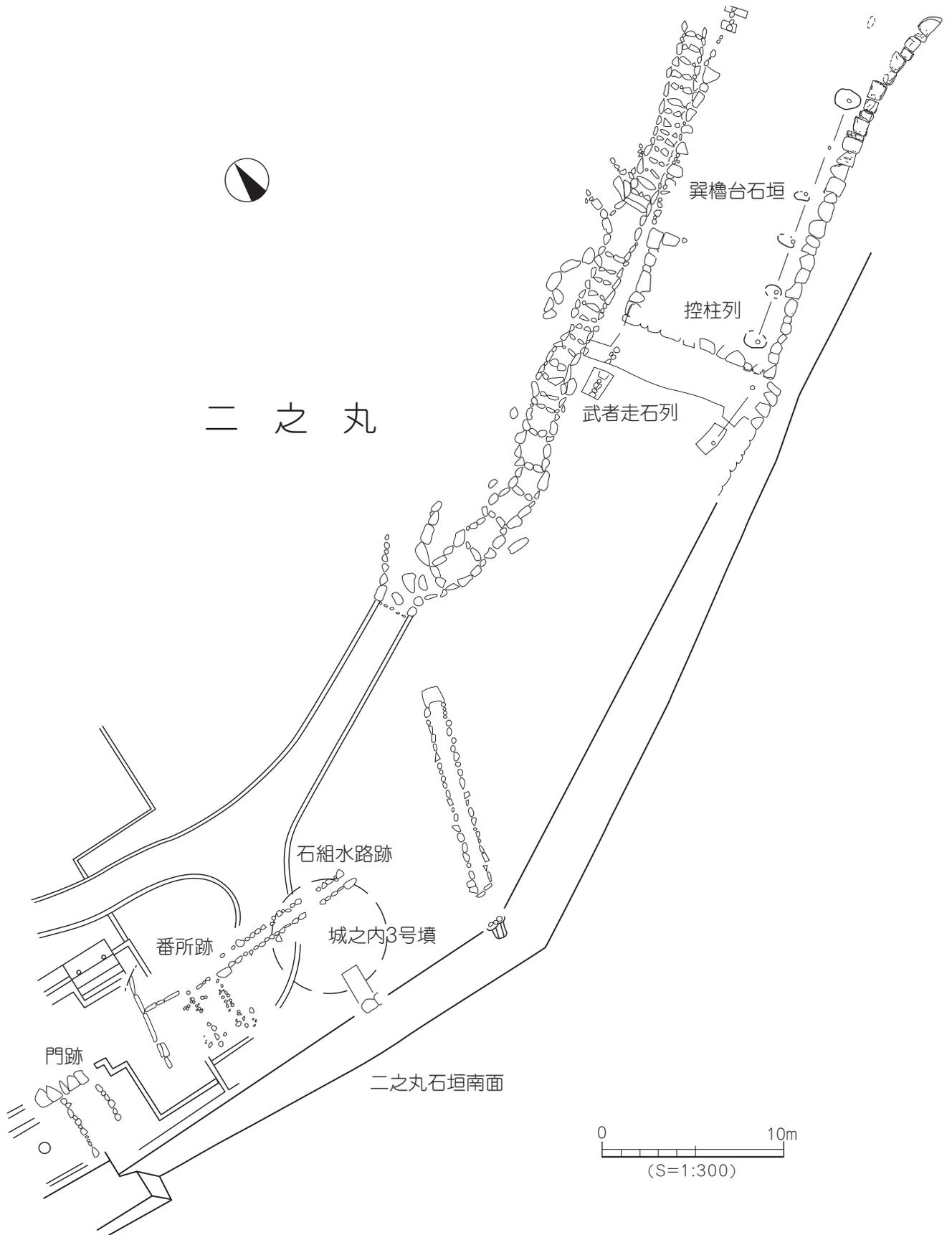


図2 調査地位置図

史跡松山城跡



图3 巽櫓台石垣遺構配置図

二之丸地区の調査



写真5 二之丸石垣南面上面遺構検出状況（東より）



写真6 二之丸石垣南面門跡検出状況（西より）



写真7 二之丸石垣南面番所跡（新段階）検出状況（北より）



写真8 二之丸石垣南面番所跡（古段階）検出状況（北より）

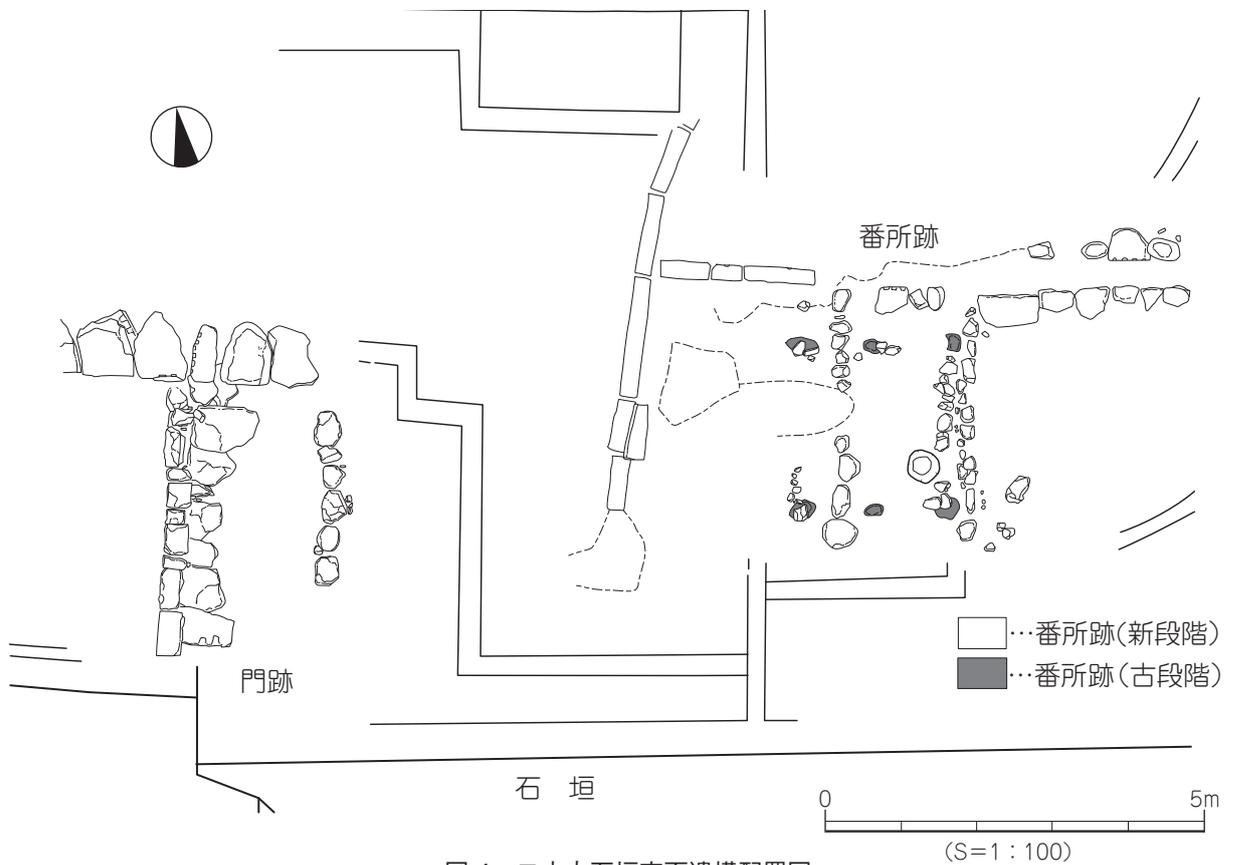


図4 二之丸石垣南面遺構配置図



写真9 城の内3号墳検出状況（東より）



写真10 城の内3号墳検出状況（南より）



写真11 城の内3号墳玄室内の版築状の埋土（西より）



写真12 城の内3号墳玄室内遺物出土状況（北西より）



写真13 城の内3号墳玄室完掘状況（南より）



写真14 城の内3号墳玄室内出土双竜環頭



写真15 解体前状況（南より）



写真16 修理後状況（南東より）

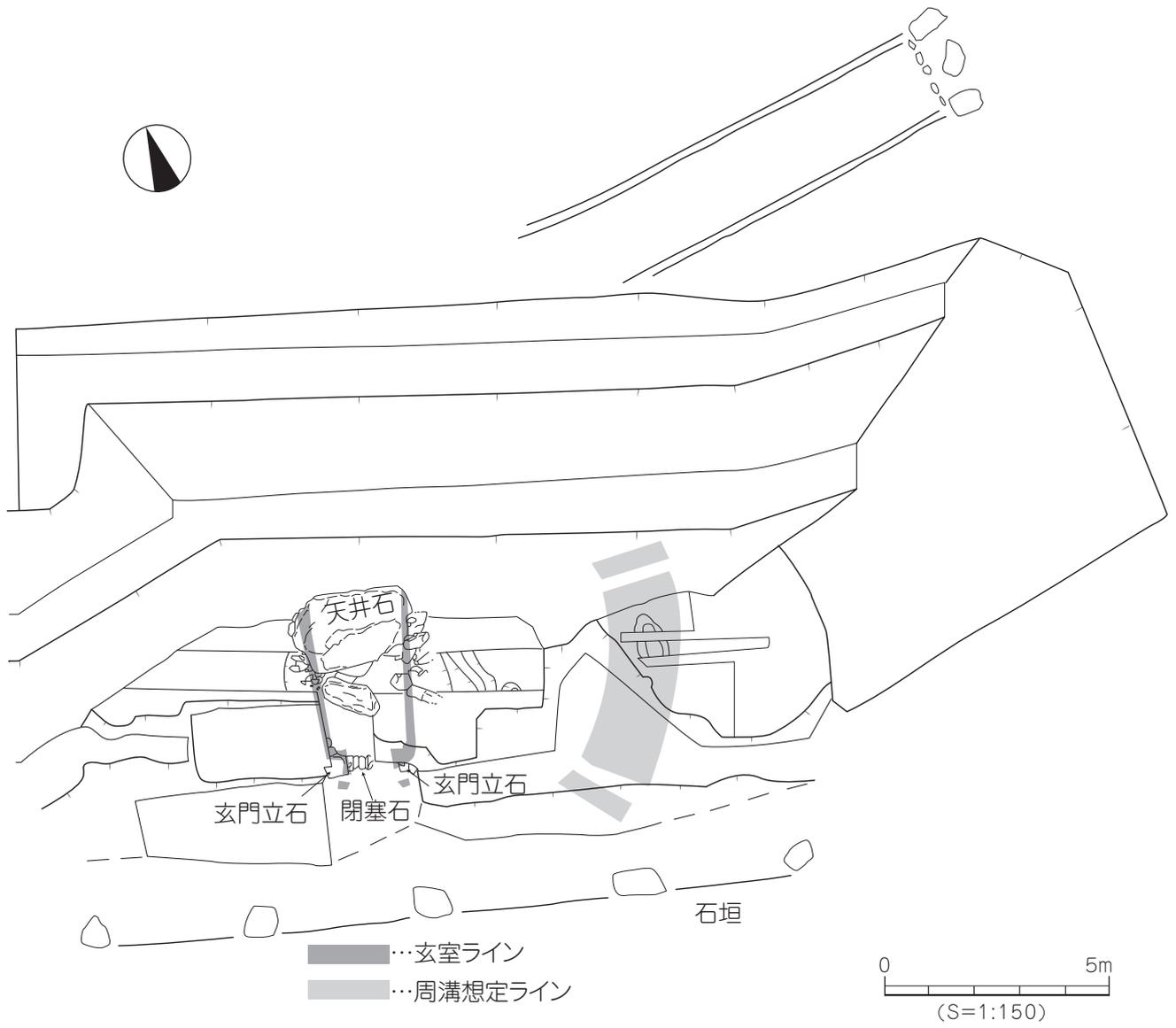


図5 城の内3号墳遺構配置図

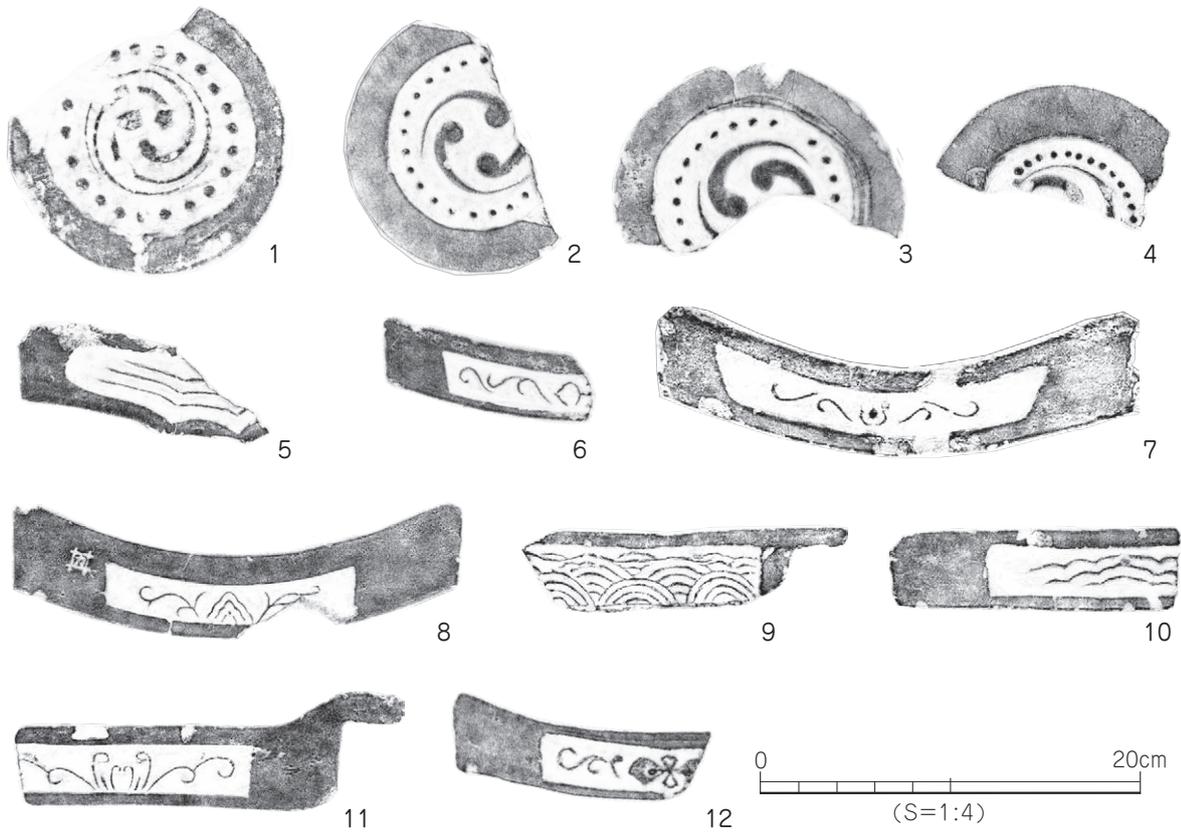


図6 巽櫓跡台石垣出土遺物実測図

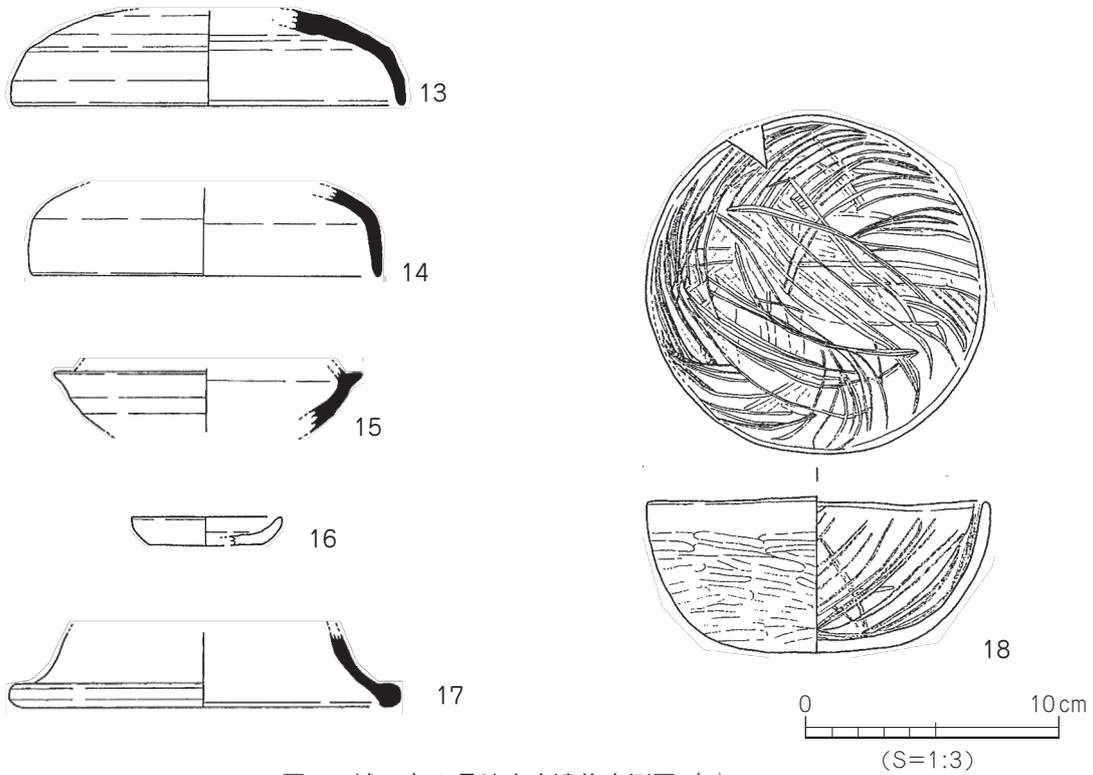
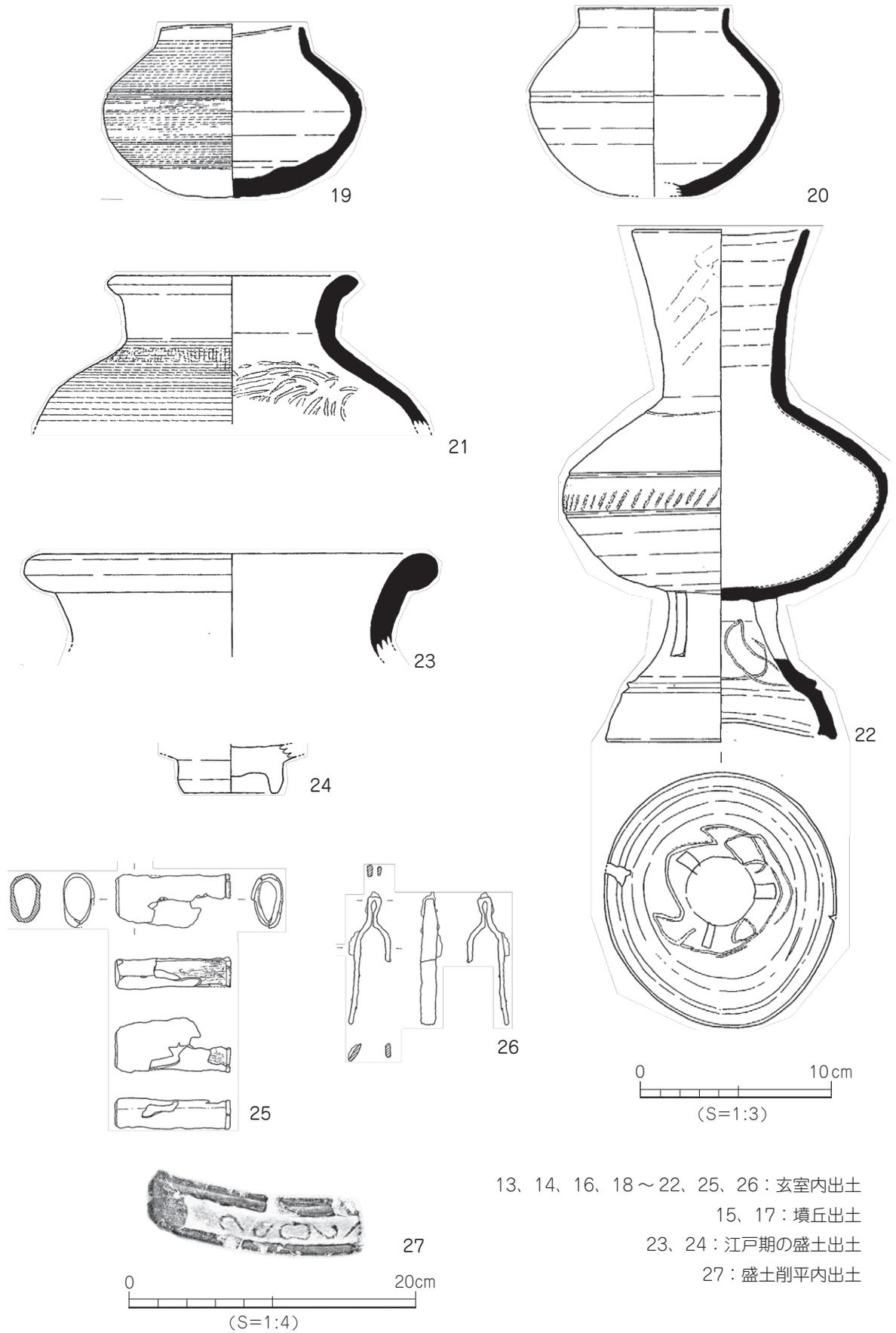


図7 城内3号墳出土遺物実測図(1)



13、14、16、18～22、25、26：玄室内出土
 15、17：墳丘出土
 23、24：江戸期の盛土出土
 27：盛土削平内出土

図8 城の内3号墳出土遺物実測図(2)

2. けやきもんあと 櫓門跡 1・2・3次調査

所在地	松山市丸之内
期 間	1次：平成17年2月21日～同年3月30日 2次：平成17年4月25日～同年7月27日 3次：平成17年10月2日～同年12月27日
面 積	1次：約220㎡、2次：約120㎡、 3次：約135㎡
担 当	楠寛輝・山中菊乃

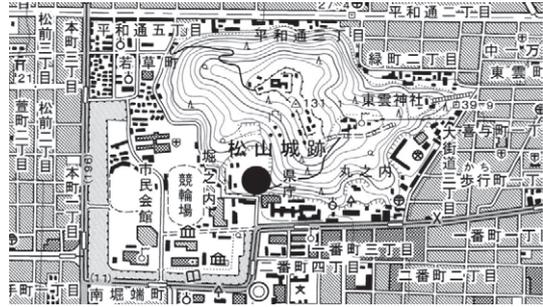


図1 調査位置図

経 過 松山城は、平成13年3月24日に発生した芸予地震や同年6月の大雨により大きな被害を受けた。そのため、松山市では被害状況の把握に努めるとともに、「史跡松山城跡災害復旧検討委員会（当時）」を立ち上げ、その復旧に向けた整備方針を検討する一方、文化庁等の関係機関と協議を行い、被害の著しかった二之丸石垣南面や巽櫓台石垣、櫓門北続櫓台石垣の修理、本丸周辺で複数発生した地割れや陥没の復旧等を実施することを決めた。それを受けて、平成13年度から4ヶ年をかけて、二之丸石垣南面と巽櫓台石垣の修理工事を実施した（図4、写真2・5・6）。それに続き、平成17年度からは2ヶ年をかけて、同様に櫓門北続櫓台石垣の修理工事を実施することとし、それに伴い事前の石垣上面等の確認調査（1次：平成16年度、2次：同17年度）と解体に伴う確認調査（3次：同17年度）を実施した。櫓門は、大手登城道を黒門から進み、続く梅門を抜けた先に存在する。建物は残っていないが、北側には上下2段、南側には1段の石垣が現存しており、古絵図や明治初期に撮影された写真等から櫓門であったことが分かっている（図2、写真1）。登城道の本丸と二之丸への分岐という要所に位置し、門の上に二重の櫓を載せる松山城最大の規模を誇る門であることから、この門が防壁上非常に重要なものであったことが分かる。今まで発掘調査が行われたことはなく、廃絶時期についてははっきりしないが、先述の明治初期の写真が現存していることから、この頃まで存在していたことは確かである。

遺構・遺物 1次調査（図3、写真3）：櫓の礎石・束石等の確認や、石垣修理工事の基礎データとして、勾配を把握することを目的に、解体工事により部分的に破壊される北続櫓台石垣上面の調査と、石垣裾部4箇所（T1～4）のトレンチ調査を実施した。その結果、石垣上面の調査では櫓の礎石や束石がほぼ完全な形で確認され、上段では全面に渡って南北7間半×東西2間半、下段では南端から南北3間×東西2間の櫓が存在していたことが明らかとなった。これらの櫓は、上段は南の櫓門の3階、下段は同2階で接続していたと考えられる。また、下段上面では、櫓の内部と外部で床面の構造が全く異なっていたことも明らかとなった。櫓内部では礎石や束石の上面やや下のレベルで栗石が面的に確認されたが、櫓外部では同じレベルで三和土（黄褐色粘質土）が厚く敷かれていた。櫓内部は、水が石垣内部へ浸透する心配がなく、また、上に床を張る関係で栗石が露出したままでも問題ないが、櫓外部は、石段を含め屋外となることから、石垣内部への水の浸透を防ぐとともに、石垣上面を地表面として利用する必要があったことから、三和土を敷いたものと考えられる。なお、礎石や束石の直上には、廃絶時のものと考えられる明黄褐色粘質土が堆積し、そこからは、その上の表土（腐葉土）を含め、廃絶時に櫓に葺かれていたと思われる大量の瓦や、量は多くない

ものの幕末以降の陶磁器等が出土した（図5）。石垣裾部のトレンチでは、全てで根石が確認された。調整のための少量の小礫を伴う場合もあるが、基本的には全て地山を根切りした上に直接据えられていた。櫓門周辺は明治期以降のかく乱や造成が著しく、根石の確認された深さはトレンチによって大きく異なり、各トレンチの最も深いところで現在の地表面から75～155cm下であった。

2次調査（図3、写真3）：1次調査を受けて、櫓門の全容把握を目的に、残る南続櫓台石垣上面等9箇所（T1～9）のトレンチ調査を実施した。その結果、1次調査とは様相が大きく異なり、南続櫓台石垣上面（T1～7）では、明治期以降のかく乱が著しく、櫓の礎石または東石と考えうる石材は3石しか確認できなかった。最も南で確認された石材は、石材の上面が平滑で大きさも一般的な東石より大きく、北石垣での調査成果から考えても礎石の可能性はあるが、これから東に続く礎石や抜き取りは確認されず、櫓の規模を確定するには至らなかった。なお、この石が櫓南壁の礎石と考えた場合の櫓の規模は、南北3間×東西3間半で、北の櫓門の2階、更には北続櫓台石垣下段の櫓へと繋がっていたものと考えられる。その他の遺構は、遺物等から考えて全て明治期以降のもので、一部の土坑は東石の抜き取りの可能性が十分に考えられるものの認定には至らなかった。ただし、明治期以降、二之丸が衛戍病院として機能していたことを示すアンプル等の医療廃棄物がまとまって見つかった土坑や、明治期以降の石垣東面の大規模な改修痕跡（石垣改修痕跡1）は、松山城の明治期以降の歴史を考える上で興味深い。なお、この石垣改修痕跡1の裏込の栗石は角礫が主体であったが、対照的に西側の江戸期の石垣の裏込の栗石は拳大の円礫（河床礫）が主体であった。なお、階段推定地（T8）や門部分（T9）では、明治期以降のかく乱が著しく、それらの痕跡は確認できなかった。

3次調査（図3、写真4）石垣修理工事の基礎データとして、石垣の内部構造や孕み出しの原因の把握を目的に、解体と並行して確認調査を実施した。その結果、積石については、石同士の接し方が悪いだけでなく、間詰石の多くは化粧であり、控には明確な介石はほとんど見られず、ほぼ栗石（円礫）だけで施工されているなど、とても粗雑で施工を急いだ印象を受けるものであった。裏込の栗石層については、全て円礫であったが、孕み出しの大きかった部分を中心に、雨水等により上から流れ込んだと思われる土砂が大量に含まれていた。背面基盤層については、最下部で和泉砂岩の岩盤（地山）が確認され、その直上に地山の代替として大型角礫層（和泉砂岩）が薄く設けられていたものの、それより上は全て栗石であった。これらの調査結果から、地震が致命傷を与えたものの、石垣全体について施工が悪かったところに、明治期以降、石垣上面に存在した櫓が撤去され、雨水が石垣内部に流入するようになり、石垣内側から外側に向かって繰り返し圧力がかかったことが、孕み出しの最大の要因であると考えられる。なお、この施工の悪さは、施工を急いだことが影響した可能性や、当時は近世城郭が全国で最も多く築かれた時期であり、その多くが短期間で築かれたことも考え合わせると、熟練した技術者や石工等の不足が影響した可能性も考えられる。また、北続櫓台石垣南東隅角部は、絵図や石積技法から後世に東側へ拡幅されている可能性が指摘されていたが、当該部分の背面基盤層である地山の東側に、地山の代替として追設された幅約2m（1間 ※過去の調査成果を踏まえ1間は6尺5寸〔約2m〕で計算）の大型角礫層（和泉砂岩）が確認され、拡幅が確かめられた。遺物については、積石の控付近からノミが1点出土したことが注目されるが（図5）、全体としては非常に少なく、石垣の構築や改修の年代を示すようなものはなかった。

小 結 以上のように、3回の確認調査を通じ、不明な点の多い櫓門の具体像に迫る重要な知見を数多く得られるとともに、石垣の孕み出しの原因を把握することができた。

史跡松山城跡

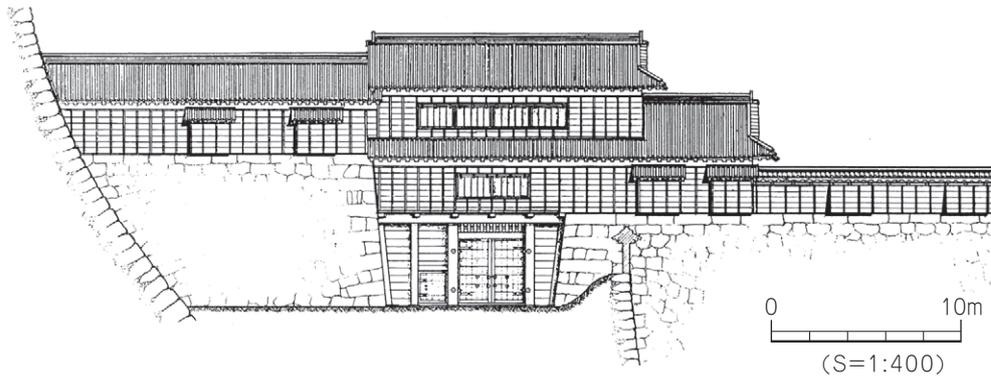


図2 櫓門推定復元図（西より、河合勤氏作画）※

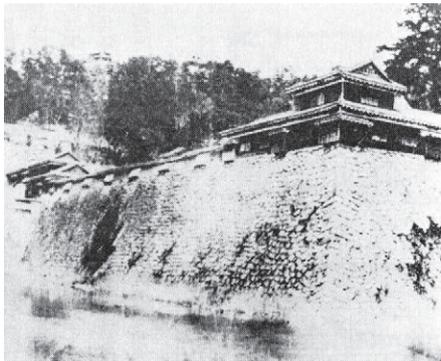


写真1 二之丸古写真（南西より、小沢健志氏所蔵）※



写真2 解体前状況（南西より）



写真3 解体前状況（北より）



写真4 解体後状況（南より）



写真5 修理後状況（北より）



写真6 修理後状況（南西より）

※松山城編集委員会編 1994『松山城 第5版』より転載

二之丸地区の調査

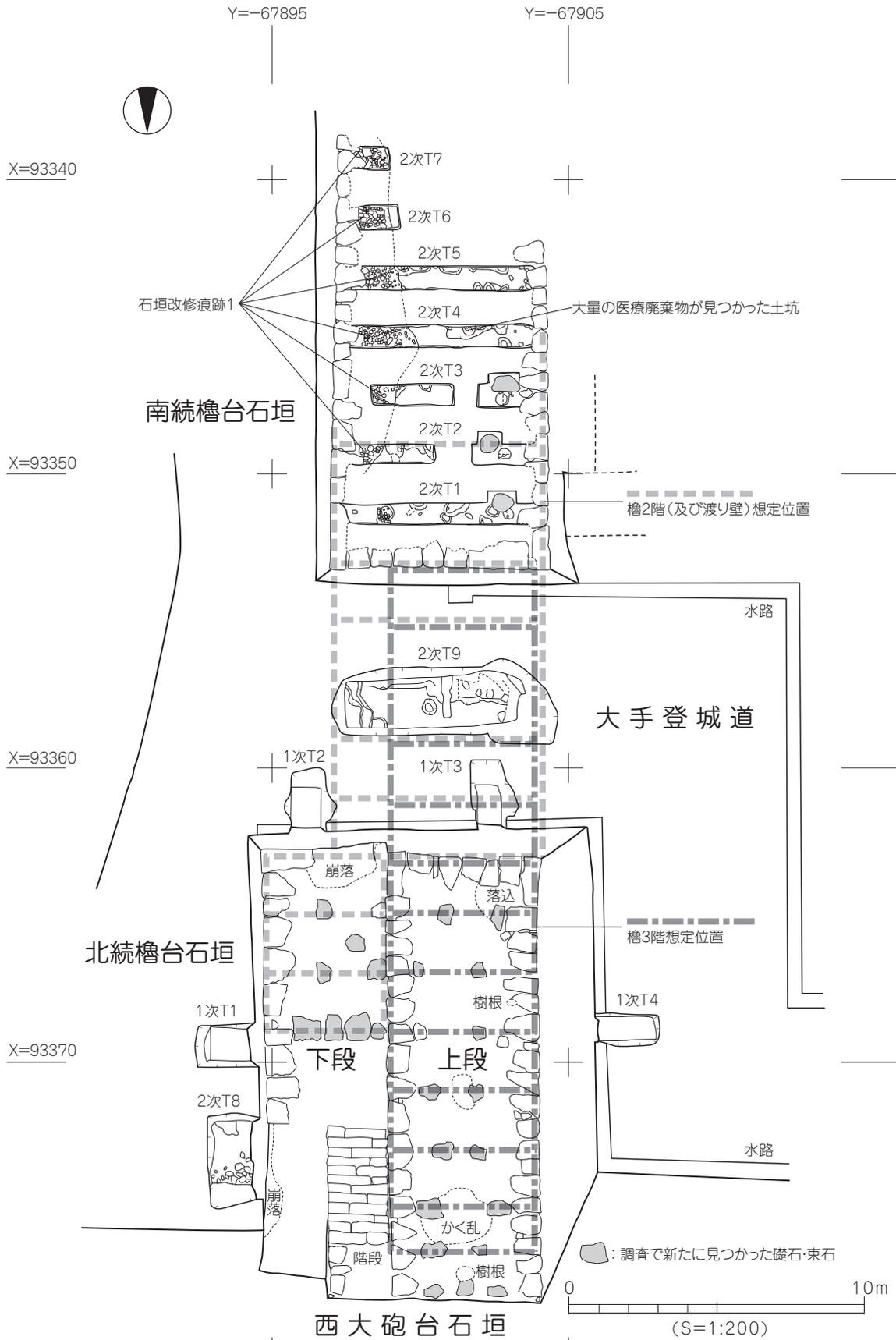
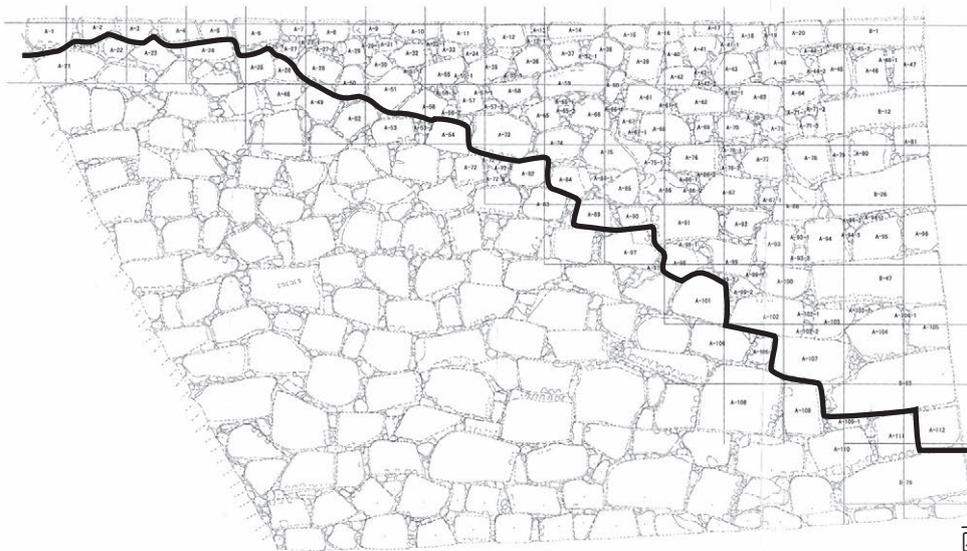
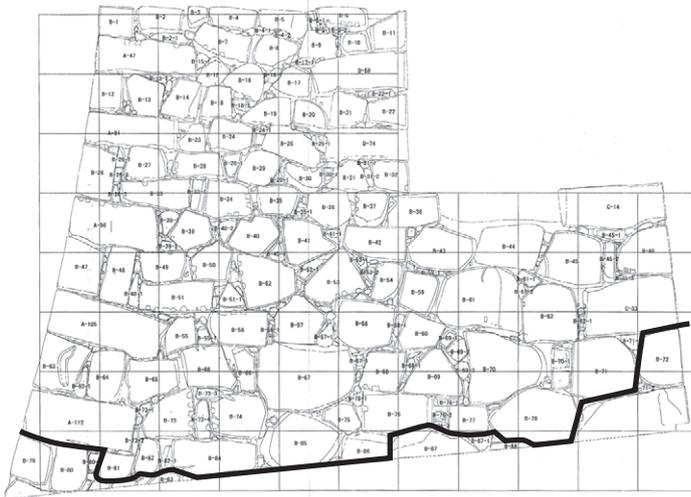


図3 遺構配置図

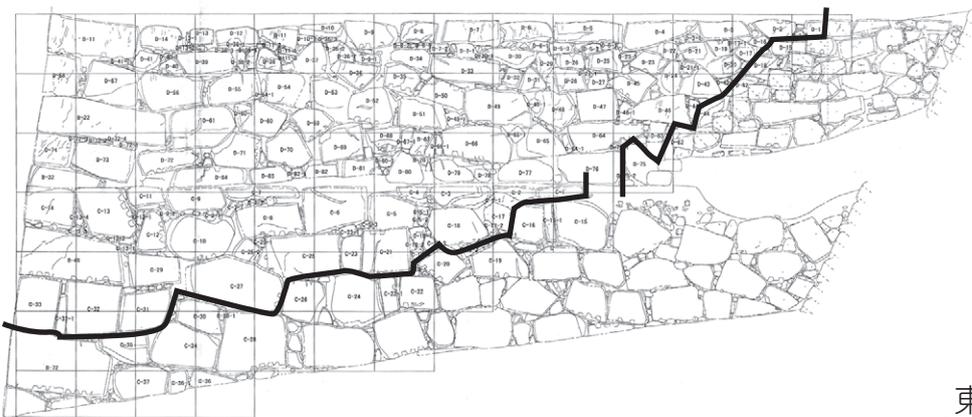
史跡松山城跡



西面



南面



東面

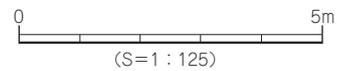
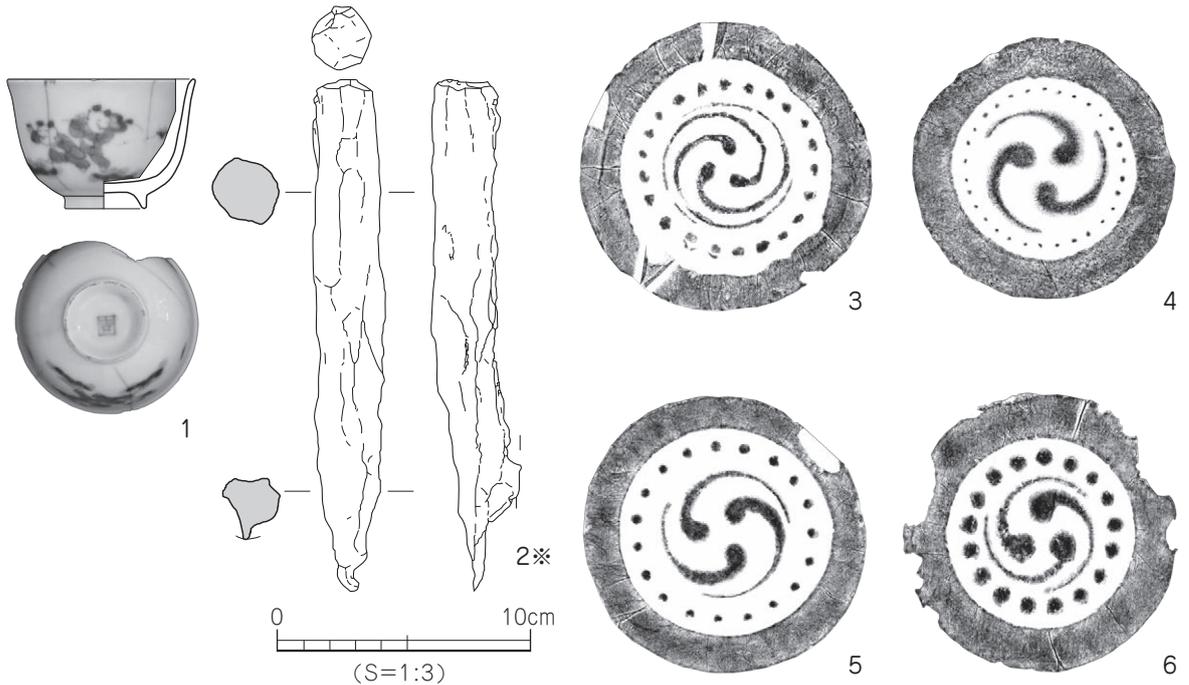
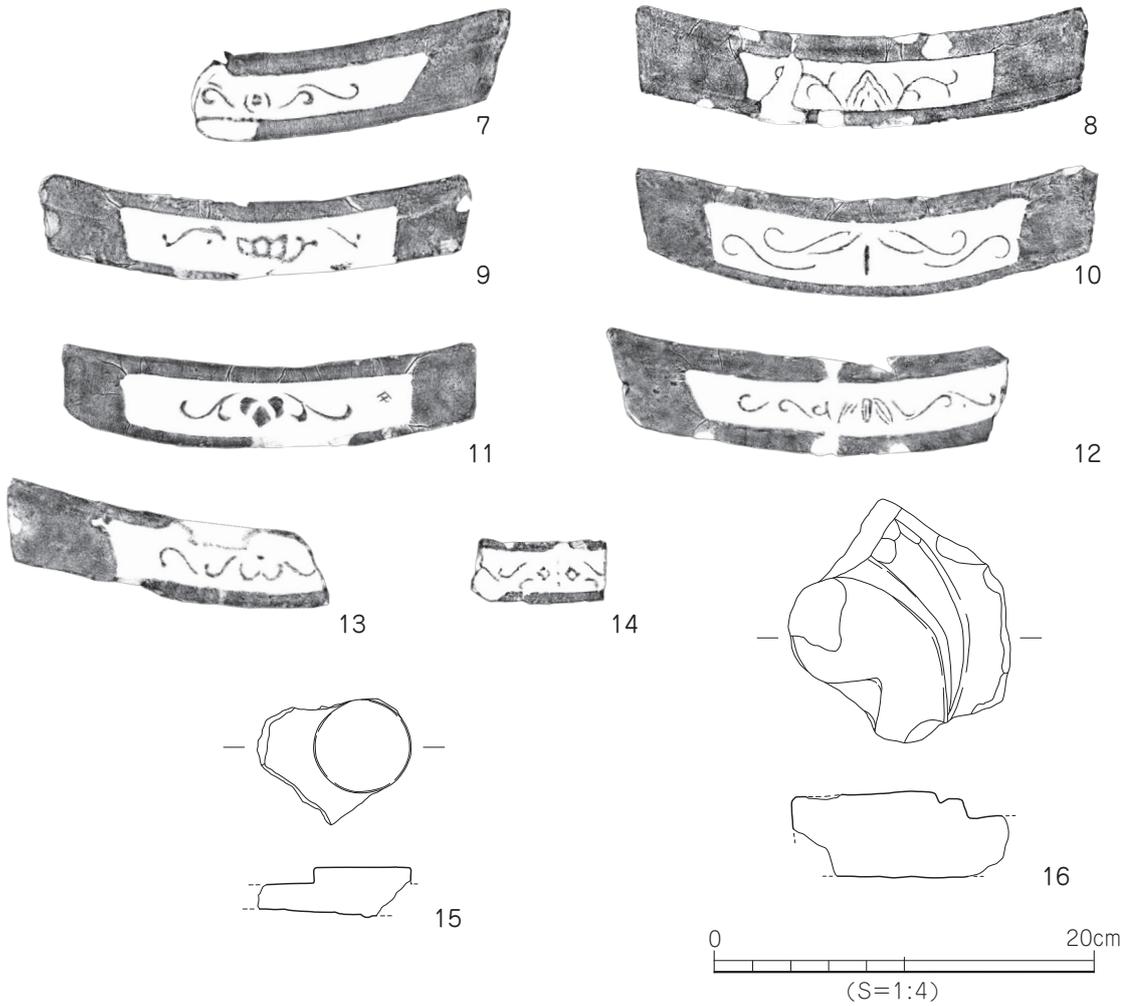


図4 解体範囲図



※富田和気夫・西田郁乃 2020「城跡等から出土した石工道具の検討(1)」より再トレースの上転載



第5図 出土遺物実測図

史跡松山城跡

表1 梶門跡出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	1次	磁器	小杯(端反)	7.6	5.2	3.2	透明	染付	肥前、唐子文、「吉」銘

表2 梶門跡遺物観察表 鉄製品

番号	出土場所	器種	材質	法量			備考
				長さ (cm)	径 (cm)	重さ (g)	
2	3次 A-44 控	ノミ	鉄	21.3	29.5	585	

表3 出梶門跡土遺物観察表 軒丸瓦・その他

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
3	1次 下段2層	14.25	6.8	2.0	1.7	左巻三巴	22	0.7~0.9	灰・浅黄	良好		
4	2次 下段2層	14.1	7.1	2.1~2.3	1.7	左巻三巴	30	0.5	灰	良好		
5	1次 下段2層	14.8	6.8	1.8~2.0	(1.6)	右巻三巴	19	0.6~0.7	灰・暗灰	良好	○	
6	1次 上段2層	14.7	6.2	2.3	1.6	右巻三巴	17	1.2	暗灰	良好	○	

表4 梶門跡出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
7	2次 T9 造成土	(24.0~17.0)	4.6	(15.2~18.2)	2.1	3.9~4.8	1.3	灰	良好		宝珠(上)	
8	3次 下段表土	23.0	4.8	12.9	2.4	4.5~5.5	1.5	灰	良好	○	宝珠(上、線)	
9	1次 上段表土	21.7~22.6	4.05	13.9~14.4	2.5	3.7~4.1	1.2	オリーブ黒	良好		三葉(上、線)	
10	1次 下段2層	23.5~23.9	5.7	16.0~16.6	3.1	3.5~3.8	1.3	暗灰	良好	○	三葉(下)	
11	3次 7段目・下段栗石(建物内)	21.4	4.1	15.0	2.5	3.2	1.25	灰白	良好	○	三葉(下)	井桁文(陽刻、瓦当右端)
12	3次 下段表土	(24.2~27.2)	5.0	(17.0~19.2)	2.6	3.6	1.9	灰・灰白	良好		三葉(下、線)	
13	3次 7段目下段タタキ	(26.0~26.4)	4.1	(15.0~16.0)	2.5	5.5	1.7	灰白	不良		二葉(下、線)	
14	3次 7段目下段タタキ	—	3.2	—	2.1	—	1.6	にぶい黄色	不良		剣菱	
15	3次 下段表土	—	—	—	—	—	2.6	灰白	良好	○	家紋(星梅鉢)	鬼瓦
16	2次 T9 SD1	—	—	—	—	—	4.5	灰・灰白	良好		右巻三巴	鬼瓦

くろもんあと 3. 黒門跡 1・2・3・4次調査

所在地	松山市堀之内
期 間	1次：平成19年1月22日～同年3月29日 2次：平成19年8月21日～同年12月2日 3次：平成19年12月3日～同20年2月5日 4次：平成20年8月11日～同年10月27日
面 積	1次：約130㎡、2次：約120㎡、 3次：約100㎡、4次：約45㎡
担 当	楠寛輝

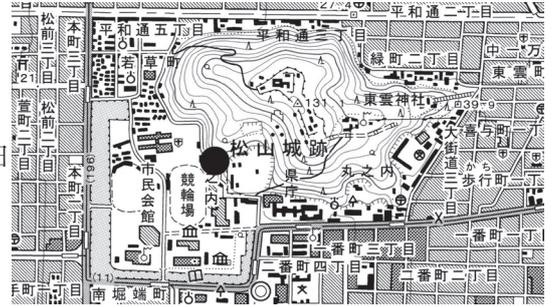


図1 調査地位位置図

経 過 黒門は、大手登城道の三之丸と城山を画する門である。大手登城道には黒門に続いて梅門や槻門等が連続し、この辺りが防御上とても重要であったことが分かる。これらの建造物は現存していないが、明治初期に周辺を撮影した写真には槻門が写っており、その頃までは存在していたようである。なお、黒門の両袖の東西石垣とも、上面に続櫓を載せられる形状をしているが、古絵図や古文書等から考えて、黒門は高麗門で、続櫓は伴わなかったと考えられており、両石垣の上面には土塀が続いていたようである（図2）。その黒門跡では、平成18年6月の地震の後、その被害調査を行う中で西及び北石垣に大きな孕み出しが確認された。そこで松山市では、「史跡松山城跡整備検討委員会（当時）」に諮るとともに、文化庁等の関係機関と協議を行い、平成19年度から2ヵ年で修理を実施することとし（図4、写真1・9）、それに伴い事前の石垣上面等の確認調査（1次：平成18年度、2次：平成19年度）と解体に伴う確認調査（3次：平成19年度）、周辺の確認調査（4次：平成20年度）を実施した。

遺構・遺物 1次調査（図3、写真2）：解体工事により部分的に破壊される西石垣上面（上・下段）や北石垣上面に加え、門の全容把握を目的に、東石垣上面の調査を実施した。その結果、西石垣下段では、明確な江戸期の遺構は確認されなかったが、石垣の中心部に江戸期の盛土である明黄褐色粘質土が確認された（それ以外は全て栗石）。なお、西面や南面は、石積技法から明治期以降の改修が想定されていたが、東面と比べ西面や南面が栗石層の幅がかなり広く、その上に明治期以降の黄橙色～暗灰黄色粘質土が厚く堆積していたことから、改修が確かめられた。同上段では、江戸期の遺構としては土塀の控柱穴跡2基が確認された。また、下段と同様に、石垣の中心部に江戸期の盛土である明黄褐色粘質土が確認された（それ以外は全て栗石）。なお、西石垣上段の東面は黒門石垣の中でも最も孕み出しが目立つ箇所で、天端石は内側に倒れ込み、その背後の石垣上面は最大20cmほど陥没していたが、調査の結果、陥没範囲全域にわたって明治期以降のかく乱が確認され、その埋土は、下層に炭や焼土が一部見られるものの、全体的に締まりの悪い褐色～黒褐色土で、陸軍時代の陶磁器が多数出土した。以上のことから、明治期以降、このかく乱から長年に渡って石垣内部に雨水が流入し、石垣内側から外側に向かって繰り返し圧力がかかったことが、石垣孕み出しの主な原因であると考えられる。北石垣では、上面は西から東に向けて急角度で下がっており、表土はほとんど流出して全面に栗石が露出していた。このことから、ここが水道となっていたことは明らかであり、西石垣上段東面と同様に、石垣内部への水の流入が、孕み出しの主な原因であると考えられる。また、明治期以降

に石垣の背後に間知積石垣が設置されたことに伴い、東側の石垣の厚さが2m程度と薄くなり、石垣の強度が下がったことも、影響しているものと考えられる。東石垣では、江戸期の遺構は確認されなかったが、石垣の東側で、西石垣と同様の江戸期の盛土である明黄褐色粘質土が確認された。また、この盛土が確認された範囲を除く全域で、江戸期の遺物（図5・6）を含むにぶい黄褐色粘質土が確認された。この粘質土の範囲の石垣は、築城段階の粗割石を用いた布崩し積の石垣と比べ、全体的に目地がよく通り、精加工の積石や間詰石が一部に確認されるなど、江戸期の間で改修されている可能性が高いことから、このにぶい黄褐色粘質土も改修に伴うものと考えられる。

2次調査（図3、写真3・4）：石垣の内部構造や根石等の確認を目的に、1次調査に続いて西石垣上面（上・下段）の調査と、石垣裾部3箇所（T1～3）のトレンチ調査を実施した。その結果、西石垣では、1次調査で確認された江戸期の盛土である明黄褐色粘質土が、上下段の区別なく厚く堆積していることが確認され、絵図等も踏まえると、江戸期には上下の段差はなく（=全て上段の高さ）、明治期以降、石垣の一部が切り下げられて下段が築かれた、換言すれば、現在は門両袖の東石垣と西石垣下段の高さは概ね揃っているが、本来は、門の左右で石垣の高さが異なり、西石垣の方が5尺程度（約150cm）高かった可能性が高くなった（なお、調査後、段差のない状態の西石垣が写った戦前の写真が確認された〔図2、写真11〕）。北石垣北側土塁裾部（T1）では、期待された江戸期の土塁の土留などの遺構は確認されなかった。北石垣南面裾部（T2）では、現在見えている最下段の石材が根石で、地山を根切りして直接据えられていることが確認された。西石垣西面入隅裾部（T3）では、石垣が地下約2.5m続いていることが確認された。埋没していた部分の石垣は、石積技法やトレンチ最下層から江戸初期の唐津焼の碗が出土したこと（図5）等から考えて、加藤嘉明による築城段階の石垣である可能性が高く、築城時の西石垣西面は、現在見えている約3.5mを加えた約6mの高さを誇る石垣であったと考えられる。また、トレンチ最下層から上1m以上は江戸期の盛土が堆積しており、江戸期の段階で、既に石垣が大規模に埋められていたことが明らかとなった。この盛土は、規模の大きさや場所等から、松平氏入封後の三之丸御殿の整備に伴う可能性も考えられる。

3次調査（図3、写真5・6）：石垣修理工事の基礎データとして、石垣の内部構造を把握することを目的に、解体と並行して確認調査を実施した。その結果、積石については、石同士の接し方が悪いだけでなく、間詰石の多くは化粧であり、控には明確な介石はほとんど見られず、ほぼ栗石（円礫〔河床礫〕）だけで施工されているなど、前回修復を行った槻門北続櫓台石垣と同様に、とても粗雑で施工を急いだ印象を受けるものであった。裏込の栗石層については、基本的に円礫であったが、根石部分のみ円礫に粘土が混ぜられていた。根石の固定と浸水防止を意図したと考えられる。盛土については、大部分が遺物をほとんど含まない明黄褐色粘質土であったが、盛土の最下層からは灰や炭とともに、江戸後期の瓦や陶磁器が広く出土し（図5・6）、この石垣が江戸後期に大規模に改修されていることが明らかとなった。また、不明な点の多い江戸期の石垣普請の様子を具体的に示す、全国的に類例のない「地蔵」の文字と「地蔵」の絵、「侍」の絵が墨書された栗石（図5）や、石割時に用いた鉄製の矢の形の錆が内側に付着した矢穴（写真10）などが確認された。

4次調査（図3、写真7・8）：黒門の全容把握や門と接していた内堀等の確認を目的に、門や内堀部分等7箇所（T1～7）のトレンチ調査を実施した。その結果、北石垣南面や西石垣東面裾部（T1・2）では、2次調査のT2と同様に、現在見えている最下段の石材が根石で、地山を根切りして直接据えられていることが確認された。門部分（T3）では、明治期以降のかく乱が著しく、期待された門の

礎石等と認定できる遺構は確認されなかった。西石垣西面裾部（T4・5）では、2次調査のT3と同様に、石垣が地下約2.5m続くことや、江戸期の盛土が1m以上堆積していることが確認された。三之丸の小普請所と接する西石垣南西出隅裾部（T6）では、明治期以降の水路等によるかく乱が著しく、期待された小普請所に関連する遺構は確認されなかった。内堀と接する東石垣南面裾部（T7）では、期待された内堀とその西岸の堀土手が確認され、堀土手の勾配は約40度（1割2分）、堀土手の天端（＝道路面）と堀底との高低差は3m以上であったことが明らかとなった。また、堀土手表面から江戸後期の砥部焼の染付の端反碗が出土した（図5）。なお、堀土手と内堀の境界には水敲石垣が確認されたが、過去の内堀の入隅部の調査で確認されたものと同様に、積石の石材種別（石垣に広く用いられる花崗岩と異なり砂岩が主体）や大きさ（石垣と比べて小ぶり）、調整（石垣と比べて粗雑）等から、明治期以降の改修により設けられたものと考えられる。また、T6・7で確認された石垣根石の表面調整（地上に露出していた範囲にのみノミ調整あり）から、江戸期の地表高がH=22.1m前後であったことが明らかとなった。

小 結 以上のように、4回の確認調査を通じ、不明な点の多い黒門の具体像に迫る重要な知見を数多く得られるとともに、石垣の孕み出しの原因を把握することができた。

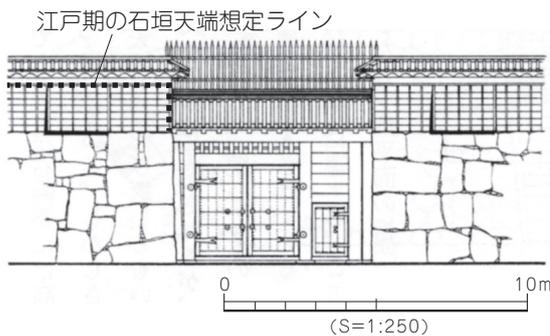


図2 黒門推定復元図（南より、河合勤氏作画）
※松山城編集委員会編 1994『松山城 第5版』より転載



写真1 解体前状況（南東より）



写真2 東石垣完掘状況（1次、東より）



写真3 西石垣下段完掘状況（2次、北より）



写真4 西石垣上段完掘状況（2次、北より）



写真5 解体後状況（北石垣、西より）



写真6 解体後状況（全景、東より）



写真7 石垣及び江戸期造成土確認状況（4次T5、北より）



写真8 掘土手及び内堀確認状況（4次T7、東より）



写真9 修理後状況（南東より）



写真10 矢の形の錆が内側に付着した矢穴



写真11 黒門西石垣古写真（南西より）

※平井誠 2008『愛媛と戦争』より転載

二之丸地区の調査

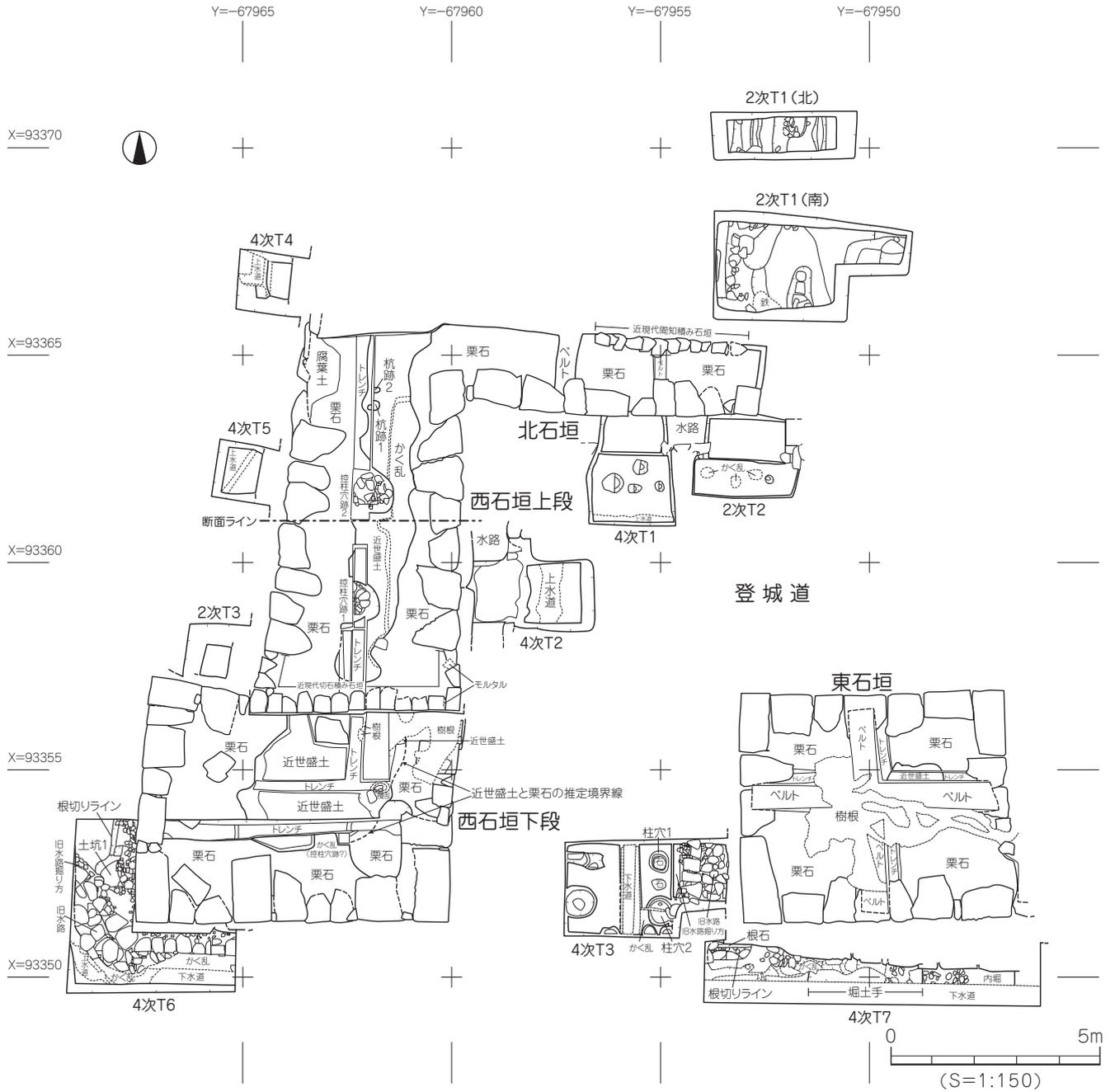


図3 遺構配置図

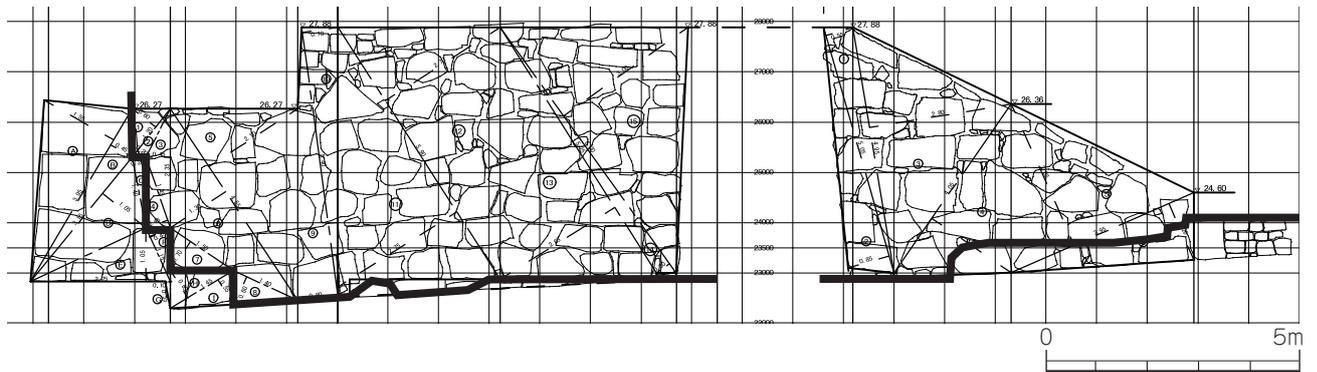


図4 解体範囲図 (左：西石垣東面 右：北石垣南面)

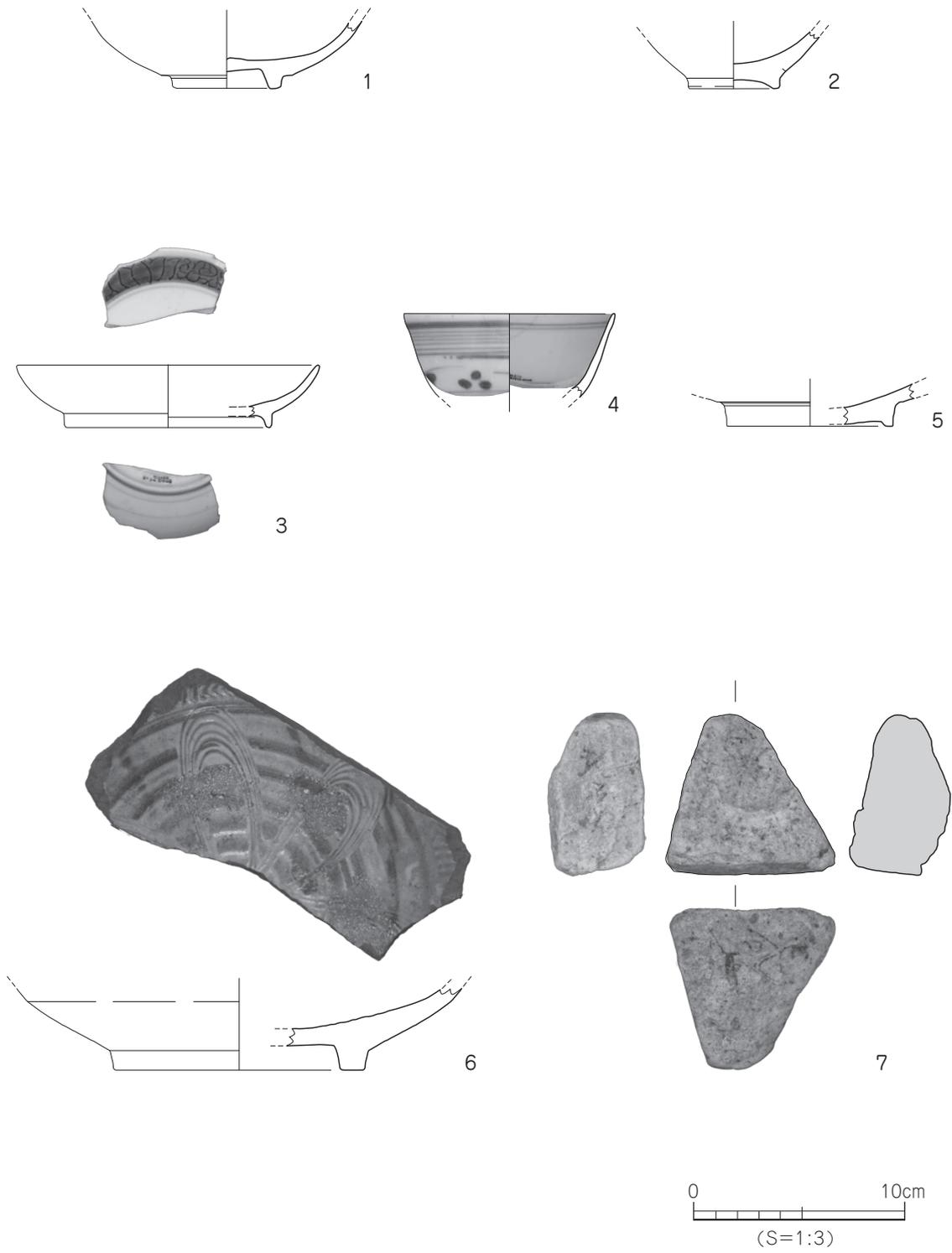


図5 出土遺物実測図(1)

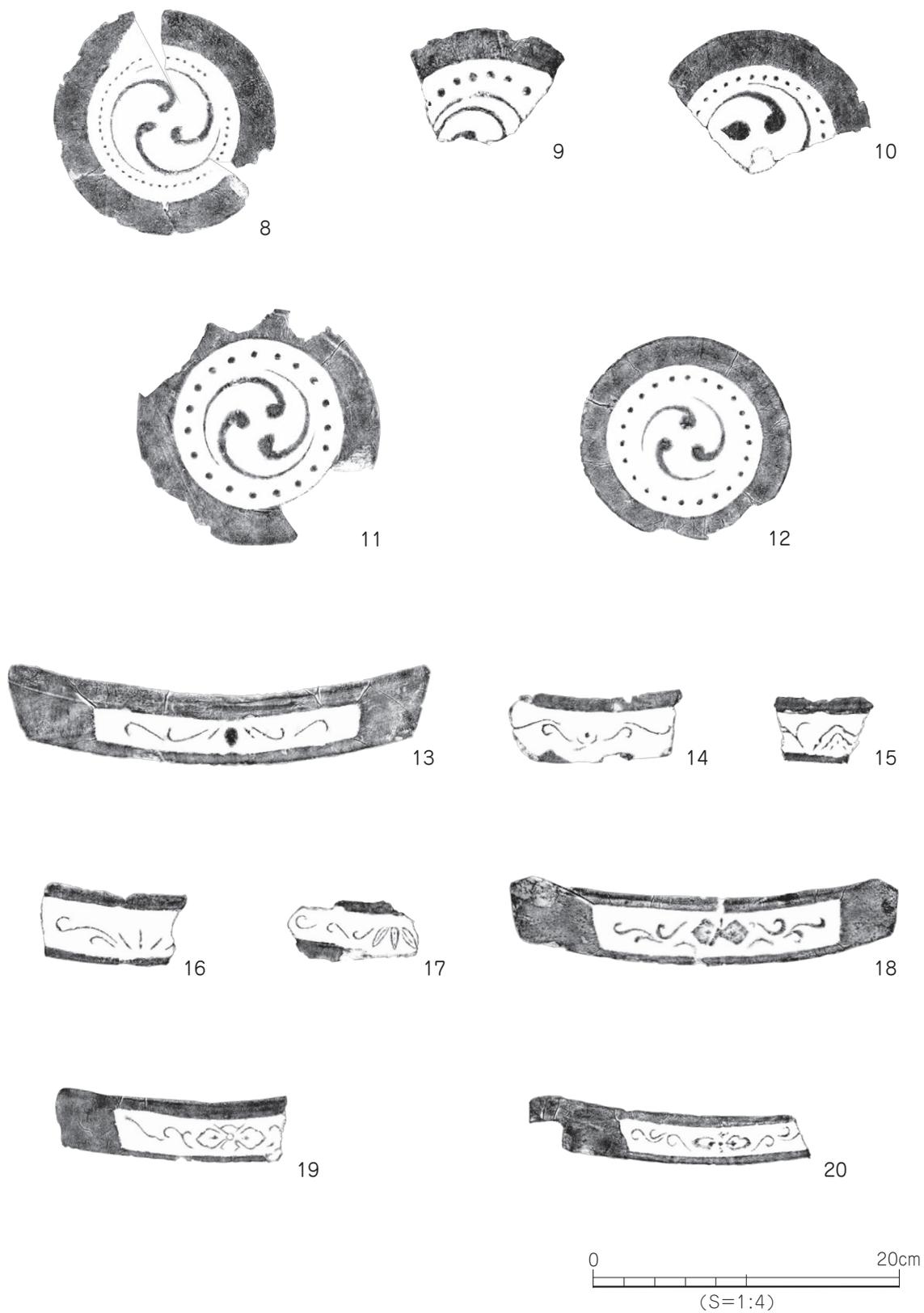


図6 出土遺物実測図(2)

史跡松山城跡

表1 黒門跡出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	3次 E-79 上	陶器	碗	—	[3.2]	5.0	灰		砥部?
2	2次 T3 4層	陶器	碗	—	[2.7]	4.2	灰		肥前、底部露胎
3	4次 T5 2層	磁器	皿	(14.2)	3.0	(9.6)	透明	染付	肥前、線彫
4	4次 T7 堀土手上層	磁器	碗(端反)	(10.4)	[4.0]	—	透明	染付	砥部、重圈文
5	4次 T7 堀埋土	陶器	碗	—	[2.0]	(7.8)	灰		瀬戸美濃
6	1次 東石垣 トレンチ中	陶器	皿	—	[3.9]	(11.8)		化粧土	肥前(刷毛目唐津)、砂目痕(見込)

表2 黒門跡出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
7	3次 E-68 控	栗石	花崗岩	7.6	8.0	4.5	308.4	「地藏(字)、地藏(絵) 侍(絵)」墨書

表3 黒門跡出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
8	1次?	14.2	10.1	2.0	1.5	左巻三巴	42	0.3	灰白・白	良好		
9	1次 西上段2層	(19.0)	(14.8)	2.0	2.2	左巻三巴	(24)	0.75	灰白	良好		
10	4次 T6 SK1	(14.4)	(9.4)	2.4	1.5	左巻三巴	(33)	0.6	灰	良好		
11	1次 西下段表土	15.8	10.5	2.4	(2.0)	左巻三巴	19	0.7	灰	良好		
12	1次 西下段2層	13.7	9.6	1.7~1.9	1.7	左巻三巴	23	0.5	灰	良好	○	

表4 黒門跡出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
13	1次 西下段2層	25.6	4.6	17.0	2.0	4.1	2.2	灰	良好		宝珠(下)	面取
14	2次 西上段2層	—	4.5	—	2.4	—	1.5	黄灰	良好		宝珠(上)	面取
15	4次 T7 堀土手上層	—	4.3	—	2.7	—	1.9	灰	良好	○	宝珠(上・線)	
16	1次 西下段2層	—	4.3	—	2.9	—	1.8	灰	良好		三葉(上)	
17	1次 東石垣トレンチ	—	—	—	2.2	—	(2.0)	灰	良好		三葉(下・線)	
18	1次 西上段2層	24.7	4.3	15.3	2.8	3.6~5.2	1.7	淡黄	不良		劍菱	
19	1次 西上段表土	(23.2)	3.9	(15.0)	2.1	3.9	1.5	灰	良好		劍菱(線)	
20	2次 T3 2層	[15.5]	3.2	(13.4)	2.0	3.7	1.5	灰白・灰	良好		劍菱	軒棧

第3節 三之丸地区の調査

あとち
1. 県営ラグビー場跡地試掘調査・
さんのまるあと
三之丸跡 1・2 次調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 試掘：平成 13 年 12 月 10 日～平成 14 年 3 月 31 日
 1 次：平成 14 年 9 月 10 日～平成 15 年 3 月 31 日
 2 次：平成 16 年 1 月 19 日～同年 3 月 26 日
 面 積 試掘：14,016㎡（対象地面積）、
 1 次：約 1,400㎡、2 次：約 312㎡
 担 当 試掘：西村直人、河野史知
 1 次：西村直人、田内眞由美、2 次：西村直人

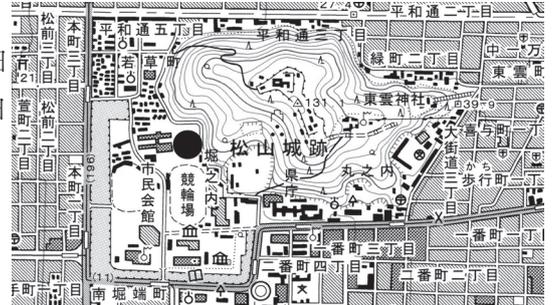


図 1 調査地位置図

経 過 城山公園（堀之内地区）第 1 期整備に伴う試掘調査および確認調査である。調査地の県営ラグビー場跡地は、城山公園（堀之内地区）の北東隅に位置する。江戸時代の絵図によると、往時は、屋敷地又は山里曲輪とされる「西之丸」及び藩主の屋敷兼藩庁である「三之丸御殿」の一部に当たる（図 8・9）。しかしながら、近代以降、陸軍等の射撃場などの大型施設の設置により、江戸時代の遺構の残存が不明であったことから、まずは試掘調査により遺構の有無を全体的に把握した上で、後に内容確認調査を実施することとした。

試掘調査では、38 箇所（T1～38）のトレンチを設定した。調査の結果、敷地の北西部及び南部に井戸や石垣、石組溝などが残存し、敷地の大部分が西之丸跡に当たることを確認した。一方、敷地全体が陸軍施設の設置や県営ラグビー場造成により地形が大きく改変されていることが判明した。これらのことから、1 次調査は、主に北西部の三之丸御殿と西之丸の境界確認、2 次調査は、主に南部の西之丸の出入口の確認を目的として行うこととした。1 次調査では 5 箇所（Ⅰ～Ⅴ区）、2 次調査では 3 箇所（Ⅰ～Ⅲ区）を設定した（図 2）。

遺構・遺物 石垣、石組溝及び井戸等が確認された。

石垣（図 3・6・7、写真 3～6）：3 基確認された。1 次Ⅰ区の北部で確認された石垣 1 は、東西に 5、6 段が残り、最大高 1.2 m、検出長 3.6 m を測る。築石は、高さ 25cm 前後の粗割の砂岩や礫岩などの乱積みで、面は揃っていない。1 次Ⅱ区の東部で確認された石垣 2 は、長さ約 9m、幅約 4m の溝の北面に東西にわたり積まれる。根石を含め凡そ 3 段が残り、高さ最大 1.8m、長さ 7.5m、傾斜角約 65 度を測る。天端が揃っていないため、上部に石垣が続いていたと考えられるが、根石が築石より手前に突出していないことから、高い石垣ではないと推測される。底面は栗石が石垣に寄りかかるように敷かれる。また、石垣西端は幅 103cm の角石が積まれるが、築石は北へ連続せず地山に接する。一方、東端は栗石が築石と同じ高さに積まれる。石垣の対面（溝南面）及び溝東面は地山絶壁である。築石は、幅 60cm、高さ 50cm 前後の粗割の花崗岩を使用した乱積みで、一部に幅 7～8cm 程度の矢穴がみられる。間詰石は花崗岩の割石が使用され、隙間なく充填されている。溝の埋立時に西端は石列で閉塞される。溝埋土（石垣 2 の覆土）から 17 世紀前半の陶器などが出土した。1 次Ⅴ区で確認された石垣 3 は、根石を含め東西に 2、3 段が残り、最大高 1.6m、検出長 2.6m、傾斜角約 70 度を測る。裏込石（栗

石)が高さ3m以上残存していることから、本来は5段以上の石垣であったと考えられる。築石は幅90cm、高さ60cm前後の粗割の花崗岩を使用した布積みで、一部に幅8～9cm程度の矢穴がみられる。間詰石は花崗岩の割石が使用され、隙間なく充填される。「上」と「卍」の刻印が確認された。

石組溝(1次)(図3、写真7～9):3条確認された。1次I区の北部で確認された石組溝1は、検出長12.8m、幅30～40cmを測り、北西から南東に緩やかにカーブする。北端の一部は栗石が充填される。SD2の埋立に伴い設置され、埋土から17世紀の陶器などが出土した。1次I区の南部からII区の南北にかけて確認された石組溝2は、検出長29.6m、幅50cmを測り、調査区外南に延びる。石材は主に花崗岩が使用される。底面は北から南へ傾斜する。石垣2の埋立に伴い設置されており、埋土から17世紀の陶器などが出土した。1次II区の西端で南北方向に確認された石組溝3は、検出長17.9m、幅26cmを測る。石列及び石組溝2とはほぼ並行し、北で西に屈れ、調査区外西へ延びる。西石組の天端が東石組より30cm程低く、底面は北から南へ傾斜する。

石組溝(2次)(図6、写真10・11):2条確認された。2次I区の東部で南北方向に確認された石組溝1は、検出長10.4m、幅60～70cmを測り、調査区外南北に延びる。東石組は、主に幅60cm前後の花崗岩が使用され、築石面から奥行約130cmの裏込を伴う。絵図との比較から、小普請所東辺の石垣とみられる。2次I区の南部で東西方向に確認された石組溝2は、検出長約16mで、幅約120cmを測り、石組溝1を横断し、調査区外東西に延びる。南石組は天端が揃っていることから、最上段が残存しているとみられる。北石組は一部が残るのみであるが、南石組の天端よりも高い北岸の遺構検出面の高さまで石積が積まれていたと推測される。底面には割石が敷かれる。南石組の石材は主に幅50cm前後の花崗岩が使用され、北石組は主に幅30cm前後の砂岩等が使用される。また、南石組の南側に並行して柱穴列が2条が並ぶ。このうち1条は、南石組と同時に造られたとみられる。

暗渠(図3、写真12):1次I区の北部で確認された。石組溝1(1次)と同時に構築され、北端は瓦管により連結される。表面は大小の栗石が乱雑に積まれるが、内部は均等な石が整列して並べられる。下層から17世紀前半の陶器が出土した。

溝(図3、写真13):1次I区の南北にかけてSD2が確認された。南北検出長約24m、幅約150cm、深さ約100cmを測り、北端は石垣1に連なる。未調査であるが、1次T2にも延長すると推測される。埋土から17世紀前半の陶器が出土した。

井戸(図3・5、写真14):3基を確認した。1次I区の東部で確認されたSE1は、50cm角の穴が開けられた八角形のコンクリート製の蓋に覆われ、中には丸太と板からなる足場が築石に食い込んだ状況であった。井戸本体は内径約2.7m、掘方は径約7.1mで、その間に裏込石が充填される。底面は泥や石が溜まっており、現況の深さは6.9mを測る。築石は花崗岩が使用され、表面には、「◎」「○」「▽」「☒」「田」などの刻印が確認された。試掘T26で確認されたSE2は、掘方の上部内壁に裏込石、下部に井筒(水溜)とみられる組板の一部が残っており、構内には築石とみられる石が多数落とし込まれる。掘方は上部が長径2.4m短径2.0mで、下部は約一辺1.5mの隅丸方形であることから、小型の井戸と考えられる。1次IV区で確認されたSE3は、昭和24(1949)年の航空写真と重ねると、井戸の位置が、現在は削平されている城山から西へ舌状に延びる微高地上に当たることから、遺構は3m程削られた状態とみられる。本体は内径2.3m、掘方は長径8.1m、短径7.2mで、その間に裏込石が充填される。築石は花崗岩が使用される。深さは少なくとも2.5m以上を有する。埋土からガラス片とともに陶磁器や銭などが出土した。いずれの井戸も「亀郭城秘図」と「松山城下図屏風」に描かれる。

堀基礎・礎石建物跡（図4、写真15・16）：2次Ⅰ区の中央で確認された。堀礎石は検出長6.6m幅約90cmで、調査区外北側に延長する。基礎石の間は栗石が充填される。礎石建物は、30cm前後の石及び小穴が方位や他の遺構に沿って並んだもので、平面形は不明であるが、1～2間四方の小規模な建物と推測される。絵図によっては、辻番所の存在を記すものや門が描かれるものがある。

小 結 本調査では、西之丸に関する遺構が多数検出された。陸軍等により地形が大きく改変されていたものの、石垣や井戸など比較的大型の遺構は概ね残存しており、絵図と整合するなど大きな成果が得られた。本調査地が「西之丸」として初めて描かれる絵図は、延宝元（1673）年から天和2（1682）年に比定されている「水野秘蔵松山城下図」であるが、寛永4（1627）年から同7（1630）年までに比定される「蒲生家伊予在城之節郭中屋敷割之図」には、石垣を設けた重臣屋敷が描かれている。本調査で確認された石垣2及び3は、石積方法や覆土（埋土）の遺物から、17世紀初頭前後に築造されたとみられることから、この絵図の石垣に当たる可能性が高い。また、1次調査の石組溝2は、その石垣2を埋立てて設けられており、その状況と埋土の遺物から、貞享4（1687）年に新造された三之丸御殿の東辺（西之丸との境）と考えられる。

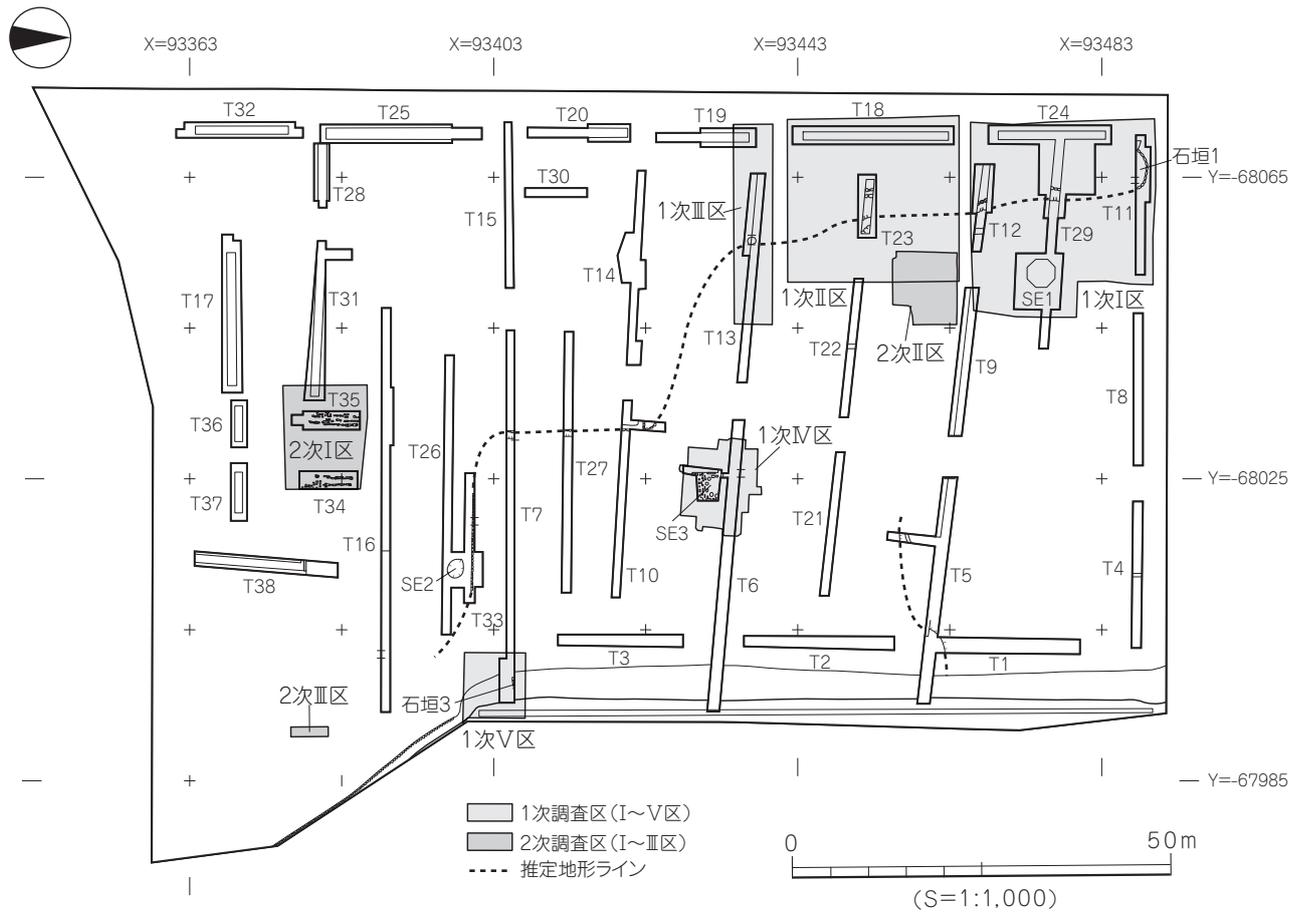


図2 トレンチ位置図

史跡松山城跡

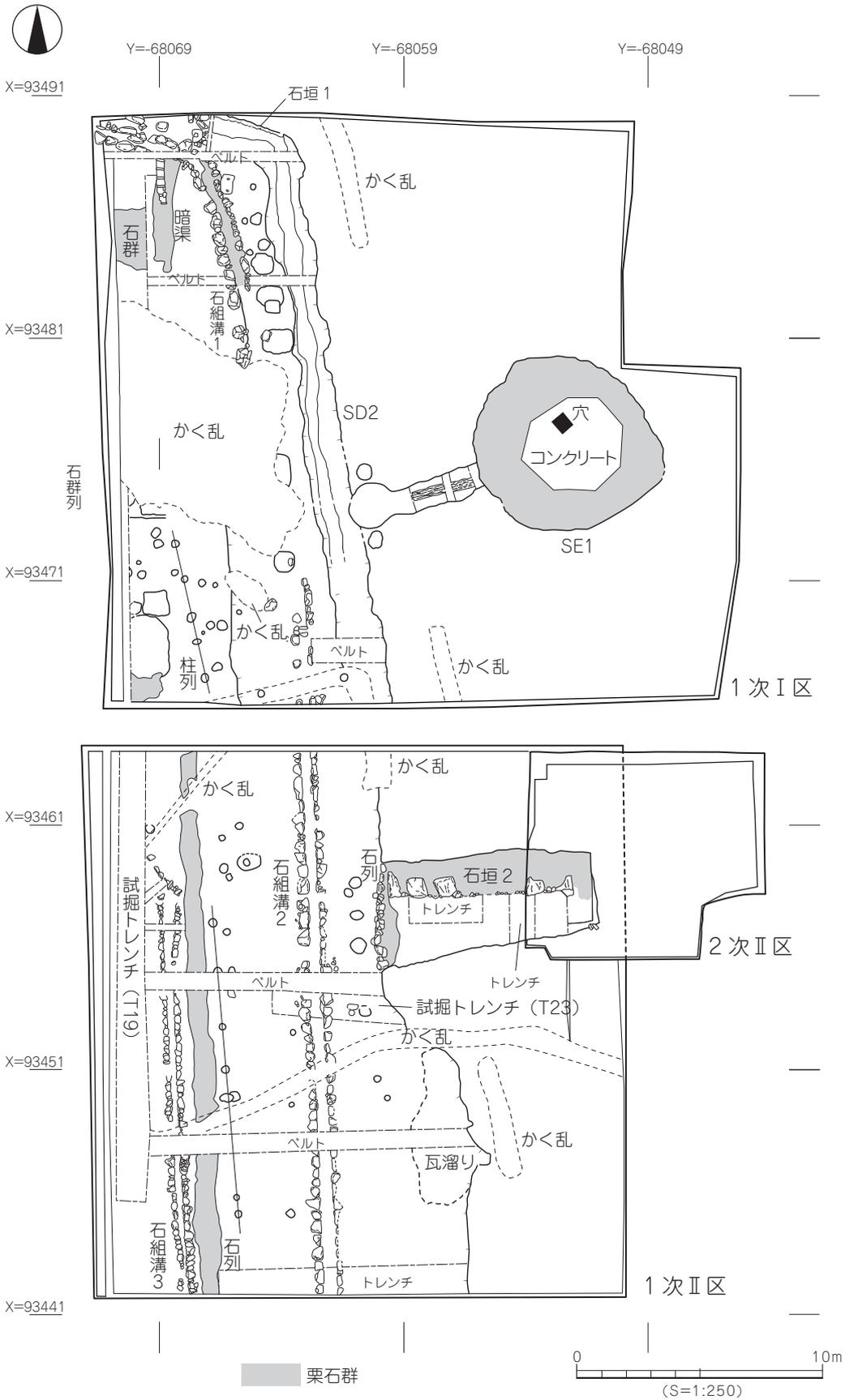


図3 1次I・II区・2次II区平面図

三之丸地区の調査

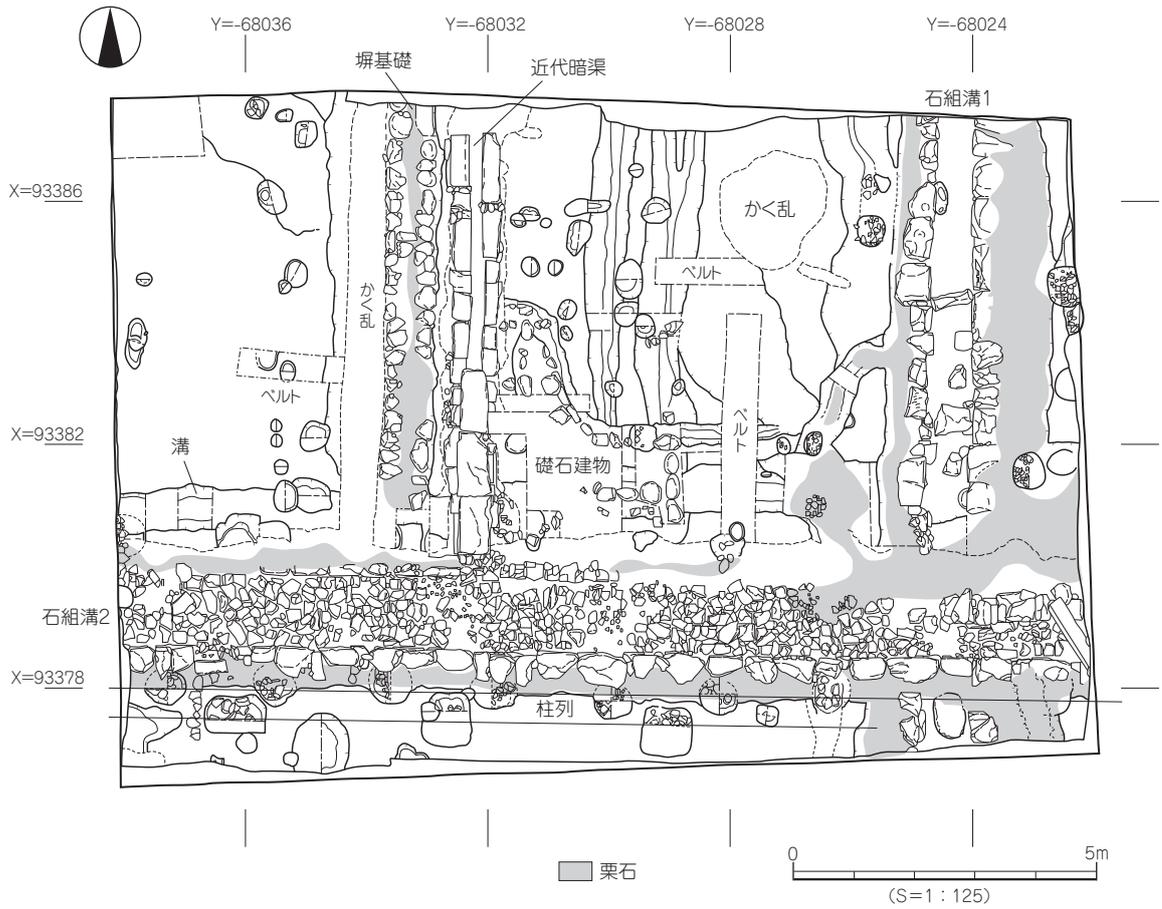


図4 2次I区平面図

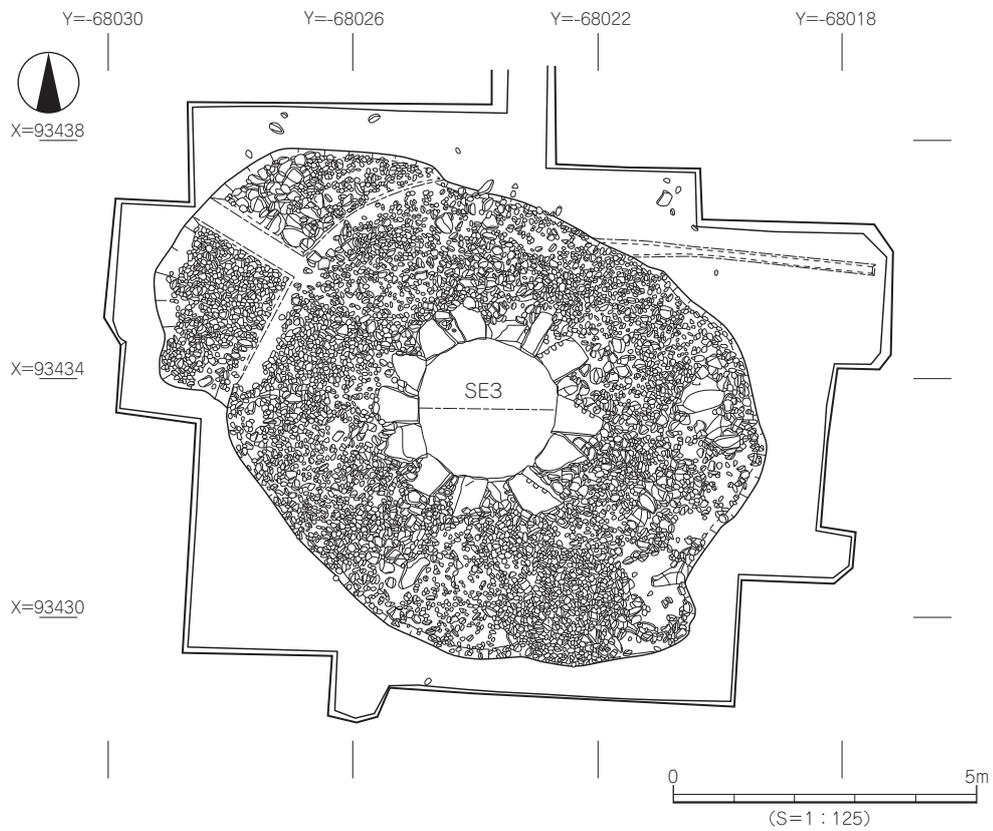


図5 1次IV区 SE3 平面図

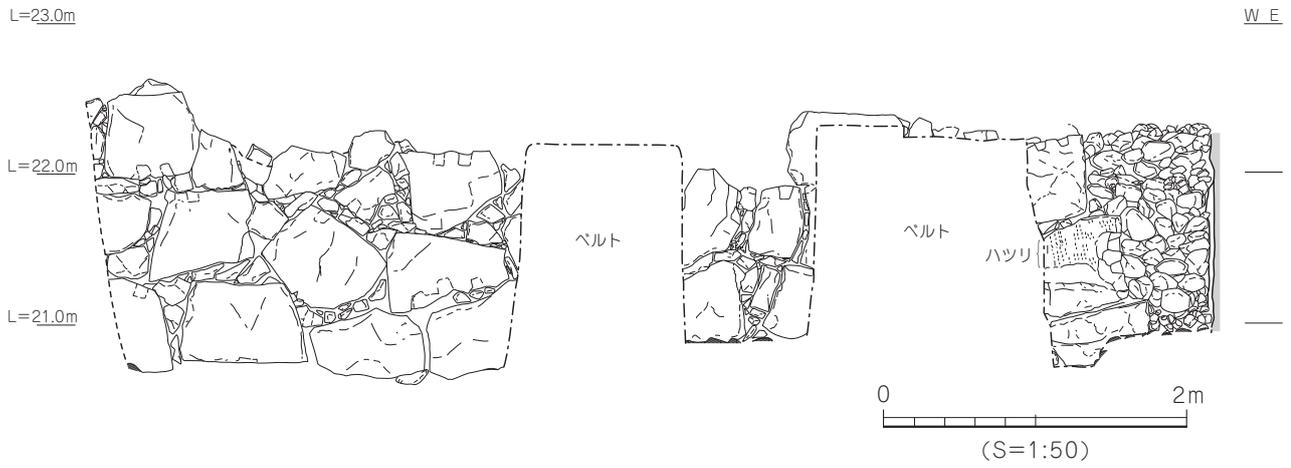


図6 1次Ⅱ区石垣2立面図

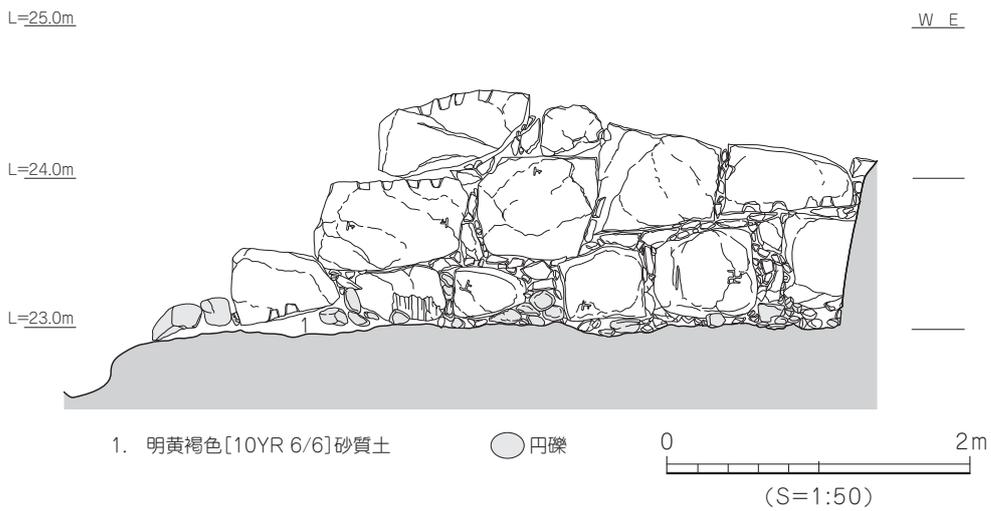


図7 1次Ⅴ区石垣3立面図



図8 亀郭城秘図（部分、伊予史談会蔵）に描かれた西之丸



図9 松山城下図屏風（部分、愛媛県歴史文化博物館蔵）に描かれた西之丸



写真1 1次調査I・II区全景(南東より)



写真2 2次I区全景(北西より)



写真3 1次II区石垣2東部(東より)



写真4 2次II区石垣2西部(南東より)



写真5 2次II区石垣2西部(北より)



写真6 1次V区石垣3(南西より)



写真7 1次I区石組溝1(北西より)



写真8 1次II区石組溝2及び3(南より)



写真9 1次Ⅱ区石組溝3 (南より)



写真10 2次Ⅰ区石組1 (西より)



写真11 2次Ⅰ区石組溝2 (北より)



写真12 1次Ⅰ区暗渠 (西から)



写真13 1次Ⅰ区SD 2 (北東より)



写真14 1次Ⅳ区井戸3 (南西より)



写真15 2次Ⅰ区近代溝及び土堀跡 (北より)



写真16 2次Ⅰ区礎石建物跡 (東より)

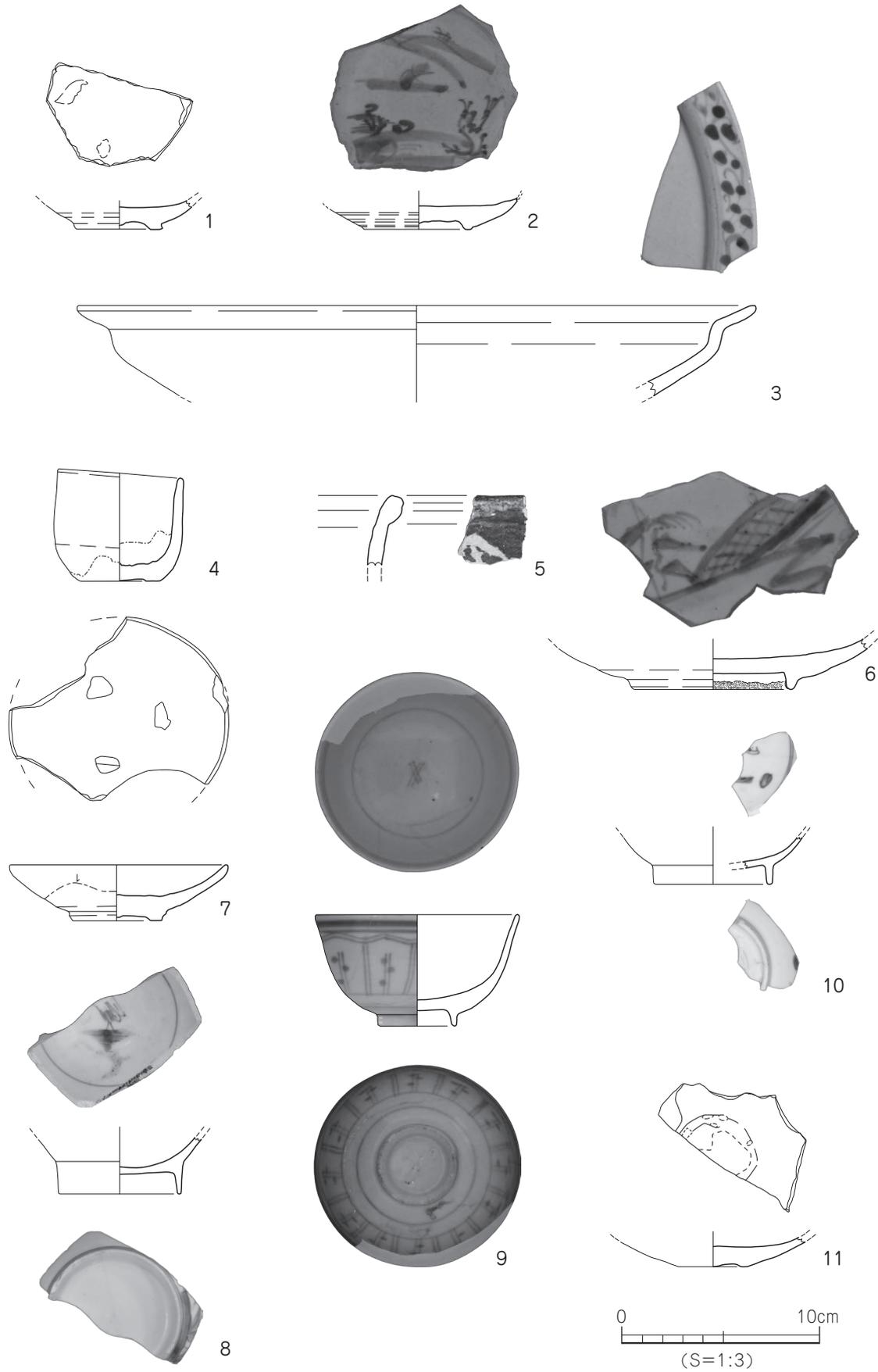


图8 出土遺物実測図 (1)

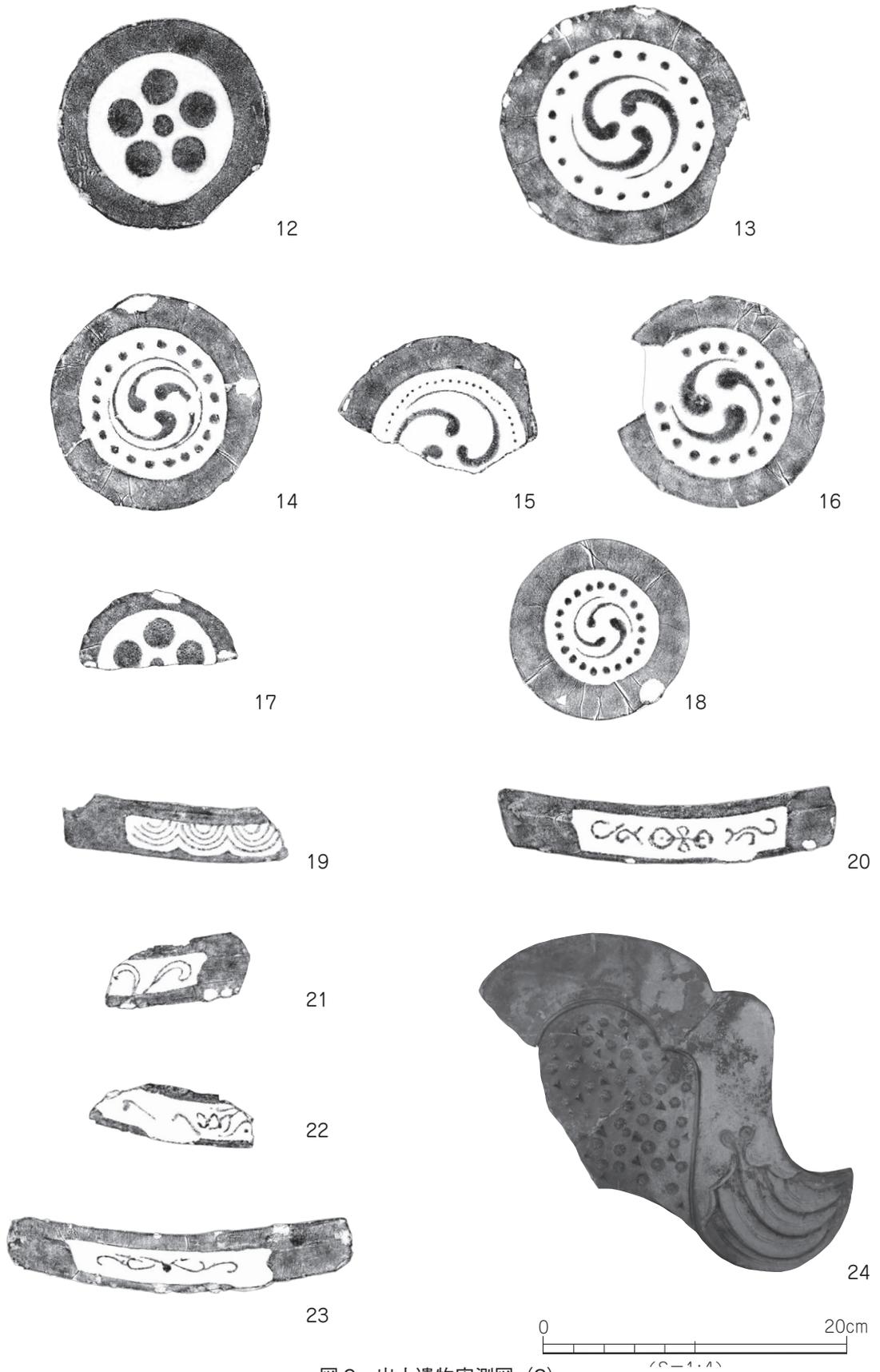


図9 出土遺物実測図 (2)

史跡松山城跡

表1 三之丸跡1・2次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	1次I区 試掘T12 裏込土	陶器	皿	—	[1.45]	4.2	灰		肥前、底部露胎、縮緬高台、胎土目痕 (見込)
2	1次I区 南石列西側覆土	磁器	皿	—	[1.2]	5.5	透明	染付	肥前 (初期伊万里)、山水文、砂目痕 (高台)
3	1次I区 かく乱	磁器	皿	(34.2)	[4.6]	—	透明	染付	肥前 (初期伊万里)、唐草文
4	1次II区 石垣2前面南北トレンチ粘質土	陶器	湯呑碗	6.2	5.7	4.0	灰		肥前、底部露胎、碁笥底、完形
5	1次II区 石垣2前面南北トレンチ粘質土	陶器	碗	—	[3.6]	—	黒		美濃 (黒織部)
6	1次IV区 SE3	磁器	皿	—	[3.1]	(3.9)	透明	染付	肥前 (初期伊万里)、山水文?、砂目痕 (高台)
7	1次IV区 SE3	陶器	皿	11.2	2.85	4.6	灰		肥前、底部露胎、胎土目痕 (見込)
8	2次I区 石組溝1軒丸・軒平集合	磁器	碗 (広東)	—	[2.9]	(6.0)	透明	染付	肥前、鷺文 (見込)
9	2次I区 石組溝12層	磁器	碗 (端反)	10.2	5.65	3.8	透明	染付	砥部、檜梅文?、井桁文 (見込)
10	2次I区 近代暗渠掘方	磁器	碗	—	[2.4]	(5.8)	透明	染付	肥前
11	2次I区 石組溝2裏込土	陶器	皿	—	[1.5]	(3.7)	灰		肥前、底部露胎、碁笥底、兜巾、砂目痕 (見込)

表2 三之丸跡1・2次出土遺物観察表 軒丸瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
12	試掘 造成土	14.0	9.8	19~22	1.9	家紋 (星梅鉢)	—	—		良好		
13	1次IV区 SE3	15.9	11.35	21~24	1.8	右卷三巴	19	0.8	灰	良好	○	
14	2次I区 石組溝1軒丸・軒平集合	14.2	10.2	18~22	1.7	右卷三巴	20	0.7	オリーフ黒・灰白	不良		
15	2次I区 石組溝1被覆土	(15.0)	(10.0)	2.0	1.5	左卷三巴	(24)	0.2	灰白・黄灰	良好		
16	2次I区 石組溝1被覆土	13.5	9.7	2.0	1.5	右卷三巴	16	1.0	灰	良好	○	
17	2次I区 サブトレ9	(10.0)	(7.0)	1.4	1.5	家紋 (星梅鉢)	—	—	灰	良好		菊瓦
18	2次I区 石組溝12層	11.8	7.3	2.3	1.6	右卷三巴	21	0.6	暗灰	良好	○	鳥衾

表3 三之丸跡1・2次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
19	2次I区 石組溝1	(21.4~21.8)	3.7	(13.4~13.8)	1.9	4.0	1.2	灰	良好		青海波	
20	2次I区 石組溝12層	22.0	3.5	13.6	2.5	35~47	1.85	灰・灰白	良好		剣菱	
21	2次I区 近代暗渠 灰層	—	4.3	—	2.4	—	1.5	灰・灰白	良好		不明	唐草 (二重線)
22	2次I区 石組溝2 (北) 裏込土	—	3.6	—	2.3	—	1.4	灰	良好		三葉 (上・線)	
23	2次I区 サブトレ7	21.8	3.6	13.0	2.0	5.4	1.85	灰・灰白	良好		宝珠 (下・斜)	
24	2次I区 塀基礎埋土	(23.0)	16.8	(13.4)	12.3	(9.4~20.4)	1.7	灰白・明褐	良好	○		鬼瓦

2. 三之丸跡 3次調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 平成16年7月27日～同17年2月3日
 面 積 約340㎡
 担 当 岸見泰宏

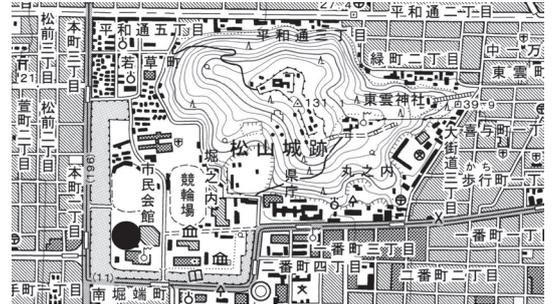


図1 調査位置図

経 過 三之丸跡3次調査は、これまでの調査と同様に、城山公園（堀之内地区）整備事業（第1期）に伴い、江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容や遺存状況、範囲等を把握するために行った事前の確認調査である。調査は、解体が終了した市営庭球場跡地を対象として、3箇所（T1～3）のトレンチを設定し、整備事業で園路として整備することを目指している江戸期の道路の確認を主目的として実施した（図2）。

遺構・遺物 T1（図3、写真1）：県民館跡地（現在の愛媛県美術館）での調査で確認された東西道路と、市営庭球場解体に伴う試掘調査で確認された南北道路西側溝との交差点にトレンチを設定した。調査の結果、表土である明治期以降の造成土の直下、現地表下約60cmで、東西道路（石組側溝2条）、南北道路（石組側溝1条）、溝2条等が確認された。東西道路は、南北に石組側溝（SD1・2）を伴い、幅約8.7m（側溝を含む）、検出長9mを測る。トレンチ西端で後述する南北道路が北側に接続してT字路となる。部分的に細砂を叩き締めた道路面が3面確認された（各路面厚は約3cm）。南側のSD1は、最大幅50cmを測る。石組東面は、明治期以降のかく乱により、積石は原位置を保っていない可能性が高いが、西面は幅30～40cm、高さ20～40cmの円礫（河床礫）を横積みにしたもので、1～2段が遺存し、最高50cmを測る。北側のSD2は、最大幅80cmを測る。石組北面は、明治期以降のかく乱により、トレンチ中央付近から後述するSD3との交差部までの間の遺存状況は悪かったものの、幅40～50cm、高さ30cm程度の円礫を横積みにしたもので、1～2段が遺存し、最高60cmを測る。積石同士はしっかりと接しており、積石間の空隙は20cm以下の円礫で間詰めされていた。南北道路は、西側に石組側溝（SD3）を伴い、検出長4.7m（SD2より北側）を測る。南側で先述の東西道路と接続してT字路となる。SD3は、幅約80cmを測る。石組西面は、明治期以降のかく乱により、積石は原位置を保っていない可能性が高い。一方、東面は、SD2との交差部から北約2mの地点から北側が上下2段に分かれており、下段は10～20cm程度の円礫が接することとなる並べられているが、上段は幅30cm、高さ20cm程度の円礫を横積みにしたもので、SD2との交差部には約40cm角の切石が据えられていた。上段は、下段と比べて石の並びが乱れており、大きさも揃っておらず、また、下段の掘方を切って据えられていることから、改修に伴うものであると考えられる。なお、SD3は、堆積状況から、SD2が廃絶して埋められる以前に既に埋められていたと考えられるが、全ての石組側溝内から共通して江戸後期の陶磁器が出土していることから（図6）、廃絶時期に大きな差はないものと考えられる。また、東西道路内には、石組側溝と並行して、2本の素掘りの溝（SD4・5）が確認された。両者とも幅約2.3m、深さ約80cmを測る。埋土からは、他の廃

棄土坑と同様に、多量の陶磁器と食物残渣が出土した。陶磁器は、わずかに江戸前期の初期伊万里などが含まれるものの、江戸後期のものが中心で、そのうち「嘉永六年」（1851年）と墨書された土瓶の蓋は記年銘資料として注目される（図6・7）。

T2（図4、写真2）：庭球場北西部に、土塁上に設けられた観客席に直行する形で東西方向にトレンチを設定した。調査の結果、表土である明治期以降の造成土の直下、現地表下0.9～1m程度で、南北方向溝4条（SD1～4）、整地層2箇所（整地層1・2）、土坑（SK）等が確認された。SD1は、素掘りで、幅1.3～1.4m、深さ約40cmを図る。埋土からは、江戸後期の肥前や瀬戸・美濃、砥部等の陶磁器が出土した（図6・7）。SD2は、SD1の約1m東に並行して走る溝で、幅は北壁付近で約60cm、南壁付近で約50cmを測る。検出高は19.0m、底部高は北壁付近で18.7m、南壁付近で18.6mである。SD2はSK2、SK3、SK4を切っており、SK3はSK4を切って掘削されている。これらの土坑は廃棄土坑と考えられ、下層に江戸後期の陶磁器を中心とした多量の遺物を包含している（図6・7）。SD3は、検出幅約60cmを測る。SD2と同位置・同規模であったと考えられるが、SD2、SK2、SK3、SK4に切られており、検出長はわずか80cmであった。溝両肩の灰黄褐色土（20cm以下の円礫を多数含む、幅約60cm）は、護岸の地業であると考えられる。埋土は、SD2に切られているため判別できなかった。以上のことから、SD2・3周辺の遺構の構築順序はSD3→SK4→SK2・3→SD2であると考えられる。SD4は、石組で、幅約50cmを測る。検出高は19.3mで、底部高は18.9mである。溝内にはモルタルが敷き詰められており、その下層には非常に硬くしまった真砂土層、更に下層には30cm以下の円礫層が確認された。この真砂土層は、モルタルを敷く前の地業と考えられることから、この層までは明治期以降の改変が及んでいることが分かる。その下の円礫層は、地山直上に敷かれていたが、遺物の出土が皆無であったことから、年代を特定することはできなかった。整地層1は、砂岩由来の明黄褐色粘質土層で、SD1西側で確認された。過去の調査成果等から、この整地層1は杉馬場（馬場土手を含む）、その東側のSD1とSD2・3の間は幅の狭い南北道路、その東側は屋敷地であると考えられる。また、整地層2は、黄橙色真砂土で、屋敷地内のSD2・3とSD4の間で確認された。東西に側溝（東：SD4、西：SD2）を伴う明治期以降の道路であると考えられる。

T3（図5）：土塁の構造と規模を明らかにするため、土塁上に設けられた観客席の南側に、土塁と直行する形で、東西方向にトレンチを設定した。調査の結果、土塁本体にともなう盛土層を3層、土塁構築前の造成土層を1層確認した。ただし、土塁裾部付近には明治期以降の溝が存在し、土塁の規模を把握することはできなかった。

小 結 以上のように、今回の調査を通じ、目的としていた江戸期の道路やその交差点が確認されるなど、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも、重要な知見を数多く得ることができた。

三之丸地区の調査

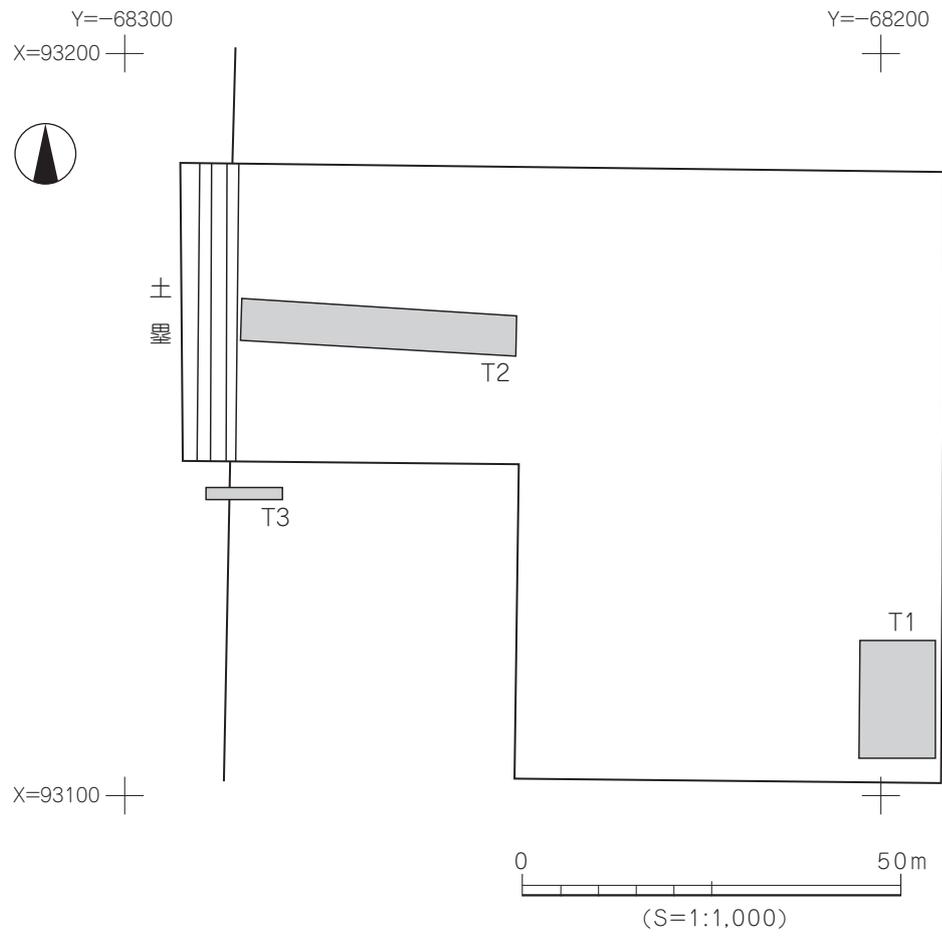


図2 トレンチ位置図

史跡松山城跡

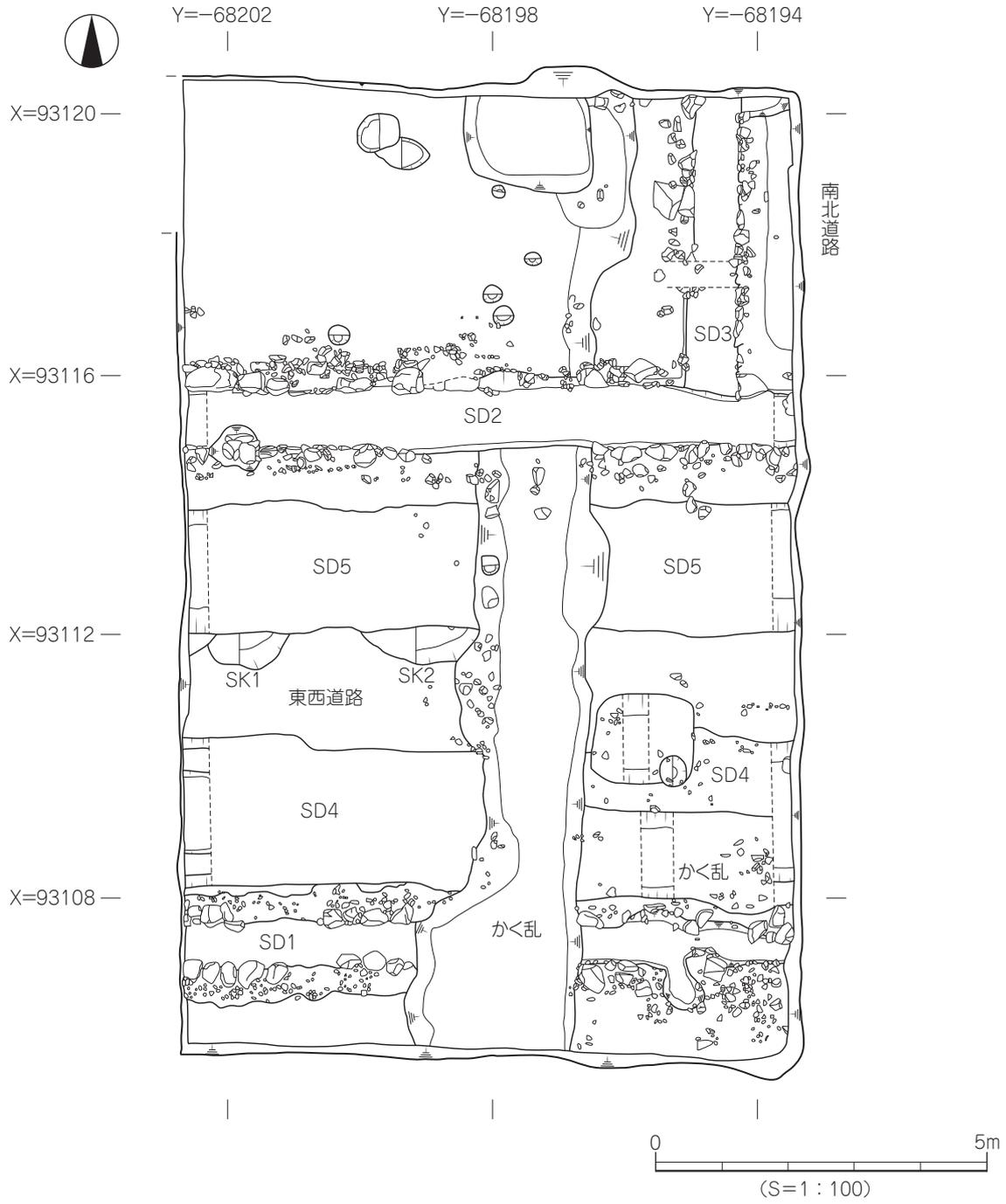


図3 T1平面図

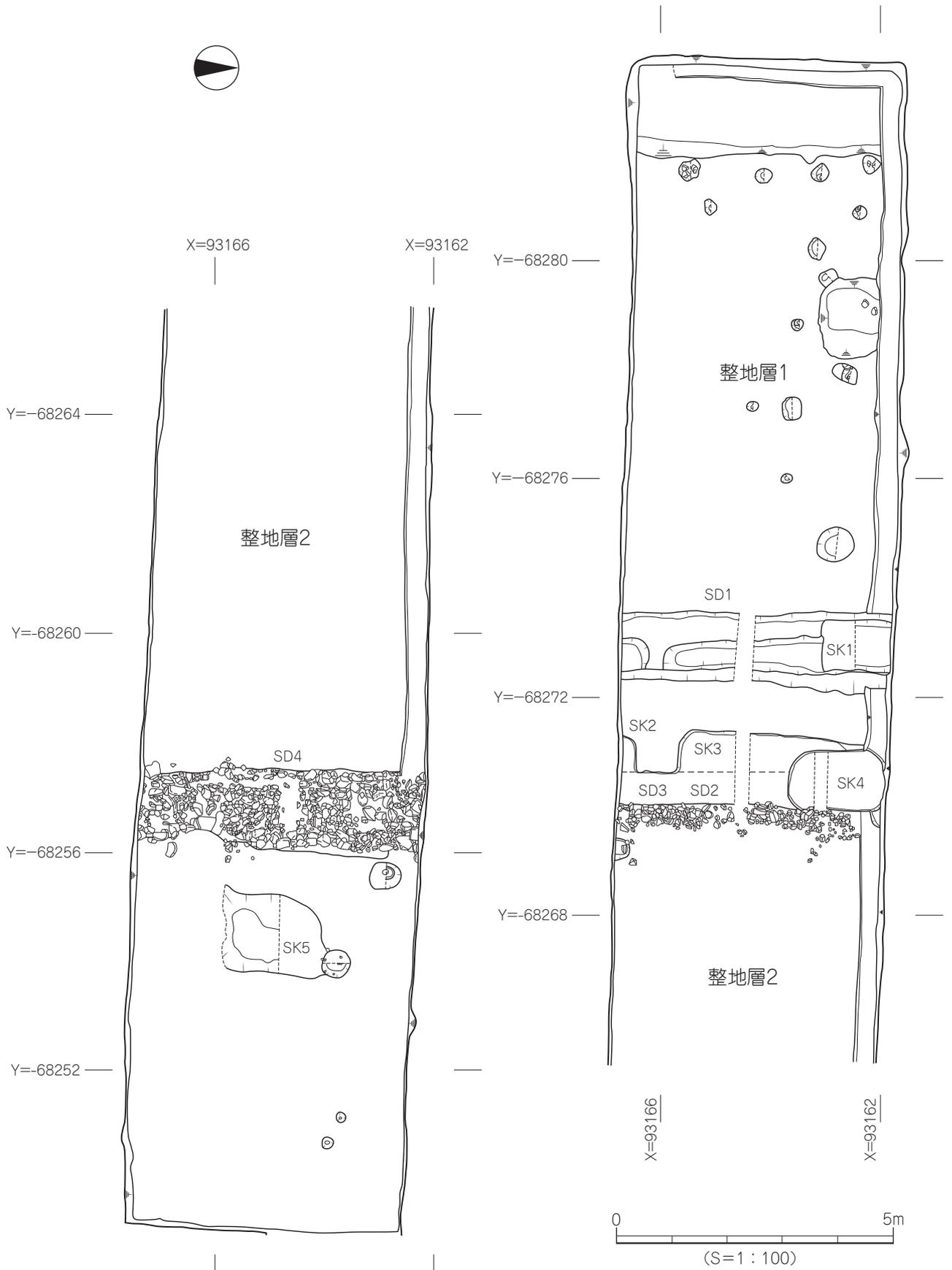


図4 T2 平面図

史跡松山城跡

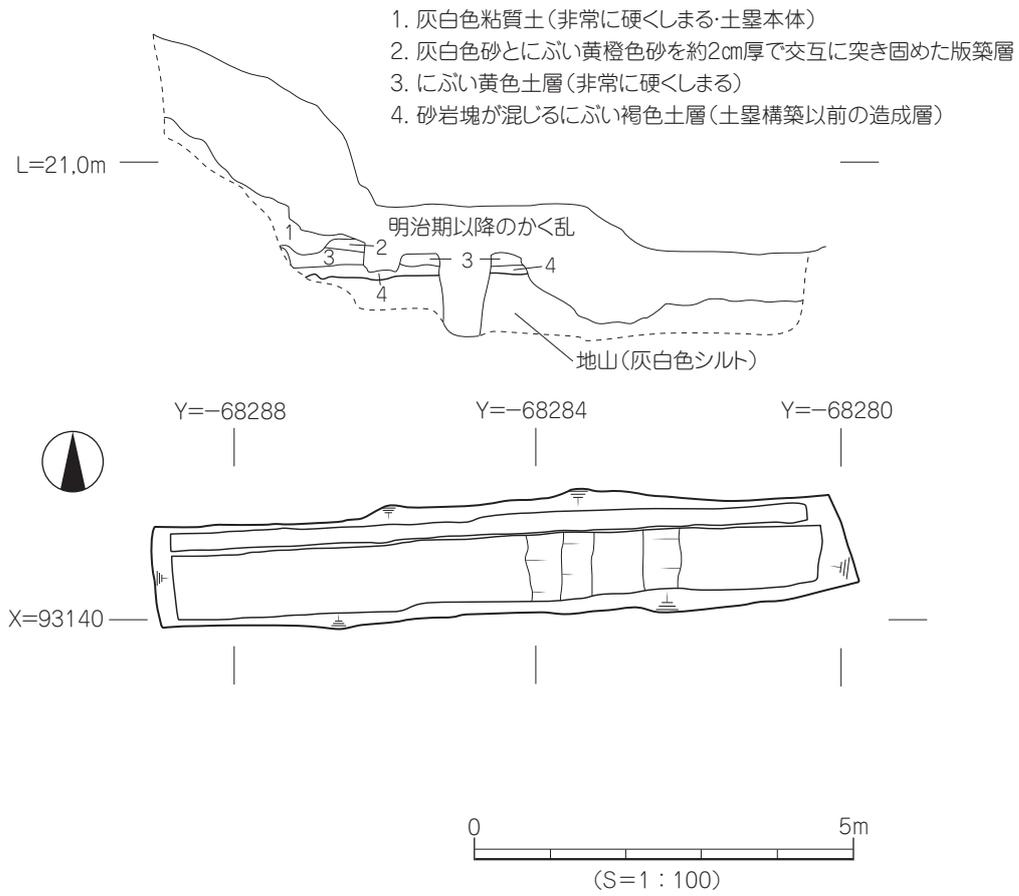


図5 T3北壁断面図及び平面図



写真1 T1 完掘状況（西より）

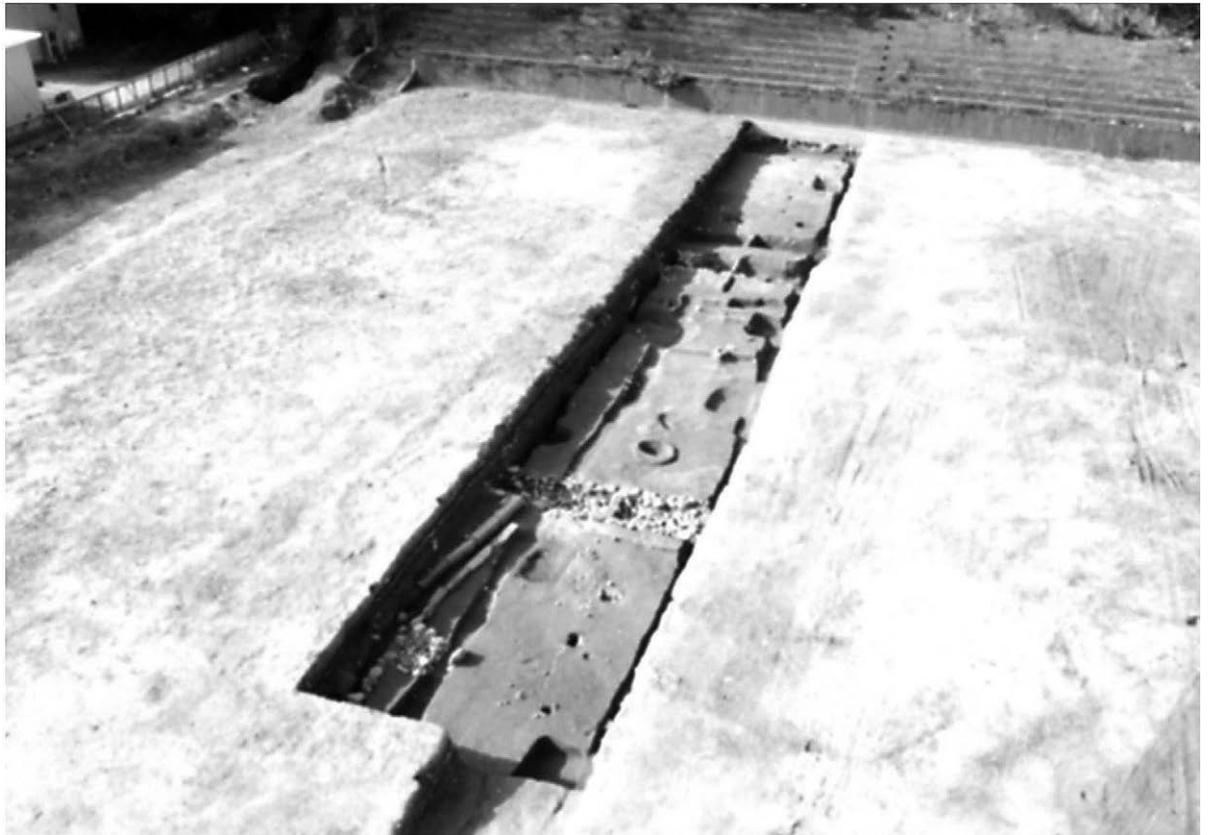


写真2 T2 完掘状況（北東より）

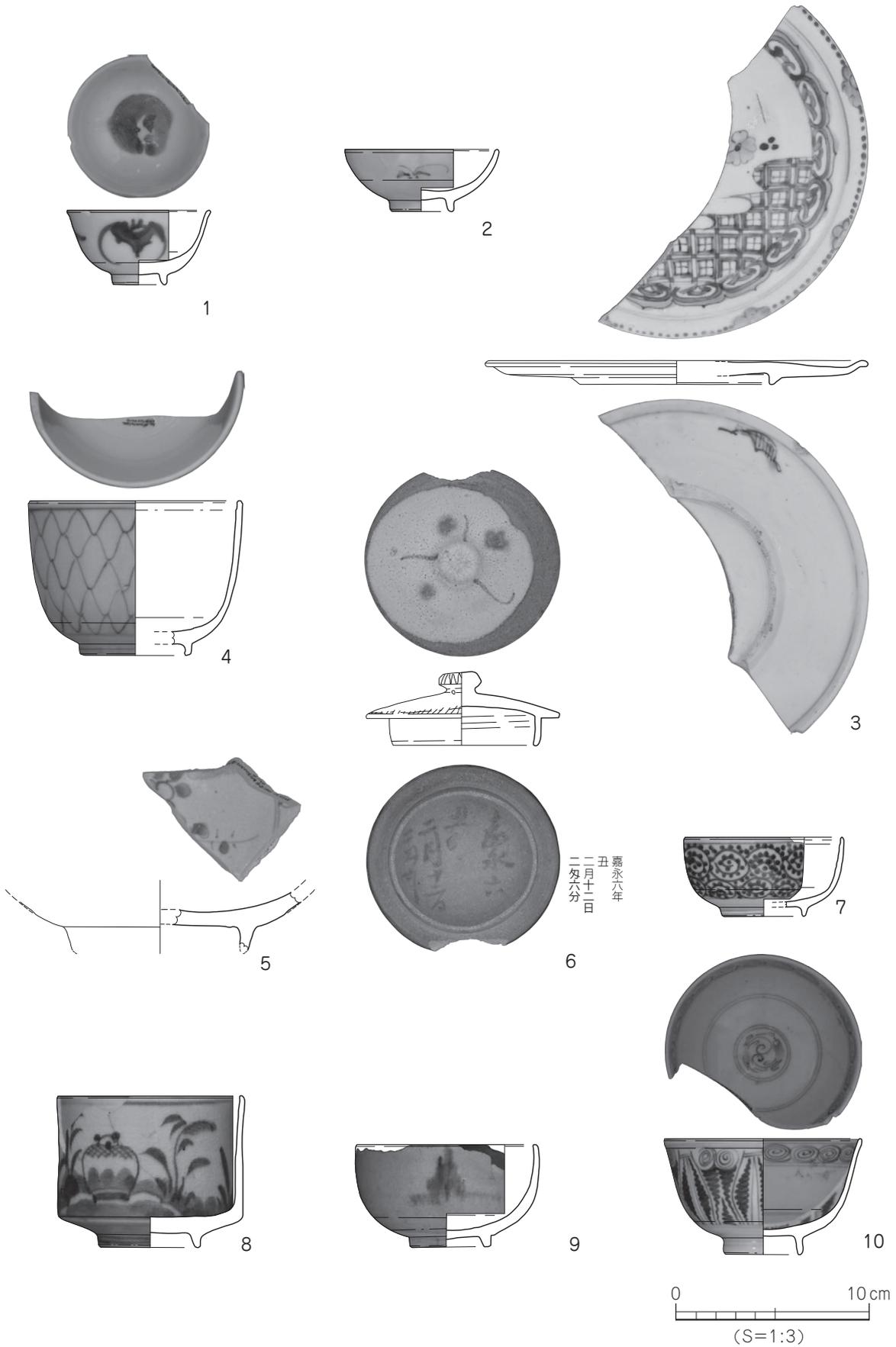


图6 出土遺物実測図 (1)

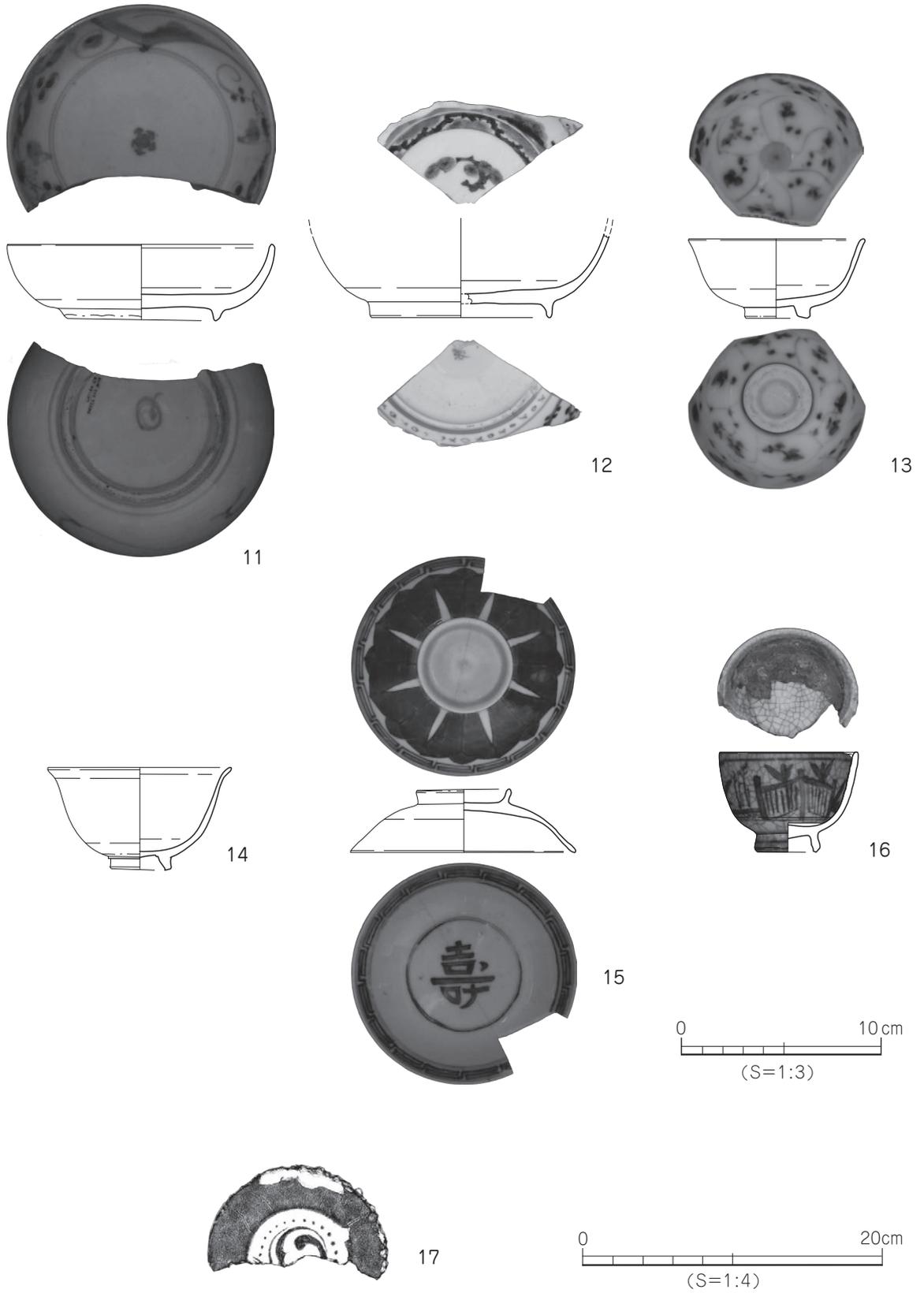


図7 出土遺物実測図(2)

史跡松山城跡

表1 三之丸跡3次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	T1 南西溝明褐色土(上層)	磁器	小杯(端反)	7.35	3.85	2.7	透明	染付	瀬戸、蝙蝠文、雨龍文(見込)、口鏝
2	T1 南西溝明褐色土(上層)	磁器	小杯	7.85	3.25	3.1	透明	染付	肥前?、蝶文
3	T1 南西溝明褐色土(上層)	磁器	皿	(19.2)	1.25	(10.0)	透明	染付	肥前(初期伊万里)、四方襷文
4	T1 SD2 中央断割)	磁器	碗	10.9	8.05	5.15	透明	染付	肥前、網目文、釉剥(口縁、見込)
5	T1 SD2 東壁南側裏込め断割・道路内2層	磁器	皿	—	[2.9]	—	透明	染付	西岡?、草花文
6	T1 SD4	陶器	蓋(土瓶)	10.0	3.8	2.2		化粧土	関西?、「嘉永六 丑 二月十二日 二匁六分」墨書(内面)
7	T1 SX1 上層	磁器	小杯	8.1	4.1	4.1	透明	染付	肥前、蜻唐草文、釉剥(口縁)
8	T1 SX4	磁器	碗(筒型)	9.5	7.85	5.6	透明	染付	産地不明、壺文?、釉剥(口縁)
9	T2 SD1	陶器	碗	9.3	5.35	3.95	透明	染付	瀬戸美濃(御室碗)、山水文
10	T2 SD1	磁器	碗(端反)	10.2	6.0	3.9	透明	染付	肥前、渦文
11	T2 SD2 上層	磁器	皿	13.2	3.85	7.4	透明	染付	肥前(波佐見)、葡萄文?、五弁花(コンニャク印判、見込)
12	T2 SD2 上層	磁器	皿	—	[4.2]	(8.9)	透明	染付	肥前、松文
13	T2 SP1 最下層	磁器	碗(端反)	(8.8)	4.0	3.1	透明	染付	瀬戸、靈芝文
14	T2 SX9	陶器	碗(端反)	9.15	5.15	3.0	灰(貫入)		京信楽
15	T2 SX11 最下面	磁器	蓋	11.2	3.2	4.15	透明	染付	肥前、青磁釉(つまみ内)、寿字文(見込)
16	T3 SD3 遺構	陶器	碗	(6.9)	5.0	2.9	透明	染付化粧土	関西?、陶胎染付?、橋文、有機物?が付着(内面)

表2 三之丸跡3次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
17	SX02	(11.5)	(6.1)	2.8	2.0	右卷三巴	(26)	0.4	灰黄	良好		小型

3. 三之丸跡 4 次調査

さんのまるあと

所在地 松山市堀之内
 期 間 平成 16 年 10 月 1 日～同 17 年 3 月 31 日
 平成 17 年 4 月 25 日～同年 10 月 25 日
 面 積 約 540m²
 担 当 岸見泰宏・山中菊乃

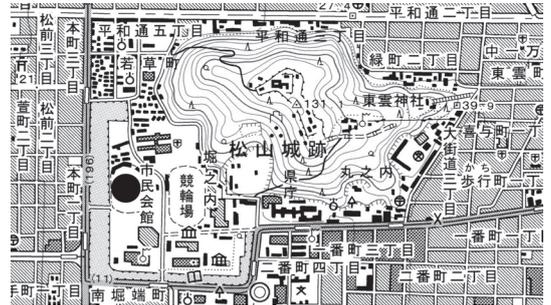


図 1 調査地位置図

経 過 三之丸跡 4 次調査は、これまでの調査と同様に、城山公園（堀之内地区）整備事業（第 1 期）に伴い、江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容や遺存状況、範囲等を把握するために行った事前の確認調査である。調査は、解体が終了した市営野球場跡地を対象として、3 箇所（T1～3）のトレンチを設定し、整備事業で園路として整備することを目指している江戸期の道路の確認を主目的として実施した（図 2、写真 1）。

遺構・遺物 T1（図 3、写真 2）：3 次調査で確認された南北石組溝及び杉馬場の延長部にトレンチを設定した。調査の結果、表土である近代以降の造成土の直下、現地表下約 60cm で、東西道路、南北石組溝 1 条、東西石組溝 1 条等が確認された。東西道路は、南側に石組側溝（SD1）を伴い、検出長 19.8m を測る。後述の T3 の東西道路と一連のものと考えられる。一部で細砂を叩き締めた道路面が確認された。SD1 は、石組が 1～2 段遺存しており、高さは最大 50cm を測る。石組南面は、積石はほとんど遺存していなかったが、裏込に使われたと思われる栗石が確認された。溝内からは完形の棧瓦が多数出土しており、屋敷地となる南側には土塀が設けられていたものと考えられる。南北石組溝（SD2）は、幅約 60cm、検出長 3.3m を測る。石組東面は最大でも 15cm 角程度の小振りの積石が用いられており、根石のみ遺存していた。一方、西面は、幅 30cm 程度、高さ 15cm 程度の積石が用いられており、積石は石面をやや寝かせて積まれていた。東西石組溝（SD3）は、SD2 の西側で確認されたもので、石組北面だけが遺存し、検出長は 8m を測る。溝内には多量の瓦が堆積しており、これを取り除くと石組が確認された。30～40cm 角程度の積石が用いられ、1 段のみ遺存していた。なお、この SD2 より西側は、3 次調査で確認された杉馬場東側の幅の狭い南北道路と一連のものであると考えられる。また、東西道路内には、少なくとも 12 基の土坑（SK）が確認された。全て廃棄土坑と考えられるが、中でも SK1 は、東西 7.5m、南北 2.5m、深さ 55cm を測り、埋土には大量の瓦と焦土・炭が出土した。ほとんどの瓦は、表面に大量の雲母が付着していることから、江戸後期以降のものであると考えられ、その総量は土よりも多いほどであった（図 7）。一方、SK2 は、東西 2.3m、南北 1.3m、深さ 57cm を測り、埋土上層は砂質土と細砂が同心円状に堆積し、遺物はほとんど出土しなかったが、下層は黒色土で、炭、食物遺体、陶磁器が多数出土した（図 5）。陶磁器には、焜炉、焙烙、碗などとともに、カワラケが多数含まれおり、「一」「五」等の墨書を持つものも少なくない。また、高台内に「与州松山」銘を持つ江戸後期の西岡焼の端反の鉢も出土している（図 5）。これらの廃棄土坑は、江戸期に道路として使われていた場所に多数掘られていることや、出土した瓦や陶磁器がほぼ全て江戸後期のもので一括性が高いことなどから、明治初期に江戸期の建物等が撤去された際に掘られたも

のである可能性が高い。

T2：野球場外野中央部に南北方向にトレンチを設定した。その結果、溝、土坑等が確認されたが、今回の調査目的である道路等の区画に関連する遺構は確認されなかった。

T3（図4、写真3）：3次調査で確認された南北道路とT1で確認された東西道路の延長部にトレンチを設定した。調査の結果、表土である近代以降の造成土の直下、現地表下約60cmで、東西道路（石組側溝2条）、南北道路（石組溝2条）、貯水池等が確認された。東西道路は、南北に石組側溝（SD1・2）を伴い、幅約8.0m（側溝を含む）、検出長15.5mを測る。方位はN-92°3'16"-Eを取り、先述のT1の東西道路と一連のものと考えられ、後述する南北道路と交差して十字路となる。交差点西部で道路面と考えられる粒子の細かい淡黄色砂層の広がり確認された。北側のSD1は、幅50～60cm、深さ約40cmを測る。石組北面は、遺存状況が悪く、積石は一部しか遺存していなかった。南面も北面と同様に遺存状況が悪く、積石はあまり遺存していなかったが、北面と比べて、積石は小振りで、やや乱雑に積まれている印象であった。南側のSD2は、南北道路との交差点の東側と西側に分かれる。東側は、幅約60cm、深さ約40cm、検出長1.6mを測る。石組は、南北面ともに遺存状況が悪く、積石はほとんど遺存していなかった。西側は、幅約60cm、深さ約70cm、検出長5.9mを測る。石組北面は、幅30～50cm、高さ20～40cmの大型の積石と、20cm角程度の小振りの積石の2種類が用いられており、高さは約40cmを測る。一方、南面は、積石は3石しか遺存していなかった。南北道路は、東西に石組側溝（SD3・4）を伴い、幅約8.7m（側溝を含む）、検出長15.5mを測る。方位はN-0°37'40"-Eを取り、3次調査T2の南北道路と一連のものと考えられ、先述の東西道路と交差して十字路となる。西側のSD3は、東西道路を横断せず、南北に分かれる。北側は、幅約60cm、深さ約40～50cm、検出長4.8mを測り、石組西面の1段のみ遺存していた。一方、南側は、幅約60cm、深さ約50cm、検出長3.2mを測り、石組の東西面を合わせても、積石は4石しか遺存していなかった。東側のSD4は、東西道路を横断しているが、SD1との交差部分の北側はSD1の石組が続いており、SD4は塞がれた状態となっていた。幅約50cm、深さは最大60cm、検出長14.8mを測る。石組東面は、幅30～55cm、高さ20～40cmの積石が1段積まれた箇所と、10～20cm角の小さな積石が2～3段積まれた箇所とが存在しており、西面も同様の特徴を有している。貯水池（SX1）は、交差点北西の屋敷地内で確認された。検出長は東西3.8m、南北2.8mを測る。護岸は40cm角程度の自然石で組まれており、道路と並行して直角に折れている。池内からは、護岸に使用されているものと同様の自然石が大量に出土しており、その分布は岸に近づくほど多くなる。埋土は、橙色粘質土層のみで占められており、短期間で埋められたことが分かる。また、その直下では、この遺構を貯水池とする根拠となった還元された暗灰色粘質土が確認された。なお、T1と同様に、道路内には、江戸後期の陶磁器と多量の炭を含む土坑が多数確認された（図5～7）。これらの土坑も、明治初期に江戸期の建物等が撤去された際に掘られた廃棄土坑である可能性が高い。

小 結 以上のように、今回の調査を通じ、目的としていた江戸期の道路やその交差点が3次調査に続いて確認され、三之丸の区画が明らかになるとともに、その道路内から明治初期と考えられる多数の廃棄土坑が確認されるなど、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも、重要な知見を数多く得ることができた。

三之丸地区の調査

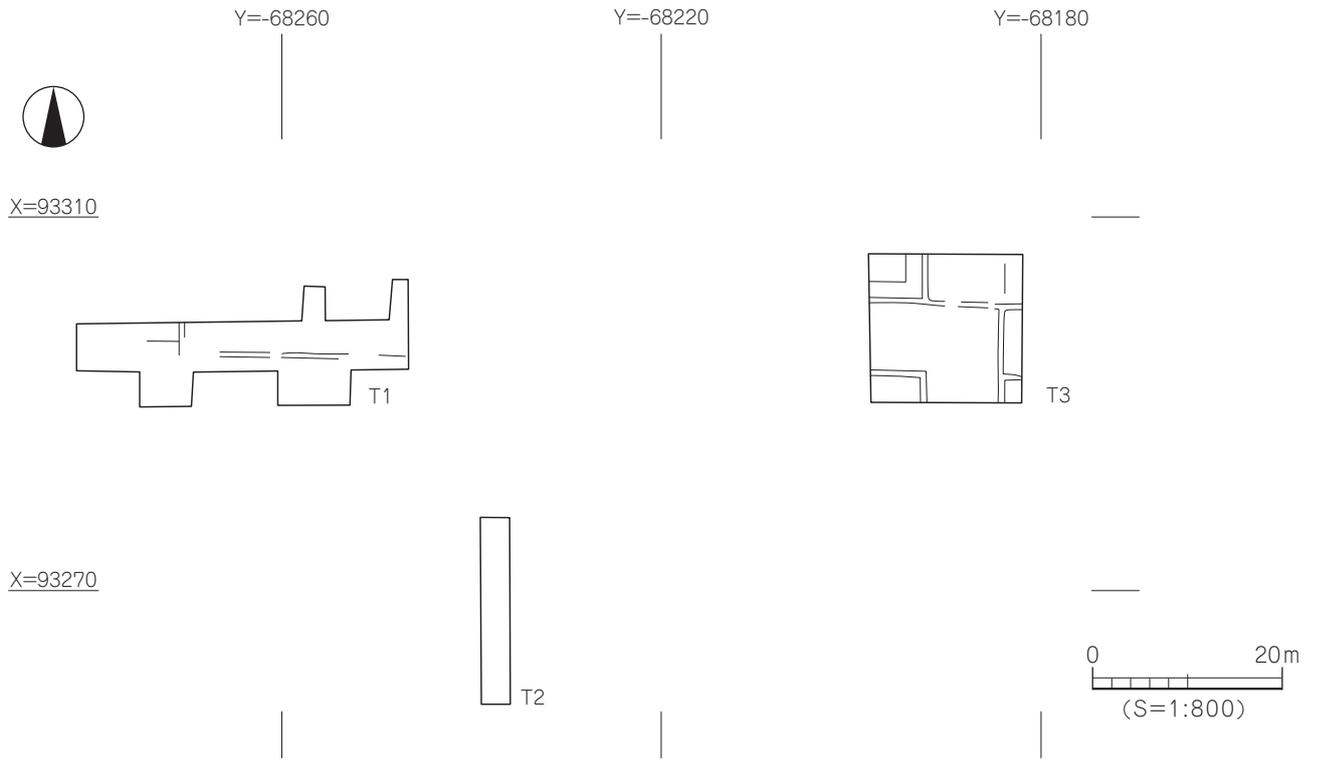


図2 トレンチ位置図

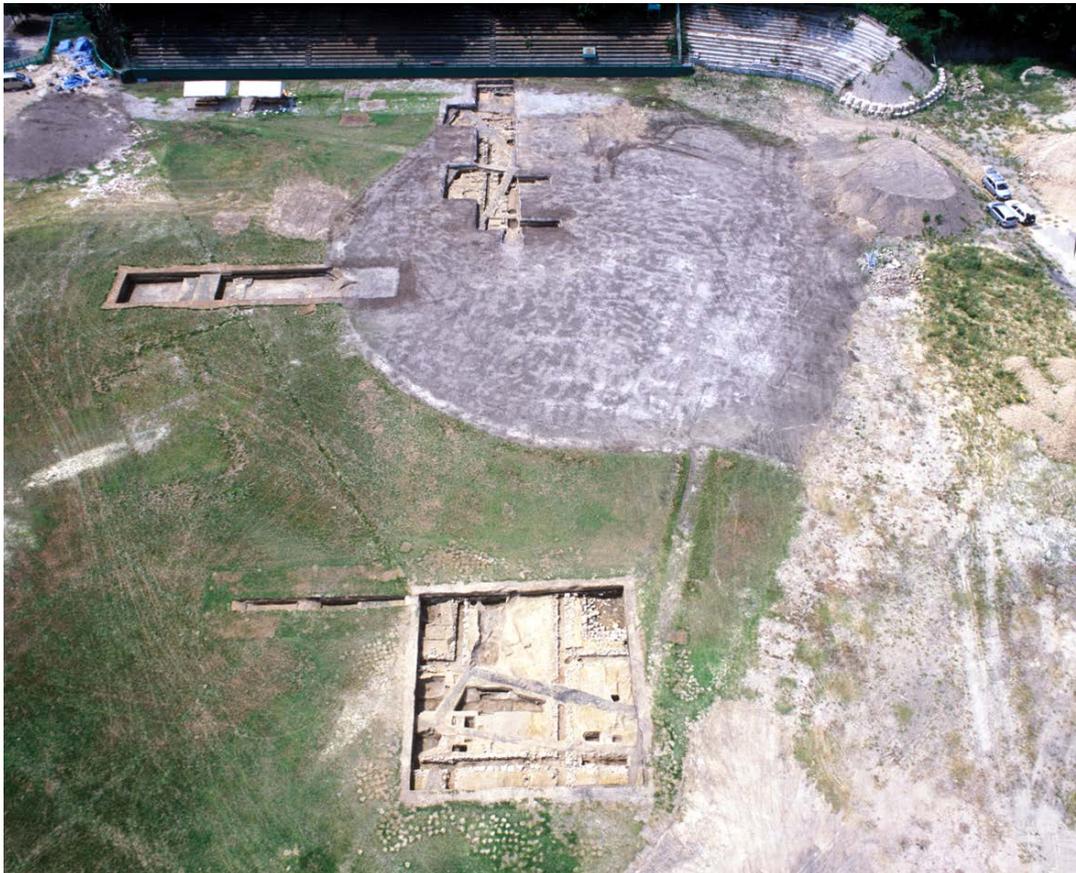


写真1 調査地全景（東より）

史跡松山城跡

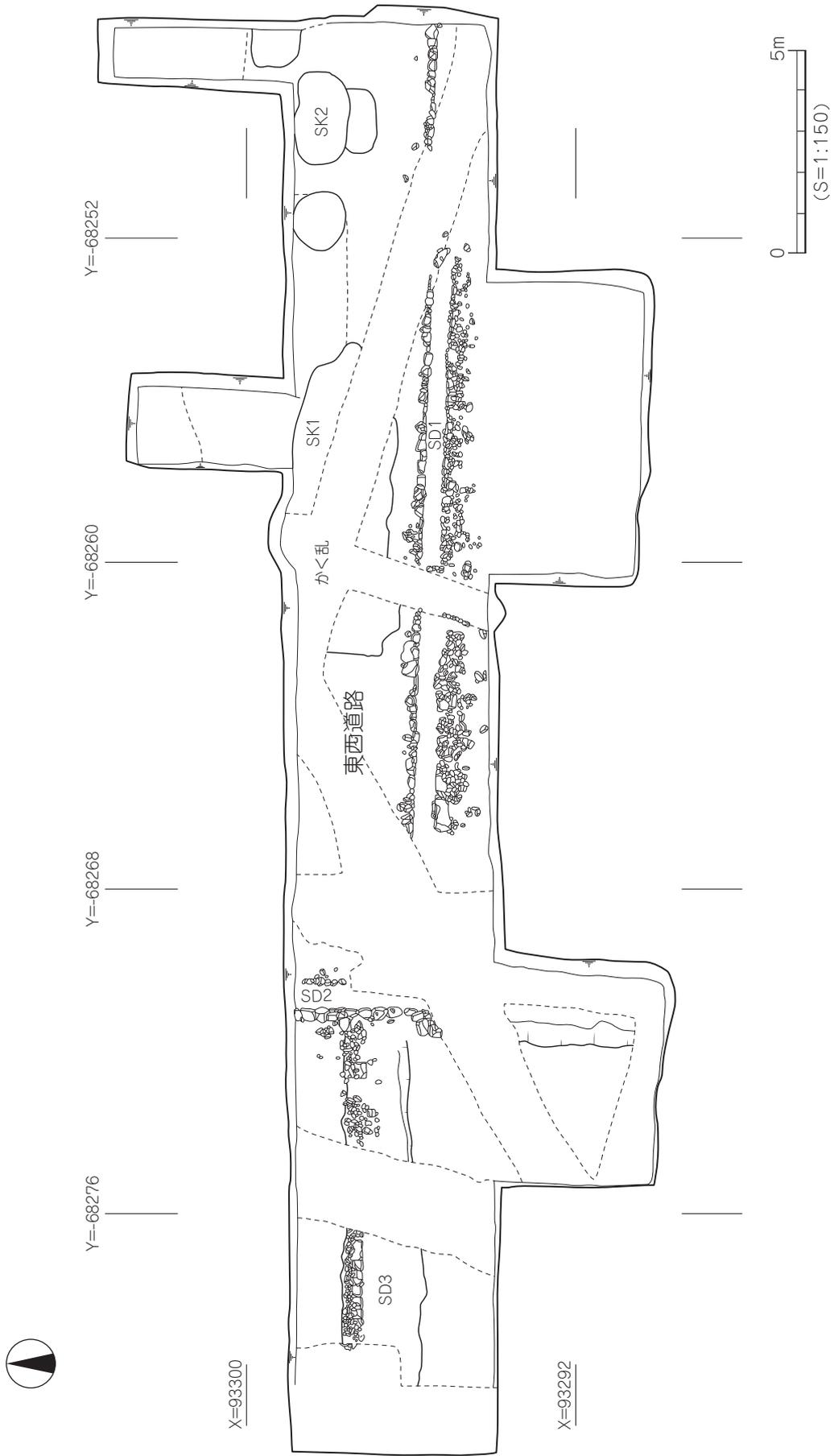


図3 T1 平面図

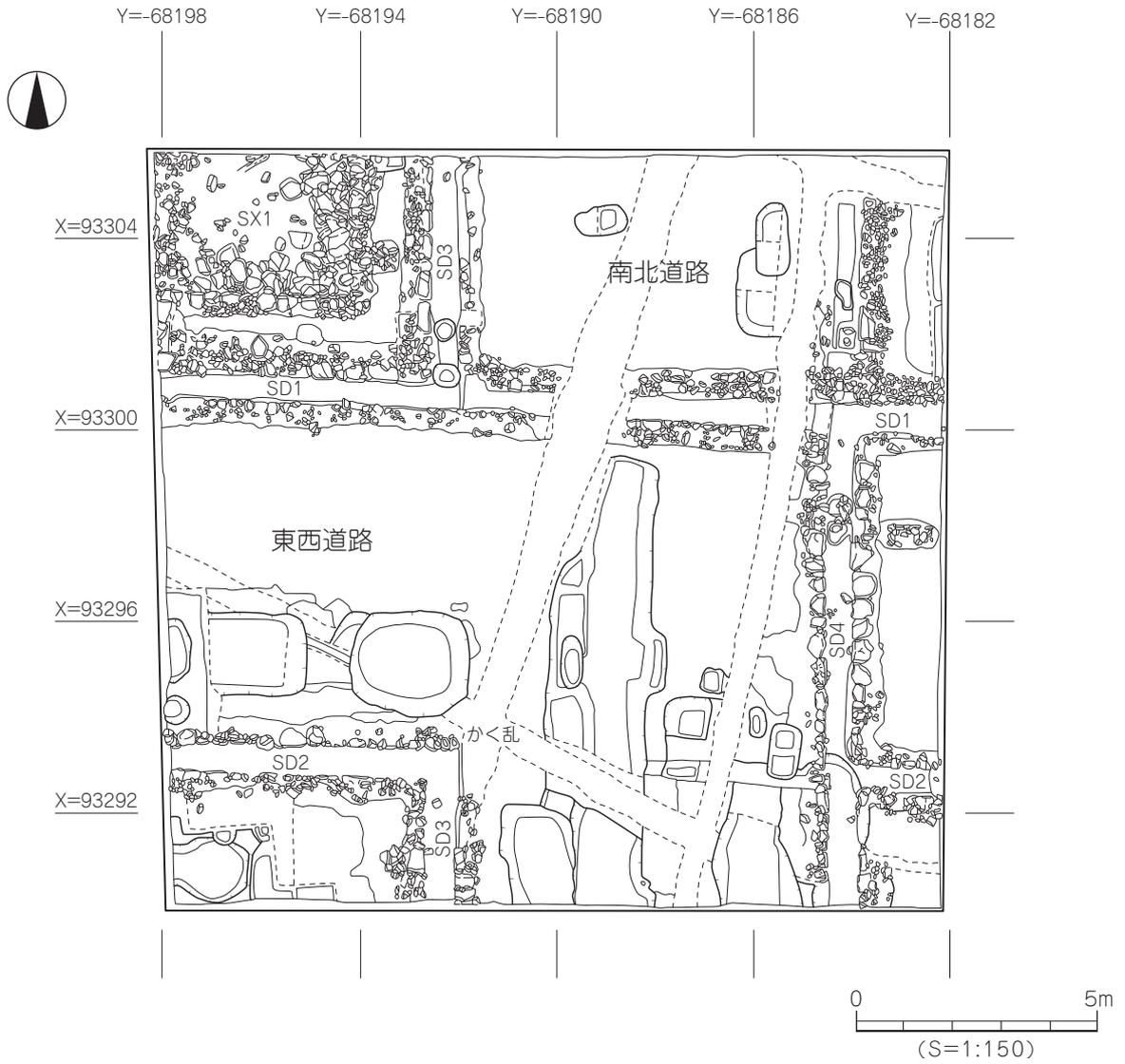


図4 T3平面図



写真2 T1 完掘状況 (上が北)



写真3 T3 完掘状況 (上が北)

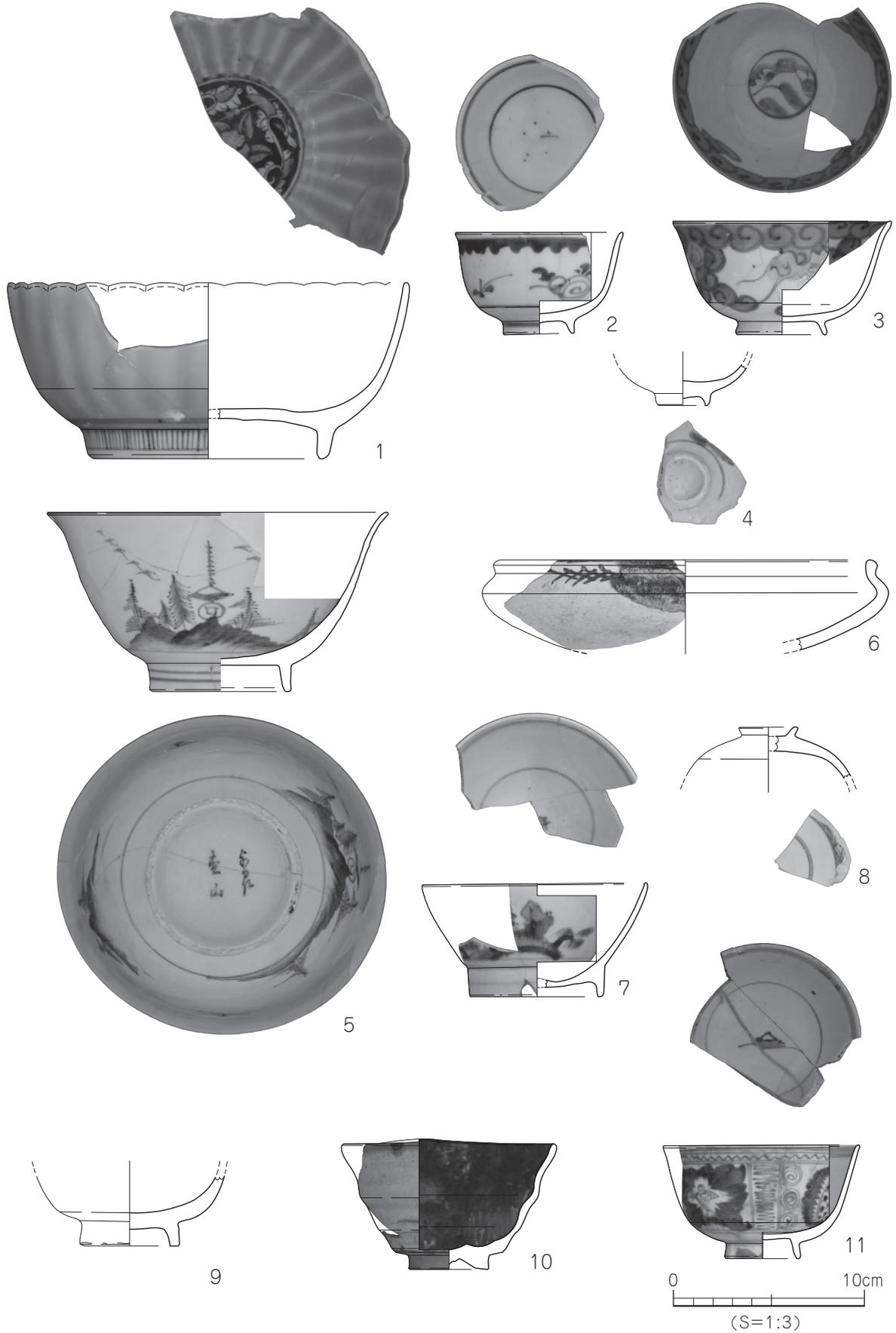


図5 出土遺物実測図(1)

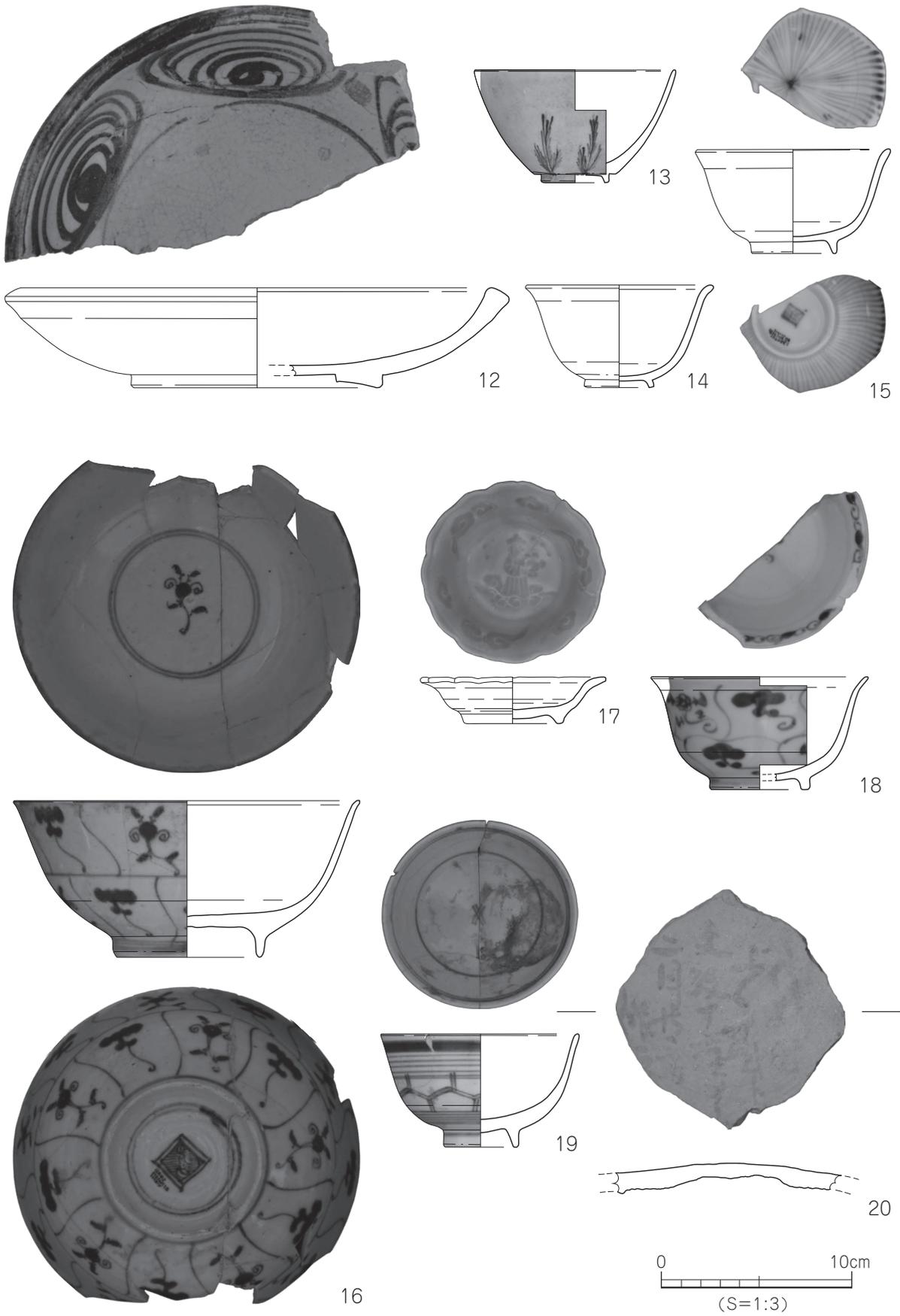


图6 出土遺物実測図 (2)

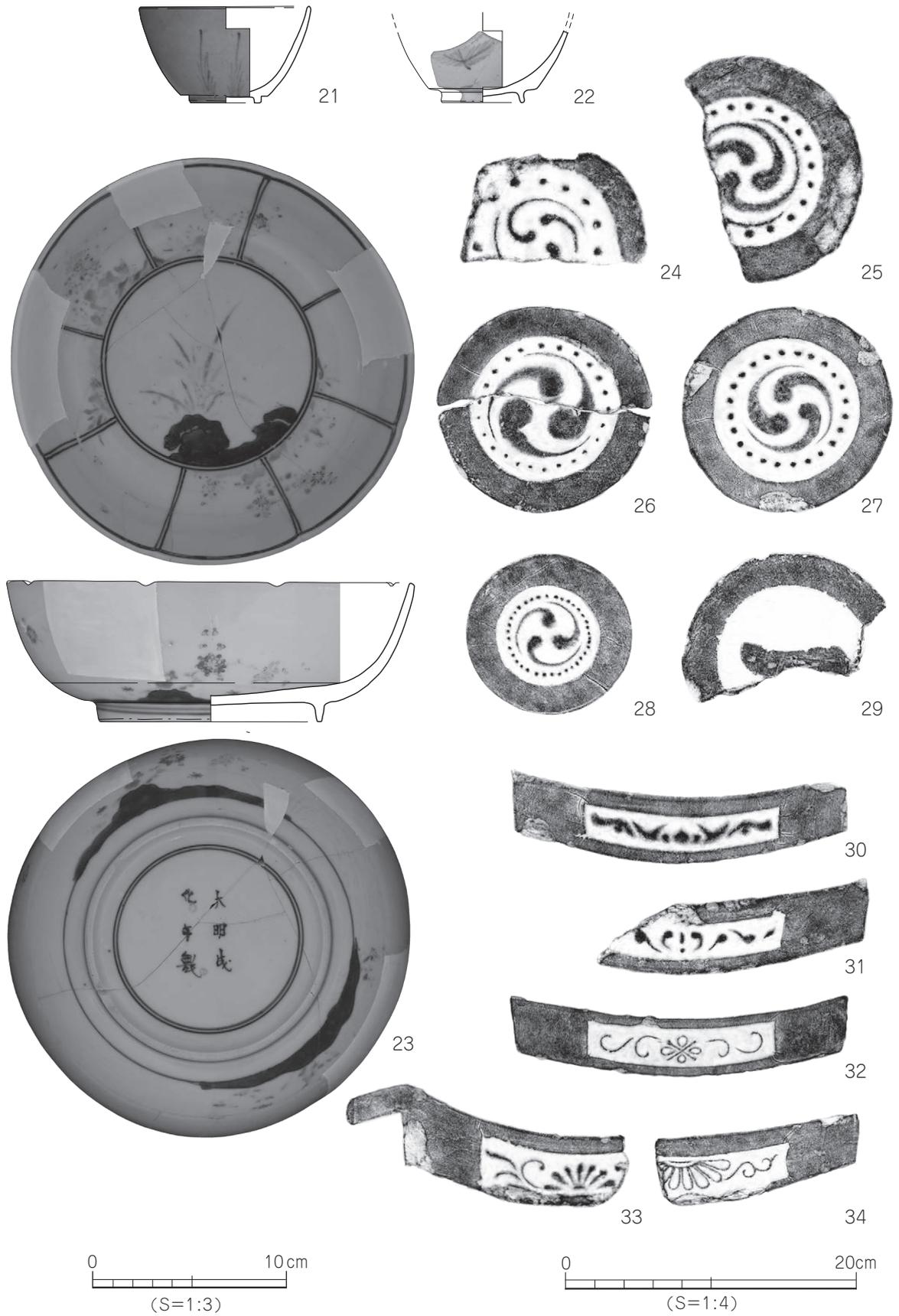


図7 出土遺物実測図 (3)

史跡松山城跡

表1 三之丸跡4次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	T1 1区 SD1 上層瓦層	磁器	鉢	(20.8)	(12.0)	9.3	青磁 透明	染付	肥前、輪花、蛇の目凹型高台、櫛高台、焼 窯
2	T1 4区 SD2 東端	磁器	碗 (端反)	(8.7)	5.4	3.65	透明	染付	砥部、花蝶文
3	T1 (4区?) SD2 東端	磁器	碗 (端反)	11.9	6.0	4.1	透明	染付	肥前、雲竜文
4	T1 4区 SD3 最下層	磁器	碗	—	[2.15]	(2.6)	透明	染付	肥前 (初期伊万里)、砂目痕 (高台)
5	T1 4区 SX10	磁器	鉢 (端反)	17.8	9.5	7.2	透明	染付	西岡、山水文、「与弼委山」銘
6	T1 4区 SX27 北西部	陶器	向付	(19.3)	[4.8]	—	銅緑		美濃 (青織部)、斜格子文
7	T1 4区 SX27	磁器	碗 (広東)	11.7	6.0	6.8	透明	染付?	西岡?、山水文
8	T3 1区 貯水池 貼床粘土	磁器	蓋	—	[2.65]	(3.0)	青磁 透明	染付	肥前、外面青磁
9	T3 3区 SD2 上層	陶器	碗 (呉器手)	—	[3.7]	5.6	白		肥前 (京焼風陶器)、被熱?
10	T3 2区 SD3?	陶器	碗	(10.9)	6.65	(4.1)	薬白	掛け分 け	萩、兜巾
11	T3 3区 SX3 下層 遺構2	磁器	碗 (端反)	(10.2)	6.0	3.8	透明	染付	肥前、花文
12	T3 3区 SX3 下層 遺構2	陶器	皿	(24.6)	5.3	(12.9)	白	鉄絵	瀬戸美濃 (馬の目皿)
13	T3 3区 SX3	陶器	碗 (小杉)	(10.0)	5.95	(3.45)	透明釉	錆絵	京信楽、若松文
14	T3 3区 SX21 下層炭	陶器	碗 (端反)	(9.6)	5.4	(3.2)	灰 (貫入)		京信楽
15	T3 3区 SX21 下層炭	磁器	碗 (端反)	(10.0)	5.55	(4.9)	透明	染付	瀬戸、放射状文
16	T3 2区 SX25 下層	磁器	鉢 (端反)	18.0	8.3	7.5	透明	青花?	清?、霊芝文、「□」銘
17	T3 2区 SX25 下層	磁器	皿	9.8	2.5	5.2	青磁		三田、人物文 (陰刻、見込)
18	T3 3区 SX25 黒	磁器	碗 (端反)	(11.3)	5.95	(5.1)	透明	染付	瀬戸、霊芝文
19	T3 1区 SX26 下層炭	磁器	碗 (端反)	10.3	6.0	3.3	透明	染付	砥部、亀甲文、重圈文
21	T3 1区 SX26 ベルト8層	陶器	碗 (小杉)	8.7	5.05	3.6	白	鉄絵	西岡?、若松文
22	T3 3区 西断割中層	磁器	碗 (小杉)	—	[3.8]	(4.2)	透明	染付	西岡、若松文
23	SX11	磁器	碗 (輪花)	21.0	7.2	11.4	透明	色絵	肥前、草花文、「大明成化年製」銘

表2 三之丸4次出土遺物観察表 土器・土製品

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調 (外面 (内面))	胎土 焼成	備考
				幅	厚み	長さ	外面	内面			
20	T3 1区 SX26 下層炭層	土製品	焜炉	[12.0]	0.6~1.1	[12.7]	「文政〇年」 墨書	回転による 沈線のよう な工具痕	にぶい橙 橙	長 (1~3)・ 金ウンモ◎	

三之丸地区の調査

表3 三之丸跡 4次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
24	T3 3区SD2 西中層炭	14.0	10.0	1.9	—	右卷三巴	(16)	0.9	灰白	良好		
25	T1 4区SD2 西中層	15.4	11.0	2.4	—	左卷三巴	(24)	0.7	黄灰・灰黄	良好		
26	T1 4区SX2 焼土内・SX9北	14.0	10.2	2.15	2.15	左卷三巴	24	0.7	灰	良好	○	
27	T1 3区SX3 東中ベルト 2層灰色砂	14.1	10.1	2.1	2.2	右卷三巴	24	0.65	オリーブ黒	良好	○	
28	T3 3区南西屋 敷地内SX7 上層褐色混	11.15	7.0	2.25	1.7	左卷三巴	35	0.4	灰	良好	○	小型
29	T3 1区 SD3北	15.0	10.4	2.2~ 2.55	—	一文字	—	—	灰白・灰黄	良好		

表4 三之丸跡 4次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
30	T3 3区SX3 下層 遺構2	22.9	4.2	13.3~ 13.5	2.4	4.75	1.9	灰	良好	○	宝珠	菊間?
31	T3 3区SX3 下層 遺構2	(24.6~ 25.2)	4.7	(13.8~ 14.4)	2.4	5.7	1.35	灰	良好	○	三葉	軒棧瓦?、江戸式?
32	T3 3区SD3 中層橙混	22.6~ 23.1	4.0	13.0	2.65	4.7~5.4	1.6	灰・灰白	良好		剣菱(線)	
33	T2 1区SX26 ベルト5層	—	4.5	(13.4)	2.6	5.2	1.6	灰	良好	○	菊(上)	軒棧瓦
34	T3 3区SD2 中・東間ベルト層	(24.3~ 24.6)	4.4	(14.7)	2.4	4.8	1.35	灰・灰黄	良好		菊(下、線)	

さんのまるあと
4. 三之丸跡 5 次調査

所在地 松山市堀之内

期 間 平成 18 年 1 月 4 日～同年 3 月 29 日

面 積 約 185m²

担 当 岸見泰宏・大庭美鈴・山中菊乃

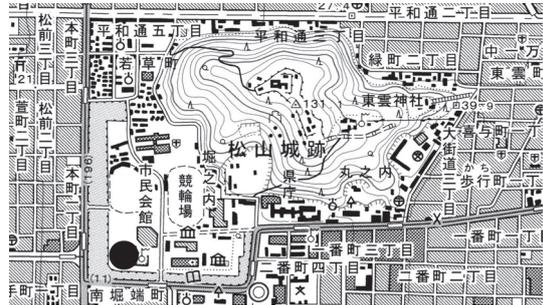


図 1 調査地位置図

経 過 三之丸跡 5 次調査は、これまでの調査と同様に、城山公園（堀之内地区）整備事業（第 1 期）に伴い、江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容や遺存状況、範囲等を把握するために行った事前の確認調査である。調査は、解体が終了した市営弓道場跡地を対象として、4 箇所（T1～4）のトレンチ（ただし、T1 は T1-1～3、T4 は T4-1～3 に分かれる）を設定し、特に絵図等から存在が予想される三之丸南西角の貯水池の確認を主目的として実施した（図 2～4）。

遺構・遺物 調査の結果、貯水池や土塁、整地層等が確認された。

貯水池（図 5～8、写真 1～7）：貯水池は、東岸が石垣となっており、北端の T1 から南へと続き、南端の T3 付近で東へ折れ、L 字状を呈する可能性が高い。「亀郭城秘図」（図 2）では長方形に描かれているが、後に発見された「松山城下図屏風」（図 3）では、同様の L 字状に描かれており、同屏風の正確性の高さが分かる。東岸の石垣の総延長は約 44m と考えられ、T3 を除く全ての検出箇所ですべて石垣の基底部に胴木（直径 10～15cm の丸木）が確認されている。積石が幅 50cm・高さ 20cm 程度で揃っていることや、積み方に顕著な差が見られないことから、同時期に構築された一体の構造物である可能性が高い。一方、T3 で確認された南北方向の石垣は、他で確認された石垣の胴木を結んだ軸線よりも約 70cm 東に位置し、積み方にも積石同士の間隙が比較的開いているなどの違いが見られることから、構築時期が異なっている、あるいは別遺構である可能性も考えられる。また、東岸の石垣の胴木を結んだ軸線は、真北よりやや東寄りの N-1° 28' 0" -E を向き、この延長上には、3 次調査 T2 で確認された杉馬場（馬場土手を含む）東端の SD1 や、4 次調査 T1 の SD2 が位置し、軸線も一致する。「亀郭城秘図」「松山城下図屏風」ともに、貯水池と杉馬場は同程度の幅で描かれていることも踏まえると、この軸線が貯水池と杉馬場の東端である可能性が高い。北岸は、石垣である東岸とは異なり、木組によって護岸されていた。具体的には、水敲部分に直径 6cm 程度の木杭を打ち込み、その外側（北側）に直径 8 cm 程度の丸木を積み上げて土留めし、更に外側には杭を千鳥に打ち込んで、土の流出を防いでいた。貯水池北側には杉馬場が存在するが、「亀郭城秘図」「松山城下図屏風」ともに、その境界は、杉馬場を含む道路部分の表現とは異なり、緑色で土塁状に表現されていることを踏まえると、木組で土留めされた北岸の北側には土塁等が設けられ、杉馬場と区切られていた可能性が高い。また、T3 では、貯水池内の水を南堀へ排水するための排水口 2 基（排水口 1・2）が確認された。東側の排水口 1 は、現在も南土塁を貫通して南堀へと通じており、排水機能を有している。そのため、外側はコンクリートによって覆われ、5 本の土管が接続されていた。一方、西側の排水口 2 は、南土塁を貫通しておらず、明治期以降の造成土と石によって塞がれた状態で確認された。排水口 2 の内部

は、江戸期のものと考えられる矢穴を伴う積石で構築されており、レーザー距離計で計測したところ約 27m 続いていた。同様に計測した排水口 1 から南堀までの距離約 28m と比べても約 1m 短いだけであり、排水口 2 についても、江戸期には南土塁を貫通して南堀まで通じていたものと考えられる。なお、先述の「松山城下図屏風」でも、貯水池の南側の南堀の北岸には、東西 2 箇所の排水口が表現されており（図 3）、貯水池の形状等と合わせ、同屏風の正確性の高さが分かる。なお、池内からは、江戸後期の陶磁器等が多数出土した（図 9・10）。

土塁（図 6・8、写真 3・6）：T2 では、現況の土塁上面下約 30cm から 1.5m 程度の厚さで版築土層が確認された。版築土層からは、江戸後期までの遺物が多数出土しており（図 9）、江戸後期以降に土塁が改修されていることが明らかとなった。また、この層の直下には、貯水池内堆積土層と考えられる灰色粘質土が水平に堆積しており、この改修によって土塁が東側に拡幅され、貯水池が埋められたことも明らかとなった。この土塁拡幅部西端の下層では、先述の版築土層とは異なる、東に下がりながら堆積する非常にもろい砂礫層が確認され、その更に下層では、固く締まった灰色シルト層が確認された。土質等から、このシルト層は江戸期の土塁（以下「旧土塁」という。）の法面であり、その上の砂礫層は旧土塁の崩落土であると考えられる。また、T4 では、土塁の拡幅に伴う堆積は確認されず、明治期以降のかく乱により垂直に削平された旧土塁の堆積のみが確認された。このように、T2・4-1 とも、旧土塁の裾部は明治期以降に削平されており、土留め等の有無については確認できなかった。ただし、貯水池の沈殿土層である灰色粘質土は土塁に近づくほど薄くなり、砂粒の混入が多くなることから、当初より土留め等はなかった可能性も考えられる。

整地層（図 6・8、写真 3・6）：T4 の貯水池の東岸の石垣の東側で確認された。粒子が細かくやや締まったにぶい黄色砂層が互層となっており、厚さ 20cm を測る。3 次調査 T2・4 次調査 T1 で確認された、馬場土手東側の幅の狭い南北道路と一連のものであると考えられる。また、T2 の貯水池の東岸の石垣の東側では、明確な整地層は確認できなかったが、江戸後期の陶磁器等を多数含む土坑（SK）が複数確認された（図 9）。3・4 次調査では、江戸期の道路内を中心に、同様の特徴を持つ廃棄土坑が多数確認されており、これらの土坑も、明治初期に江戸期の建物等が撤去された際に掘られた廃棄土坑である可能性が高い。

小 結 以上のように、今回の調査を通じ、目的としていた貯水池が確認されるなど、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも、重要な知見を数多く得ることができた。

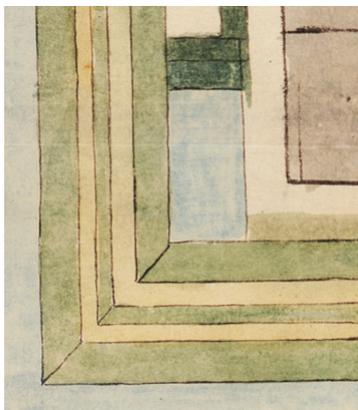


図 2 亀郭状秘図
（部分、伊予史談会蔵）



図 3 松山城下図屏風（右隻、部分、愛媛県歴史文化博物館蔵）

史跡松山城跡

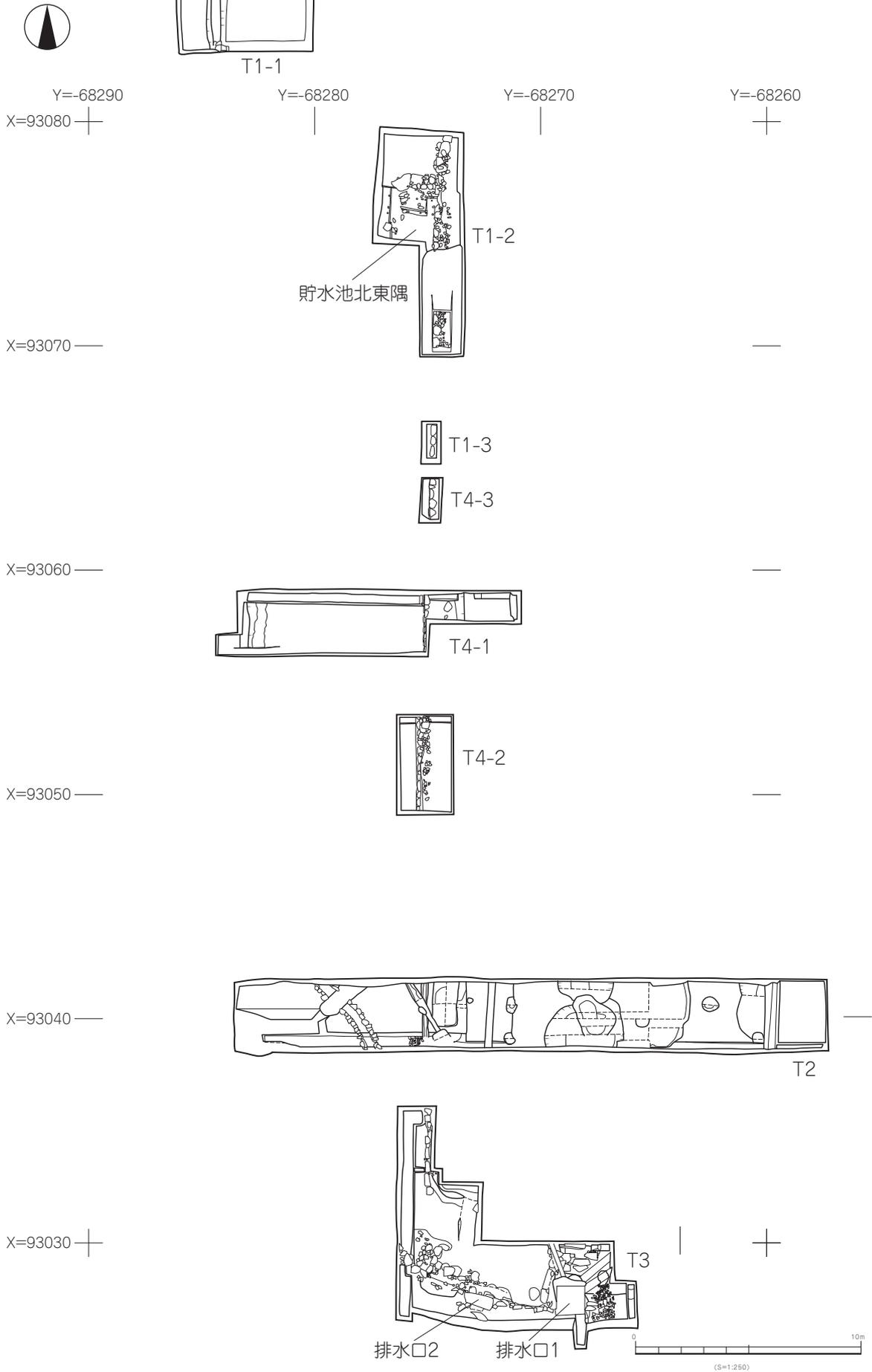


図4 トレンチ位置図

三之丸地区の調査

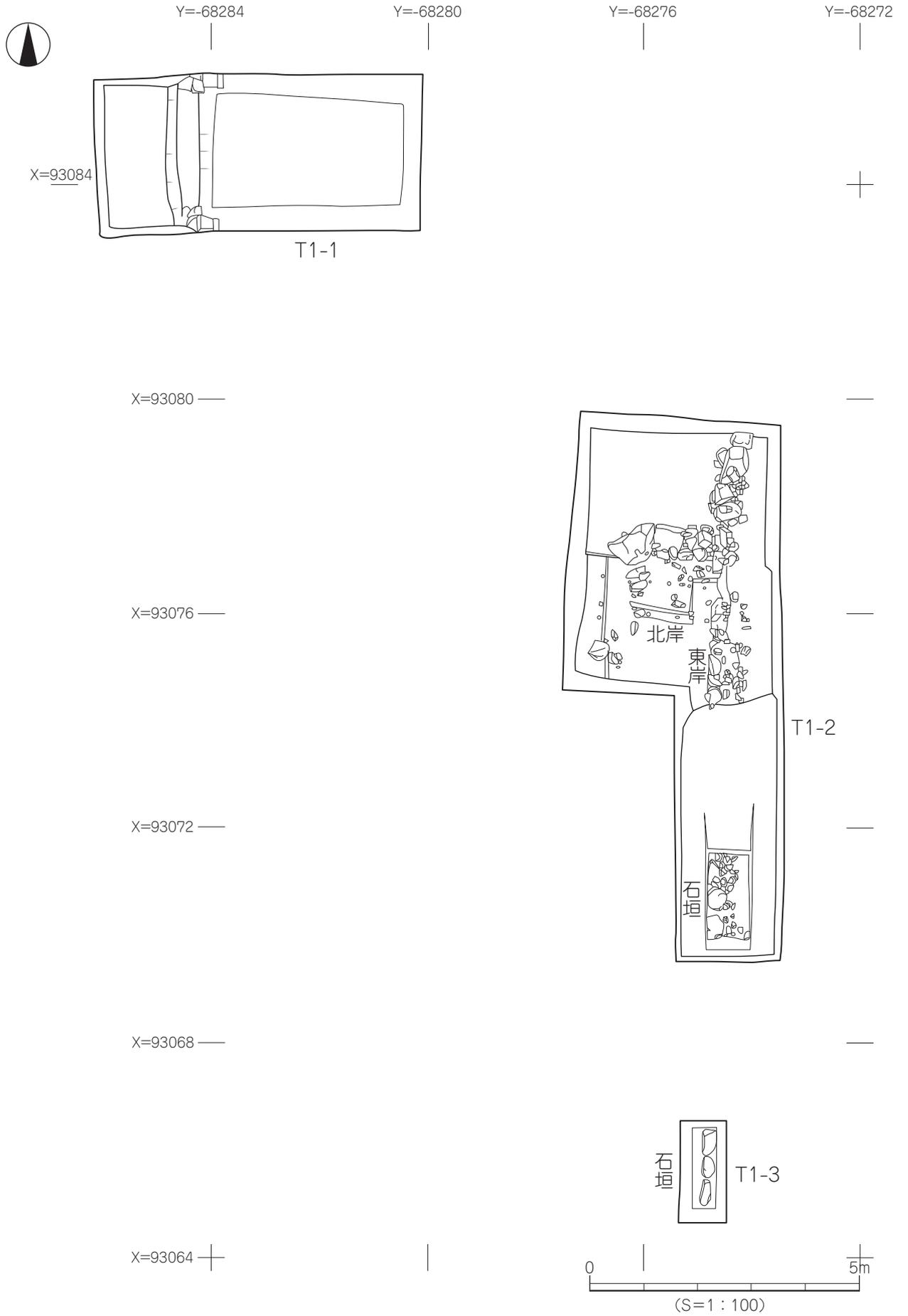


図5 T1 平面図

史跡松山城跡

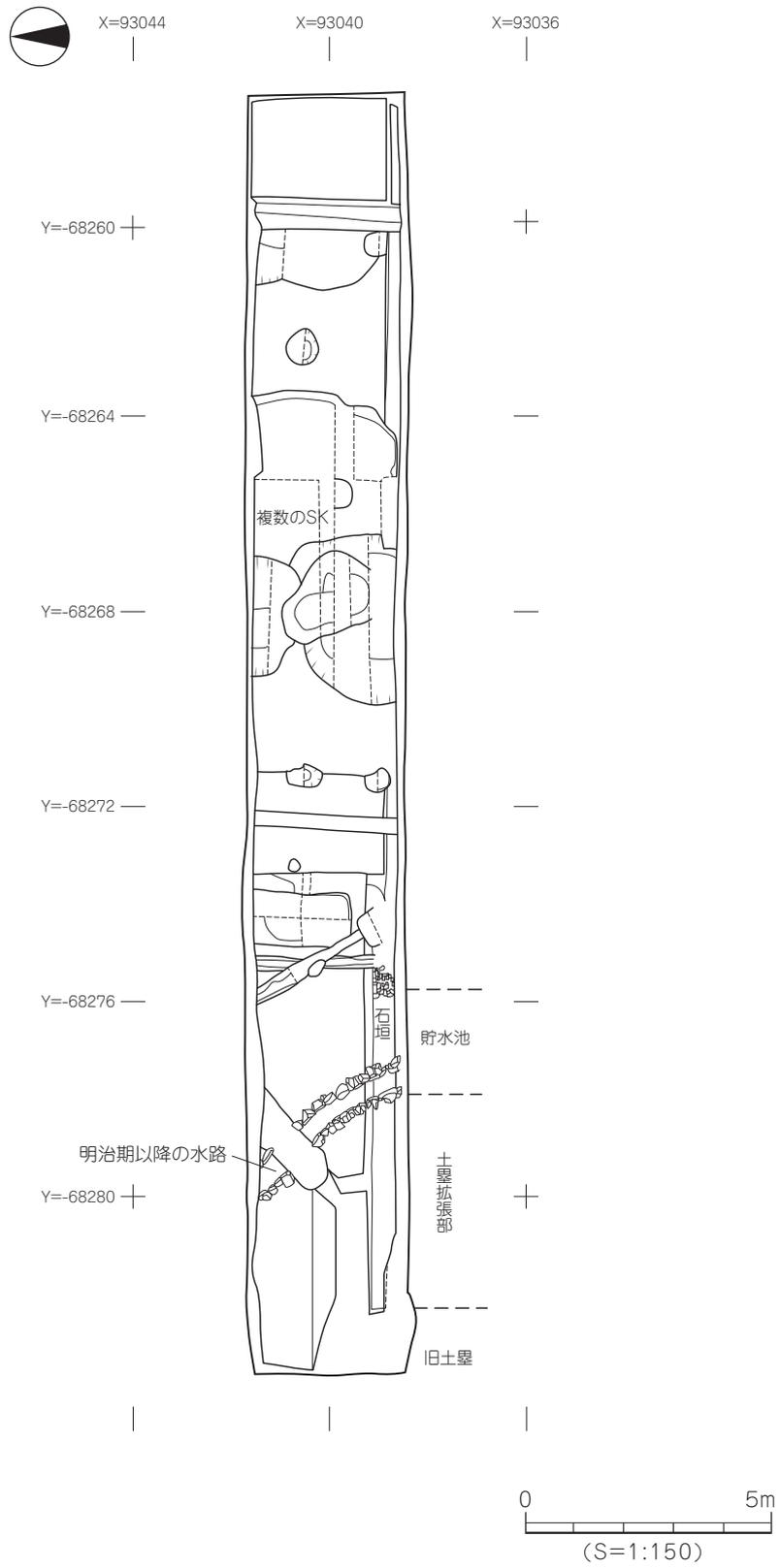


図6 T2平面図

三之丸地区の調査

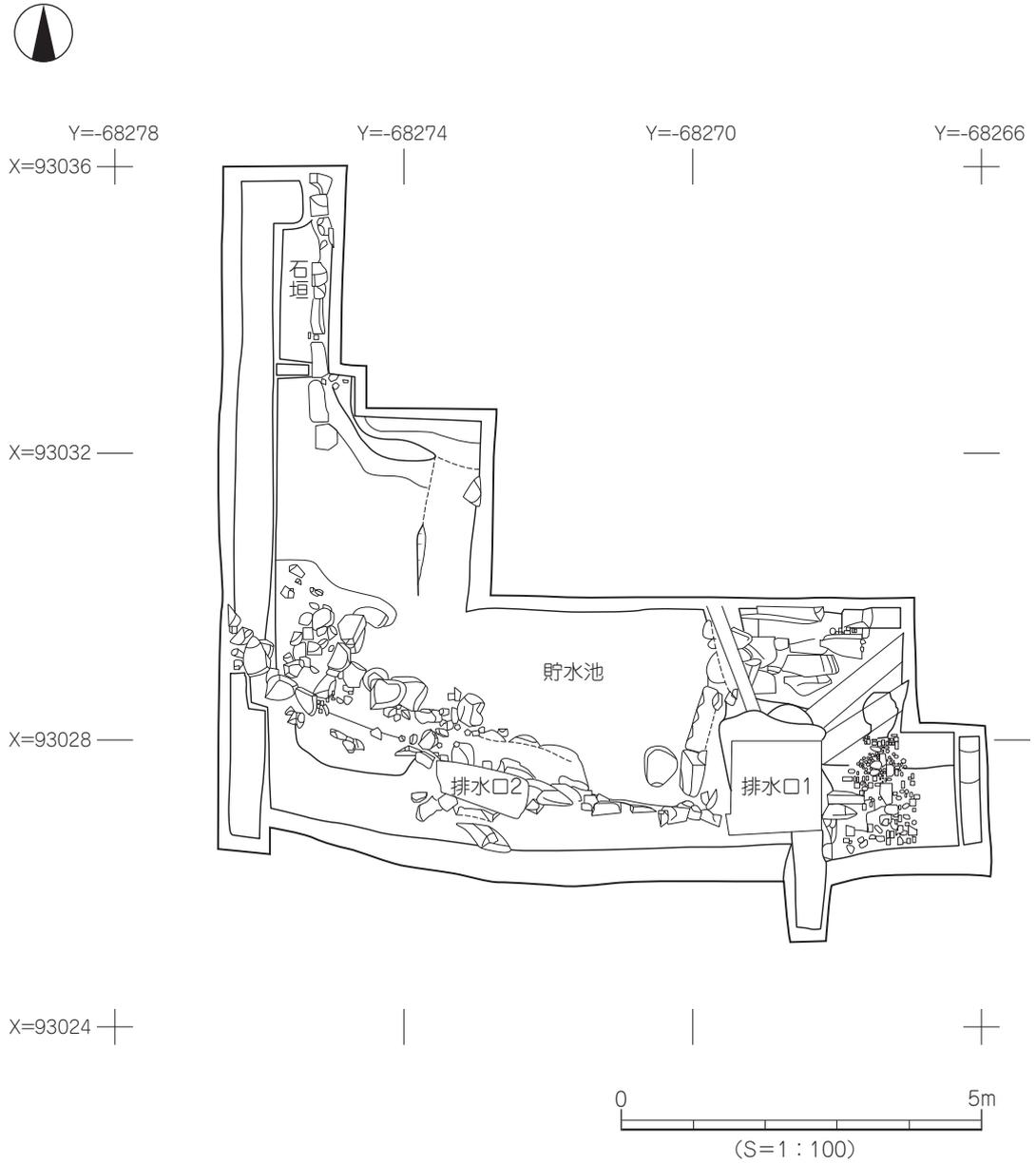


図7 T3平面図

史跡松山城跡

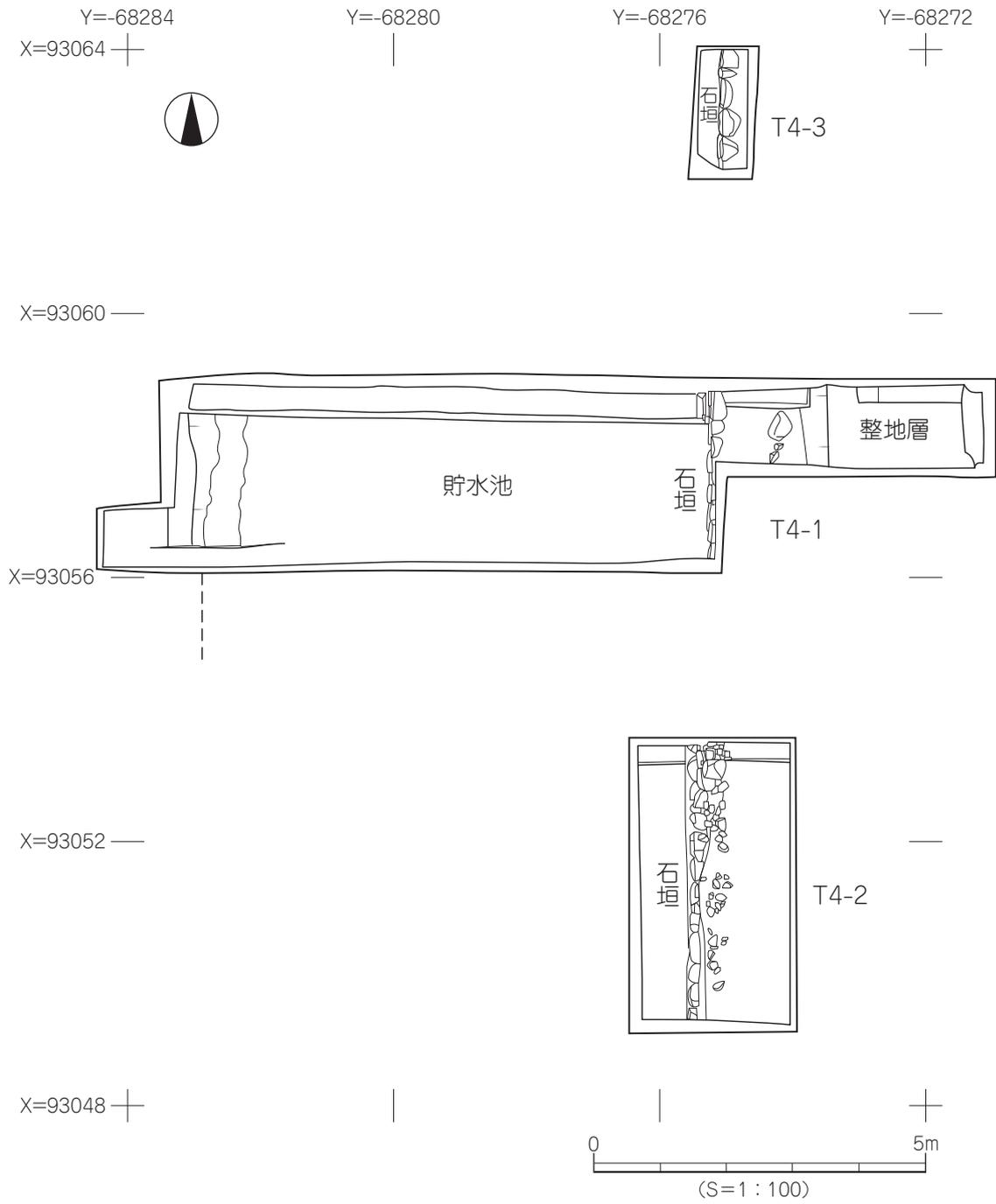


図8 T4平面図

三之丸地区の調査



写真1 調査地全景（北より）



写真2 T1-2 完掘状況（北より）

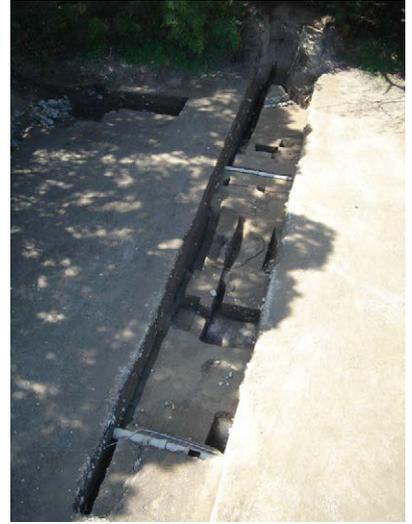


写真3 T2 完掘状況（北東より）



写真4 T3 完掘状況（北東より）



写真5 T3 排水溝2（北より）



写真6 T4 完掘状況（南より）



写真7 T4-2 貯水池東岸石組（西より）

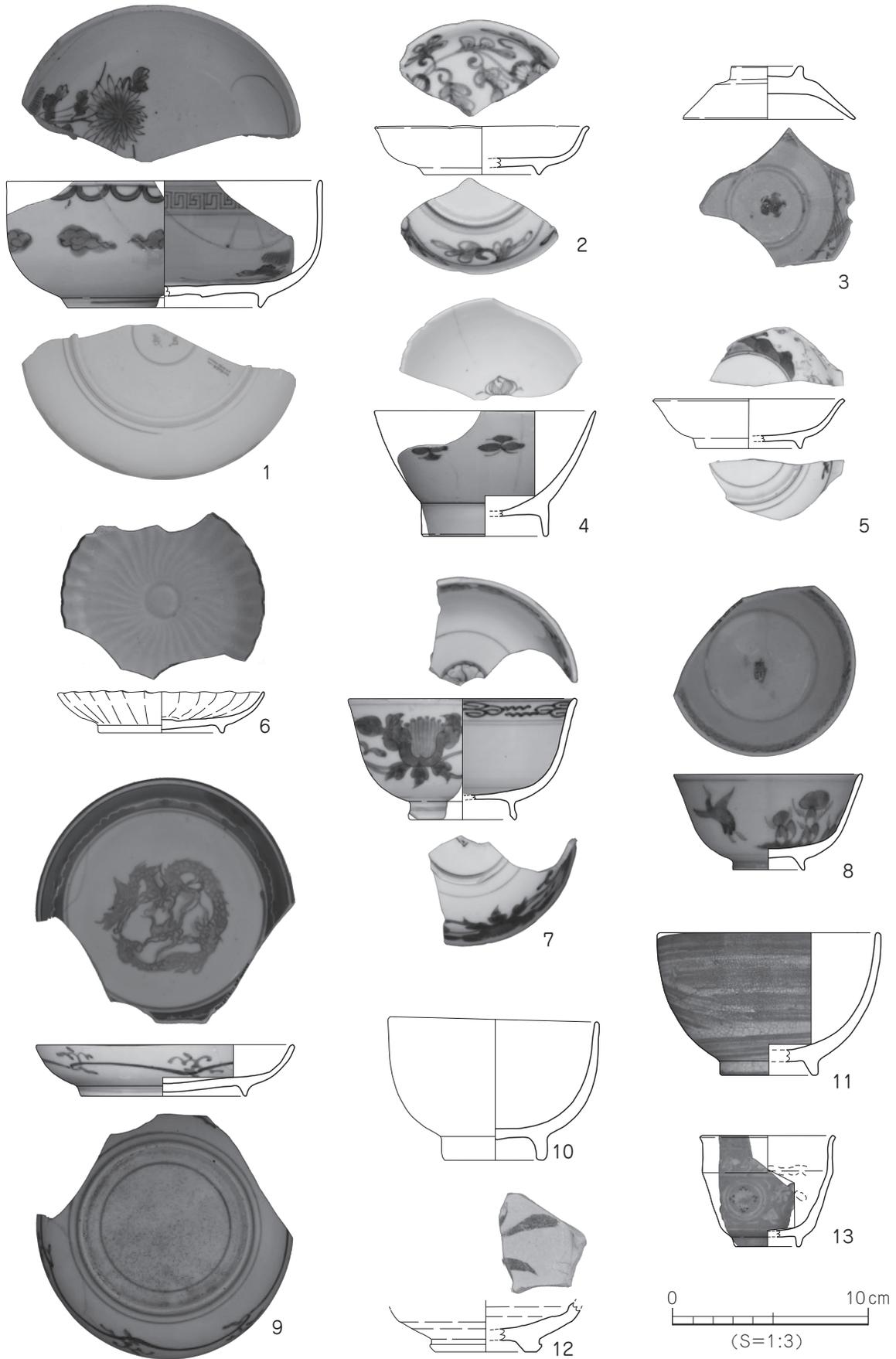


图9 出土遺物実測図 (1)

三之丸地区の調査

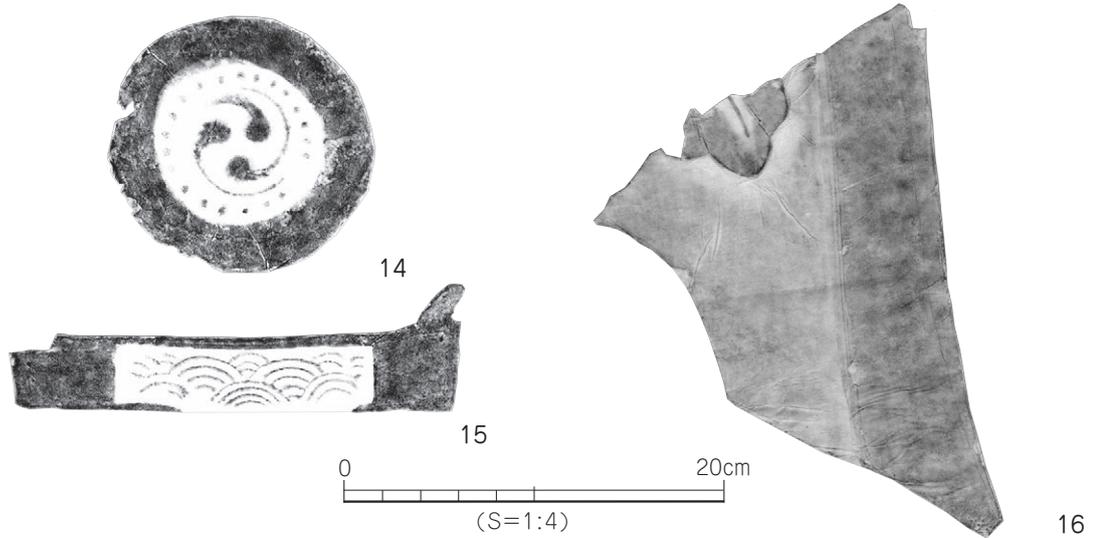


図 10 出土遺物実測図 (2)

表 1 三之丸跡 5 次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	T1-2 北拡張区 池埋土	磁器	鉢	(16.0)	6.0	(9.9)	透明	染付	肥前、菊文、蛇の目凹型高台、「□明□製」銘、 焼継
2	T1-2 北拡張区 池埋土	磁器	皿	(10.8)	2.95	(6.0)	透明	染付	瀬戸、花唐草文
3	T1-2 北拡張区 池埋土	磁器	蓋	(8.7)	2.7	3.6	青磁 透明	染付	肥前、外面青磁、陶胎染付、五弁花 (コンニャク 印判、見込)
4	T2 池埋土断割り	磁器	碗 (広東)	(11.2)	6.4	(6.3)	透明	染付	肥前、蝶文、桃文? (見込)
5	T2 池埋土断割り	磁器	皿	(9.6)	2.6	(5.8)	透明	色絵	肥前、草花文
6	T2 土壘断割り	磁器	皿 (菊)	(10.5)	2.2	6.3	透明		肥前、輪花 (型)、口鏝
7	T2 土壘断割り	磁器	碗 (端反)	(11.6)	6.2	(5.5)	透明	染付	肥前、牡丹唐草文?
8	T2 SX4	磁器	碗 (端反)	9.6	4.9	3.6	透明	染付	肥前、花鳥文、寿字文 (見込)
9	T2-3 SX11 上層	磁器	皿	(13.0)	2.65	8.4	透明	染付	肥前、龍文 (コンニャク印判、見込)、口鏝
10	T2-3 SX11 上層	陶器	碗 (呉器手)	10.5	7.4	5.0	透明		肥前 (京焼風陶器)
11	SX11	陶器	碗	(11.0)	7.3	(5.0)	透明	化粧土	肥前 (刷毛目唐津)
12	T3 池角部 SK	陶器	碗	—	[2.5]	(5.2)	透明	鉄絵	肥前 (絵唐津)、草文?、底部露胎、胎土目 痕? (見込)
13	T3 北拡張現代層	磁器	小杯	(6.7)	5.7	(3.2)	青磁	象嵌	高麗 (高麗青磁)

表 2 三之丸跡 5 次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
14	T4-2 現代土	13.3	8.2	2.4	1.5~ 2.0	左巻三巴	(23)	0.5~0.6	灰	良好		

表 3 三之丸跡 5 次出土遺物観察表 その他

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
15	T4-2 池埋土	23.5	4.1	13.4	2.9	右: 5.6 左: 4.5	1.26	灰	良好		青海波	軒堀瓦
16	T3 排水溝 2	[27.5]	[24.5]	—	—	5.0~6.0	6.0~6.4	灰	良好	○	三葉柏?	鬼瓦

さんのまるあと
5. 三之丸跡 6・12次調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 6次：平成18年8月1日～同19年3月16日
 12次：平成20年12月10日～同21年3月27日
 面 積 6次：約600㎡、12次：約145㎡
 担 当 6次：岸見泰宏、12次：高尾和長

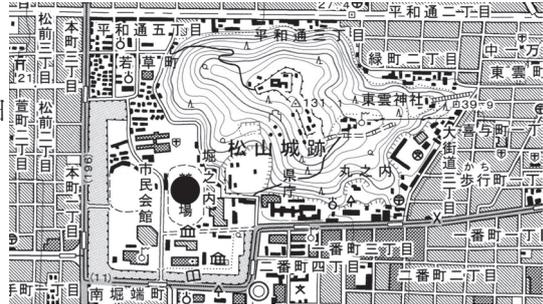


図1 調査位置図

経 過 三之丸跡 6・12次調査は、これまでの調査と同様に、城山公園（堀之内地区）整備事業（第1期）に伴い、江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容や遺存状況、範囲等を把握するために行った事前の確認調査である。調査は、解体が終了した競輪場跡地の北側半分を対象として、6次調査では8箇所（T1～8、ただしT1はT1-1～4、T2はT2-1～8、T3はT3-1～5に分かれる）、12次調査では11箇所（T1～11、ただしT1はT1-1・2に分かれる）のトレンチを設定し、特に絵図等から存在が予想される三之丸北東の小普請所等の確認を主目的として実施した（図5、写真16・17・23～25）。

遺構・遺物 調査の結果、小普請所、内堀、東西道路2条、南北道路2条等が確認された。

小普請所（6・12次、図5、写真1～6・18～22）：小普請所石垣西・南・東面（西・南：6次、東：12次）が確認された。西面は検出長18m、総延長約82m、南面は検出長20m、総延長約38m、東面は検出長3m（12次T1-1のみ）を測る。3面とも、上部は削平されて1～2段しか遺存しておらず、当時の高さを復元することは難しい。積石は花崗岩で、西・南面は、幅60～70cm、高さ40～50cm、控長60～70cm程度であったが、東面は、幅100cmを超えるものもあり、西・南面よりも大きい印象であった。東面は、三之丸から城内に続く大手登城道上の黒門の正面に当たることから、見栄えのするより大きい石材が選択的に用いられた可能性がある。その背面には栗石層が確認された。栗石層は、一般的に円礫（河床礫）のみで構成されるが、西・南面では、円礫と精良な灰白色の粘土が混ぜられている箇所も確認された。このような円礫と粘土を混ぜたものは、小普請所北東の黒門跡の西石垣根石部分の栗石層でも確認されており、根石の固定と浸水防止を意図したものと考えられる。また、石垣の裾部には石組溝が伴い、石垣の対面（＝道路側）の石組は幅50～60cm、高さ30～40cmの砂岩が並べられている。また、溝底には、一部に劣化が見られるものの、厚さ10cm程度、幅・奥行とも20～40cmの砂岩の敷石が全域で確認された。なお、小普請所内には12次調査で8箇所（T4～11）のトレンチを設定したが、T4・5で旧陸軍の兵舎跡が確認されるなど、明治期以降の改変が著しく、江戸期の遺構は確認されなかった。

内堀（6次、図5、写真7～10）：内堀の西岸（三之丸側）が確認された。検出長は6m（T6のみ）を測る。堀底部から岸への立ち上がり部分には土留めと考えられる直径10cm程度の木杭が0.5～1m間隔で千鳥に打ち込まれており、その西側に、明治期以降のものと考えられる粗い調整の間知積みの水敲石垣（基底部に幅約46cmの梯子胴木を伴う）が確認された。石垣の西側には地山が確認され、そこから西に向けて約30度（1割6分）の勾配で約2.5m上昇し、以降は平坦となる。以上のことから、この傾斜面は内堀西岸の堀土手の法面、この平坦面はその天端と考えられる。

東西道路 1 (6 次、図 5、写真 11～13)：南北に石組側溝を伴い、道路幅は約 8m (側溝を含む) を測る。方位は N-91° 14'54" -E を取り、4 次調査で確認された東西道路と一連のものと考えられ、東側で後述の南北道路 1 と接続して T 字路となる。北側側溝は南北道路 1 との交差点で道路を横切るが、南側側溝は南北道路の西側側溝と接続し、南方向へ折れる。石組は 1 段のみ遺存しており、積石は幅・高さとも 10～20 cm 程度の小振りなものであった。道路面は、明治期以降のかく乱が著しく確認されなかった。

東西道路 2 (6 次、図 5、写真 14)：小普請所の南側、御用米蔵の北側に設けられた道路で、方位は N-92° 7'56" -E を取り、西側で後述の南北道路 1 と接続して T 字路となる。道路北側は小普請所石垣南面と一体となった石組側溝を伴うが、南側は石組側溝は確認されなかった。ただし、T2-6・3-5 で小普請所石垣南面と並行する素掘りの溝が確認されており、この溝を南側の側溝とすると、道路幅は約 8m (側溝を含む) となる。また、T2-4・2-6 では、黄色細砂を叩き締めた道路面が確認された。

南北道路 1 (6 次、図 5、写真 13・15)：小普請所と御用米蔵の西側に設けられた道路で、東西に石組側溝を伴い、道路幅は約 8.4m (側溝を含む) を測る。方位は N-1° 4'15" -E を取り、南側の県民館跡地 (現在の愛媛県美術館) で確認された南北道路と一連のものと考えられ、北西側で東西道路 1 と、南東側で同 2 と接続して T 字路となる。道路東側は、T2-4 以北は小普請所にあたり、小普請所石垣西面と一体となった石組側溝を伴う。一方、T2-6 以南は御用米蔵にあたり、石組側溝が確認されたが、明治期以降のかく乱により、石組西面しか遺存していなかった。積石は、幅 50～60cm、高さ 40～50 cm 程度の花崗岩で、一部には矢穴や刻印が確認されるなど、石垣等からの転用材である可能性があり、時期は明らかではないものの、改修されている可能性がある。一方、西側は、T2-1・1-2・1-3 で石組側溝が確認されたものの、遺存状況が悪く、石組はほとんど確認されなかった。また、T2-6 では、黄色細砂を叩き締めた道路面が確認された。

南北道路 2 (6・12 次、図 5、写真 18～20)：小普請所東側、内堀の西側に設けられた道路で、北は黒門に続き、西側で東西道路 2 と接続して T 字路となる。道路西側は、12 次 T1-1 で小普請所石垣東面と一体となった石組側溝が確認されたが、東側は、側溝等は確認されなかった。ただし、6 次 T6 で確認された内堀西岸の堀土手天端の南北軸線を道路東端とすると、道路幅は約 8.5m (側溝を含む) となる。また、「亀郭城秘図」や「松山城下図屏風」では、小普請所石垣東面は、北側の黒門付近では部分的に内側 (西側) に食い込むように表現されており (図 2・4)、黒門に近い 12 次 T1-1 の小普請所石垣東面や石組側溝は、それに該当している可能性がある。その場合、小普請所石垣東面の標準的な南北軸線は、12 次 T1-1 で確認された石垣東面よりも少なくとも 1 m 程度東側となり、道路幅は少なくとも 1 m 程度狭くなると考えられる。

このように、三之丸の区割の軸線は、東西が南に 1～2° 程度、南北が東に 1° 程度傾いていることが明らかとなってきた。このことは、現況の南土塁の東西軸線が南に 2° 程度、西土塁の南北軸線が東に 1° 程度傾いていることとも整合的である。また、道路幅については、杉馬場東側の道路を除き、東西・南北の区別なく、両側の側溝を含めて 8 m (4 間 ※過去の調査成果を踏まえ 1 間を 6 尺 5 寸 [約 2 m] で計算) 程度であることが明らかとなってきた。なお、この道路幅は、「御城下大絵図」に記載された付近の道路の「道幅」とも概ね一致している (図 3 ※これまでの調査成果から、当該絵図の道幅には、原則的に道路側溝が含まれていると考えられる)。施設の規模については、「亀郭城秘図」には、今回確認された小普請所、御用米蔵、内堀などの城内の主要な施設の寸法についての記載があり (図 2・5)、例えば、内堀は「南北 80 間 巾 20 間」とされているが、今回確認された西岸の

千鳥杭から東岸の二之九石垣西面の基底部までの距離は約41mであり、「巾20間（約40m）」との記載と概ね一致する。同様に小普請所は「東39間2尺 西42間 北29間 南32間」とされているが、12次T1-1で確認された小普請所石垣東面の南北軸線と、6次T2-4で確認された小普請所石垣南西隅との距離は約62m（なお、先述のとおり、小普請所石垣東面の標準的な南北軸線を、少なくとも1m程度東側とした場合は約63m以上）となり、「南32間（約64m）」との記載と概ね一致する。このように「亀郭城秘図」に記載された施設の規模は、概ね正確であることが確かめられた。三之丸跡は、後世の開発によって大きくかく乱されており、江戸期の遺構が確認されない箇所も少なくないが、発掘調査成果と「亀郭城秘図」等を組み合わせることで、三之丸の区割を、ある程度正確に復元することは可能であろう。

小 結 以上のように、2回の調査を通じ、目的としていた小普請所や内堀等が確認されるとともに、これまでの調査成果等も踏まえ、三之丸の区割の南北軸は東に1°程度、東西軸は南に1～2°程度傾いていることや、道路幅は4間程度を基本としていること、「亀郭城秘図」をはじめとする絵図の正確性など、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも、極めて重要な知見を数多く得ることができた。

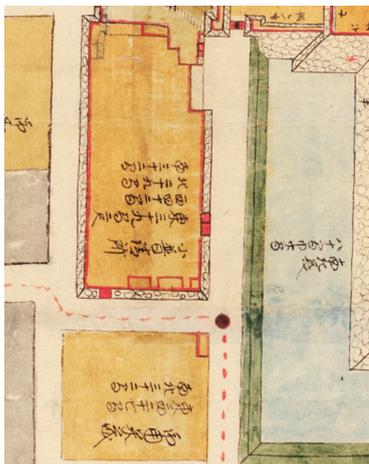


図2 亀郭城秘図（部分、伊予史談会蔵）

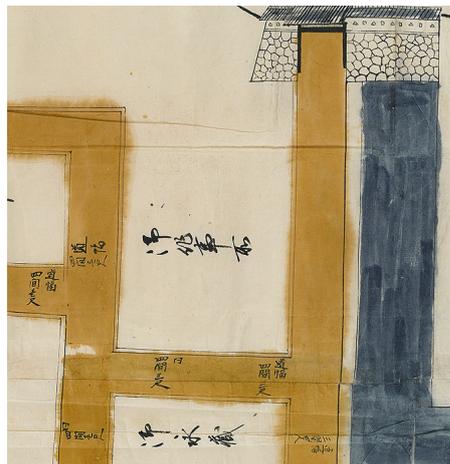


図3 御城下大絵図（三番、部分、坂の上の雲ミュージアム寄託）



図4 松山城下図屏風（左隻、部分、愛媛県歴史文化博物館蔵）

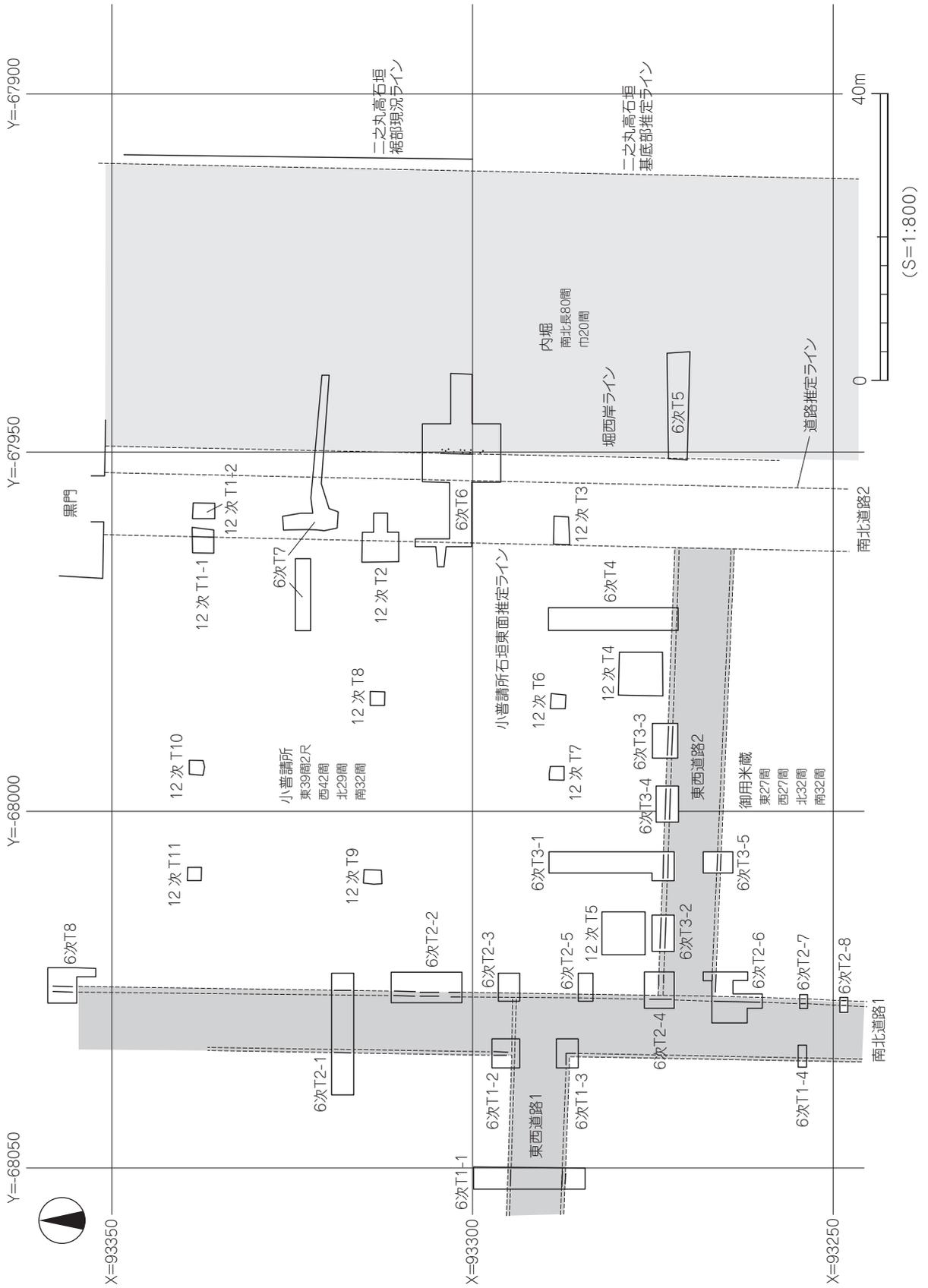


図5 トレンチ位置図



写真1 6次 T2-2 小普請所石垣西面検出状況
(北西より)



写真2 6次 T8 小普請所石垣西面検出状況
(南西より)



写真3 6次 T2-4 小普請所石垣南西隅検出状況
(南東より)



写真4 6次 T3-2・T2-4 小
普請所石垣南面から南西隅を
望む (東より)



写真5 6次 T3-1・3-4
小普請所石垣南面検出状
況 (東より)



写真6 6次 T3-1 小普請所石垣南面検出状況(南東より)



写真7 6次 T6 内堀西岸検出状況 (南東より)



写真8 6次 T6 内堀西岸水敲石垣及び千鳥杭検出状況
(東より)



写真9 6次 T6 内堀西岸梯子桐木検出状況
(北東より)



写真 10 6次 T6 内堀西岸梯子胴木詳細検出状況
(北より)



写真 11 6次 T1-1 東西道路 1 検出状況 (北西より)



写真 12 6次 T1-1 東西道路 1 南側溝検出状況
(北西より)



写真 13 6次 T1-3 東西道路 1・南北道路 1 交差点
南西隅検出状況 (南西より)



写真 14 6次 T3-5 東西道路 2 南側側溝推定遺構
検出状況 (東より)



写真 15 6次 T2-1 南北道路 1 西側側溝検出状況
(北東より)



写真 16 6次調査地遠景 (南西より)



写真 17 6次調査地全景 (東より)



写真 18 12次 T1 完掘状況 (西より)



写真 19 12次 T1-1 完掘状況 (北より)



写真 20 12次 T1-1 小普請所石垣東面及び石組溝敷石検出状況 (東より)



写真 21 12次 T4 完掘状況 (南西より)



写真 22 12次 T5 完掘状況 (南東より)



写真 23 12次調査地北東部 T1・2・黒門付近遠景 (南より)



写真 24 12次 調査地北部 T2・3・6・11 遠景 (南東より)



写真 25 12次調査地南部 T4・7 遠景 (北東より)

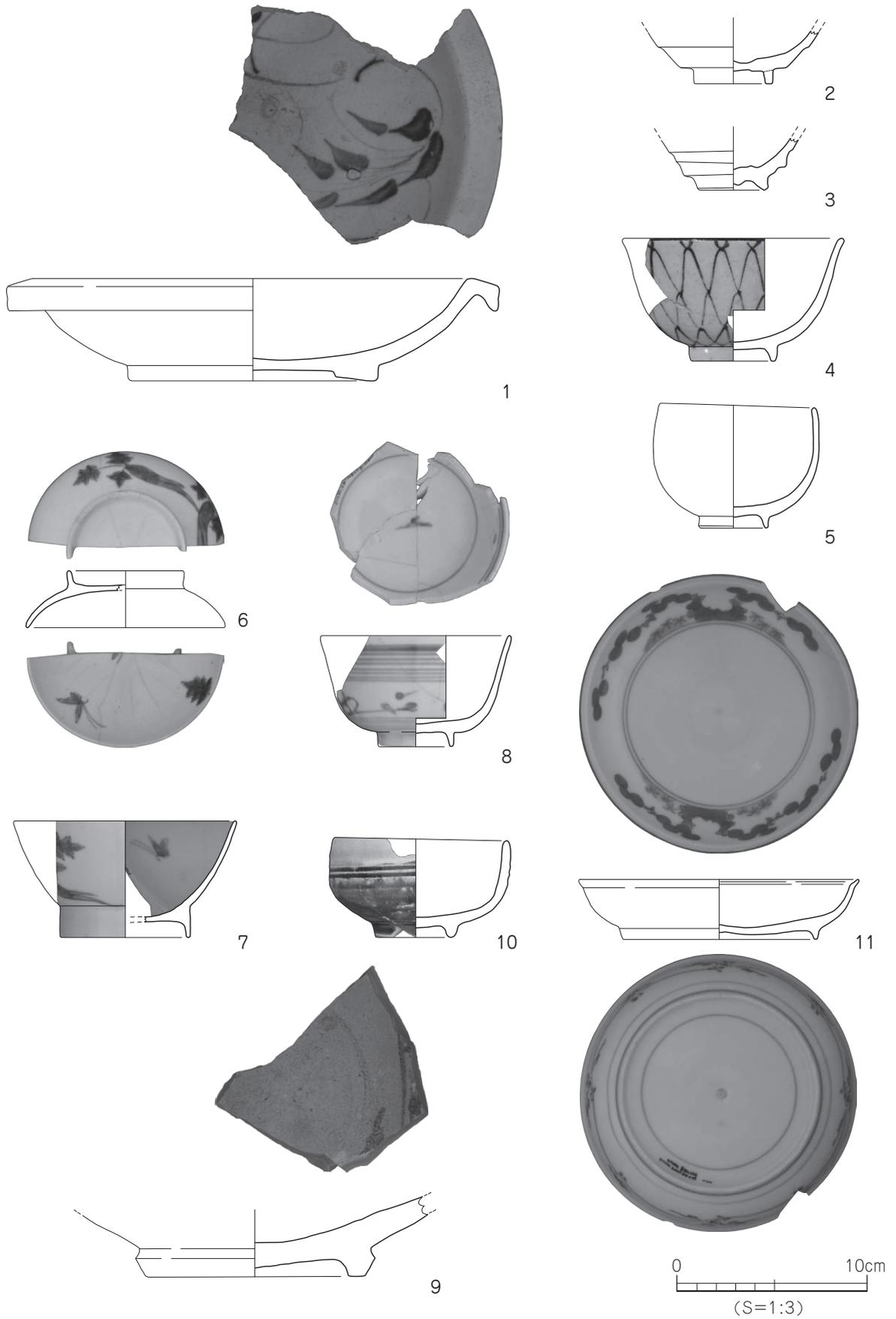


図6 出土遺物実測図(1)

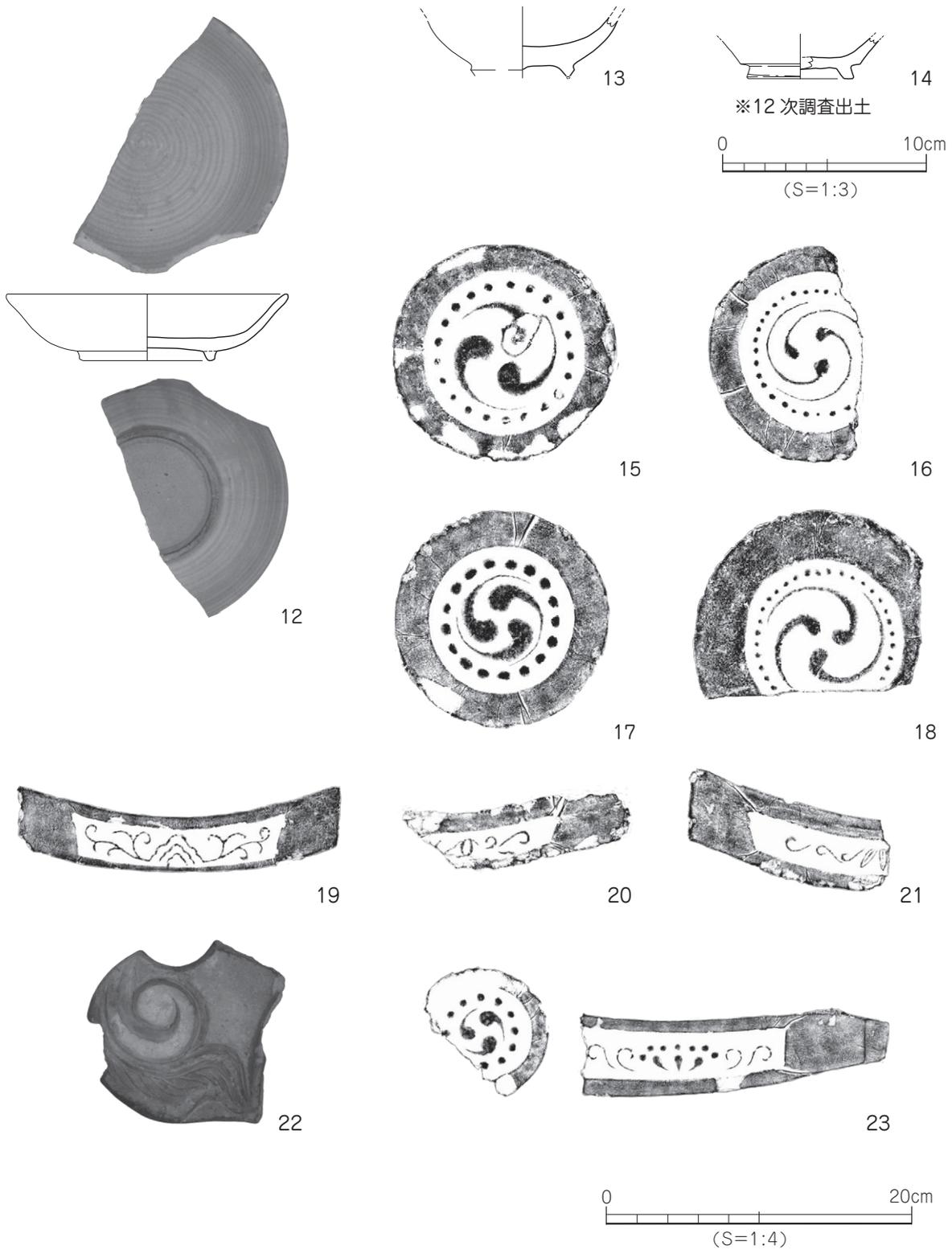


図7 出土遺物実測図(2)

三之丸地区の調査

表1 三之丸跡6・12次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	6次 T1-2 SD2 東 SX 中	陶器	皿	(22.6)	5.4	(12.8)	透明	鉄絵 染付	瀬戸美濃 (石皿)、唐草文、窯道具痕
2	6次 T1-2 SD2 東 SX 中	陶器	碗	—	[2.8]	(4.0)	薬白		萩、兜巾
3	6次 T1-2 SD2 東 SX 中	陶器	碗	—	[2.8]	3.3	白		西岡?、兜巾
4	6次 T1-4 SX1	陶器	碗 (端反)	(11.4)	6.5	4.2	透明	鉄絵	瀬戸美濃、網目文
5	6次 T1-4 SX1	陶器	碗	8.0	6.6	3.5	白		京信楽
6	T6次2 SK1 断割り	磁器	蓋	10.4	6.0	3.0	透明	染付	肥前、人參文 (外面)、蝶文 (内面) ※下記7 (碗) と組
7	6次 T2 SK1 断割り	磁器	碗 (広東)	(11.6)	6.15	(6.8)	透明	染付	肥前、人參文 (外面)、蝶文 (内面) ※上記6 (蓋) と組
8	6次 T2-6 SD1 北 東 拡張表土	磁器	碗 (端反)	(9.8)	5.9	3.8	透明	染付	砥部、梅文、重圈文
9	6次 T2-6 南拡 張 SD1 裏込上 層	陶器	皿	—	[4.2]	(11.6)	灰	鉄絵	肥前 (絵唐津)、草文?、底部露胎、胎土目 痕 (見込)
10	6次 T3-3 SD1 砂層	陶器	碗	9.0	5.3	4.0	灰		瀬戸美濃 (腰鎗茶碗?)、鉄釉 (外面下半部)、 沈線
11	6次 SX11	磁器	皿	14.6	3.15	10.1	透明	染付	肥前、松竹文、口鎗、窯道具痕 (高台内)
12	6次 T7 堀内	陶器	皿	(13.8)	3.3	(6.5)	灰	化粧土	瀬戸美濃 (刷毛目皿)
13	6次 T7 堀内	陶器	碗	—	[2.9]	—	灰		肥前、底部露胎、兜巾
14	12次 T1水路 コンクリート 下粘質土	陶器	碗	—	[2.0]	(5.0)	灰		瀬戸美濃

表2 三之丸跡6次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
15	T2-8 表土	(14.0)	10.2	2.0	1.4	左巻三巴	21	0.7	灰白	良好		
16	T1-3 東かく乱	13.4	9.8	1.8	1.0	右巻三巴	22	0.5	暗灰	良好		
17	T2-6 SD1 かく乱上層	13.9	9.4	2.4	1.6	右巻三巴	17	1.3	暗灰	良好	○	
18	T8 造成土	(16.0)	10.2	3.0	1.5	左巻三巴	27	0.45	灰	良好		大型

表3 三之丸跡6次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
19	T3-4 SD1 砂層上面	21.0	3.5	13.3	2.9	3.7	1.3	灰白	良好		宝珠 (上・線)	
20	T2-3 かく乱	(20.6)	3.6	(10.6~ 11.6)	1.7	4.5	1.4	灰白	良好		宝珠? (下・斜・線)	
21	T7 堀内	(25.4)	4.7	(16.8~ 18.4)	2.3	4.0	1.6	灰	良好		三葉 (下・線)	
22	T2-6 SD1 上層	—	—	—	—	—	1.8	灰	良好	○		鬼瓦

表4 三之丸跡6次出土遺物観察表 軒棧瓦

番号	出土場所	丸部法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
		平部法量 (cm)										
23	T8 造成土	8.3	(8.2)	1.1	—	右巻三巴	(12)	0.7	暗灰	良好	○	東海式?
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚	文様				
		23.7	4.0	13.7	3.5	5.5	1.3	三葉 (上)				

6. 四国がんセンター解体に伴う試掘調査

所在地 松山市堀之内 13 番 1

期 間 平成 18 年 8 月 17 日～同年 11 月 16 日

面 積 約 725m²

担 当 吉岡和哉

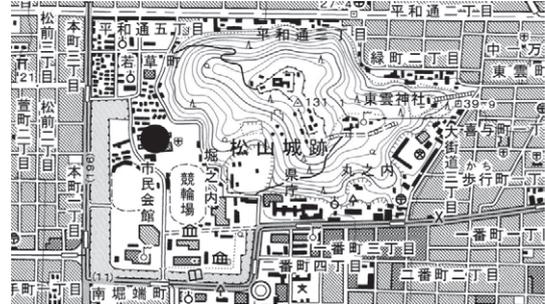


図 1 調査地位位置図

経 過 四国がんセンターは、城山公園（堀之内地区）整備事業（第 1 期）に伴い、松山市郊外に移転し、病棟等の建物は全て解体されることになった。四国がんセンターの敷地の大部分は、絵図等から、江戸時代中期以降、松山藩政の中心である三之丸御殿であったと考えられている。そのため、解体工事の地下の遺跡への影響や、遺跡の内容、遺存状況、範囲等を把握することを目的に、23 箇所（T1～23）のトレンチを設定し、事前の試掘調査を実施した（図 2）。

遺構・遺物 調査の結果、多くのトレンチで、明治期やそれ以前の遺構や造成面を確認した。

T1：明治期の廃棄土坑（主に瓦が出土）が確認された。また、四国がんセンターの過去の受水槽が確認された。

T2：地山の落込み（内部は池内堆積土層）が確認された。また、医療廃棄物を含む土坑 2 基が確認された。

T3（図 3、写真 1～3）：北御門の西石垣が確認された。南北方向の石垣（石面：西側）と、巨石を用いた東西方向の石垣（石面：北面）が、南北石垣の南側と東西石垣の東側で入隅となる。裏込の栗石層は円礫（河床礫）で、確認された範囲から、東西石垣の上面に築かれた櫓門である北御門の内外（南北）に、広場空間が存在した可能性が高い。

T4：北土塁の南側法面が確認された。

T5（図 4、写真 4～6）：北土塁の南側法面と南端、同北側法面、池状の落込み（内部は池内堆積土層）が確認された。

T6：T5 より続くと考えられる池内堆積土層が確認された。

T7：遺物の出土はないが、明治期以前と考えられる造成面が確認された。

T8：明治期以前の造成面と造成面に掘り込まれた溝状遺構が確認された。なお、上層で注射針を含む焼却灰層が確認された。

T10～13：明治期以前の造成面が確認された。

T16：池内堆積土層が確認されたが、年代を特定することはできなかった。

T17：T6 から続くと考えられる池内堆積土層が確認された。

T21（図 5、写真 7・8）：三之丸御殿の区画南端の可能性のある東西方向の石組溝が確認された。石組は、トレンチ中央付近で大きく乱れるが、検出長約 11m、幅約 1 m を測り、溝底には切石が敷かれている。なお、明治期の土管が接続されており、比較的新しい時期まで使用されていたと考えられる。

T22：明治期以前の造成面が確認された。また、医療廃棄物を含む焼土層や排水用の大型の会所が確認された。

小 結 以上のように、今回の試掘調査を通じ、三之丸御殿に関する可能性のある石組溝や造成面に加え、北御門の西石垣や北土塁が確認されるなど、不明な点の多い三之丸御殿やその周辺についての重要な知見を数多く得ることができた。

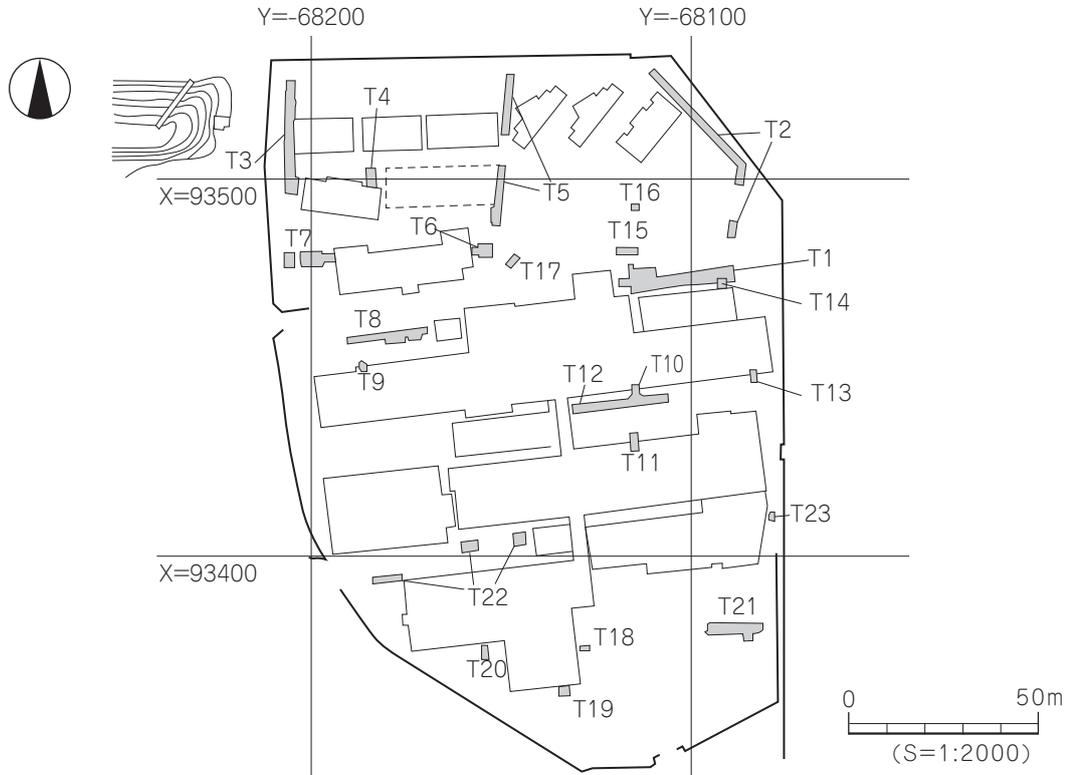


図2 トレンチ位置図

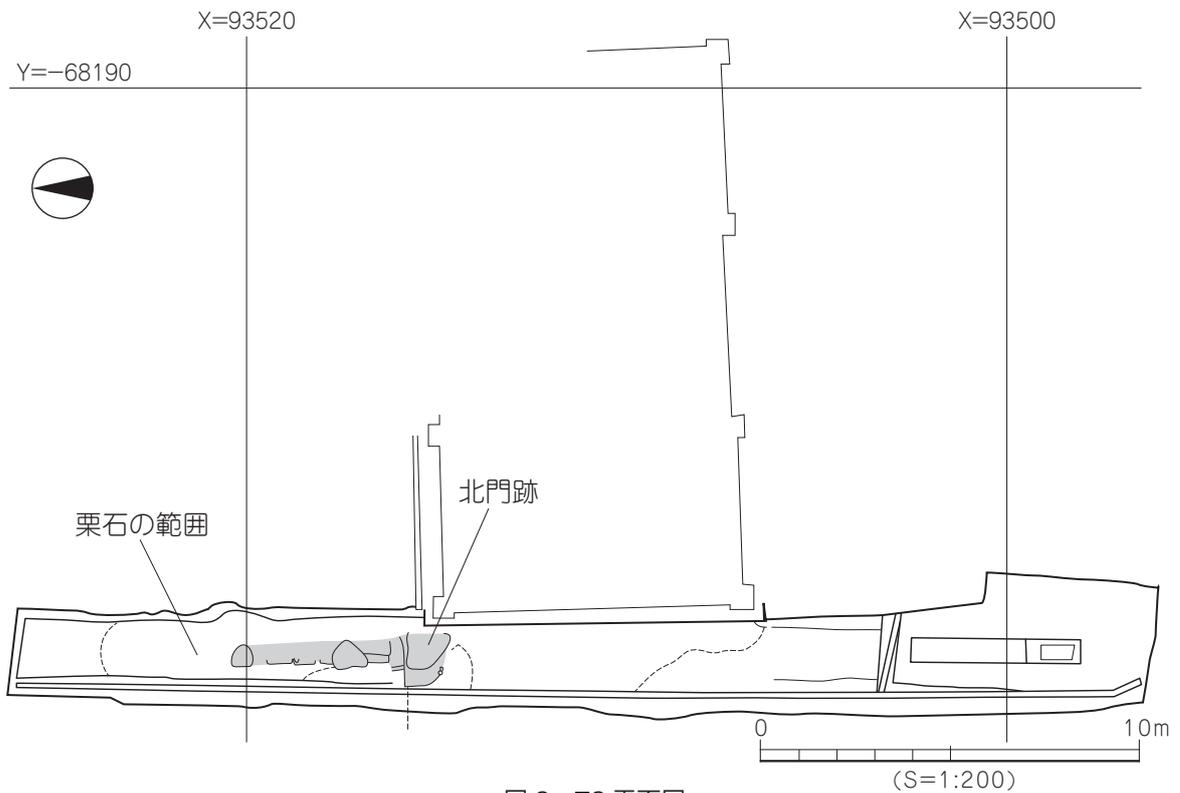


図3 T3平面図

史跡松山城跡

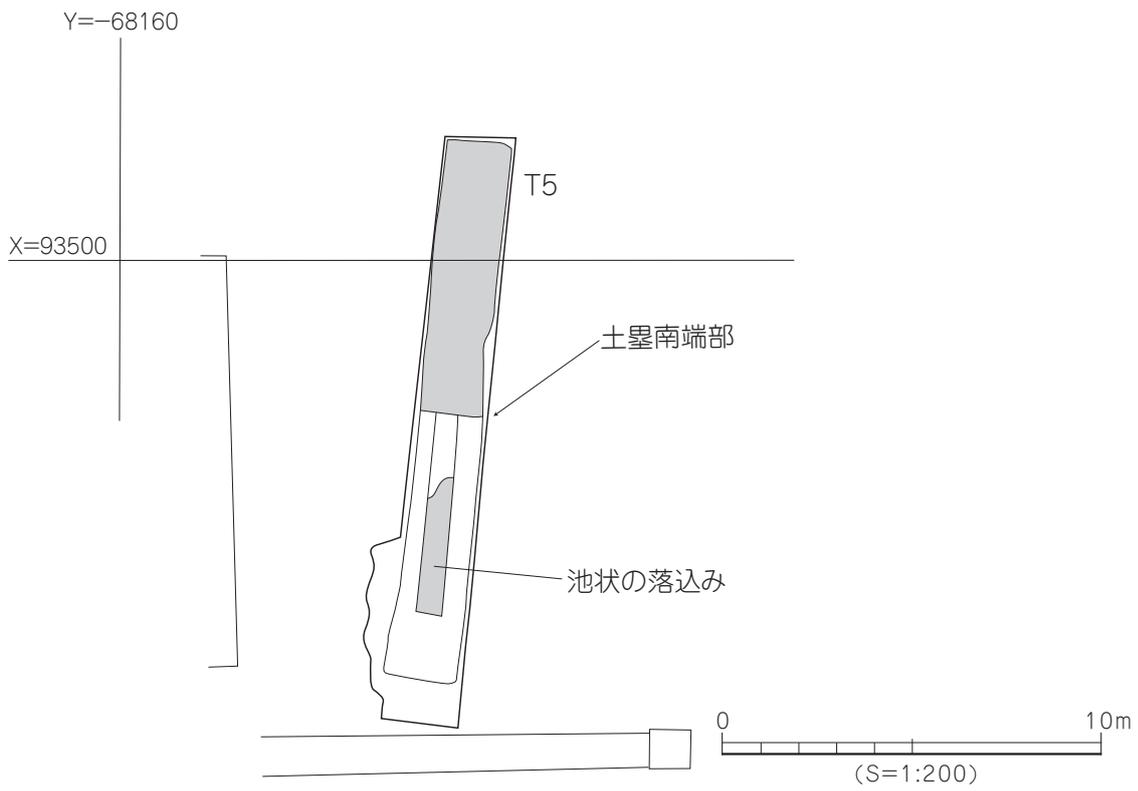
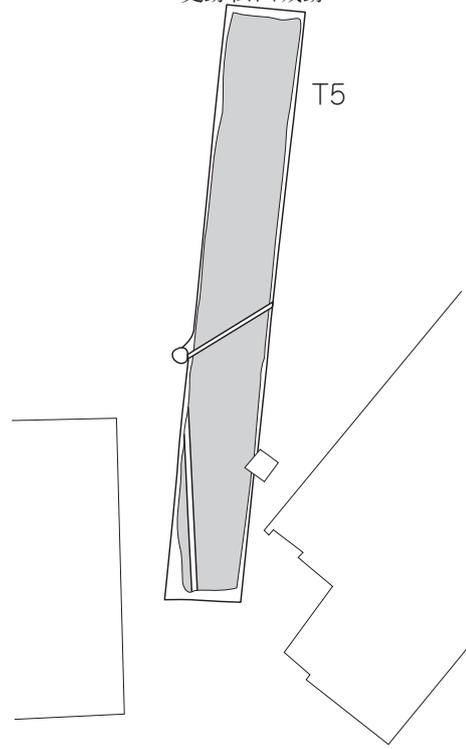


図4 T5 平面図

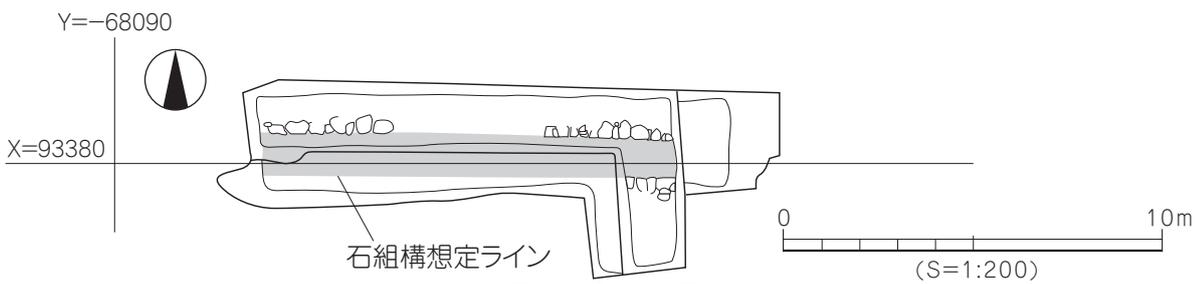


図5 T21 平面図



写真1 T3 調査状況 (南より)



写真2 T3 北御門西石垣検出状況 (北西より)



写真3 T3 北御門西石垣検出状況 (西より)



写真4 T5 調査状況 (南より)



写真5 T5 北区地山傾斜状況 (北東より)



写真6 T5 南区遺構検出状況 (南より)



写真7 T21 調査状況 (西より)



写真8 T21 石組溝検出状況 (北東より)

7. 四国がんセンター宿舎・擁壁解体に伴う試掘調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 宿舎：平成 19 年 1 月 9 日～同年 1 月 16 日
 擁壁：平成 20 年 3 月 7 日～同年 3 月 31 日
 面積 宿舎：20㎡、擁壁：30㎡
 担当 楠寛輝

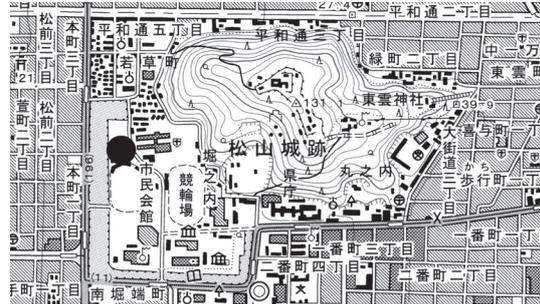


図 1 調査地位置図

経 過 四国がんセンターは、城山公園（堀之内地区）整備事業（第 1 期）に伴い、松山市郊外に移転し、病棟等の建物に加え、隣接する宿舎や同敷地擁壁（敷地南端）についても解体することになった。そのため、解体工事の地下の遺跡への影響や、遺跡の内容、遺存状況、範囲等を把握することを目的に、宿舎については 5 箇所（T1～5）、擁壁については 1 箇所のトレンチを設定し、事前（一部解体工事に並行して）の試掘調査を実施した（図 2）。

遺構・遺物 宿舎（写真 1～4）：全てのトレンチとも、近代以降の造成土の堆積が厚く（2m 以上）、江戸期の遺構は確認されなかった。明治期以降の陸軍等による造成工事の規模の大きさが分かる。

擁壁（図 4・5、写真 5～8）：明治期以降の堆積が厚かったものの（約 2.5 m）、その下で杉馬場や馬場土手の可能性が高い遺構や南北道路等が確認された。トレンチ西端では杉馬場と考えられる整地層（東側に側溝 [SD2] を伴う）と、その東側で馬場土手と考えられる盛土遺構が確認された。杉馬場と考えられる整地層は、粗砂が大量に混じる暗褐色土層で、検出幅 20cm、厚さ約 5cm を測り、検出高は約 19.7m である。過去の調査成果等から、杉馬場の可能性が高いと考えられる。SD2 は、幅約 1.4m、深さ約 25cm を測り、検出高は上端で約 19.7m であった。馬場土手の可能性が高い盛土遺構は、幅 1 間（約 2m）、厚さ約 40cm に渡り、粗砂がかなり混じる黒褐色粘質土（締まりが悪く、近世の遺物が少量含まれる）が一様に堆積していた。土層の特徴や過去の調査成果から推測されている位置や幅（1 間 [約 2m]）と整合的であること等から、馬場土手である可能性が高いと考えられる。検出高は上端で約 19.7m だが、それより上は、近代以降に削平されていると考えられる。また、馬場土手の東側では南北道路と考えられる整地層（西側に側溝 [SD1・3] を伴う）と、その東側のトレンチ東端で廃棄土坑(SK1)が確認された。南北道路と考えられる整地層は、にぶい黄褐色粘質土で、幅約 2.6m(1 間 2 尺)、厚さ約 5cm を測り、検出高は約 19.4m である。過去の調査成果等から、南北道路の可能性が高いと考えられる。なお、この道路幅は、これまでの三之丸跡での調査確認された他の道路が 8m（4 間）程度であったことに比べてかなり狭いが、万延元（1860）年の「御城下大絵図」には、この付近の道路について、西側に側溝が表現され、他よりもかなり狭い「道幅 1 間 3 尺（約 2.9m）」と記載されており、概ね一致している（図 3 ※これまでの調査成果から、当該絵図の道幅には原則的に側溝が含まれていると考えられる）。その下からは、東西方向の石列が確認された。北側の石面が揃っているようであることから、調査区外（北側）に存在するであろう東西方向の石組溝の南側の石組である可能性が高いと考えられる。検出高は約 19.2 m で、南北道路の整地層は、石列を覆うように堆積しており、石列が埋められた後に設けられていることが分かる。SD1 は、南北道路の西側の側溝と

考えられ、幅約 1.9m、深さ約 60cm を測り、検出高は上端で約 19.6m である。その下からは SD1 と並行する SD3 が確認された。検出幅 1m、深さ約 50cm を測り、検出高は上端で約 19.2m である。なお、SD1 は SD3 を切って設けられている。SK1 は、炭が多少混じるオリーブ黒色粘質土の埋土に、江戸期の瓦や陶磁器がかなり含まれる廃棄土坑で、検出高は南北道路と同じ約 19.4m である。その下からは、南北道路に接するように幅約 80cm の南北方向の石組が検出された。検出高は約 19.3m で、石組の西端は、南北道路の整地層によって覆われている。検出範囲は狭いが、石組は東西の石面を揃えて据えられているようであることから、土塀基礎の可能性が高いと考えられる。

小 結 以上のように、2 回の試掘調査を通じ、杉馬場や馬場土手の可能性が高い遺構が確認されるとともに、その東側の南北道路は幅約 1 間 3 尺で、改修を受けていることなど、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも重要な知見を数多く得ることができた。

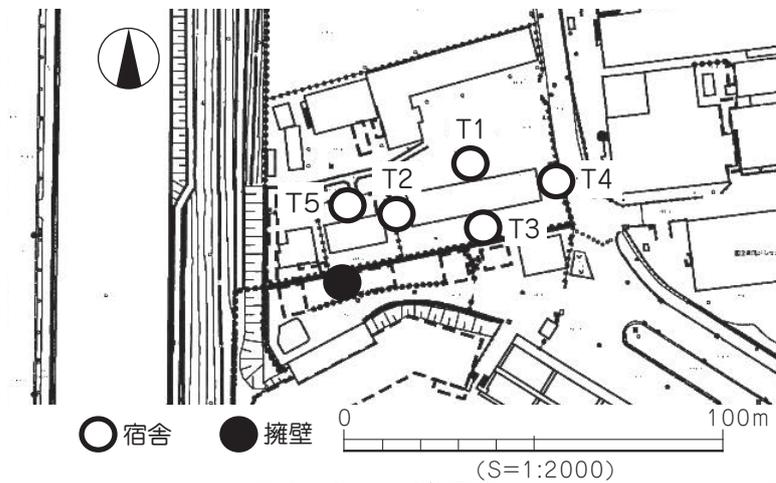


図 2 トレンチ位置図



図 3 御城下大絵図（式番、部分、坂の上の雲ミュージアム寄託）

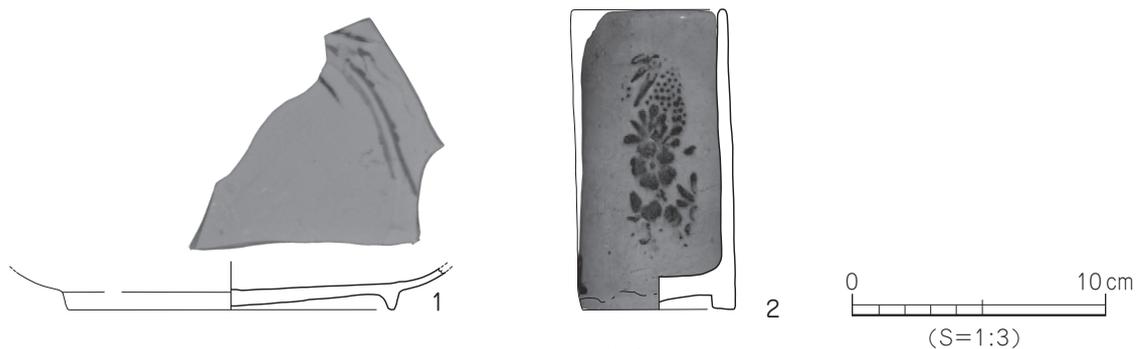


図 4 出土遺物実測図

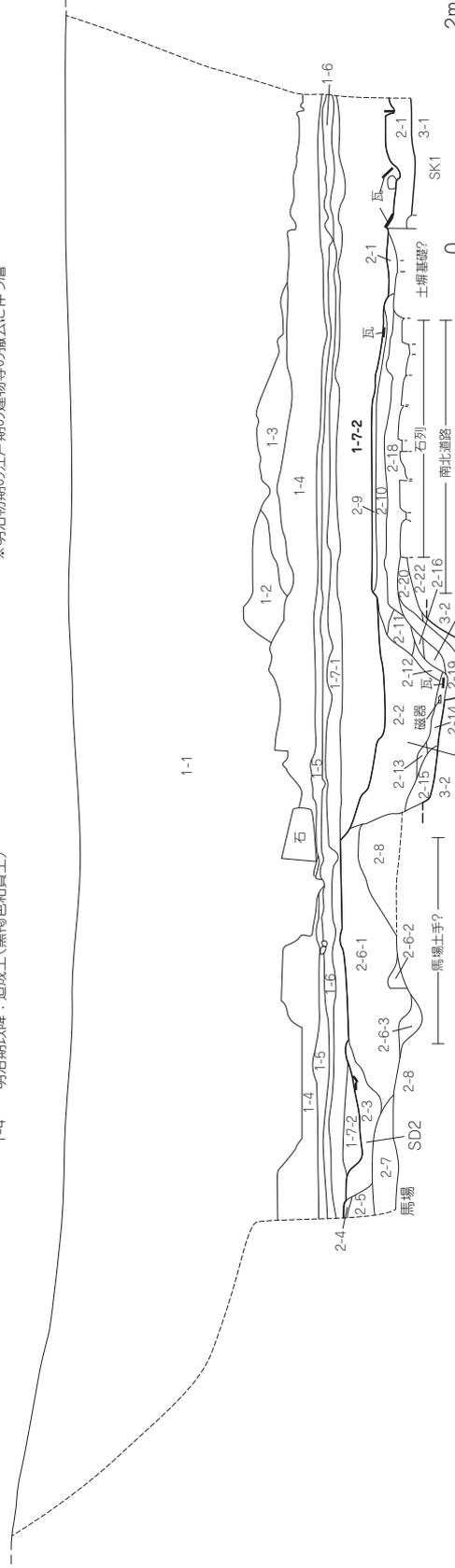
表 1 がんセンター擁壁解体工事に伴う確認調査出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	擁壁 SD3 (下層)	磁器	皿	—	[1.6]	(12.8)	透明	色絵	肥前 (柿右衛門様式)、鳳凰文 (色絵)、草花文 (陽刻、見込)
2	擁壁 SD3 (下層)	陶器	花瓶	(5.9)	16.9	6.1	灰	鉄絵	瀬戸美濃、草花文 (型紙摺り)

史跡松山城跡

L=23.0m

- 1-1 明治期以降：造成土(明赤褐色粘質土[10YR6/6]) ※旧陸軍の砲撃練習場土手造成に伴う層
- 1-2 明治期以降：造成土(暗灰色粘質土) ※旧陸軍の砲撃練習場土手造成に伴う層
- 1-3 明治期以降：造成土(暗灰色粘質土)
- 1-4 明治期以降：造成土(黒褐色粘質土)
- 1-5 明治期以降：真砂土 ※旧陸軍の広場整備に伴う整地層
- 1-6 明治期以降：造成土(黄灰色粘質土)
- 1-7-1 明治期以降：造成土(1-7-2に明黄褐色粘質土ブロックがかなり混じる)
- 1-7-2 明治期以降：造成土(黒褐色粘質土、灰や遺物が多量に含まれる) ※明治初期の江戸期の建物の撤去に伴う層



- 2-1 江戸期：オリーブ黒色粘質土[5Y3/1] ※SK1埋土
- 2-2 江戸期：黒褐色粘質土[2.5Y3/2] ※SD1埋土(上層)
- 2-3 江戸期：暗オリーブ褐色粘質土[2.5Y3/3] ※SD2埋土
- 2-4 江戸期：暗褐色土[10YR3/3](真砂土) ※杉馬場の整地層
- 2-5 江戸期：暗灰色土[2.5Y4/2]
- 2-6-1 江戸期：黒褐色粘質土[10YR3/2] ※馬場土手?
- 2-6-2 江戸期：2-6-1に明黄褐色[10YR6/6]の粒が多少混じる層
- 2-6-3 江戸期：2-6-1がやや黄色味を帯びた暗褐色土[10YR3/3]層
- 2-7 江戸期：にぶい黄褐色粘質土[10YR4/3]と黄灰色粘質土[2.5Y4/1]等が厚5cm程度で層状に堆積する層
- 2-8 江戸期：褐色粘質土[10YR4/4](暗褐色[5Y4/1]等の粘質土ブロックがかなり混じる)

- 2-9 江戸期：にぶい黄褐色粘質土[10YR4/3] ※南北道路の整地層
- 2-10 江戸期：黄灰色[2.5Y4/1]や暗灰色[2.5Y4/2]、黒褐色[10YR3/1]等の粘質土が、厚3cm程度で層状に堆積する層
- 2-11 江戸期：暗灰色粘質土[2.5Y4/2]
- 2-12 江戸期：黄灰色粘質土[2.5Y4/1]
- 2-13 江戸期：暗灰色粘質土[2.5Y5/2]
- 2-14 江戸期：黒褐色粘質土[2.5Y3/2] ※SD1埋土(下層)
- 2-15 江戸期：黄灰色粘質土[2.5Y4/1]
- 2-16 江戸期：黄灰色粘質土[2.5Y5/1]
- 2-17 江戸期：黄褐色粘質土[2.5Y5/3]

- 2-18 江戸期：暗灰色土[2.5Y4/2]
- 2-19 江戸期：褐色砂質土[7.5YR4/3] ※SD3埋土(上層)
- 2-20 江戸期：にぶい黄褐色土[10YR5/3]
- 2-21 江戸期：暗灰色粘質土[5B6/2] ※SD3埋土(下層)
- 2-22 江戸期：にぶい黄褐色粘質土[10YR4/3] ※石列脚/方埋土
- 3-1 地山：にぶい赤褐色砂[5YR4/3]
- 3-2 地山：灰色粘質土[5Y4/1]

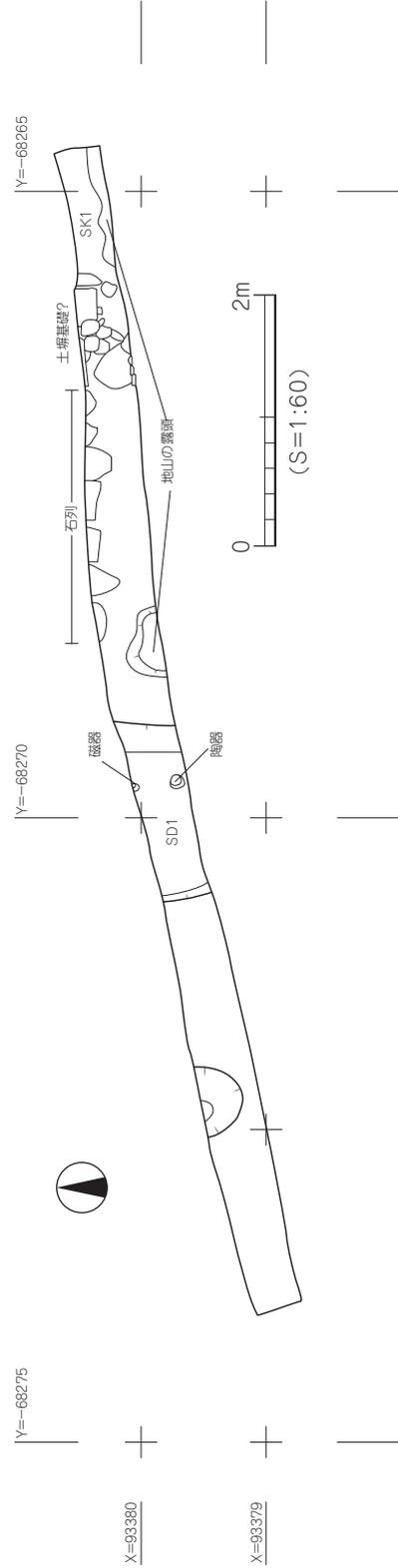


図5 擁壁北壁断面図及び平面図



写真1 宿舎 T1 西壁断面 (東より)



写真2 宿舎 T5 東壁断面 (西より)



写真3 擁壁 完掘状況 (南東より)



写真4 擁壁 馬場～馬場土手部分完掘状況 (南より)



写真5 擁壁 SD1・3 完掘状況 (南より)



写真6 擁壁 SD1 底遺物出土状況 (東より)



写真7 擁壁 南北道路完掘 (石列等検出) 状況 (南より)



写真8 擁壁 SK1 完掘 (土塀基礎検出) 状況 (南より)

8. 市営野球場・同庭球場観客席解体・

土塁保護に伴う試掘調査

所在地 松山市堀之内

期 間 T1～8：平成18年10月3日～同年10月16日
T9：平成19年6月18日～同年6月26日

面積 約90㎡

担当 楠寛輝

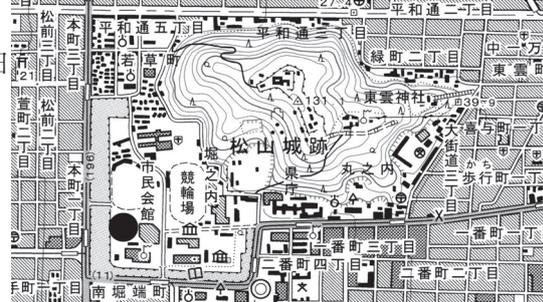


図1 調査地位置図

経 過 市営球場及び同庭球場は、城山公園（堀之内地区）整備事業（第1期）に伴い、松山市郊外に新設される中央公園に移転することとなり、それに伴い、土塁に食い込んで設けられていた両施設の観客席についても全て解体し、当該部分の土塁保護工事を行うことになった。そのため、解体工事の土塁への影響や、保護工事のための必要となる土塁の構造等を把握することを目的に、9箇所（T1～9）のトレンチを設定し、事前（一部解体工事と並行して）の試掘調査を実施した（図2）。なお、土塁では、平成5年に確認調査が一部行われ、近代以降の造成土の下で、江戸期の土塁（以下「旧土塁」という。）が確認されており、表面はやや締まった土で薄く覆われているが、内部は全て砂礫であった。

遺構・遺物 土塁天端部（T1～6・8 [図3・4、写真1～6・8・9]）：全てのトレンチで旧土塁が確認された。確認された現地表からの深さは、直下から約1.4m下までとかなり幅がある。旧土塁の天端高については、南から北に向けて、T1からT5までが24.7m程度とほぼ一定であるが、T6で一部削平を受けているものの約26.0m、T8では約26.2mまで上昇する。このことは、現在の土塁の天端高もT8付近でかなり上昇することや、三之丸内の発掘調査で、幕末の生活面が、T1からT5に並行する庭球場跡や野球場跡周辺が概ね19.5～19.6mと一定であるのに対し、T8と並行するラグビー場跡では21.6～22.3mと高くなることと整合的である。ただし、旧土塁が構築されて以降、修復や改変は何度も行われている可能性が高いことから、旧土塁の天端高については、一定の幅を持って解釈する必要があると思われる。また、旧土塁の軸線については、サンプル数が少なく、確定的なことを述べることは難しいが、最も残りの良いT1とT2における天端内側の傾斜変換点を結んだ南北の軸線は、東に1°程度傾いている。このことは、三之丸跡の調査から得られた道路等の南北の軸線が、東に1°程度傾いていることと整合的である。

土塁裾部（T6・7・9 [図4・5、写真6・7・10・11]）：野球場側のT6・7では、明治期以降の造成による堆積が厚く、旧土塁と考えられる遺構を確認することはできなかった。土塁内側の裾部は、これまでの三之丸跡での調査で、郭内部の敷地の拡幅等を目的として、近代以降、広範に改変されていることが明らかとなっているが、今回の結果もそれを追認するものである。一方、庭球場側のT9では、これまで同様、裾部を中心に真砂土や明治期以降の造成土が厚く堆積していたものの、その内側に、旧土塁と考えられる砂礫が、版築状に厚く堆積していることが確認された。平成5年の調査でも、旧土塁の内部は全て砂礫であり、このことは、一般的に土塁が堀を掘った土を内側に盛って構築され

ること（掻揚）を踏まえると、旧土塁構築時の周辺の状況は、近くを流れる石手川の旧流路の氾濫原で、砂礫が厚く堆積していたことを示唆するものであろう。また、旧土塁内側の法面の勾配については、約 35° （1割4分）であることが確認された。土塁内側の裾部は、近代以降、広範に改変されており、旧土塁内側の法面の勾配が確認されたのは今回が初めてである。そのため、この結果を直ちに旧土塁の全体に敷衍することは憚られるが、平成5年の確認調査では、旧土塁外側の勾配は約 25° （2割）と推測されており、外側に比べ内側の勾配が急であったことは確かであろう。このことは、「亀郭城秘図」にあるように、外側の法面中段に設けられた犬走りや、郭内部の敷地をできる限り広く確保しようとする意図などが影響している可能性がある。

小 結 以上のように、今回の試掘調査を通じ、旧土塁の構造や軸線、内側の法面の勾配など、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い旧土塁の歴史を考える上でも、重要な知見を数多く得ることができた。

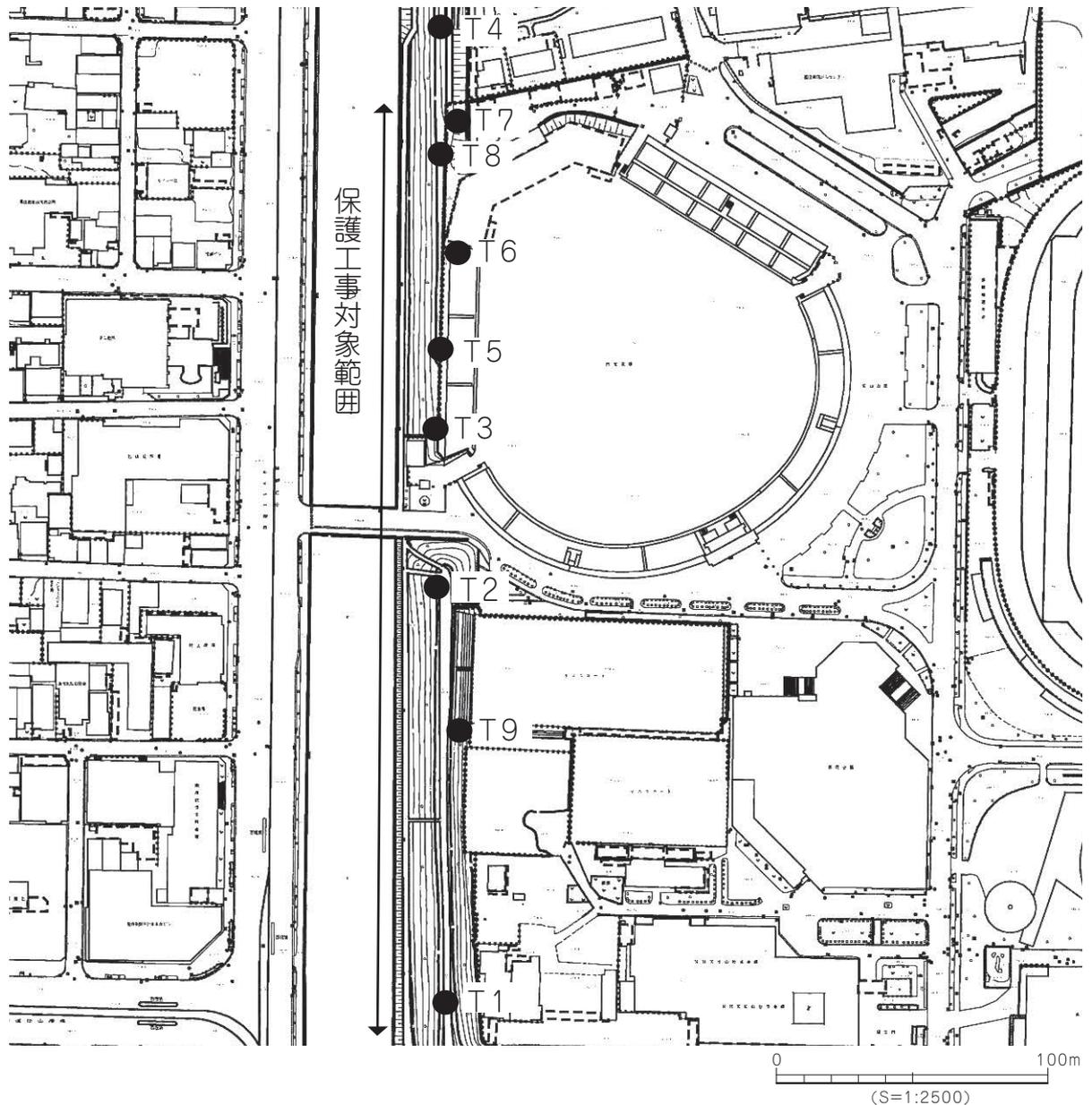
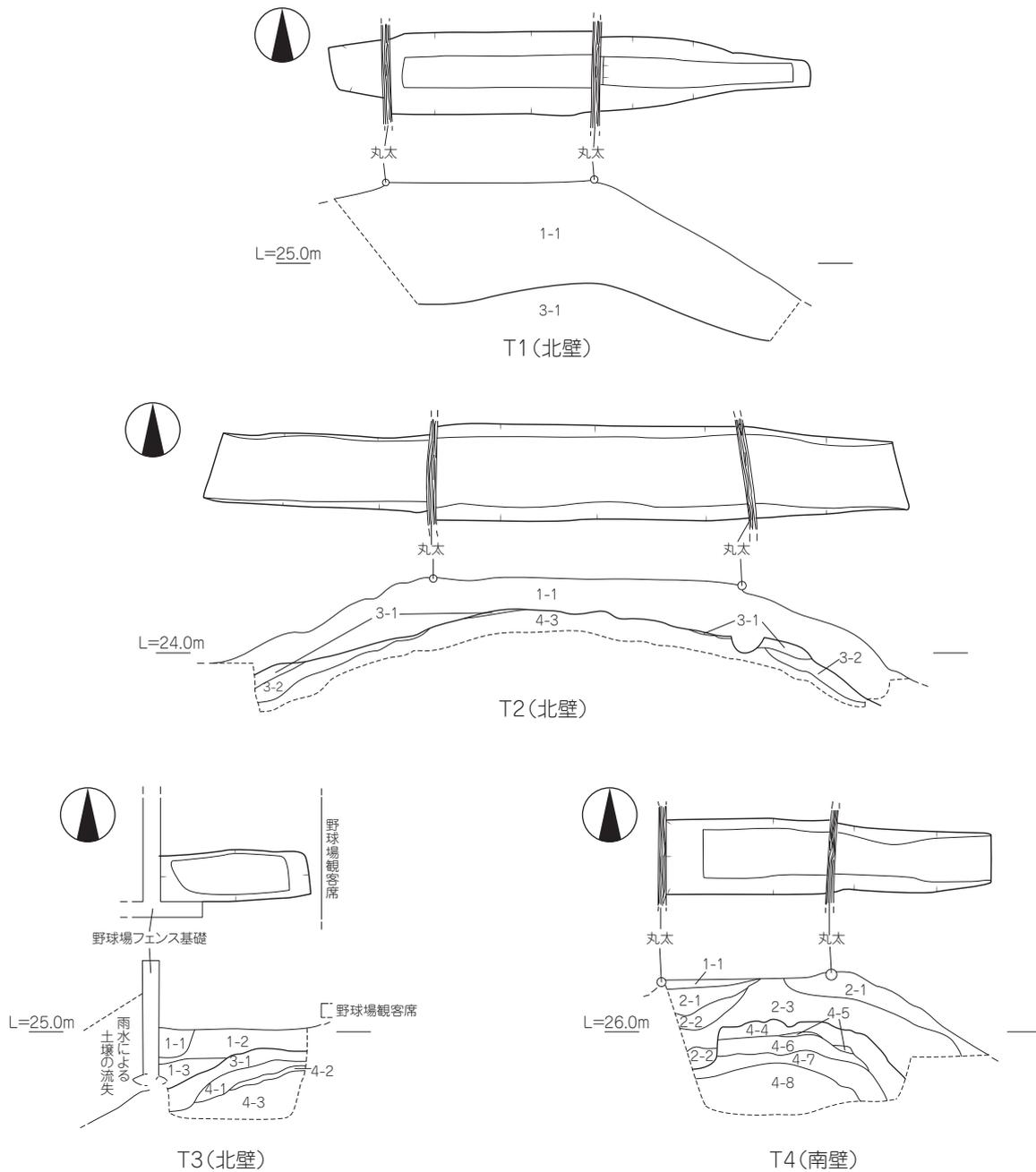


図2 トレンチ位置図

史跡松山城跡



- 1-1 明治期以降：真砂土
- 1-2 明治期以降：腐葉土（造成土が腐葉土化したもの）
- 1-3 明治期以降：真砂土（ただし、野球場フェンス基礎設置に伴うもので1-1以前）
- 2-1 明治期以降：黒褐色土[10YR2/2]、粗砂が多量に混じる
- 2-2 明治期以降：黒褐色土[10YR3/2]、粗砂が多量に混じる
- 2-3 明治期以降：灰黄褐色土[10YR4/2]、粗砂が多量に混じる
- 3-1 旧土塁表土：にぶい黄褐色土[10YR4/3]、粗砂が多量に、小礫が多少混じり、よく締まっている
- 3-2 旧土塁表土?：黒褐色土[7.5YR2/2]、腐葉土
- 4-1 旧土塁本体：にぶい黄褐色砂礫[10YR4/3]、10cm前後の河床礫が多量に混じる（色を除き4-3と同質）
- 4-2 旧土塁本体：灰黄褐色粘質土[10YR4/2]、よく締まっている
- 4-3 旧土塁本体：褐色砂礫[10YR4/4]、10cm前後の河床礫多量に混じる（色を除き4-1と同質）
- 4-4 旧土塁本体?：にぶい黄褐色粗砂[10YR4/3]、小礫がかなり含まれる
- 4-5 旧土塁本体：灰黄褐色粘質土[10YR6/2]
- 4-6 旧土塁本体：黄褐色砂[10YR5/6]、小礫が少量含まれる
- 4-7 旧土塁本体：褐色砂[7.5YR4/6]、小礫が少量含まれる
- 4-8 旧土塁本体：灰黄褐色粗砂[10YR4/2]、小礫がかなり含まれる

※他との比較のため断面図は反転して提示

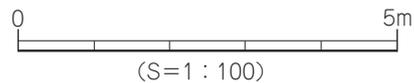


図3 T1～4 平断面図

三之丸地区の調査

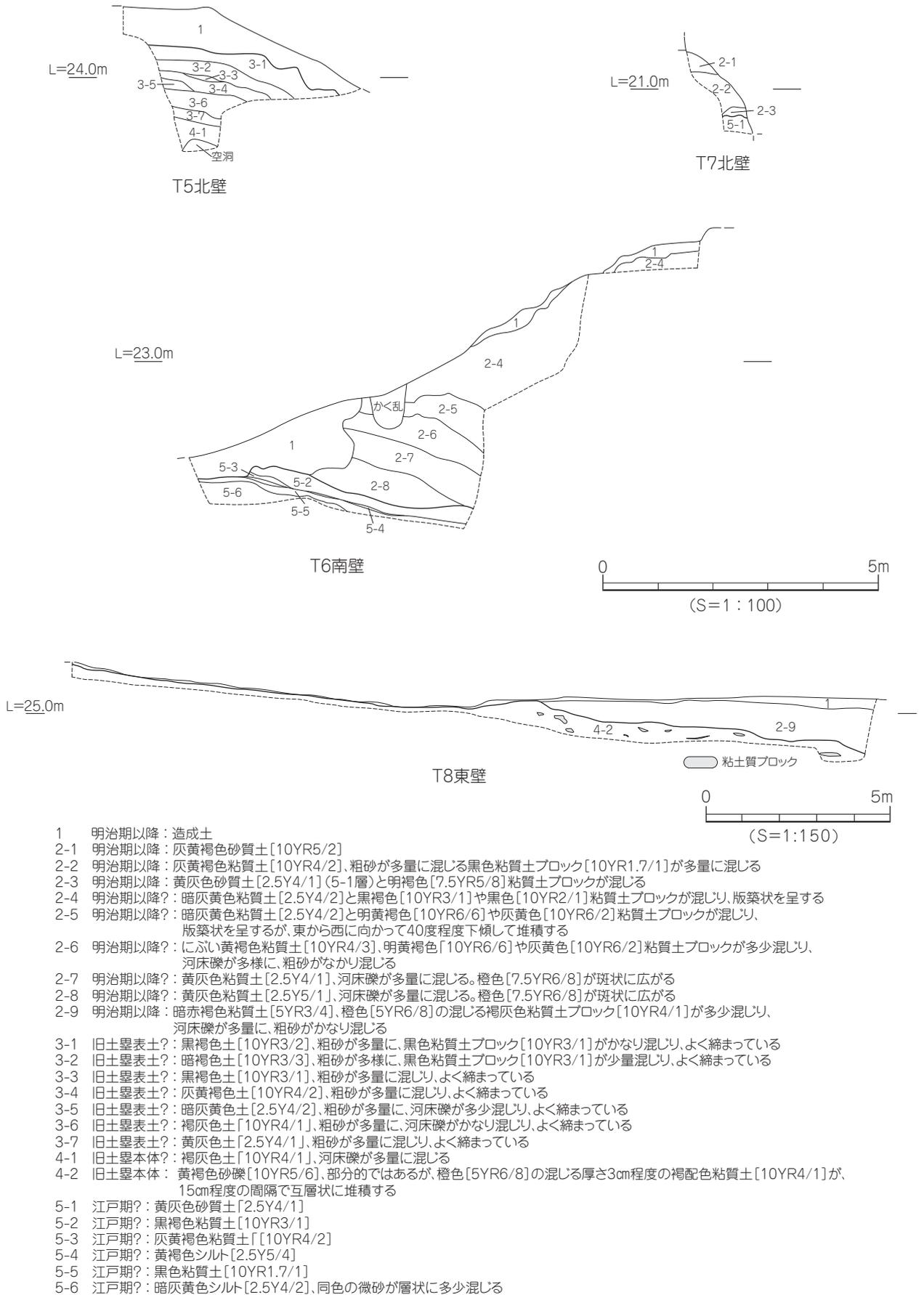
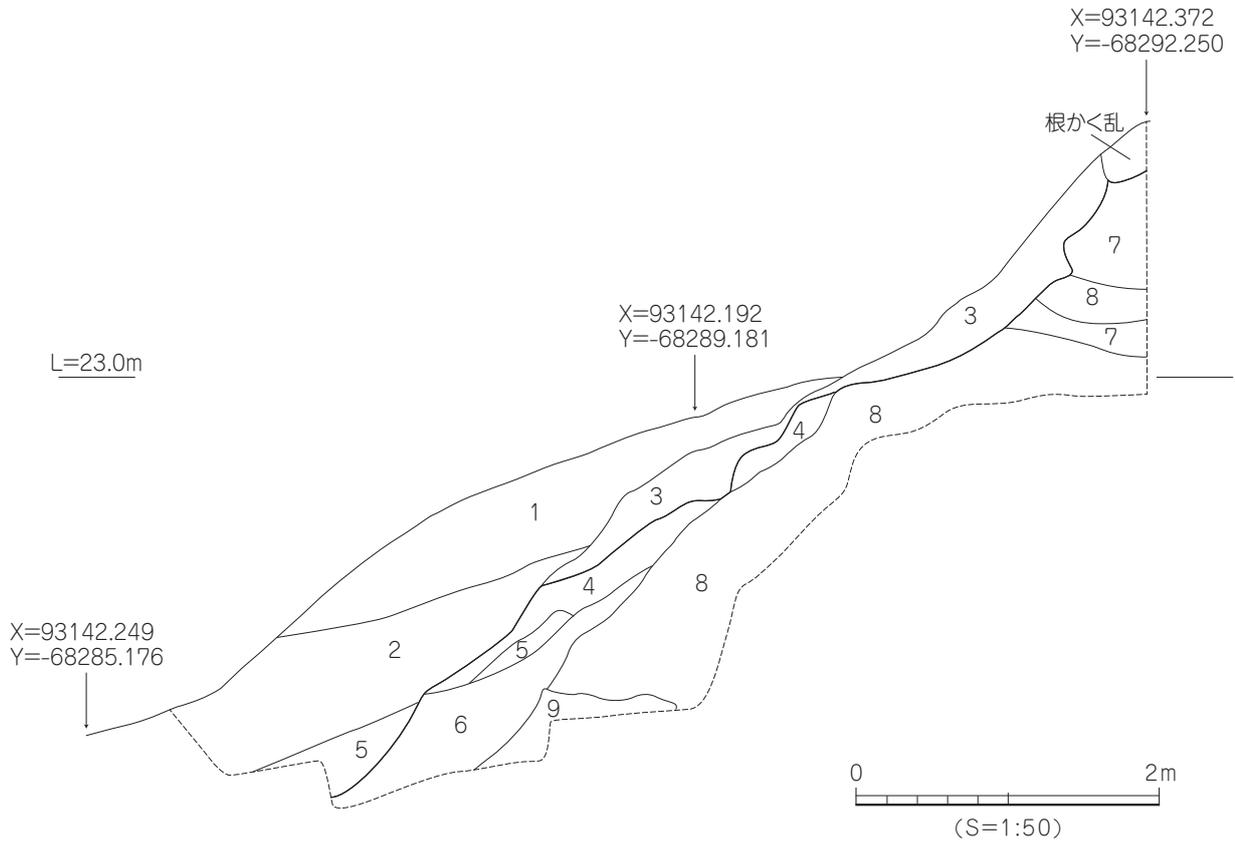


図4 T5～8断面図

史跡松山城跡



- 1 明治期以降：真砂土
 - 2 明治期以降：造成土
 - 3 明治期以降：腐葉土
 - 4 旧土塁表土?：灰黄褐色土[10YR4/2]粗砂が多量に混じる
 - 5 旧土塁表土：暗灰黄色土[2.5Y5/2]粗砂が多量に混じり、よく締まっている
 - 6 旧土塁表土：暗灰色土[2.5Y4/2]粗砂が多量に混じり、よく締まっている
 - 7 旧土塁本体：黒褐色粘質土[7.5YR3/2]砂礫混
 - 8 旧土塁本体：明赤褐色土[5YR5/6]やにぶい黄橙砂礫[10YR6/4]が互層状
 - 9 江戸期?：灰黄色粘質土[2.5Y7/2]
- ※7～9は互層状

図5 T9南壁断面図



写真 1 T1 北壁断面 (南より)



写真 2 T2 北壁断面 (南西より)



写真 3 T3 北壁断面 (南東より)



写真 4 T4 南壁断面 (北より)



写真 5 T5 北壁断面 (南東より)



写真 6 T6 南壁断面 (北東より)



写真7 T7完掘状況（東より）



写真8 T8完掘状況（北より）



写真9 T8西壁断面（北西より）



写真10 T9完掘状況（北東より）



写真11 T9南壁断面（北より）

さんのまるあと
9. 三之丸跡 7・8・10 次調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 7次：平成19年8月6日～平成20年3月31日
 8次：平成20年1月7日～同年3月31日
 10次：平成20年7月24日～同年10月31日
 面 積 7次：約740㎡、8次：約150㎡、10次：約120㎡
 担 当 7次：西村直人・武田尊子
 8次：加高次郎(財団法人松山市生涯学習振興財団)
 10次：西村直人

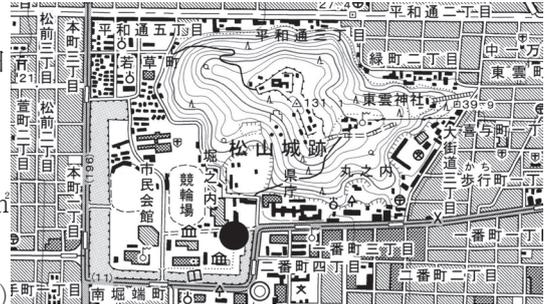


図1 調査地位置図

経 過 城山公園(堀之内地区)第1期整備に伴う確認調査である。競輪場跡地の南部及び財務局跡地の江戸時代の道路跡と内堀跡並びに御用米蔵(永蔵)や元小普請所などの屋敷割の遺構を確認することを目的とし、7次調査は22箇所、8次調査は10箇所、10次調査は3箇所の調査トレンチを設定した(図2)。

遺構・遺物 遺構は、道路及び側溝、内堀、御用米蔵及び元小普請所跡の石垣ほか、溝並びに土坑などを確認した。

道路(図2・3、写真2～4・9)：調査地全域で南北道路2条及び東西道路2条が確認された。各道路幅は、南北道路1が約13.5m、南北道路2が約8.9m、東西道路1が約8.8m、東西道路2が約8.4mを測り、いずれも「松山城御城下大絵図」に記された道路幅の寸法とほぼ一致する。また、方位軸は南北道路1がN-1°19'56"-E、南北道路2がN-1°26'29"-E、東西道路1がN-90°57'53"-E、東西道路2がN-91°21'2"-Eで、北から東へ1度程傾く。各側溝の幅は約60cmを測り、御用米蔵に沿う東西道路1の北側溝と南北道路2の東側溝の底面は石が敷かれる。各溝底の標高と傾きから、排水は南北両方向から東西道路2の南北両側溝に集まり、西へ流れることが判明した。

御用米蔵(図2・3、写真2・3)：7次T1～6で西辺と南辺の石垣が確認された。根石を含め1、2段が残る。築石は、対面する侍屋敷が15～20cmの砂岩や礫岩などが使用される一方、幅40～60cmの花崗岩が使用される。根石は砂岩も使用される。裏込は築石面から奥行き約90cmで、15cm前後の割石と粘土が充填されることから、低い石垣と推測される。6次調査の成果と併せて、御用米蔵の西辺は約55m、南辺は約63mと推定され、敷地はやや台形を呈することが判明した。

内堀(図2・4、写真5・6)：7次T7・9・11で確認された。T7で確認された入隅部の罫線は、北から東へほぼ直角方向に曲がるが、角を形成せず緩やかに湾曲する。遺構面検出面から堀底面までは、深さ約2.6mを測る。護岸には胴木上から天端まで砂岩を主とした4、5段の水敲石積が積み、高さ約1.1mを測るが、入隅部の形状や石積方法、石材とその表面調整などから、近代以降の遺構と判断した。同石垣の背面を調査したが、江戸時代の石垣やその存在を示唆する遺構は確認できなかった。

元小普請所(図2・5、写真7・8)：7次T10・13・15・16・22で北辺と東辺の石垣が確認された。根石を含め1、2段が残り、築石は幅60cm前後の花崗岩が使用される。裏込は築石面から奥行き約110cmを有し、15cm前後の栗石が充填される。このうちT10では、築石面から敷地内側に2mの位置に、傾いた柱痕跡を有する長径115cm、短径90cmの柱穴を検出した。土堀の控柱跡と考えられる。

屋敷境（図2、写真11・13）T22で元小普請所の東辺に接し、南に面を揃えて東西に並ぶ石列が確認された。絵図との比較から、南隣の侍屋敷との屋敷境と考えられる。また、10次T1で検出された石列の西延長線に並行する柱列2条も、形状は異なるものの、位置関係から同じ屋敷境の遺構とみられる。各柱列とも柱芯間は1.4m前後で、柱穴も東西約30cm、南北35～50cmと概ね揃うことから、板塀あるいは土塀の痕跡と判断した。10次T5では、元小普請所の南の侍屋敷とそ西の侍屋敷の屋敷境とみられる石組溝の一部が確認された。

溝（図2）：10次T2で確認された。検出長2.5m、幅は北辺が攪乱を受けているが、土層観察から約45cmと推測される。石組などの痕跡は確認できなかったものの、これを境に南北で整地層が異なること及び位置関係から、東御門広場と同御門の番頭家屋敷地の区画溝と判断した。

石組柵（図2、写真10）：8次T8で確認された。調査区外へ広がり、方形ないし長方形を呈するとみられ、東西140cm、南北40cm以上、深さ70cmを測る。積石は、30cm前後の花崗岩の円礫が3、4段積まれるが、天端石ではないことから、さらに積み上げられていたとみられ、本来100cm以上の深さがあったと推測される。なお、東壁8次T3で確認された南北道路3の西側溝の南延長線に接することから、連結していた可能性がある。

大型土坑（図2、写真12）：10次T2で検出した。調査区外へ広がる。南北径約315cm、東西推定215cm、深さ約80cmの大型の土坑である。大きさの割に遺物は少量であるが、17世紀初頭から前半までの陶磁器がまとまって出土しており、数少ない江戸時代前期の遺構と考えられる。

遺物は、江戸時代の瓦及び陶磁器、金属製品、石製品及びガラス製品など出土した。主に道路側溝及び廃棄土坑から出土したもので、陶磁器は、肥前・瀬戸・美濃、京・信楽系、堺、砥部などの各産地のものがみられる。特筆すべきものとして、刻書のある硯や三ツ葉葵紋の軒丸瓦が挙げられる。硯の裏面には、「花見路や 蝶の飛立つ あと於ゆく」という句ともに「又（久）五郎」という個人名が刻書される。この「又（久）五郎は、幕末に出土地の屋敷に居住していた「荒井又五郎」の可能性があり、所有者を特定し得る貴重な遺物である。

小 結 本調査では道路、御用米蔵及び元小普請所、内堀、詳細な情報を得ることができ、あらためて古絵図の記載が概ね正しいことが分かった。また、侍とその家族ほかの生活の一端を知ることのできる資料を多数得られた。一方、10次調査で検出した柱穴列は、柱芯間が140cm前後と、県民館跡地（現愛媛県美術館敷地）で確認された塀跡の柱芯間153～168cmに比べて間隔が狭い。この差が時期差によるのか、施設としての違いか、あるいは身分や役職の差であるかは、堀之内の屋敷割の変遷を検討する上で非常に重要である。今後の成果を踏まえた上で検討する必要がある。

三之丸地区の調査

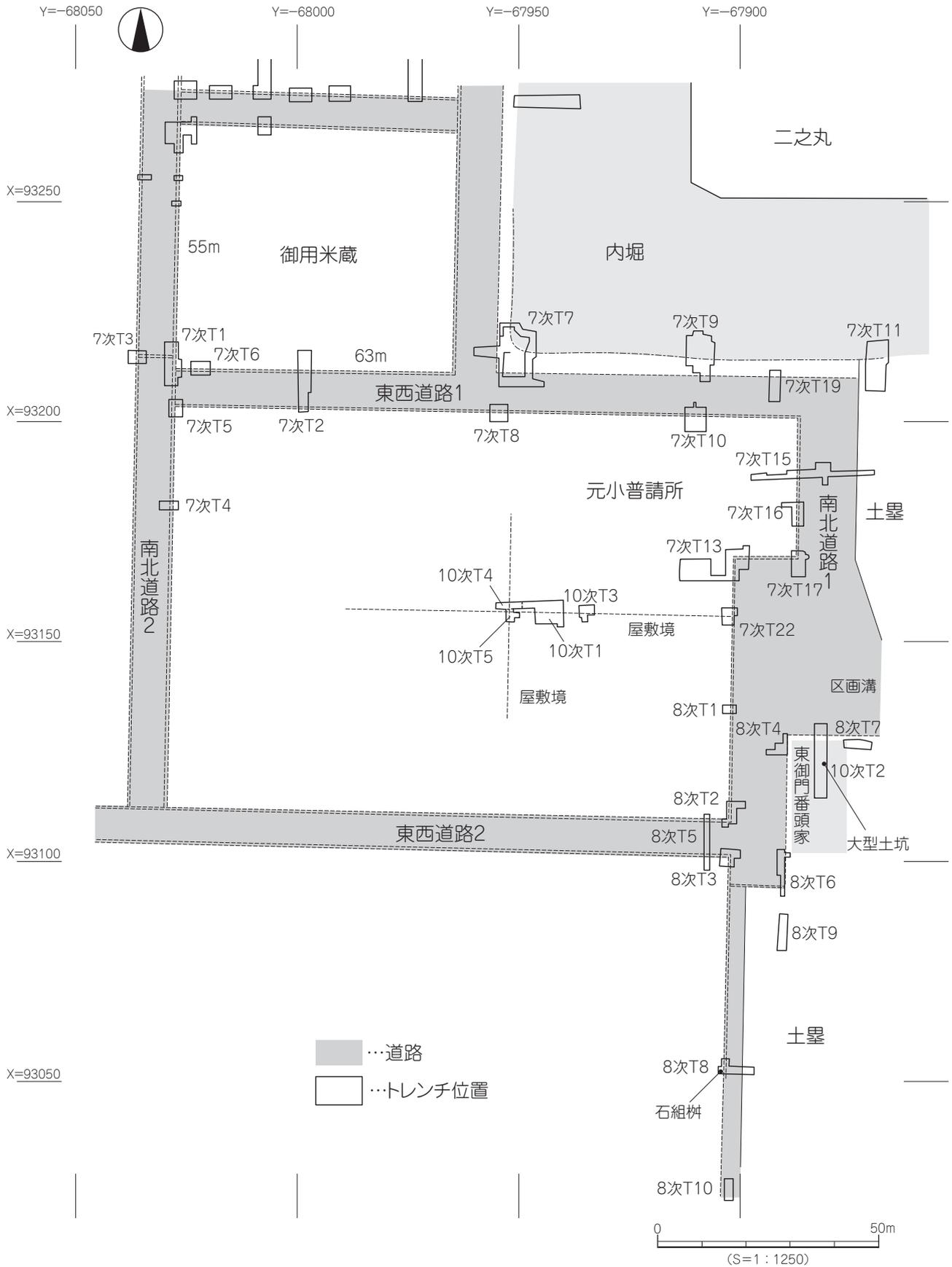


図2 トレンチ位置図

史跡松山城跡

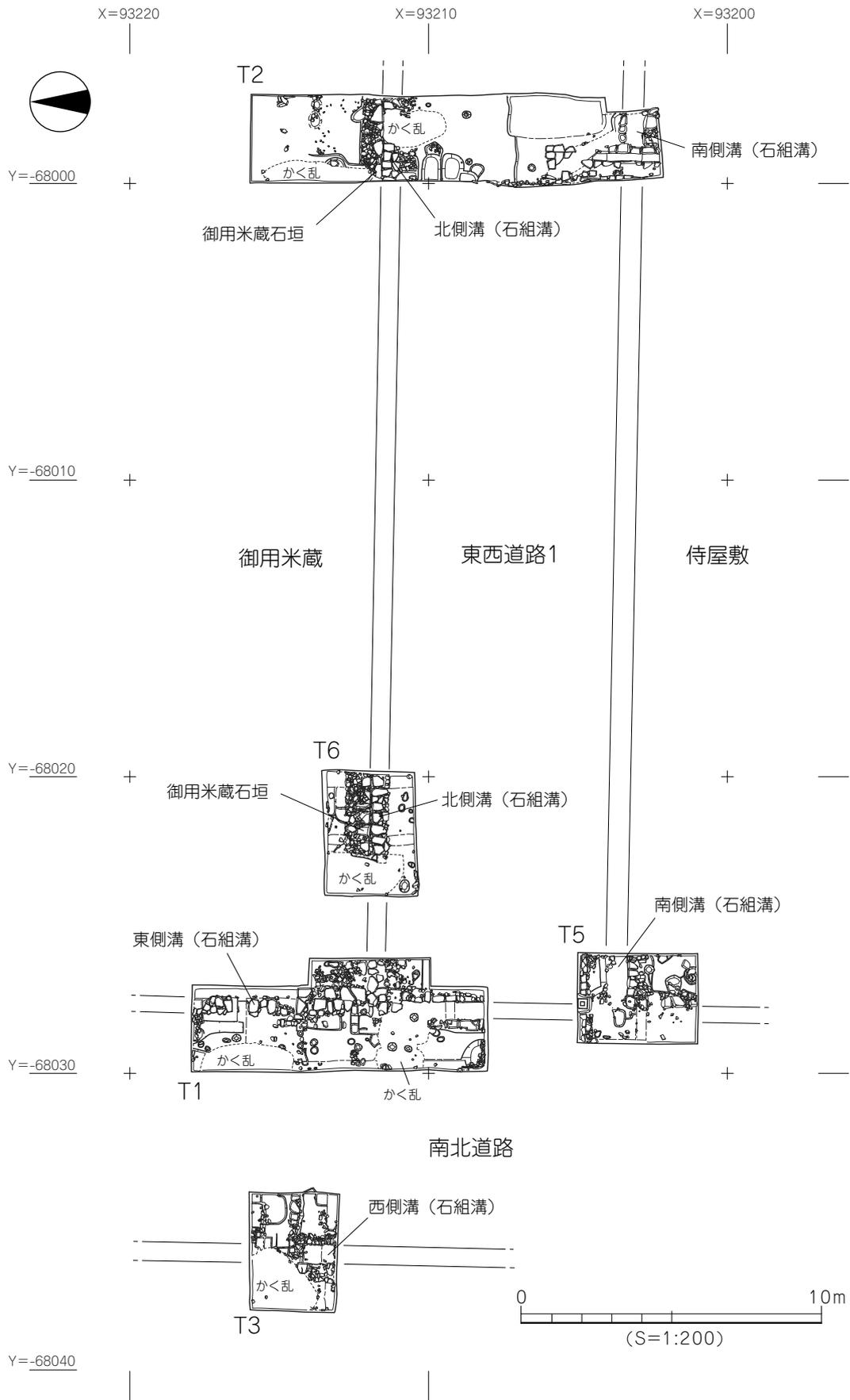


図3 7次 T1・2・3・5・6 平面図

三之丸地区の調査



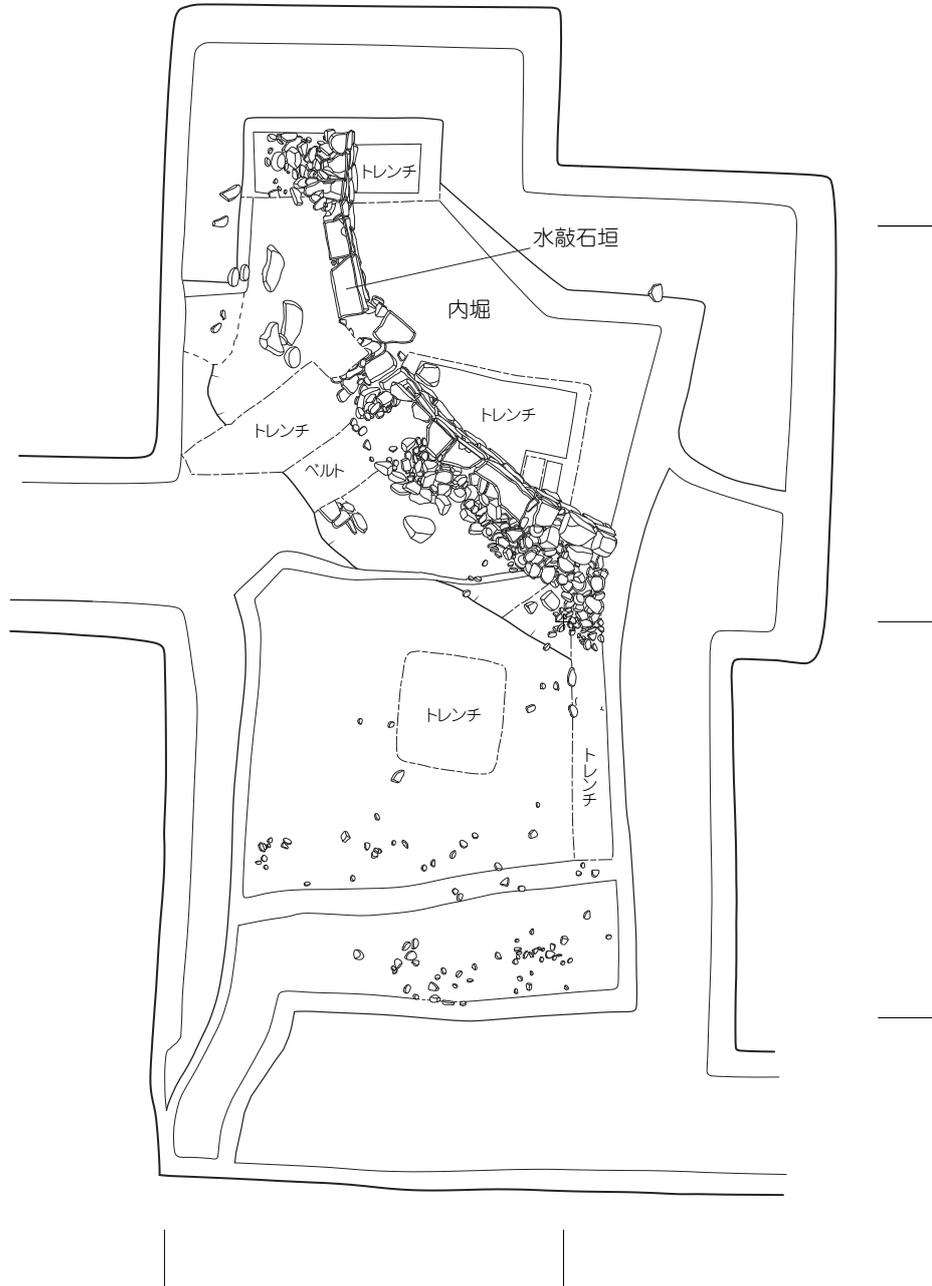
Y=-67955

Y=-67950

X=93220

X=93215

X=93210



0 5m
(S=1:100)

図4 7次T7平面図

史跡松山城跡

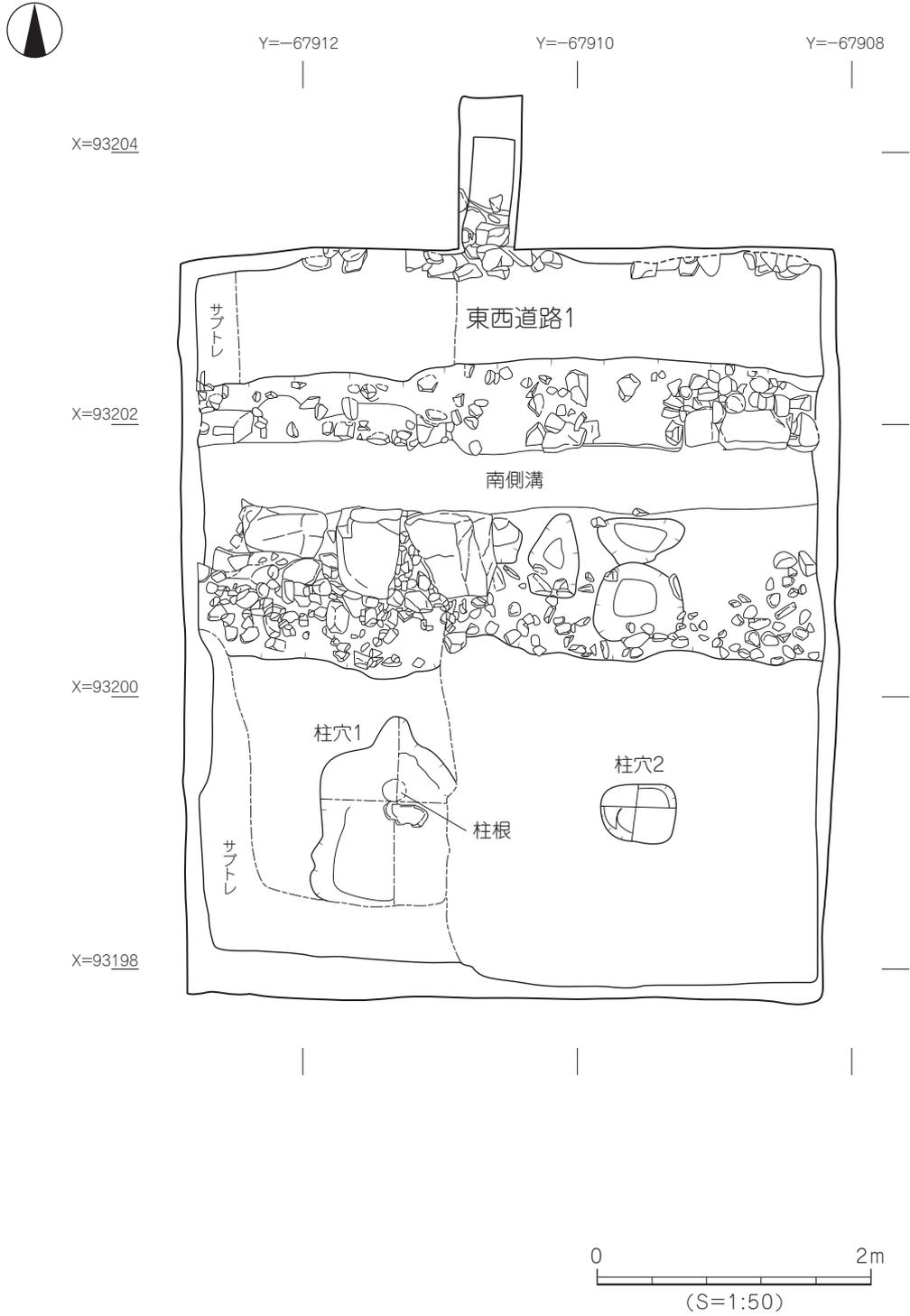


図5 7次 T10 平面図



写真1 7次調査 [西部] 遠景 (南西より)



写真2 7次 T1 完掘状況 (北西より)



写真3 7次 T2 完掘状況 (南西より)



写真4 7次 T5 硯出土状況 (北西より)



写真5 7次 T7 完掘状況 (北西より)



写真6 7次 T9 完掘状況 (北西より)



写真7 7次 T10 完掘状況 (西より)



写真8 7次 T22 完掘状況 (南東より)



写真9 7次 [東部]・8次調査遠景 (北東より)



写真10 8次調査T8石組土坑検出状況 (北より)



写真11 10次調査T1・3～5遠景 (北西より)



写真12 10次調査T2遠景 (南西より)



写真13 10次T3完掘状況 (南東より)



写真14 10次調査T4・5石列 (南西より)

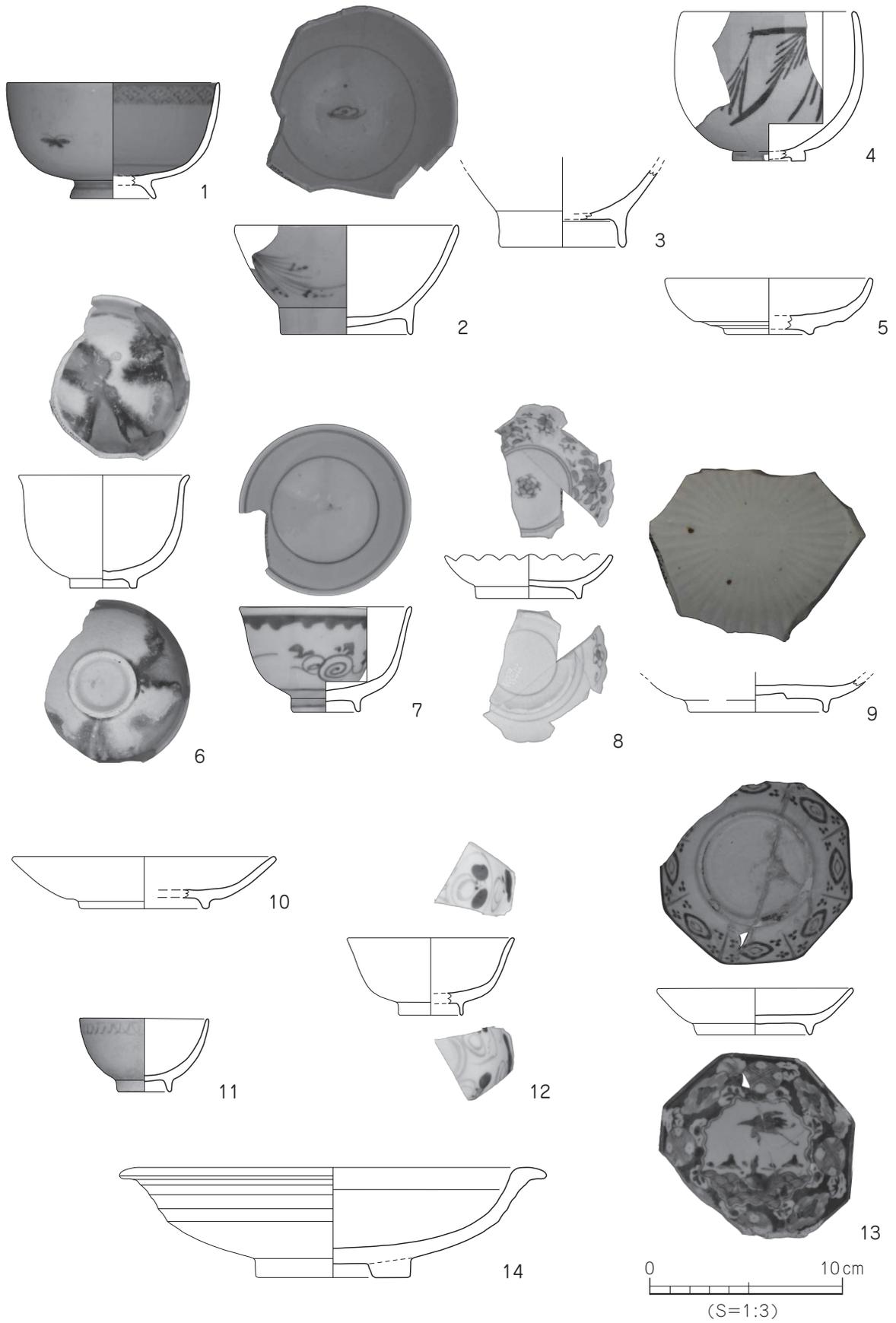


図8 7次出土遺物実測図(1)

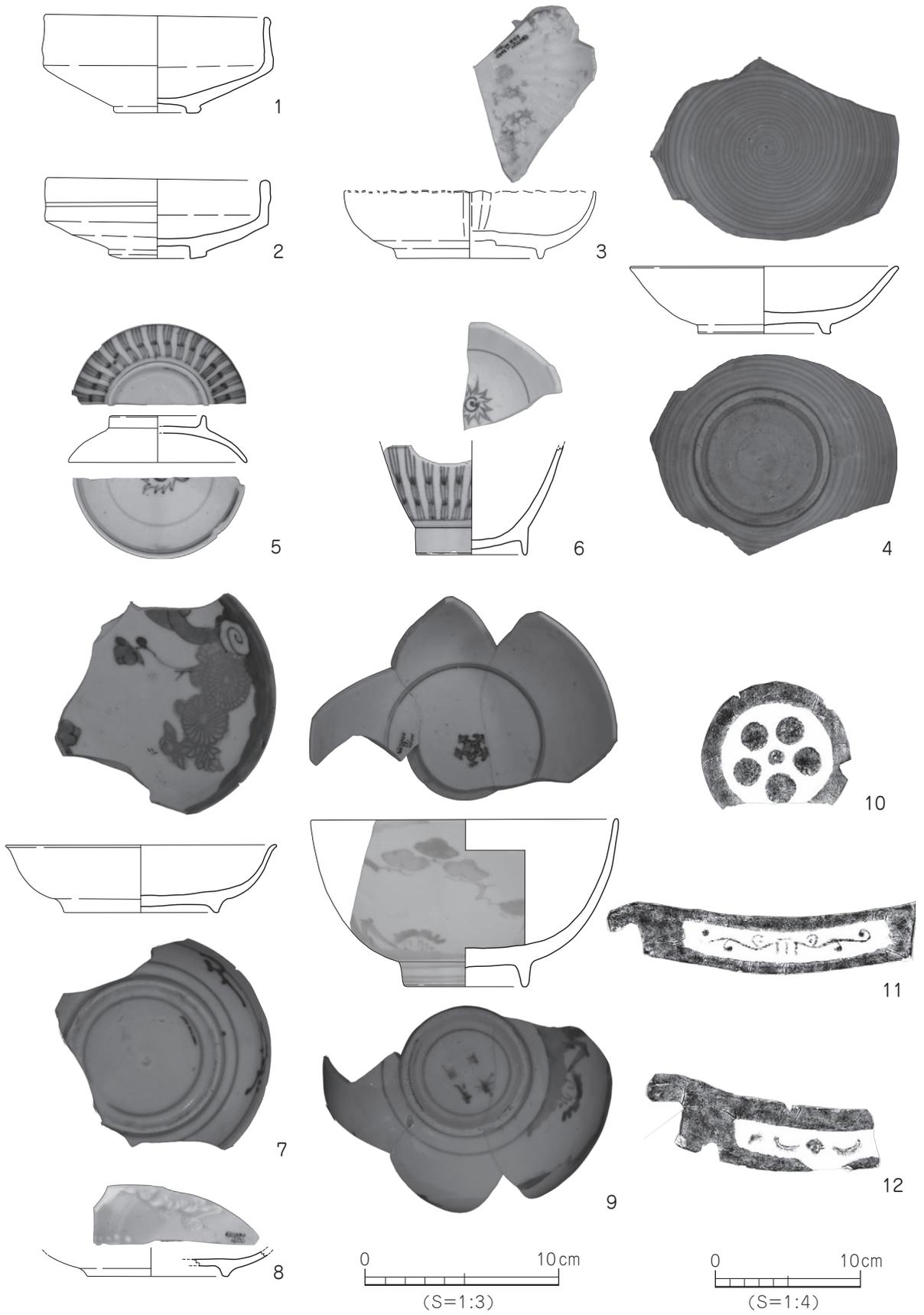


図8 8次出土遺物実測図

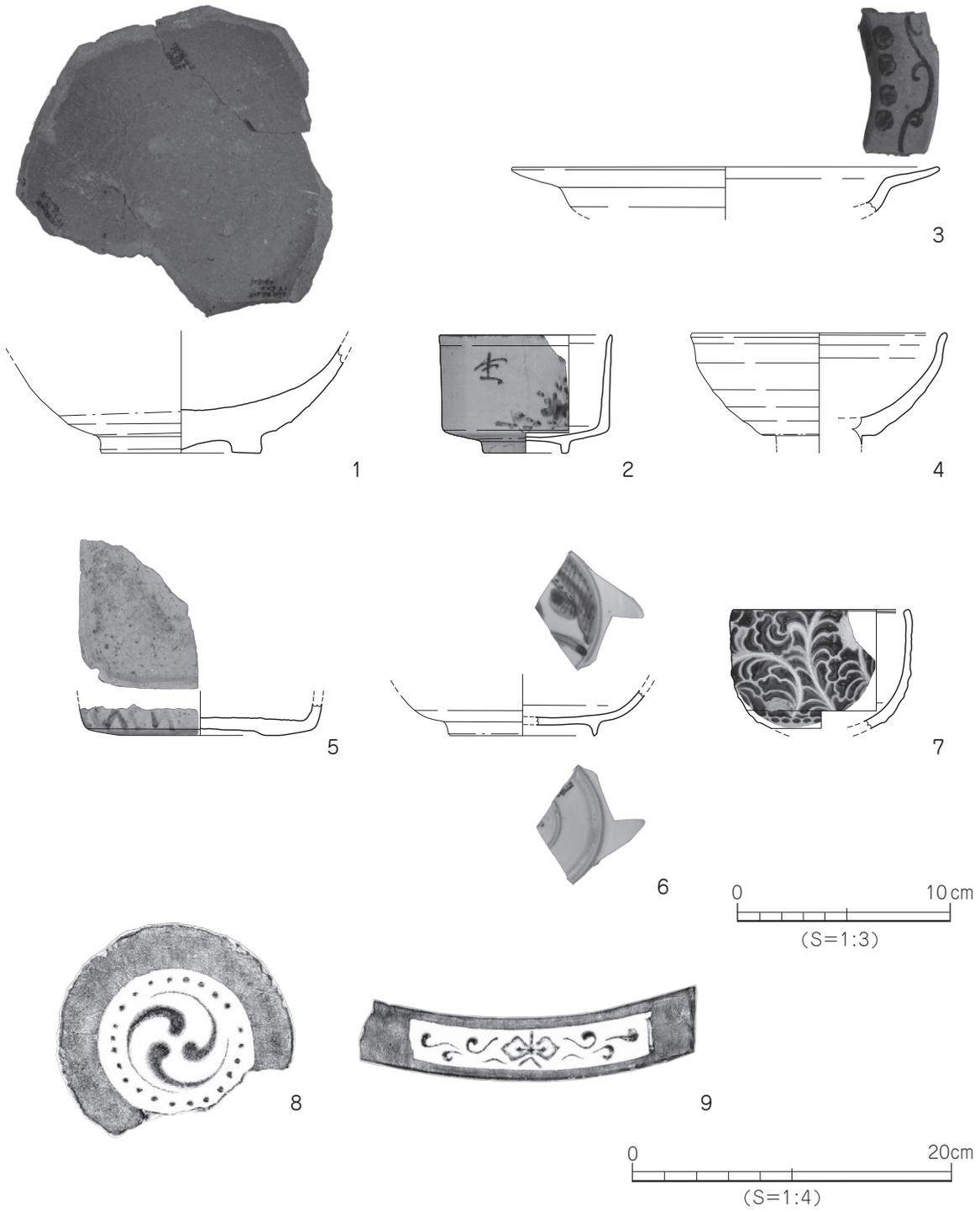


図9 10次出土遺物実測図

三之丸地区の調査

表1 三之丸跡7次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	T1 SK1	磁器	碗	(11.0)	6.1	(4.4)	透明	染付	肥前、花蝶文?
2	T2 SX1	磁器	碗 (広東)	(11.4)	5.7	(6.8)	透明	染付	砥部?、稲束文
3	T2 SX1	磁器	碗 (広東)	—	[3.5]	(6.4)	青磁		西岡?
4	T2 SX1	陶器	碗	(8.8)	7.8	(3.8)	透明	錆絵	京信楽、注連縄文?、「□」墨書
5	T3 石組溝1 埋土下層	陶器	皿	(10.6)	[2.9]	(4.4)	灰		肥前、底部露胎
6	T1 SK1	陶器	碗 (端反)	(9.2)	5.9	3.9	灰	掛け分け	瀬戸美濃?
7	T4 SK1	磁器	碗 (端反)	8.8	5.5	3.4	透明	染付	砥部、花蝶文
8	T4 SK1・2	磁器	皿	(8.6)	2.3	(5.4)	透明	染付	西岡、輪花 (型)、草花文、五弁花 (見込)
9	T5 SD1・2	磁器	皿 (菊)	—	[1.6]	[7.2]	透明		砥部、輪花 (型)、蛇の目凹型高台
10	T7 堀埋土	陶器	皿	(13.6)	2.7	(6.4)	灰	化粧土	瀬戸美濃 (刷毛目皿)
11	T7 堀埋土	陶器	小杯	6.6	3.8	2.6	透明	色絵	京信楽、重連弧文 (金彩、口縁)、蓮弁文 (銀彩、高台脇)
12	T13 南西隅 溝	磁器	碗 (端反)	(8.6)	4.05	(3.2)	透明	染付	瀬戸、霊芝文、口錆
13	T22 ゴミ穴	磁器	皿	10.2	2.4	5.9	透明	染付	肥前、八角 (型) 鶴亀文、焼継
14	T22 ゴミ穴	陶器	皿	(22.2)	5.8	(8.0)	灰		瀬戸美濃 (石皿)、窯道具痕

表2 三之丸跡7次出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
15	T5 SD1・2	硯	粘板岩?	17.5	7.1	(2.2)	294.1	「花見路や 蝶の飛び立つ あと於ゆく 寛亭」「又 (久) 五郎」刻書

表3 三之丸跡7次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
16	T5 石組溝2 南掘方	14.8	9.0	3.0	1.6	左巻三巴	(32)	0.4	灰・灰白	良好		
17	T2 かく乱4	15.0~ 15.5	10.8	2.2~ 2.5	1.7	左巻三巴	(20)	0.6	灰	良好		
18	T2 SX1	11.1	7.4	1.8~ 2.0	2.5	右巻三巴	12	0.4	灰	良好		小型

表4 三之丸跡7次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
19	T22 拡張区 造成土	(22.0)	4.0	(13.2)	1.8	4.6	1.7	灰	良好	○	宝珠 (上)	菊間?
20	T5 石組溝1 南掘方	—	4.5	(13.6)	2.7	—	1.3	灰	良好		三葉 (上、線)	軒塀瓦
21	T2 石組溝1 南側石抜き跡	(29.4)	4.9	(14.0)	2.9	(7.8)	1.8	灰	良好	○	三葉 (上)	軒棧瓦、東海式?、 面取

表5 三之丸跡8次出土遺物観察表 陶磁器 (1)

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	T2 南北道路 西側溝跡	陶器	鉢	(11.4)	5.1	4.3	鉄		関西?
2	T2 南北道路 西側溝跡	陶器	鉢	(16.2)	4.2	5.1	鉄		関西?、沈線

史跡松山城跡

表6 三之丸跡8次出土遺物観察表 陶磁器(2)

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
3	T3 西T東西 道路南側溝中層	磁器	皿(菊)	(12.9)	3.5	(7.5)	透明		砥部、輪花(型)、蛇の目凹型高台
4	T3 西T東西 道路南側溝中層	陶器	皿	(13.8)	3.5	6.8	灰	化粧土	瀬戸美濃(刷毛目皿)
5	T3 SK4	磁器	蓋	(4.9)	2.4	(9.1)	透明	染付	肥前、薬紐文? ※下記6(碗)と組
6	T3 SK4	磁器	碗(広東)	—	[5.7]	(5.7)	透明	染付	肥前、薬紐文? ※上記5(蓋)と組
7	T9 SK1(ゴミ 穴)	磁器	皿	(14.0)	3.5	(8.0)	透明	染付	肥前、菊花文(コンニャク印判[部分])
8	T9 SK1	磁器	皿	—	[1.3]	(8.0)	瑠璃		肥前、龍文(陽刻)
9	T9 SK1	磁器	鉢	(15.8)	8.7	6.2	透明	染付	肥前、遠山文?、五弁花(コンニャク印判、見込)

表7 三之丸跡8次出土遺物観察表 軒丸瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数				
10	T9 ゴミ穴	(10.5)	7.6	1.4	1.8	家紋 (星梅鉢)		灰	良好		菊瓦、面取

表8 三之丸跡8次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
11	T9(北部) ゴミ捨て穴	19.2	3.8	13.8~ 14.0	1.9	(右) 15~12	1.3	灰	良好		三葉? (下、線)	軒棧瓦、 棧部長2.7
12	9(北部) ゴミ捨て穴	—	4.5	(11.2)	2.0	(左) 3.9	1.8	灰	良好		桐?	軒棧瓦、 棧部長2.25

表9 三之丸跡10次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備
				口径	器高	底径			
1	T1 SP4	陶器	鉢	—	[4.9]	7.4	灰		肥前、底部露胎、胎土目痕(見込)、兜巾
2	T1 SK7	陶器	碗(筒型)	(8.0)	5.6	(3.85)	透明	錆絵	京信楽、草花文、口錆
3	T8 SK8	陶器	皿	(20.0)	[2.1]	—	透明	鉄絵	肥前(絵唐津)、唐草文
4	T2 SK2	陶器	碗(天目)	(11.8)	[5.25]	—	鉄		瀬戸美濃、底部露胎
5	T2 SK2	陶器	向付	—	[1.5]	(7.4)	長石	鉄絵	美濃(志野)、斜格子文?、碁笥底
6	T2 SK2	磁器	皿	—	[2.1]	(6.8)	透明		肥前、文様不明
7	T3 SK1	陶器	碗	(8.2)	[5.6]	—		色絵	京信楽、花唐草文?

表10 三之丸跡10次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数				
8	T1 SK10	14.5	9.5	2.5	1.9	左巻三巴	24	0.4~0.6	灰黄	良好	

表11 三之丸跡10次出土遺物観察表 軒平瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
9	T1 SK10	(21.0)	3.9	15.2	2.5	2.8	1.6	淡黄	良好		剣菱	軒棧瓦?

10. さんのまるあと 三之丸跡 9 次調査

所在地 松山市堀之内
 期 間 平成 20 年 3 月 3 日～同年 3 月 31 日
 面 積 約 88㎡
 担 当 西村 直人（文化財課）

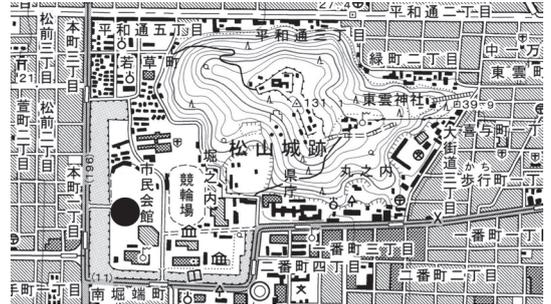


図 1 調査地位置図

経 過 城山公園（堀之内地区）第 1 期整備に伴い実施した確認調査である。3 次調査から連続する東西道路及び南北道路の確認を目的として、小規模な調査区を 2 箇所（T1、T2）設定した（図 2）。

遺構・遺物 道路跡、石列、廃棄土坑などを確認した。T1・2 ともに近代以降に攪乱を大きく受けている。また、東西道路 1 と南北道路 1 は、いずれも 3 次調査で確認した道路跡に連続する。

東西道路（図 2・3、写真 1～4）：T2 で確認した南側溝（石組溝 2）は検出長 1.8m、幅約 50cm を測る。T1 で確認した北側溝（石組溝 3）は南石組のみで、北石組が残っていないものの、土層観察から幅約 50cm 前後とみられ、両側溝を含めた道路幅は約 7.4 m と推測される。石材は幅 35cm 前後の砂岩及び花崗岩が使用される。また、北側溝（石組溝 3）の北側に並行して幅約 60cm の石列 1 が 3.5m 検出された。検出位置が 3 次 T1 の東西道路北側溝の西延長線上に当たり、さらに石列 1 の南に石組の抜跡と思われる土坑（SK6、SP2・5）が検出されたことから、石列 1 は石組溝の裏込石と考えられ、かつて同箇所に石組溝 3 とは別の東西の道路側溝（石組溝 4）があったと推測される。土層観察によると、石組溝 3 が石組溝 4 に先行することから、おそらく北への道路拡幅（≒屋敷地の縮小）に伴い、北側溝が石組溝 3 から石組溝 4 へ移設されたと推測される。移設の時期は不明であるが、拡幅後の道路幅約 8.3m は、万延元（1860）年の「松山御城下大絵図」に記された道路幅と概ね整合する。また、道路拡幅前の屋敷地の南端に当たる位置で検出された石列 3 と土坑（SK7）は、石組溝 3 に接する位置にあることから、屋敷内の排水桝の遺構とみられ、溝の移設時に撤去されたと推測される。そのほか、道路内から廃棄土坑が密に検出された。

南北道路（図 2、写真 1・5）：T1 で西側溝（石組溝 1）が確認された。検出長 1.2 m、幅約 80cm を測り、他の道路側溝（約 60cm）に比べやや広い。西石組は馬場土手と同時施工で、土手の土留めも兼ねているとみられ、東石組に比べ石材が大きく、石積方法も異なる。石材は主に花崗岩が使用される。また、西側溝（石組溝 1）の約 2.1m 東側に 3 次 T2 の SD2・3 の石列の延長線上にある石列 2 が確認された。この石列 2 を道路の東端とすると、道路幅は、側溝を含め約 2.9 m になり、「松山御城下大絵図」の記述と概ね整合する。そのほか、馬場土手の築造により埋立てられたとみられる溝 2 条（SD3・4）が確認された。

遺物は、主に江戸時代後期の瓦及び陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品などが道路側溝などから出土した。陶磁器は、肥前、瀬戸・美濃など多様である。

小 結 本調査では、三之丸の地割の変遷を知る上で良好な資料を得られた。道路の拡幅は、おそらく寛文元（1661）年の「杉馬場」の設置に関わるものと考えられる。他の調査成果と合わせて検討したい。

史跡松山城跡

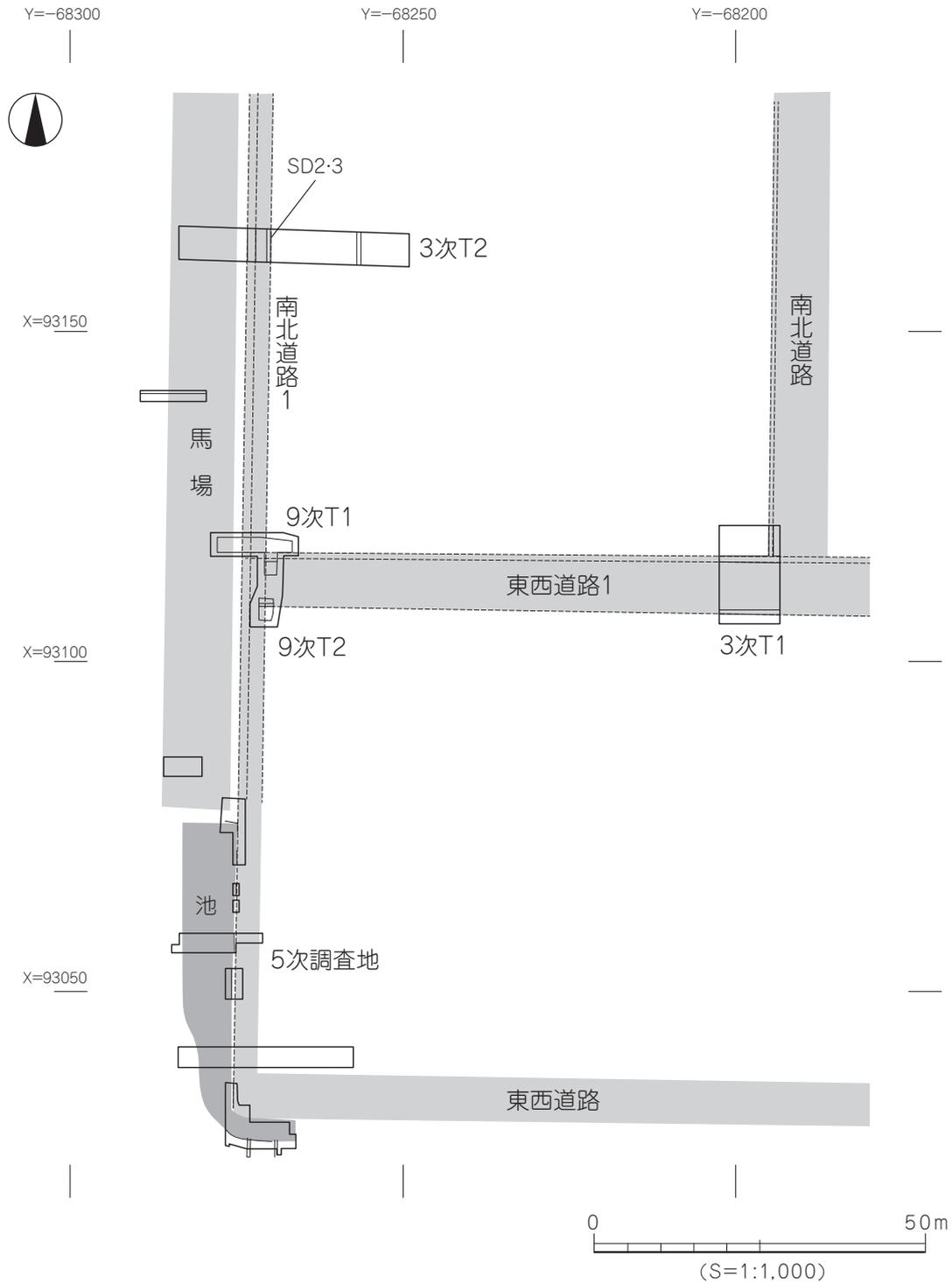


図2 トレンチ位置図

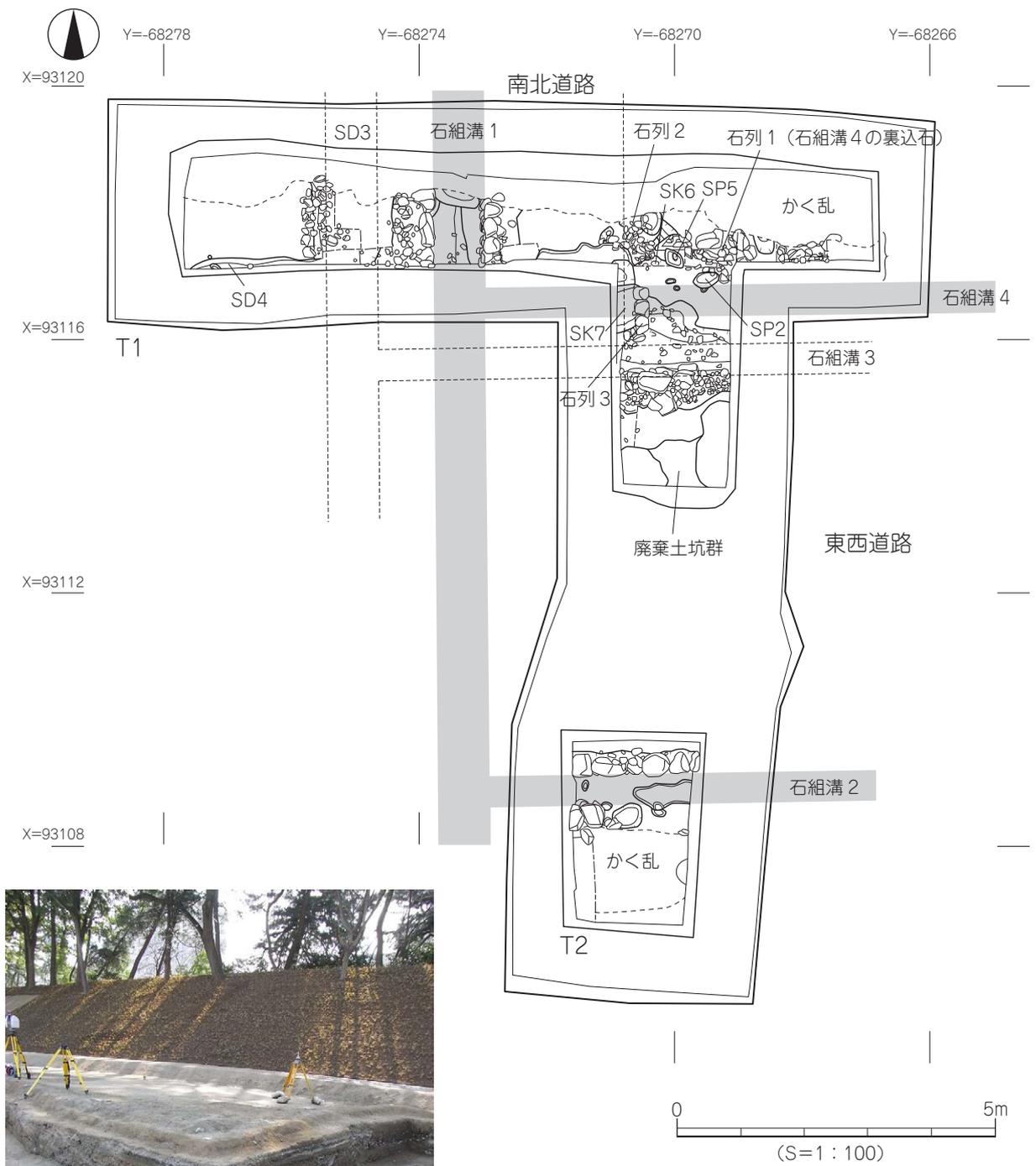


図3 T1・2平面図



写真1 T1遺構と土塁（北東より）



写真2 T1 石列 (北より)



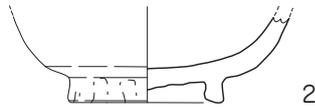
写真3 T2 石組溝2(南東より)



写真4 T1 東西道路北側溝 (左) 及び石組土坑 (右) (東より)

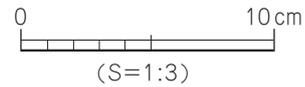


写真5 T1 南北道路7西側溝 (左) 及びSD3 (右) (北西より)



1

2



(S=1:3)

図4 出土遺物実測図

表1 三之丸跡9次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	石組溝3・4	磁器	皿	(8.5)	2.2	5.1	透明	染付	肥前?、輪花(型)、山水文、口鏝
2	石組溝3・4	陶器	碗	—	3.3	6.1	鉄		瀬戸美濃

さんのまるあと
11. 三之丸跡 11 次調査

所在地 松山市堀之内
期 間 平成 20 年 9 月 24 日～同 21 年 1 月 16 日
面 積 約 73m²
担 当 加島次郎

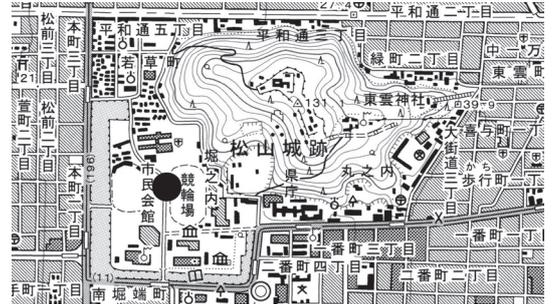


図 1 調査地位置図

経 過 三之丸跡 11 次調査は、これまでの調査と同様に、城山公園（堀之内地区）整備事業（第 1 期）に伴い、江戸期の三之丸に関連する地下の遺跡の内容や遺存状況、範囲等を把握するために行った事前の確認調査である。調査は、市営野球場と同競輪場の間の南北道路を対象として、9 箇所（T1～9）のトレンチを設定し、整備事業で園路として整備することを目指している江戸期の道路の確認を主目的として実施した（図 2）。

遺構・遺物 調査の結果、東西道路、南北道路等が確認された。

東西道路（図 2、写真 1・3～6・8）：北側の T2～9 で、道路南側の石組側溝（SD1）が確認された。西側の 4 次調査や東側の 6 次調査で確認された東西道路と一連のものと考えられ、後述の南北道路と接続して T 字路となる。SD1 は、幅 50～60cm、高さ約 35cm を測る。明治期以降のかく乱により遺存状況は悪かったが、部分的に積石が確認された。積石には、長さ 30～20cm の大型のものには硬質の円礫（川原石）や割石、長さ 15cm 程度の小型のものには軟質の砂岩が多く用いられており、大きさにより石材が使い分けられていた可能性がある。溝内の下層には、恒常的に水が流れていたことを想起させるやや粒の粗い砂が堆積しており、SD1 は、周辺道路のみならず、三之丸全体の排水にも一定の役割を果たしていたものと考えられる。なお、敷石は確認されなかった。また、道路面は、明治期以降のかく乱が著しく確認されなかった。

南北道路（図 2、写真 1～3・6～8）：北側の T9 で、道路西側の石組側溝（SD2）が確認された。「中ノ町」と表記された絵図が確認されており、北側で先述の東西道路と接続して T 字路となる。SD2 は、幅約 40cm、高約 25cm、検出長約 1.5 m を測る。明治期以降のかく乱により遺存状況は悪かったものの、部分的に積石が確認された。積石には、拳大～人頭大の円礫（河床礫）が用いられていた。溝内の下層には、SD1 のような砂ではなく、粘質土が堆積しており、恒常的には水は流れていなかったと考えられる。また、溝底の高さは SD1 と比べて 20cm 程度高いことから、SD2 は、周辺道路の排水が主な役割であり、三之丸全体の排水への貢献は大きくなかったものと考えられる。なお、敷石は確認されなかった。また、南側の T1 では、道路面と考えられる小礫が大量に敷かれた緑灰色粘質土の整地層が確認され、道路内には、これまでの調査と同様に、江戸後期の遺物等を大量に含む土坑（SK）が複数確認された。これらの土坑も、明治期に江戸期の建物等が撤去された際の廃棄土坑である可能性が高い。

小 結 以上のように、今回の調査を通じ、目的としていた江戸期の道路やその交差点が確認されるなど、今後の整備を考える上でも、不明な点の多い三之丸の歴史を考える上でも、重要な知見を数多く得ることができた。

史跡松山城跡

Y=-68120

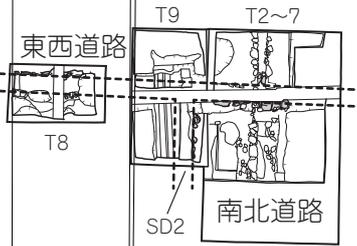
Y=-68110

Y=-68100



X=93290

SD1



X=93280

X=93270

X=93260

X=93250

X=93240

複数のSK T1

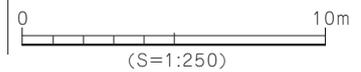


図2 トレンチ位置図



写真1 調査地全景 (北より)



写真2 T1 完掘状況 (北より)



写真3 T2～9 完掘状況 (東より)



写真4 T8 完掘状況 (北より)



写真5 T8SD1 検出状況 (西より)



写真6 T9 完掘状況 (北西より)



写真7 T9SD2 検出状況 (西より)



写真8 T9SD1・2 交差部分検出状況 (西より)

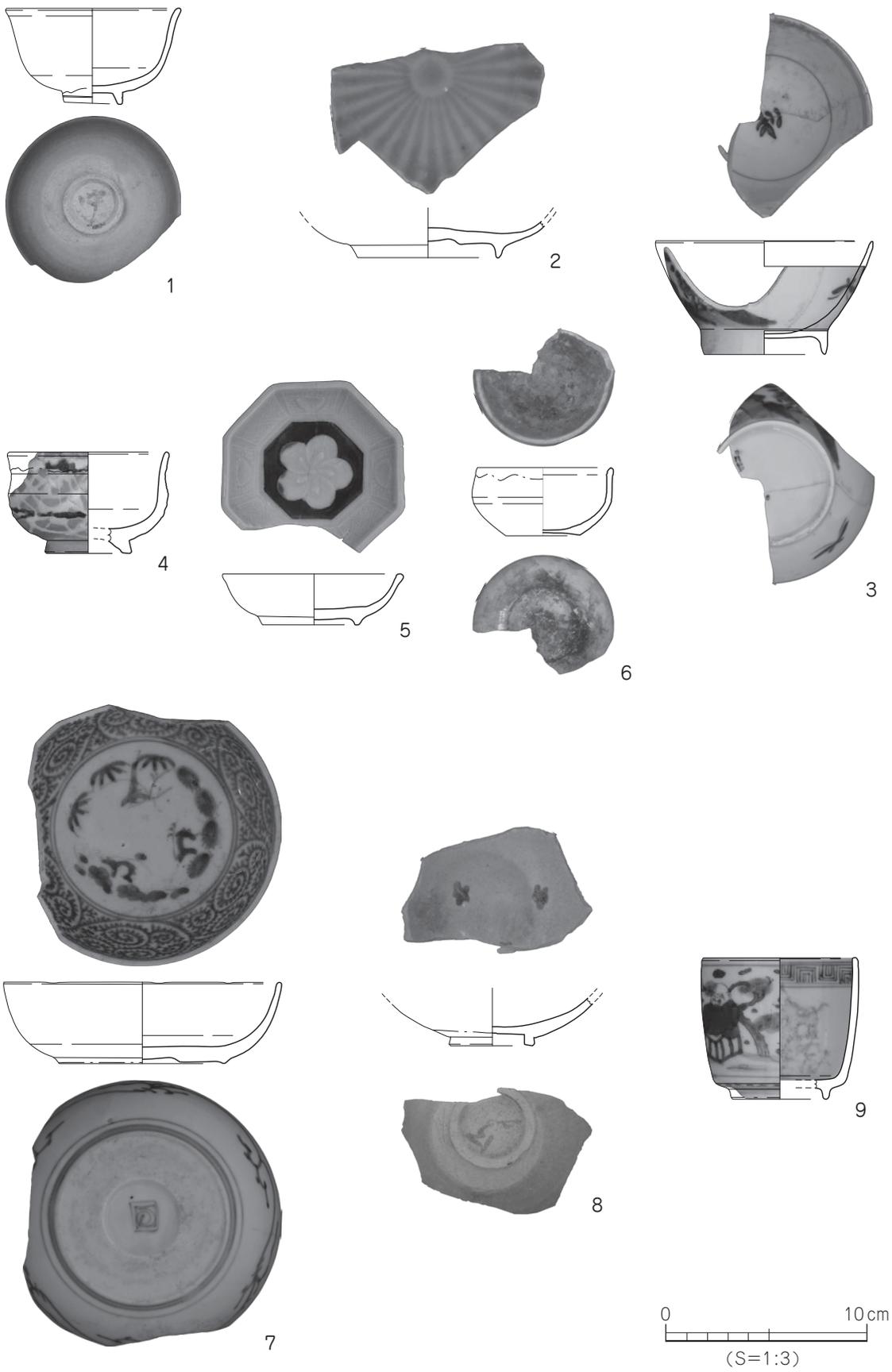


图3 出土遺物実測図(1)

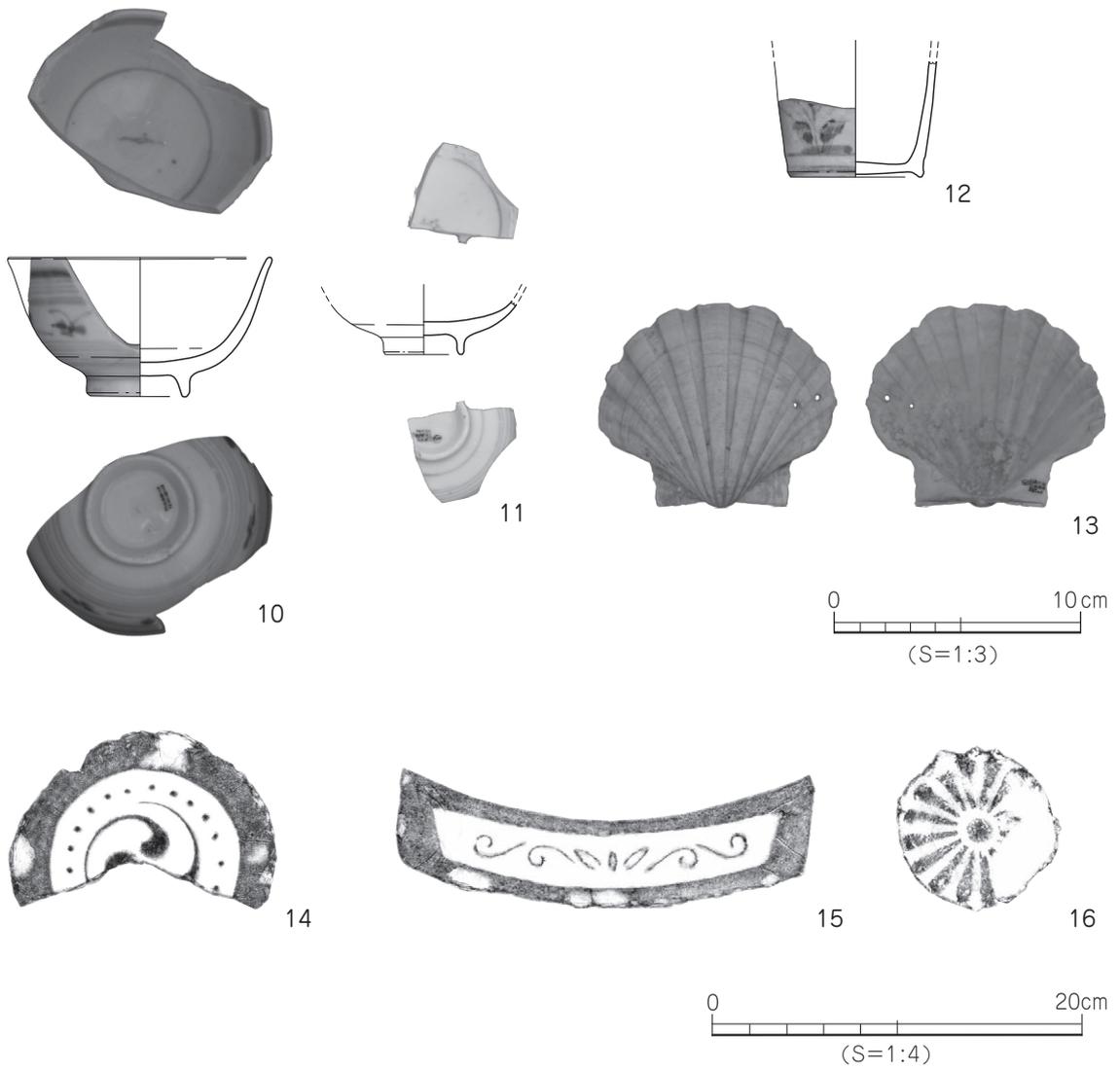


図4 出土遺物実測図(2)

史跡松山城跡

表1 三之丸跡 11次出土遺物観察表 陶磁器・その他の遺物

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	T1 拡張区 SK4	陶器	碗 (端反)	8.6	4.8	2.8	灰		京信楽、「阿？」墨書
2	T1 拡張区 SK4	磁器	皿 (菊)	—	[1.8]	(1.8)	青磁		砥部、輪花 (型)、蛇の目凹型高台
3	T1 SK4	磁器	碗 (広東)	(10.8)	5.65	6.0	透明	染付	肥前、花蝶文?、花卉文 (見込)
4	T1 SK4	陶器	碗 (腰張)	(7.8)	5.1	(4.15)	藁白 (内面)	ピラ掛け	萩
5	T1 SK4	磁器	皿	(8.9)	2.55	4.7	透明	染付	瀬戸、八角 (型)、梅文 (陽刻)、「勇」銘 (陽刻、高台内)
6	T1 SK4	陶器	片口 (小型)	6.6	3.4	3.7	褐 (口縁)		産地不明、煤付着 (底部)、有機物? 付着 (内面)
7	T1 SK4 (南半部)	磁器	皿	13.3	4.0	8.3	透明	染付	肥前、松竹梅文 (コンニャク印判 [部分]、見込)、蜻唐草文、蛇の目凹型高台、渦福銘
8	T1 SK5	陶器	皿?	—	[2.4]	4.1	灰	色絵	京信楽、花文 (青盛 [ハリ痕部]、見込)、「阿？」墨書
9	T2 SK1	磁器	湯呑碗	(7.6)	7.1	(4.7)	透明	染付	肥前、布袋文
10	T4 SK1	磁器	碗 (端反)	(10.6)	5.7	(3.9)	透明	染付	砥部、蝶文、重圈文
11	T8 西半部 東西方向 道路南側溝 東トレンチ断割り	磁器	碗	—	[2.2]	[3.1]	透明	染付	砥部、重圈文
12	T9 南半部 石組溝埋土	磁器	猪口	—	[4.7]	5.3	透明	染付	西岡?、花鳥文、被熱?

表2 三之丸跡 11次遺物観察表 貝製品

番号	出土場所	器種	材質	法量			備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	
13	T1 拡張区 SK4	杓子	イタヤガイ	8.45	9.7	31.3	

表3 三之丸跡 11次出土遺物観察表 軒丸瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
14	T8 西半部	13.8	6.7	2.0	1.4	左卷三巴	(22)	5~6	黄灰 灰白	良好		
15	T2 西トレンチ	—	[8.3]	—	2.0	菊	—	—	灰・灰オ リーブ	良好		菊瓦

表4 三之丸跡 11次出土遺物観察表 軒平瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
16	T8 西半部	22.2	4.5	18.5	2.1	16~22	23	黄灰・灰	良好		三葉 (上、線)	面取

12. 三之丸跡 13・15 次調査

さんのまるあと

所在地 松山市堀之内
 期 間 13次：平成21年8月18日～平成22年3月31日
 15次：平成22年9月1日～平成23年3月28日
 面 積 13次：約349㎡
 15次：約305㎡
 担 当 西村直人

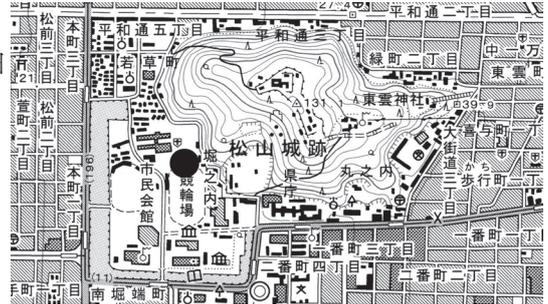


図1 調査地位置図

経 過 城山公園（堀之内地区）第2期整備に伴う確認調査である。競輪場跡地の北西部付近で、侍屋敷地一区画の範囲（13次調査）及び屋敷地内の建物等配置（15次調査）の確認を目的として実施した。13次調査では8箇所（T1～8）、15次調査では3箇所（T1～3）の調査トレンチを設定した（図2）。

遺構・遺物 調査の結果、石組溝、屋敷境、礎石建物跡、各種土坑及び井戸等が確認された。

石組溝（図2、写真2）：13次調査 T1・8 で確認された、南北道路の西側溝（SD102・105・801）は、幅約60cm、深さ50cm以上を測る。SD102・105両溝は数m離れているものの底面に単なる勾配とは考え難い高低差があることから、本来は底面に段が設けられていたと推測される。積石は根石1段を残すのみだが、遺構検出面の高さからみて、さらに1、2段積まれていたと考えられる。屋敷側の石材は幅約30cm前後の花崗岩が使用され、道路側は同規模の砂岩が使用される。屋敷側の裏込は築石面から奥行45cm前後で、裏込石は10～15cmの栗石である。また、屋敷地内から同溝に連結する瓦敷きの石組排水口が確認された。溝内から17世紀前半の陶器が出土した。

屋敷境（堀）（図2、写真3・4）：13次調査で概ね3時期の遺構が確認された。

第1期の遺構は、13次 T4・6 の整地層下で検出された柱穴列で、13次 T4 の柱穴列（SA403）は北の屋敷境、13次 T6 の柱穴列（SA601・602）は西の屋敷境である。SA403は径約55cmの柱穴6基が東西に約1.2～1.5m間隔で並ぶ。SA601は長径約80～100cm、短径約70cmの楕円形の大型柱穴が南北に連なって約1.2～1.3m間隔で並ぶ。SA602はSA601に重複して径40cm前後の柱穴3基が南北に約1.6m間隔で並び、2基は礎石が置かれる。また、T2・3のSD203・302は、SP301のような長径130cm短径90cm前後の楕円形の大型柱穴が連なった遺構とみられ、SA601と類似し、同軸線上にあること、及びSP301から17世紀初頭の陶器が出土したことから、1期の西の屋敷境の遺構と判断した。いずれも板堀跡と推測される。

第2期の遺構は、13次 T5・6 の整地層上で検出された溝で、13次 T5・6 の溝（SD501・603）は北の屋敷境である。東西に連続する布掘りの柱穴溝で、幅約60～100cm、深さ約90cmを測り、底面に礎石が1.2～1.3m間隔で置かれる。板堀跡と推測される。

第3期の遺構は、13次 T1～4・8 の整地層上で検出された柱穴列及び石列で、13次 T1・8 の柱穴列（SA101・801）は南北道路に面した堀、T4・5の柱穴列（SA401・402・501・502）と石列（石列1）は北の屋敷境、T2・3の石列（石列2・3）と柱穴列（SA301）は西の屋敷境である。SA101・SA801は、石組溝（側溝）の80cm西側で南北に並行し、径40～60cmの柱穴が約1.4m間隔で並ぶ。板堀跡又

は土塀跡と推測される。柱穴から19世紀の陶磁器が出土した。石列1は、第1期の屋敷境(SA403)の直上に位置し、幅約40cm前後の砂岩の角礫5石が東西に南面して並ぶ。背面には僅かに裏込石がみられ、前面に雨落ち溝とみられる幅約20cmの溝が沿う。また、石列1の約80cm北側に、SA401・402が東西に3.0～3.1m間隔で並行し、13次T5のSA501・502に連なる。石列1は土塀の基礎、各柱穴列は土塀の控柱と推測される。石列2・3は、南北に連続する遺構で、第1期の屋敷境(SD203・302)の直上に位置する。幅15～30cmの角礫や円礫がと東西両面を揃えて並び、幅は50cmを測る。石列間は、僅かに裏込石がみられる。石列の両側に接して雨落ち溝とみられる幅約40cmの溝が沿い、このうちSD201は対岸にも石列をもつ石組溝である。石列の約80cm東側にSA301が南北に並行する。径50～75cmの柱穴7基が、約1.4～1.6m間隔で並ぶ。板塀跡と推測される。北と西で屋敷境が異なるのは、北隣が役所(御勘定所)で、西隣が侍屋敷であることによる可能性がある。

礎石建物(図2、写真6・7)：15次T1・2の整地層下で礎石及び石列、溝が確認された。礎石は11基が確認されたほか、礎石の根石とみられる拳大の礫群が検出された。礎石は、径20～40cm、高さ8～16cmで、石間は、約1m(半間)及び約2m(一間)で、半間ごとに並ぶ南端の一行は、東石とみられる。石材は花崗岩および粘板岩が使用される。また、礎石群の南側及び東側に、礎石列にはほぼ並行する石列と溝が確認された。南側は検出長7.8m、東側は検出長6.0mで、東側は調査区外北に延びる。礎石建物を囲う犬走りの縁石雨落ち溝と考えられる。礎石を覆う整地層から17世紀前半の遺物が出土した。

井戸(図2)：13次T3で瓦積み井戸(SE301)、13次T4で桶積み井戸(SE401)、13次T6で石積み井戸(SE601)及び瓦積み井戸(SE602)が確認された。いずれも概ね屋敷地の端に位置し、径約60～90cmを測る。SE401から19世紀前半の陶磁器及び木札、漆碗が出土した。

また、15次T1・2で桶積み井戸が2基(SE1・3)確認された。径はいずれも約70cmで、SE1は深さ80cm以上、掘方径約130cm、SE3は深さ約85cm、掘方径約125cmを測る。SE1は幅10cm、厚さ約8mmの板材21枚が井戸枠として縦に使用される。SE3は厚さ約3mmの薄い板が曲げ物のように横に使用され、最下部には底板が敷かれる。いずれも瓦を主体として少量の陶磁器が出土し、SE3からは17世紀前半の陶器及び漆碗が出土した。

廃棄土坑(図2)：13次では、T5以外の全トレンチで検出された。大型は屋敷地東側に集中し、T4は特に密である。平面形が正円に近いものもあることから、井戸を廃棄土坑として利用した可能性がある。19世紀の陶磁器が多く出土した。15次のT1では整地層上で15基が確認された。大型は南東部に集中し、10基以上が重複している。17世紀前半から19世紀前半まで遺物が出土した。

瓦積み土坑(図2、写真8)：15次T1で2基(SK4・9)が検出された。いずれも平面形が角丸長方形を呈し、SK4は長軸約2.6m、短軸約1.7m及び深さ26cm、SK9は検出長約2.2以上、短軸約1.3m以上及び深さ16cmを測る。大量の瓦と僅かな陶磁器が出土した。瓦はほぼ平積みされ、土坑中央付近に30～40cm大の花崗岩が置かれる。上層は雲母を多く含んだシルト質土で埋められる。局所的な整地の類と思われる。

水溜遺構(図2)：13次T1・4で2基(SK407・402)が検出された。屋敷地内の北東部にあたり、いずれも整地層上面での検出である。SK407は東西に長い不整形で、東西約8m、南北約3m、深さ約30cmを測る。17世紀後半の陶磁器が出土した。SK402は、東西に長い隅丸方形で、東西長約4.5m、南北約2.5m、深さは約45cmを測る。SK407を瓦混じりの粘土と砂で埋め戻すとともに造られ、南辺

及び西辺に粘土、北辺は等間隔に並ぶ杭跡が確認された。また、東端は先述の瓦敷きの排水口に連結する。このことから、排水はオーバーフローにより排出される仕組みであると考えられる。瓦が多くを占めるなか、遺構南部から中央にかけて波佐見焼の青磁鉢と大量の土師器皿が集中して出土した。陶磁器は、これまでと同じく肥前系が多くを占め、京・信楽系、瀬戸・美濃系など各地のものが散見される。特徴的なものとしては、絵唐津皿や志野織部向付、初期伊万里碗、御深井釉碗、蓮華、高麗青磁壺などがある。そのほか、煙管や銅銭などの銅製品、鉄釘、火打石の破片のほか両面印などの石製品、ガラス製の筭、漆碗などが出土した。

小 結 屋敷境については、3時期の遺構を確認することができた。また、6次調査成果と併せた検討により、屋敷地の四辺の長さは南北約 34.5 m (約 17 間 5 尺)、東西 37.5 m (約 19 間) となり、敷地面積は約 1300㎡と推測される。これは、県民館跡地(現、県立美術館)発掘調査で確認された侍屋敷とほぼ一致し、このことは、堀之内の侍屋敷に一定の規格があることを示唆するものである。

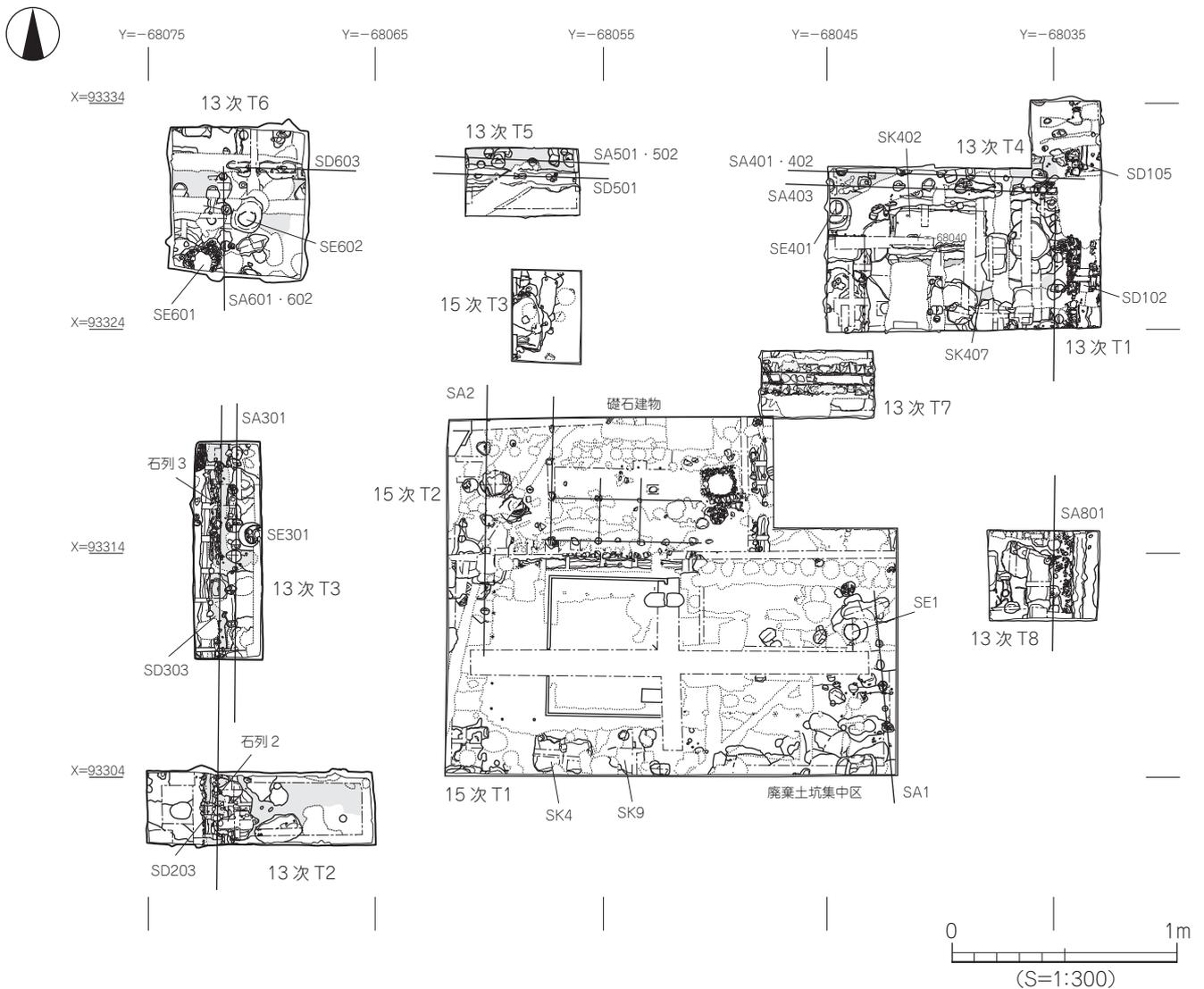


図2 調査区位置図



写真1 13次 調査地全景 (南西より)



写真2 13次 T1 SD105 (北より)



写真3 13次 T3 土塀基礎及び SD301 (南西より)



写真4 13次 T5 SA501 及び SA502 (南東より)



写真5 15次 調査地全景 (南西より)



写真6 15次 T2 全景 (南西より)

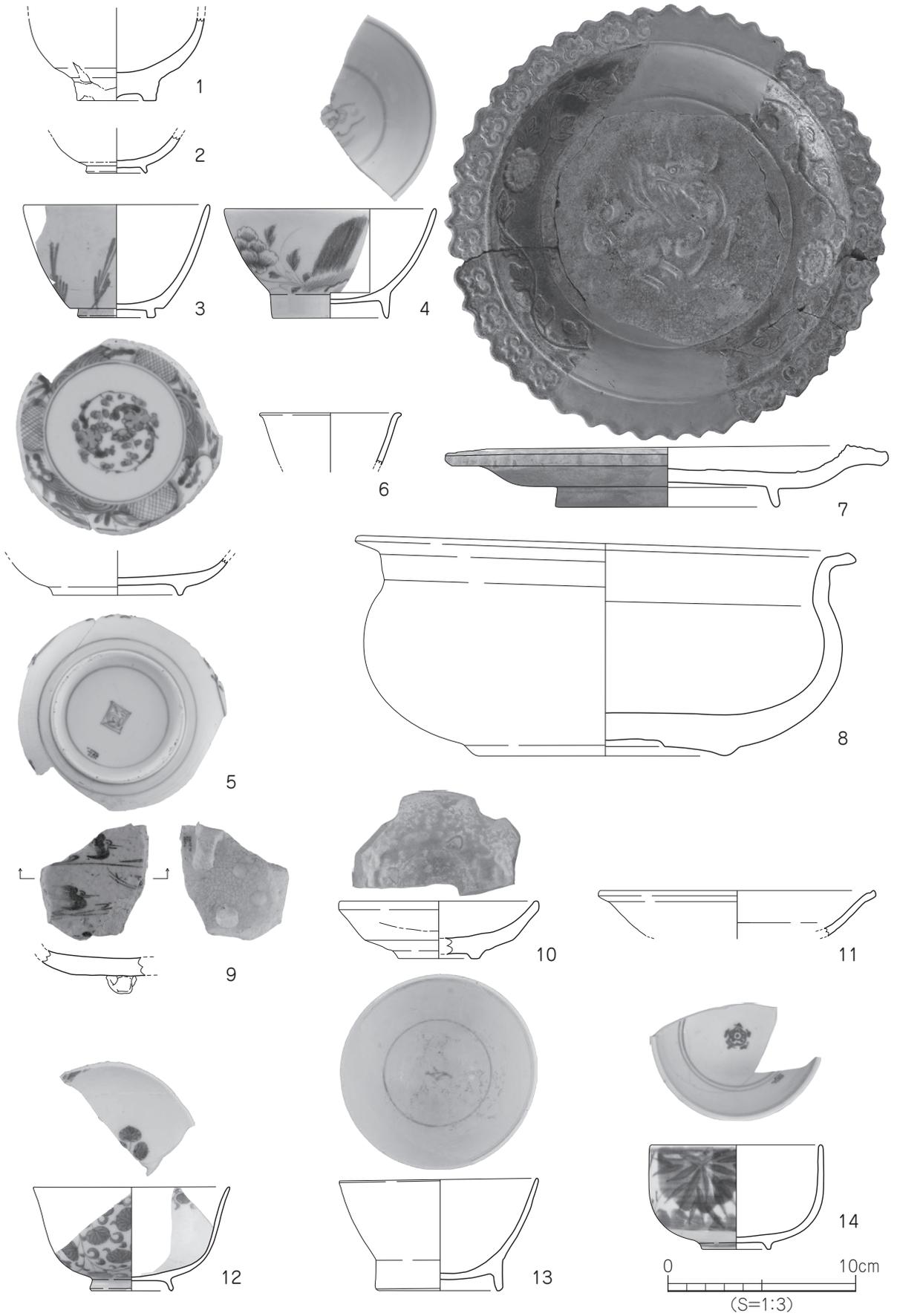


写真7 15次 T1 SD1 (南東より)

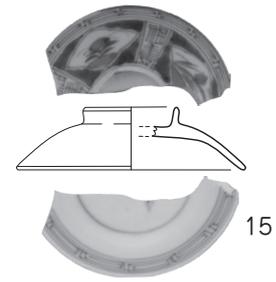


写真8 15次 T1SK4 及び SK9 (北西より)

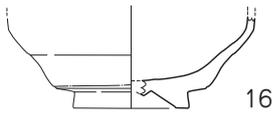
三之丸地区の調査



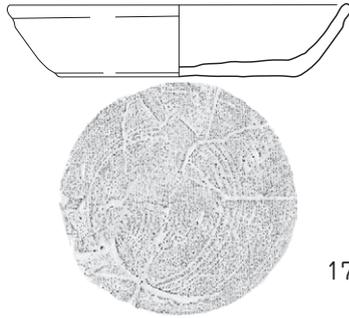
史跡松山城跡



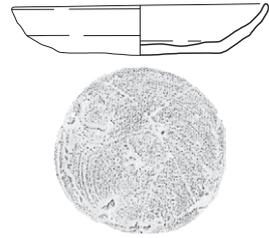
15



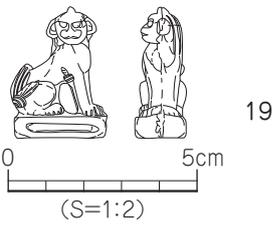
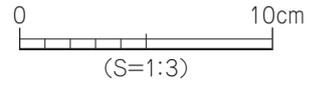
16



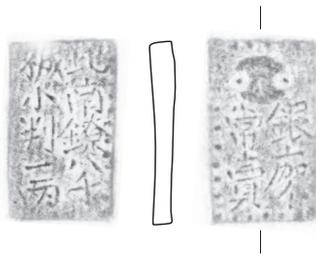
17



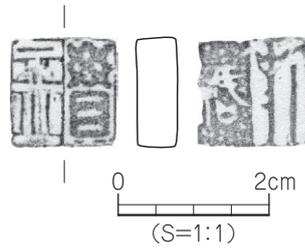
18



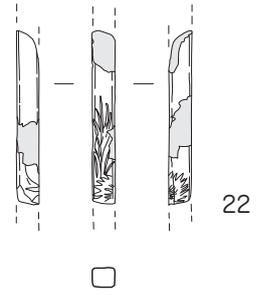
19



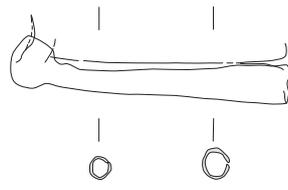
20



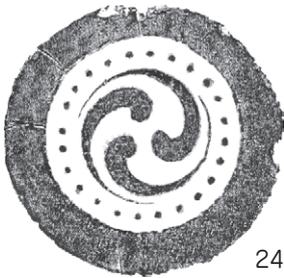
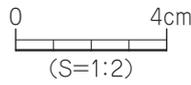
21



22



23



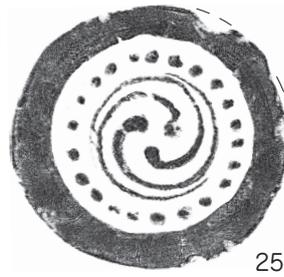
24



26



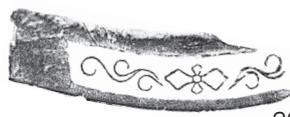
27



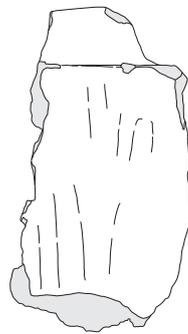
25



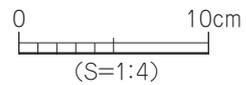
28



29



30



三之丸地区の調査

表1 三之丸跡 13・15次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	13次 SD105	陶器	碗		[4.4]	(4.2)	灰		肥前、底部露胎
2	13次 SP101	陶器	碗		[2.0]	(3.0)	透明		京信楽
3	13次 SK104	陶器	碗(広東)	10.0	6.1	4.2	透明	鏤絵	京信楽(小杉碗)、若松文
4	13次 SK104	磁器	碗	(11.2)	5.9	(6.2)	透明	染付	肥前、牡丹文
5	13次 SK402	磁器	皿		[2.0]	(6.8)	透明	染付	肥前系、梅文(コンニャク印判、見込)
6	13次 SP303	磁器	碗(端反)	7.4	[2.8]		透明		肥前
7	13次 SK104	陶器	皿(源内焼)	23.6	3.3	11.7	白釉		讃岐(源内焼)?、麒麟文(陽刻)
8	13次 SK402	青磁器	鉢	26.2	11.8	13.0	青磁		肥前(波佐見)
9	13次 SP301	陶器	向付		[2.3]		長石	鉄絵	美濃(志野織部)、千鳥文、脚付
10	13次 SP508	陶器	皿	(10.6)	3.1	(4.2)	灰		肥前系 砂目痕
11	15次 SE3	陶器	皿	(14.4)	[2.4]		灰		肥前(溝縁皿)
12	15次 SK13	磁器	碗(端反)	(10.4)	5.6	(4.2)	透明	染付	端反 葵唐草文
13	15次 SK21	磁器	碗(広東)	10.5	6.0	6.4	透明	染付	砥部
14	15次 SK20	磁器	碗	(9.0)	5.6	3.7		染付	肥前、笹文、五弁花(コンニャク印判、見込)
15	15次 SK23	磁器	蓋	(9.0)	2.5		透明釉	染付	肥前、花卉文、「福寿」字文
16	15次 SK5	陶器	碗			(4.6)	薬白		萩

表2 三之丸跡 13・15次出土遺物観察表 土器・土製品

番号	出土場所	種別	器種	法量			調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
17	13次 SK402	土師	皿	(13.4)	2.9	(9.2)	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ	橙	石・長(1~2) ◎	
18	13次 SK402	土師	皿	10.0	2.1	6.4	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ	明褐・暗褐 明褐	砂粒、金、赤 ◎	
19	13次 T5 西壁サ プトレンチ	土師	土人形・狛犬		3.5		ナデ	ナデ	灰白	密、金 ◎	
20	13次 SK801	土師	ままごと道具・銭		2.4				橙 橙	密 ◎	

表3 三之丸 13・15次出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
21	13次 SD104	両面印	滑石	1.4	1.5	0.56	2.92	「貫孟」「仲君」

表4 三之丸 13・15次出土遺物観察表 ガラス製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
22	15次 T3 SK34	簪	ガラス	(4.6)	(0.6)	(0.6)	4.99	

表5 三之丸 13・15次出土遺物観察表 金属製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
23	15次 SK1	煙管	銅	7.3	1.4	1.1	8.846	

表7 三之丸 13・15次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量						色調	焼成	キラ粉	備考	
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数					珠文径 (cm)
24	13次 SK104	14.4	10.4	2.0	1.5	左巻三巴	(24)	0.5	灰	良	○	
25	15次 SK1	14.8	10.6	2.1	1.6	左巻三巴	22	1.9	黒	良好		

表8 三之丸 13・15次出土遺物観察表 軒平瓦・その他の瓦

番号	出土場所	法量						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
26	13次 SK104	22.4	4.1	13.7	2.4	5.0	1.6	暗灰	良好	○?		
27	13次 SK402	(23.2)	4.2	(16.8)	2.6	3.3	1.4	灰・灰白	良好			板塀
28	15次 SK16	-	4.1	-	2.0	-	1.6	灰	良	○		板塀
29	15次 SK2	(20.0)	4.8	(13.4)	2.0	3.3	1.6	黒	良好			
30	15次 SK13	-	-	-	-	-	-	暗褐・黒褐	良			丸瓦・ コビキA

さんのまるあと
13. 三之丸跡 14・16・17次調査

所在地	松山市堀之内 12 番、13 番 1、13 番 9
期 間	14 次：平成 22 年 1 月 29 日～同年 2 月 25 日 16 次：平成 25 年 9 月 20 日～平成 26 年 2 月 10 日 17 次：平成 26 年 9 月 24 日～平成 26 年 12 月 26 日
面 積	14 次：約 39㎡、16 次：約 187㎡、17 次：約 214㎡
担 当	14 次：西村直人、16 次：吉岡和哉、 17 次：河野史知

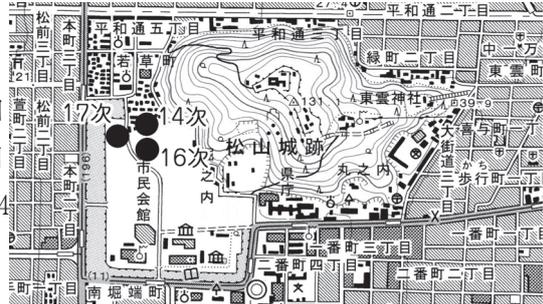


図 1 調査地位置図

経 過 城山公園（堀之内地区）第 2 期整備に伴う確認調査である。「三之丸御殿」の範囲及び西辺と南辺に隣接する道路、並びに北土塁の南裾及び馬場土手の北端を確認することを目的とし、14 次調査では 1 箇所、16 次調査では 4 箇所（T1～4）、17 次調査では 3 箇所（1～3 区）の調査区を設定した（図 2）。「三之丸御殿」とは、貞享 4（1687）年に松平定直によって造営された藩庁兼藩主の住居のことで、明治 3（1870）年に焼失している。

遺構・遺物 三之丸御殿の石垣及び道路、並びに土塁裾などが確認された。

三之丸御殿（図 3・4、写真 1・2）：14 次、16 次 2～4 区及び 17 次 1・2 区で、西辺と南辺の石垣が確認された。主に根石を残すのみで、地山である粗砂層の直上に据えられ、胴木は使用されていない。石材は全て花崗岩である。御殿南西の角石は、東西 121cm、南北 53cm、高さ 45cm 以上の直方体であることから、隅角部は算木積みであったとみられる。また、築石は幅 60～80cm 前後、高さ 45cm 前後のものが多く、表面に細かな簾状の調整痕が残る。裏込の範囲は石垣面から奥行約 220cm と広く、裏込石は 15～20cm 大の比較的大振りな栗石が多い。「亀郭城秘図」や「松山城下図屏風」には、三之丸御殿の南西隅に二階建ての櫓が描かれていることから、確認された石垣と裏込めは、この隅櫓に伴うものである可能性が高い。

道路（図 4、写真 3～6）：16 次 1～3 区で御殿南側の道路（東西道路）が確認された。幅は側溝を含めて約 8.9m で、北側溝は幅 68cm、南側溝は幅 54cm を測る。北側溝は近代以降に狭められているとみられ、元は幅 110cm 前後あったと推測される。南側溝の南石組は 55～80cm の御殿とほぼ同じ大きさの花崗岩が使用され、裏込石が密に詰められていることから、御殿の南正面にあったとされる「会所」北辺の石垣の根石と考えられる。

また、16 次 4 区及び 17 次 1・2 区では、御殿西側の道路（南北道路）が確認された。幅約 8.9m（側溝含む）で、東側溝 56cm、西側溝 65cm を測る。西側溝の西石組は 50～65cm のやや大きな石材が使用され、裏栗石が密に詰められていることから、御殿の西にあったとされる「春屋」東辺の石積（石垣）の根石と考えられる。

石組溝（図 2・5、写真 7）：17 次 1 区で、東西方向の幅広の石組溝が確認された。北御門広場と南北道路の境界に位置する。南北道路東側溝（御殿西辺溝）から西に垂直に繋がり、西端は調査区外に延びる。溝底が東から西へ傾き、約 8cm の比高差をもつことから、三之丸御殿周囲の道路側溝からの水を合流させ、西へ送るための排水溝と考えられる。幅は約 125cm と道路側溝と比べて幅広で、溝

の石組は両側とも基本1～2段で、角石は扁平な石が3段積まれる。このうち、南北道路北端の角と北御門広場東南角の天端3石は、長さ58～64cmと大きい長方体で、上面は平らな面をなし、外側の縁に橋のズレを固定するための突起が削り出し加工されている。溝の中軸には、橋脚の土台とみられる扁平な円礫21石が東西に並ぶ。橋材は出土していない。

土塁（図6・7、写真14～18）：17次2区及び3区では、三之丸北土塁の南裾が確認された。2区では土塁裾に裏込石とみられる栗石列が検出されたことから、この南側に石組の排水溝又は石垣が設けられていたと推測される。また、南北道路東側溝の北延長線上に土塁西端とみられる石列があることから、南北道路東側溝が元は連続し、北御門広場は、北土塁の南西部を切り欠くように広がっていたと推測される。土層観察によると、土塁の傾斜角は45°で、一時期は中段が存在していたとみられ、柱穴が確認された。17次3区では、土塁の裾の勾配が26度で、概ね3回の工程で構築されていることが分かった。馬場土手の北端は明確ではないものの、推定位置に僅かな高まりが検出された。

遺物は、道路直上及び側溝から、多くの瓦のほか肥前系を中心とする京・信楽系、瀬戸・美濃系、砥部などの陶磁器が出土した。また、16次2区の北側溝周辺において星梅鉢文鬼瓦片、16次3区では、星梅鉢文鬼瓦、星梅鉢文の彫られた金銅製飾金具、「出納」と墨書された砥部焼の輪花皿、大筒の鉛玉等が出土した。埋土及び覆土が焼土及び炭化物を多く含むこと、並びに遺物の所属時期から、明治3（1870）年の三之丸御殿焼失時の遺物と推測される。

小 結 本調査では三之丸御殿の西辺と南辺の石垣とこれらに沿う東西道路及び南北道路を確認することができた。三之丸御殿の石垣は根石のみであったが、抜取りの痕跡から、築石も比較的大きなものであった可能性が高い。さらに裏込石の奥行から考えても、一定の高さを有し、絵図等に描かれるような多聞櫓や二階の隅櫓が建てられる石垣であったと考えられる。遺物は、三之丸御殿特有の遺物の多く出土した。とりわけ「出納」と墨書された砥部焼の輪花皿（菊皿）は、明治元年（1868）に藩政改革を実施した際に設置した会計局の分課「出納司」を示している可能性が高く、歴史を語る遺物として貴重である。今後の三之丸御殿内の調査が期待される。



図2 調査区位置図

史跡松山城跡

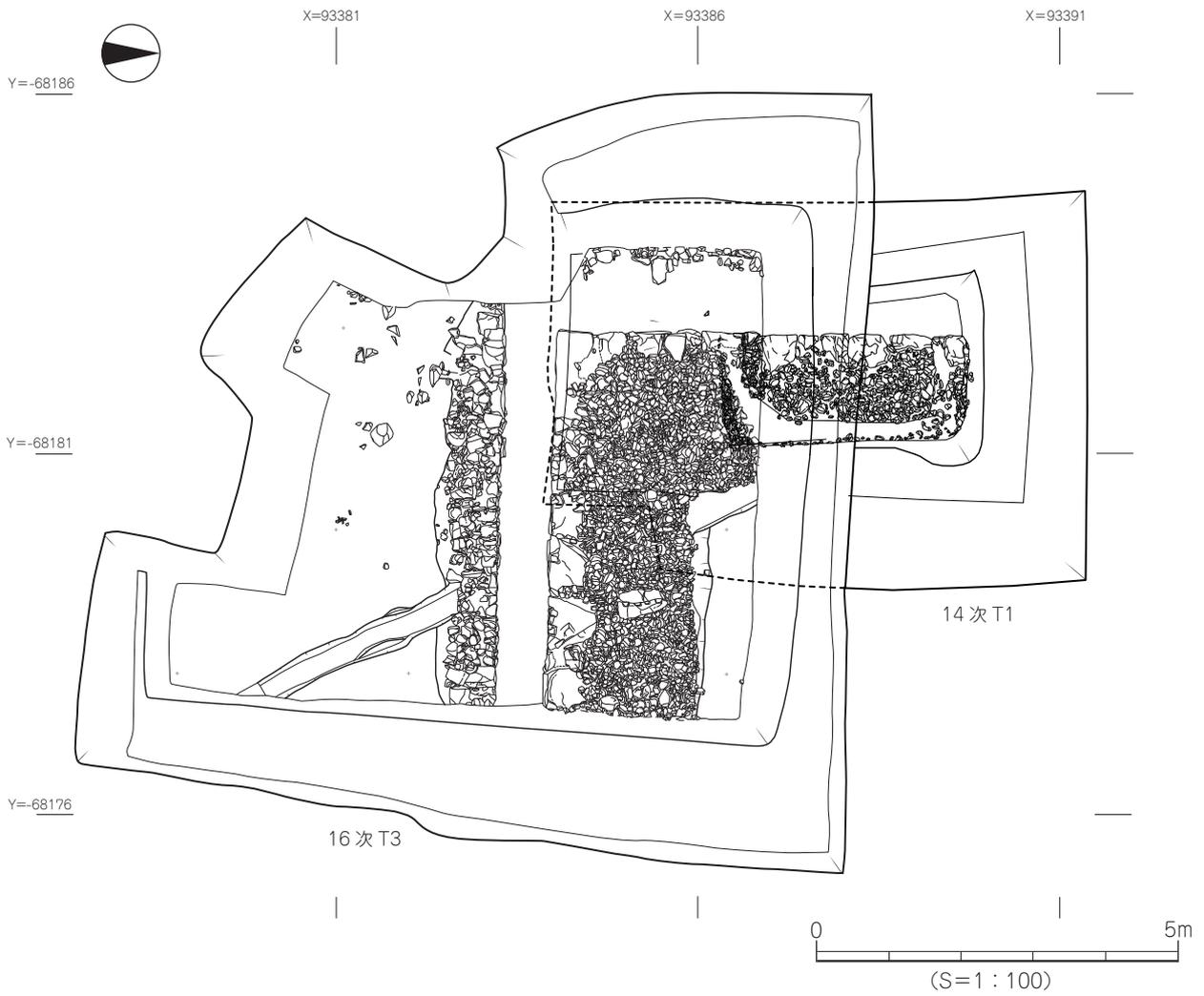


图3 14次・16次3区平面图

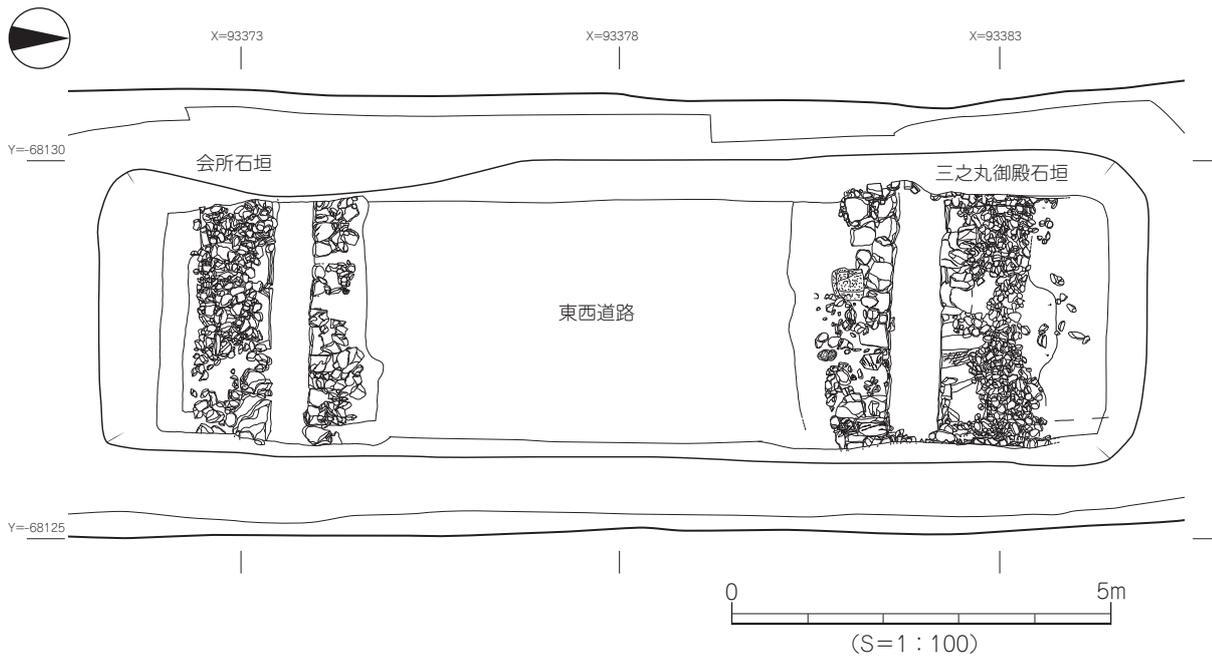


图4 16次2区平面图

三之丸地区の調査



X=93459

X=93455

X=93451

Y=-68178

Y=-68182

Y=-68186

Y=-68190

Y=-68194

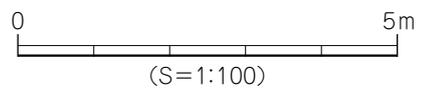
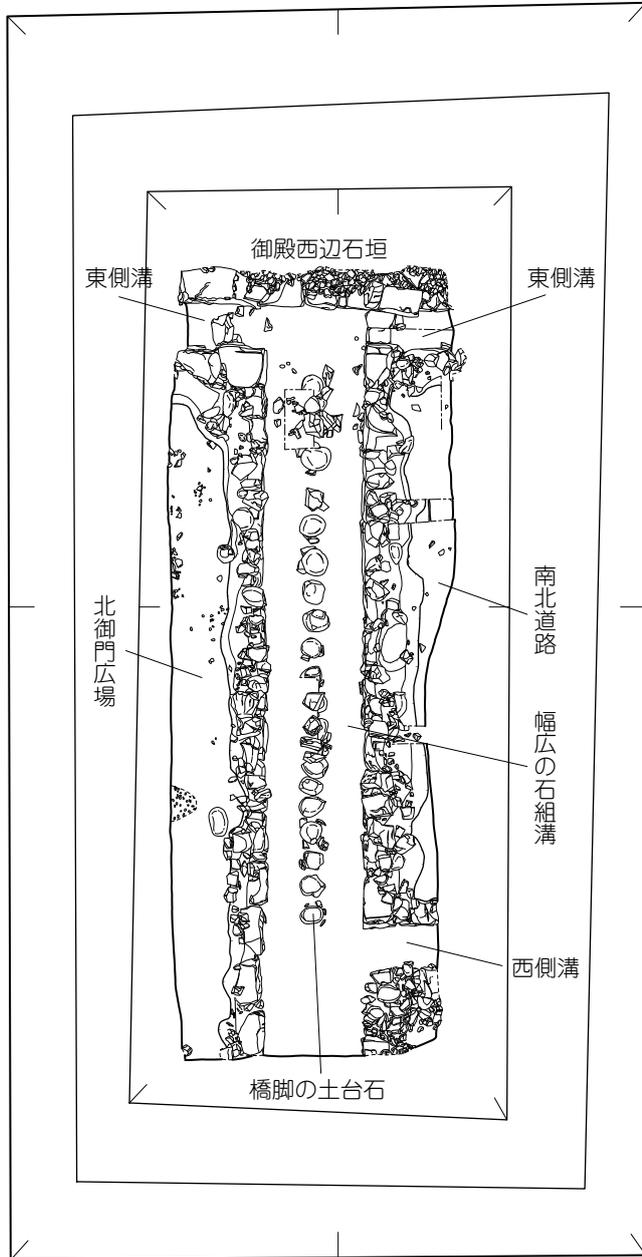


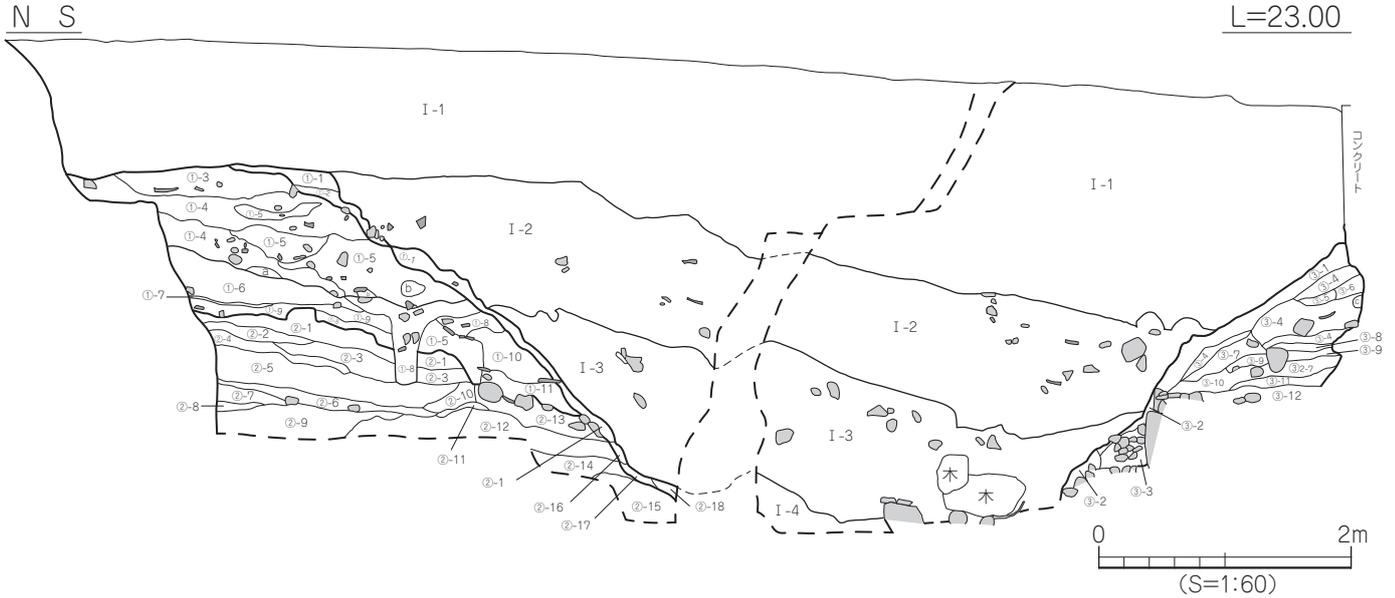
図5 17次1区平面図

史跡松山城跡



図6 17次2区平面図

三之丸地区の調査



- I-1 明黄褐色土 [10YR6/6] シルト。1～40mmの小礫、礫、コンクリートを含む。
- I-2 黄灰色土～褐色土～緑灰色土の互層 [10YR7/8]
- I-3 緑灰色土～オリーブ黄色土の互層 [10G5/1] ～ [5Y6/4]
- I-4 暗灰色シルト [N3/0]
- ①-1 黒褐色土 [10YR3/2] 粘土。1mm程度の細礫を含む。瓦あり。
- ①-2 黄灰色土 [2.5Y4/1] 粘土。やや粘質。黄色ブロック、炭化物含む。
- ①-3 黄褐色土 [2.5Y6/4] シルト。1mmの細礫、10mmの礫、瓦、明黄褐色、赤褐色シルト等のブロックを含む。
- ①-4 暗オリーブ褐色土 [2.5Y3/3] やや軟質。シルトを主とした1mm程度の粗砂を含む。砂質土状。瓦、20～30mmの礫あり。
- ①-5 暗灰色土 [2.5Y5/2] シルト1mm程度の粗砂20mm程度の石、瓦、褐色シルトのブロックを含む。
- ①-6 にぶい黄色土 [2.5Y6/4] シルト。やや硬質を主とし、1mm程度の粗砂、暗灰黄色ブロックを多含する。
- ①-7 黒色土 [5Y2/1] シルト。軟質。
- ①-8 灰色土 [5Y4/1] 粘土。軟質。粗砂1mm、明褐色の鉄と思われる粒を含む。30～50mmの石を中央部に多含する。
- ①-9 黄褐色土 [2.5Y5/4] シルト。やや軟質。
- ①-10 暗オリーブ灰色土 [2.5GY4/1] 砂質土。軟質。シルトと粗砂の混合層。
- ①-11 オリーブ灰色土 [2.5GY5/1]
- ②-1 明褐色土 [2.5Y7/6] シルト。硬質。
- ②-2 黄褐色土 [2.5Y5/4] 砂質土。軟質。シルトと1mmの粗砂の混合層。
- ②-3 浅黄色土 [2.5Y7/3] 細砂を主とし若干の粗砂とで構成される固く叩きしめられている。
- ②-4 明黄褐色土 [10YR6/8] シルトと1mm以内の粗砂で構成。固く叩きしめられている。
- ②-5 明黄褐色土 [10YR6/8] 粗砂と主としてシルトおよびシルトブロックで構成されている。叩きしめられている。
- ②-6 灰白色土の上下に [7.5YR4/4] 褐色のバンドがある。[2.5Y7/1] シルトを主として粗砂がやや混入する。固く叩きしめられている。
- ②-7 黒褐色土 [10YR3/1] シルト。軟質。粗砂若干あり。軟質。
- ②-8 褐色土 [10YR6/1] シルト。軟質。明黄褐色のバンドあり。
- ②-9 褐色土 [10YR5/1] シルト。軟質。
- ②-10 明褐色土 [7.5YR5/8] 1mm以内の粗砂で構成される。固く叩きしめられている。
- ②-11 明緑灰色土 [7.5GY7/1] シルト。軟質。
- ②-12 暗緑灰色土 [7.5GY3/1] シルト。やや軟質。
- ②-13 にぶい黄色土 [2.5Y6/4] シルトに粗砂1mm混じり。やや軟質。
- ②-14 灰色土 [N5/0] シルト。軟質。
- ②-15 暗灰色土 [N3/0] シルト。やや粗砂含む。軟質。
- ②-16 暗灰色土 [N3/0] シルト。軟質。
- ③-1 暗灰色土 [N3/0] シルト。軟質。1mm程度の粗砂、20～30mmの礫、鉄、植物遺体(根)等を含む。
- ③-2 灰色砂 [N5/0] 1mm以内の細砂。下層にスレートあり。
- ③-3 オリーブ灰色砂 [2.5GY6/1] V-13と同質。
- ③-4 灰色砂 [5Y6/1] シルト。軟質。1mm程度。1mm以内の砂が混入。
- ③-5 浅黄色土 [5Y7/3] シルト。やや軟質。
- ③-6 灰白色土 [7.5Y7/1] 砂。軟質。1mm程度の粗砂で構成。橙色混入。
- ③-7 緑灰色土 [10GY6/1] シルト。軟質。1mmの粗砂。緑灰色シルトのブロック。灰オリーブ色シルト混入。
- ③-8 黄色土 [2.5Y7/8] シルト。やや硬質。1mmの粗砂、10～20mmの礫混入。
- ③-9 灰オリーブ色土 [5Y6/2] シルト。軟質。灰色 [N6/0]、黄橙色 [10YR7/3] がみられる。
- ③-10 浅黄色土 [2.5Y7/3] シルト。軟質。橙色が混入する。
- ③-11 浅黄色土 [5Y7/3] シルト。軟質。1～2mmの粗砂が混入する。
- ③-12 灰オリーブ色土 [5Y5/2] シルト。軟質。栗石含む。[N5/0] 灰色粘土のバンドがみられる。
- a 黄褐色土 [2.5Y5/6] 粗砂1mm多含
- b 黄褐色土 [2.5Y5/6] 硬質
- c 黄灰色シルト [2.5Y8/6]

図7 17次2区東壁土層断面図



写真1 14次と整備された南北道路（北より）



写真2 14次三之丸御殿西辺石垣（北西より）



写真3 16次1区東西道路南側溝検出状況（西より）



写真4 16次1区東西道路検出状況（北より）



写真5 16次2区東西道路検出状況（北より）



写真6 16次2区東西道路南側溝検出状況（東より）



写真7 16次3区御殿南西角検出状況(南より)



写真8 16次3区出土星梅鉢紋鬼瓦



写真9 16次3区出土星梅鉢紋入金銅製飾金具



写真10 16次4区南北道路●検出状況(西より)



写真11 17次1区・2区全景(南東より)



写真12 17次1区石組溝(東から)



写真13 17次1区石組溝の加工のある角石（北より）



写真14 17次2区三之丸御殿北辺（西より）



写真15 17次2区土塁南法面（南西より）



写真16 17次2区土塁と三之丸御殿北辺（西より）



写真17 17次3区土塁断面（南東より）



写真18 17次3区土塁南法面（南東より）

三之丸地区の調査

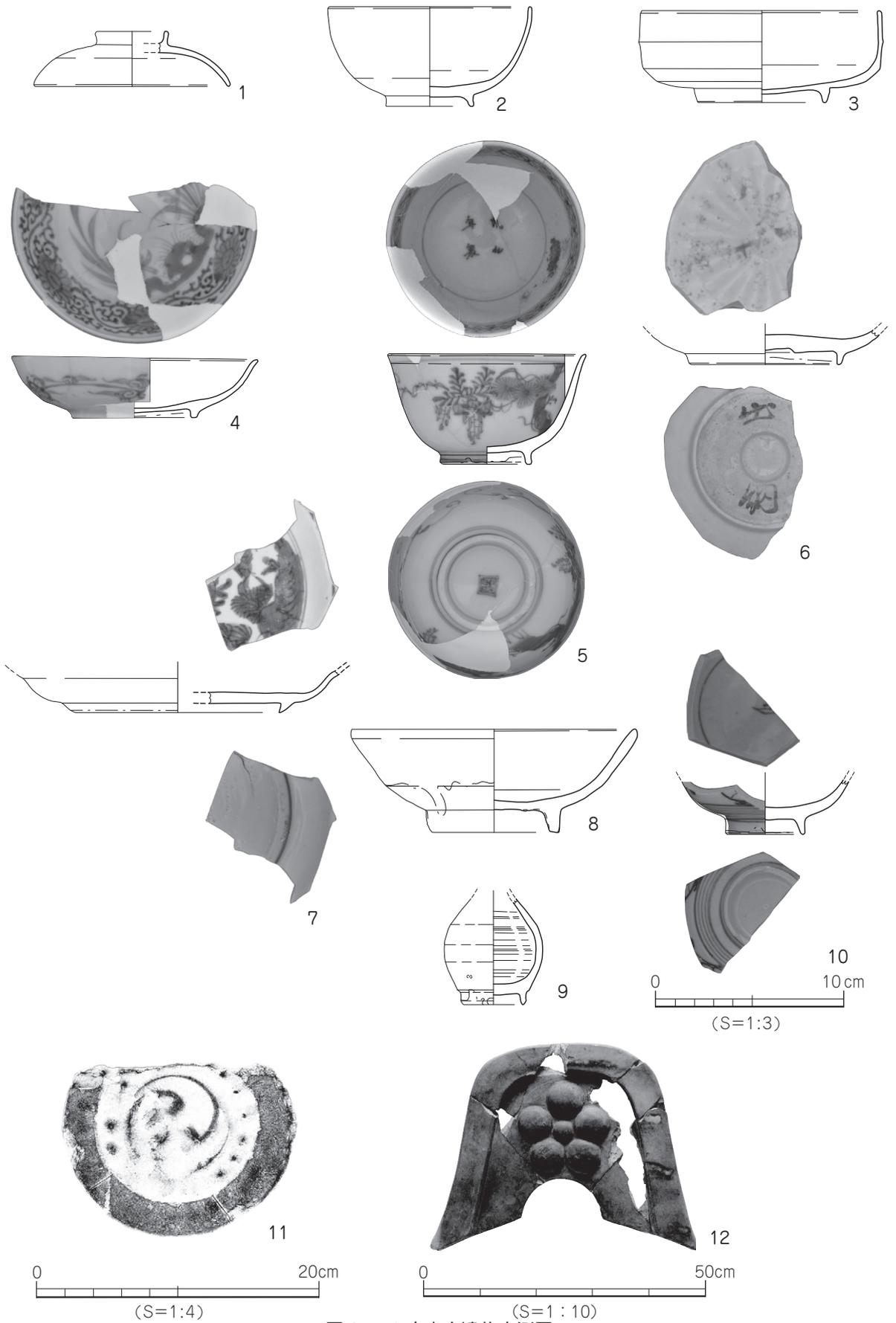


図8 16次出土遺物実測図

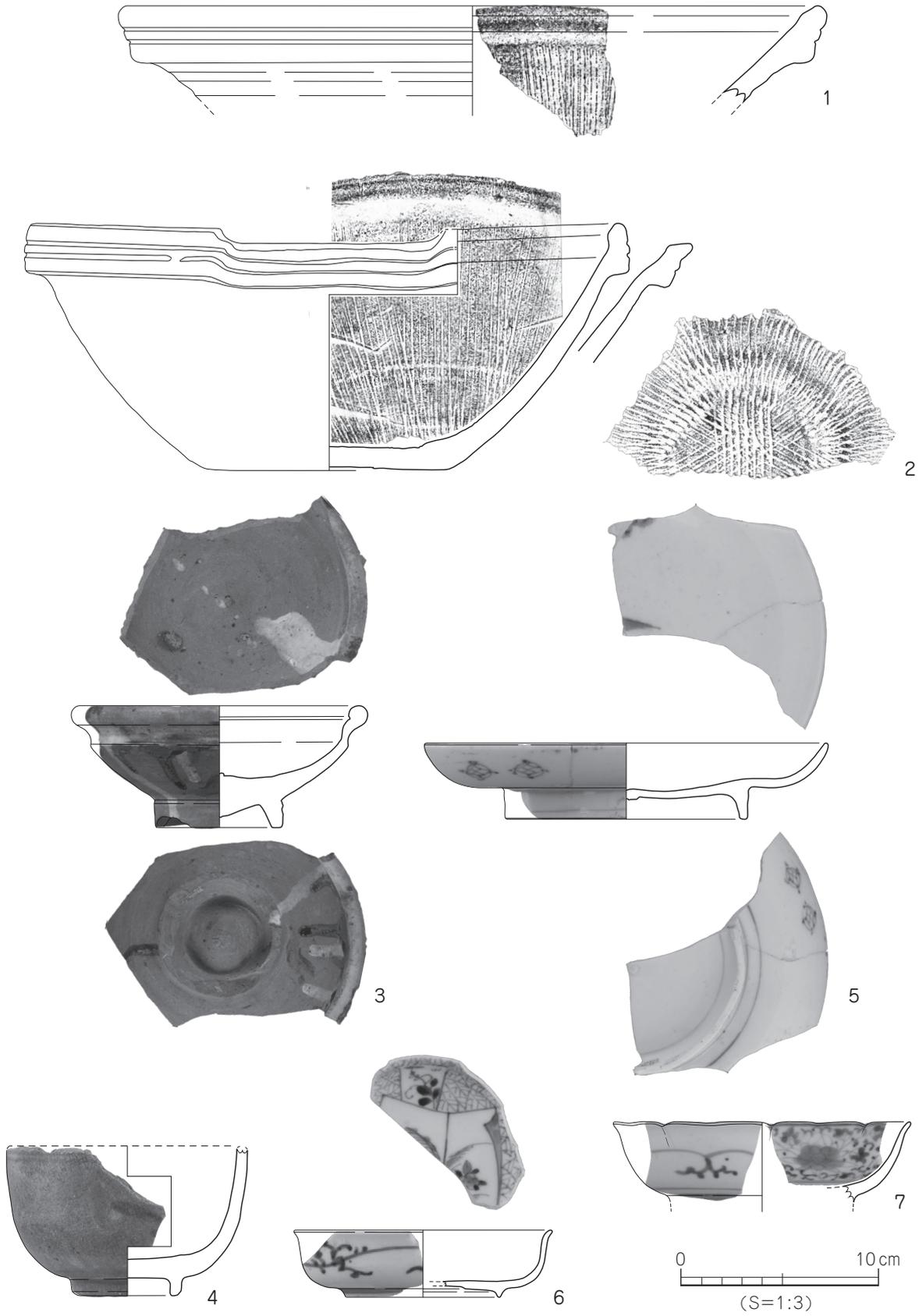


图9 17次出土遺物実測図(1)

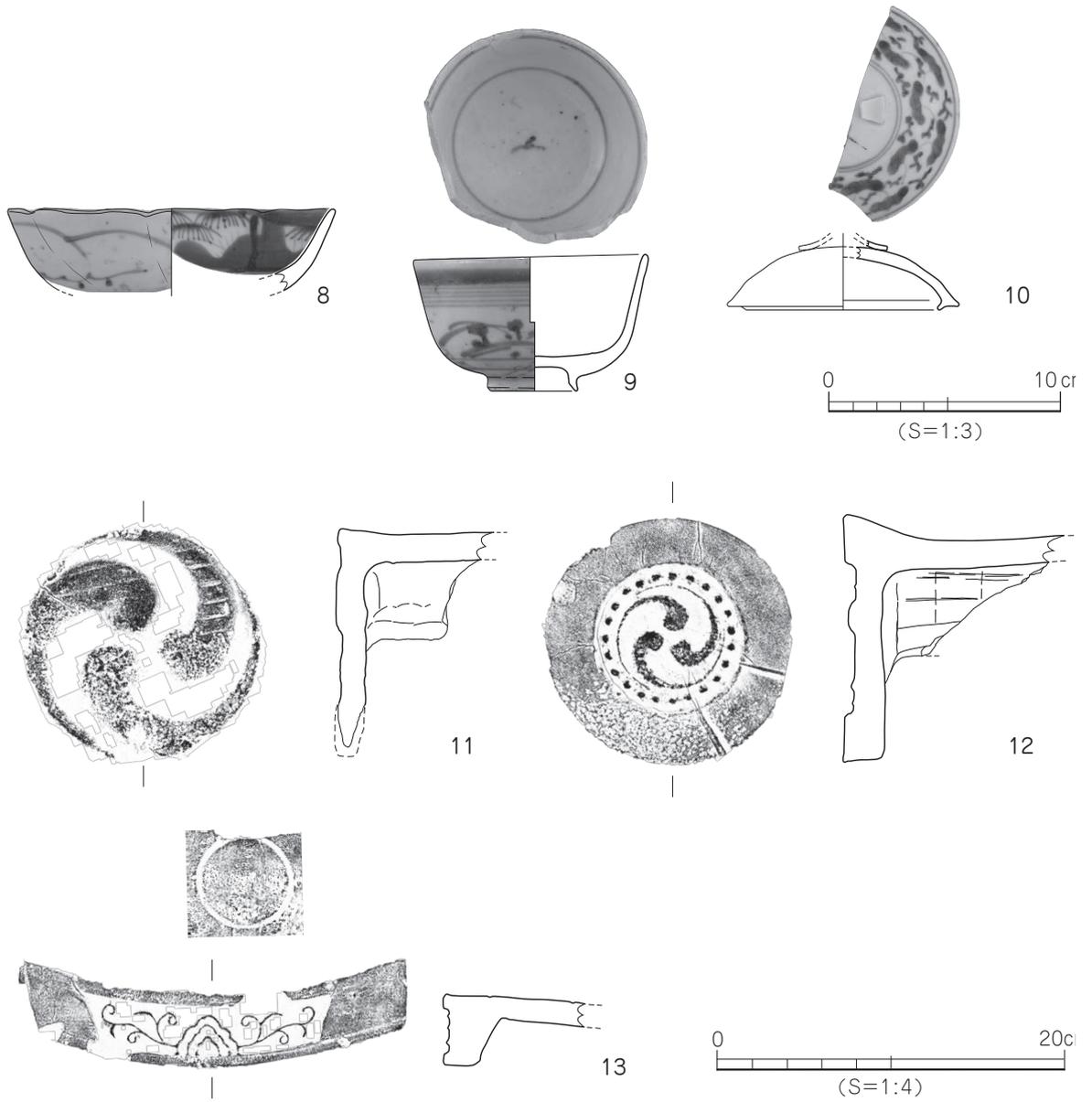


図10 17次出土遺物実測図(2)

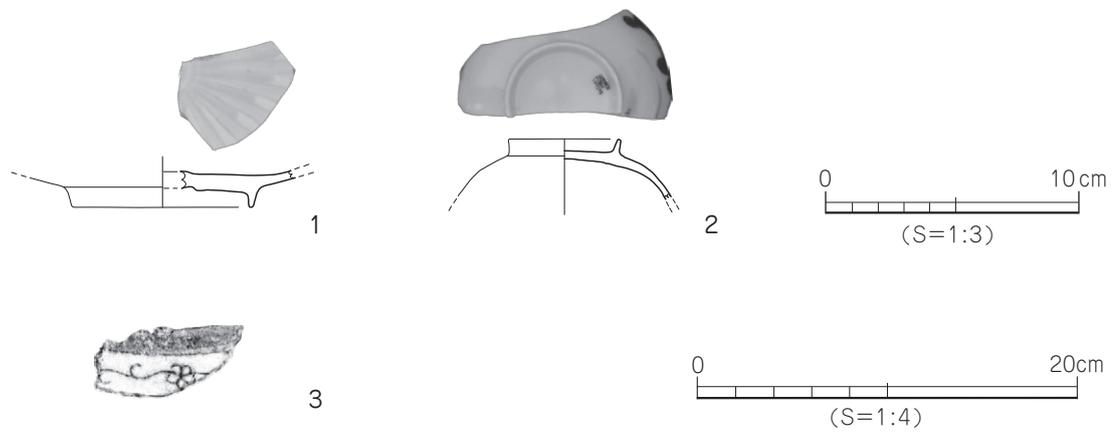


図11 14次出土遺物実測図

史跡松山城跡

表1 三之丸跡 14次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	T1 SD1	磁器	皿 (菊)	—	[1.9]	(7.0)	透明		砥部、輪花 (型)、蛇の目凹型高台
2	T1 SD1	磁器	蓋	—	[2.4]	(4.4)	透明	染付	肥前、草花文

表2 三之丸跡 14次出土遺物観察表 軒平瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
3	T1 SD1	—	—	—	—	—	—	灰・灰白	良好		五弁花 (線)	

表3 三之丸跡 16次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	3区	磁器	蓋	10.2	2.95	3.7	透明		瀬戸? ※下記2(碗)と組
2	3区	磁器	碗	10.6	5.3	4.6	透明		瀬戸? ※上記1(蓋)と組
3	3区	磁器	碗	12.6	4.9	6.7	透明		瀬戸?、隆線
4	3区	磁器	皿	(12.9)	3.3	(6.6)	透明	染付	肥前、草花文 (見込)、口錆
5	3区	磁器	碗 (端反)	10.4	5.9	4.65	透明	染付	肥前、松文、「成化年製」銘 (見込)、渦福銘
6	3区	磁器	皿 (菊)	—	[1.8]	(7.8)	透明		砥部、輪花 (型)、蛇の目凹型高台、「出納」墨書 (高台内)
7	4区 西端	磁器	皿	—	[2.1]	(10.9)	透明	青花?	明?、草花文
8	4区 西端	陶器	碗	(15.1)	6.6	5.5	褐		肥前、蛇の目釉剥 (見込)、底部露胎、泥漿附着 (釉剥部・畳付周辺)
9	4区 道路東側溝内	陶磁器	徳利	—	[5.6]	(3.1)	透明	染付	肥前?、草文
10	4区 道路東側溝内	陶器	碗	—	[2.9]	(4.0)	透明	染付	砥部、重圈文

表4 三之丸跡 16次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)							色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	主文様	珠文数	珠文径 (cm)				
11	1区	16	11.5	25	2.0	左卷三巴	(20)	0.6	灰	良好		「○」刻印

表5 三之丸跡 16次出土遺物観察表 その他の瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
12	3区	47	37	34	27.8	6.4	5.8	灰	良好		家紋 (星梅鉢)	鬼瓦

三之丸地区の調査

表6 三之丸跡 17次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径 (つまみ径)			
1	1区東西側溝5層中央	陶器	播鉢	(35.1)	[4.9]	—			堺明石
2	1区東西側溝5層中央	陶器	播鉢	29.7	12.6	12.3			備前
3	1区東西側溝西4層	陶器	皿	(14.1)	6.0	6.3	白釉鉄釉		肥前、重掛(口縁)、割高台
4	1区東西側溝西4層	陶器	碗	—	[7.5]	4.8	透明	染付	肥前、陶胎染付、山水文?
5	2区土塁内	磁器	皿	(20.1)	3.9	12.0	透明	染付	肥前、山水文(見込)、七宝文(外面)、窯道具痕(高台内)
6	1区4層東	磁器	皿	(12.9)	3.3	(7.5)	透明	染付	肥前、草花屏風文、蛇の目凹型高台
7	1区4層東	磁器	皿	(14.7)	[4.0]	—	透明	染付	肥前、輪花(型)、花卉文
8	1区4層東	磁器	皿	(13.8)	[3.6]	—	透明	染付	肥前、棕櫚文?
9	1区東西側溝西4層	磁器	碗(端反)	9.9	6.0	3.8	透明	染付	砥部、草花文、重圈文
10	1区4層東	磁器	蓋	蓋径(8.1)	[3.1]	最大径9.9	透明	染付	肥前、霊芝文

表7 三之丸跡 17次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
11	1区4層西	(13.2)	(13.2)	—	(1.6)	左卷三巴	—	—				蒲生家紋瓦?、煤付着
12	2区土塁内	14.4	8.8	28	2.2	左卷三巴	23	0.5				

表8 三之丸跡 17次出土遺物観察表 軒平瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
13	1区東西側溝5層中央	22.1	4.1	14.4	2.6	左右4.6 上下0.8	2.1				宝珠(上、線)	「〇」刻印

さんのまるあと
14. 三之丸跡 18・19 (1区)・20次調査

所在地 松山市堀之内 10番、12番
 期 間 18次：平成27年11月16日～平成27年12月28日
 19次(1区)：平成28年11月1日～平成29年2月28日
 20次：平成29年11月1日～平成30年2月2日
 面 積 18次：約54㎡、19次1区：約210㎡、
 20次：約306㎡
 担 当 18次：河野史知、19次1区：河野史知、
 20次：橋本雄一・河野史知

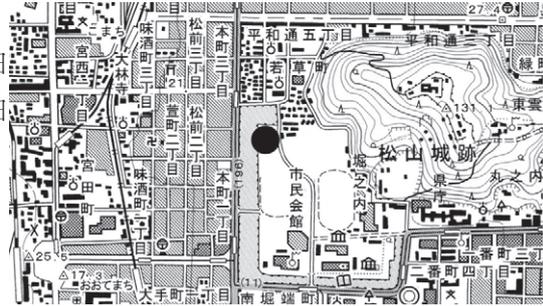


図1 調査地位置図

経 過 城山公園(堀之内地区)第2期整備に伴う確認調査である。17次調査で確認された東西の排水溝の西延長、「杉馬場」の馬場土手及び南北道路の確認を目的とし、18次調査、19次調査(1区)、20次調査で各1箇所(区)の調査区を設定した。19次調査(1区)の北端と20次調査の南端は、調査範囲がやや重複している(図2)。

遺構・遺物 馬場土手、石組溝、道路及び土塀基礎などが確認された。

馬場土手(図3、写真1・2・6・9～12・16)：寛文元(1661)年に設置されたといわれる「杉馬場」の土手である。全調査地で確認された。南北に黄色粘土を断面半円形状に盛り上げたもので、3条を検出した。18・20次で確認された馬場土手1は、高さ最大31cm、幅最大180cm、検出長14mを測り、調査区外南へ延びる。19・20次で確認された馬場土手2は、高さ最大44cm、幅最大113cm、全長6mを測り、19次で確認された馬場土手3は、高さ最大40cm、幅最大133cm、検出長6.1mを測り、調査区外北へ延びる。南端は東へほぼ直角に180cmほど延び、L字形となる。馬場土手3の南端の形状・位置と馬場土手2の北端の位置から、両者は本来東西に連結し、全体的にクランク状であったと推測され、馬場土手1と合わせて、馬場の出入口は、南に幅約5.3m開口する梃形虎口状であったと考えられる。また、馬場土手1の北部は幅が広く、直上に杉の植栽痕と思われる不整形の土坑が2基検出された。さらに、馬場の雨水等を道路側溝(石組溝2)に流すための土手を横断する石組暗渠が確認された。

石組溝(図3、写真3～5・13～15)：18次調査及び20次調査で確認された。18次調査で確認された石組溝1(東西)は、幅約130cm、深さ25～38cmを測り、溝中に橋脚の土台と推測される扁平な円礫7石が東西に並ぶ。石材は主に花崗岩が使用される。溝の位置、幅及び橋脚土台など共通する遺構の状況から、17次T1で確認された三之丸御殿の西辺から西へ連なる幅広の石組溝の延長とみられる。したがって、同溝は東から西へ傾斜する全長85.6m、幅130cmの大型溝となり、三之丸内で主要な排水溝のひとつとなる。また、20次調査で東西にわたって確認された石組溝3は、石組溝1とほぼ並行し、幅165cm、深さ30～50cmで、これまでの三之丸跡調査で確認された石組溝で最も幅が広い。馬場土手構築以前の遺構で、掘方は調査区外西に続く。後に「杉馬場」の設置により西側の一部が埋められ、馬場土手1の東辺に沿って新設された幅約70cmの南北の石組溝(石組溝2)を通して連結されたとみられる。その後、溝の南石列が一部抜き取られるとともに経路がやや南へ付け替えられたが、最終的に石組溝2の東端と南端が閉塞されるとともに埋められ、馬場の入口として整

地されたとみられる。馬場土手直下の石組溝1の埋土からは17世紀前半の陶器が出土しており、「杉馬場」設置年代と整合する。

道路 (図2・3、写真1) : 18次調査で南北道路が確認された。北端は石組溝1に架けられたとみられる橋に連なる。道路幅は、石組溝1の西辺から屋敷地の土塀基礎までで、3.5mを測る。同じ道路が確認された9次調査の推定道幅(2.9m)よりもやや幅広い。

土塀基礎 (図3、写真7) : 18次調査で確認された。南北の石列で、北は石組溝1に垂直に接し、南は調査区外南へ延びる。西に面を揃える1段が部分的に残るのみで、裏込石が僅かに残る。石材は18~50cmの花崗岩が使用される。

遺物は、石組溝内ほか各遺構の覆土から炭化物とともに多量に出土した。このうち、陶磁器の多くは幕末に属し、17次調査と同じく高級品や嗜好品が多いことから、明治3(1870)年の三之丸御殿焼失後、周辺に掻き出され、整地に伴い埋められた一群と推測される。17次1区では瓦が主体であったが、本調査では陶磁器類が主体であった。これらのことから、御殿焼失後、瓦など重量のあるものは近くに、食器や貯蔵容器などの比較的軽量の小物類は当地周辺に埋められたと推定される。いずれも罹災資料として一括性が高く、編年資料となるほか、当時の生活や流通などを考える上で、貴重な資料である。

小 結 本調査で確認した馬場土手の規模及び形状は、幕末に比定される「亀郭城秘図」など、江戸時代中期以降の絵図の描画と一致しており、各絵図の信頼性を高めるほか、史跡整備に活かせる十分な資料である。しかしながら、元禄年間(1688~1704年)の成立とされる「松山城下図屏風」には、「亀郭城秘図」とは逆に北に開口する柵形虎口状の出入口が描かれる。誤写の可能性があるが、今回の調査で確認した石組溝2と石組溝3とみられる溝が併せて土手の南に描かれていることから、当時の形状を描いたものと考えられる。したがって、馬場の出入口は、寛文元(1661)年の設置当初は北に開口していたが、18世紀以降に南への開口に改変されたとみられ、石組溝の維持とその後の経路変更は、この開口部の変更に伴う可能性が高い。今後、出土状況及び遺物の精査をもって解明すべき点である。

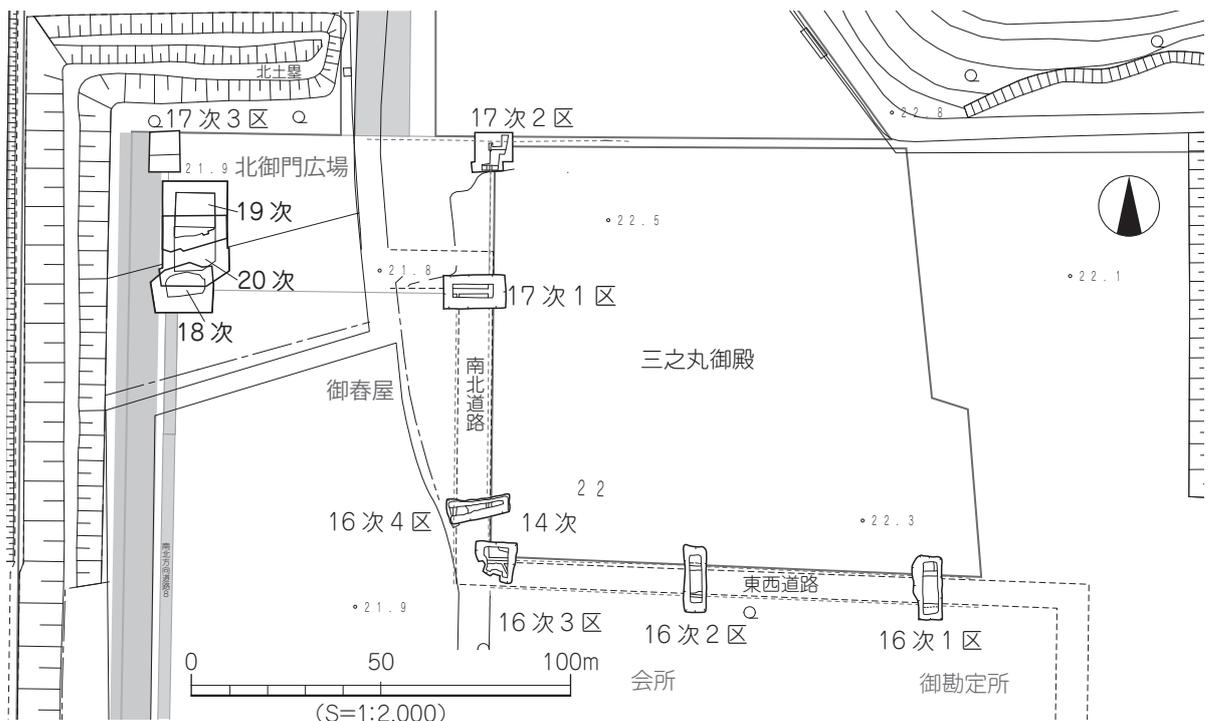


図2 調査地位置図

史跡松山城跡

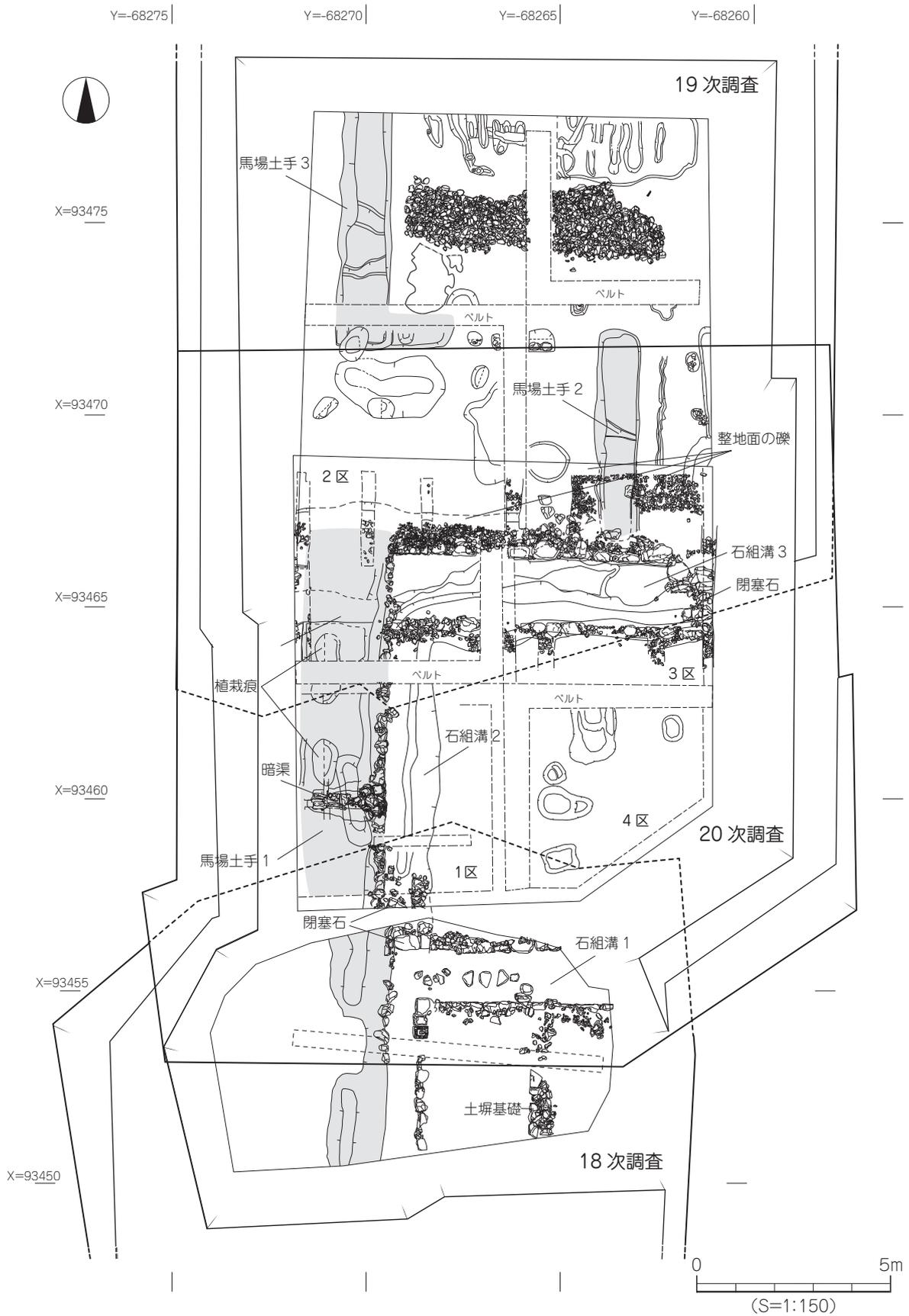


図3 18・19・20次平面図

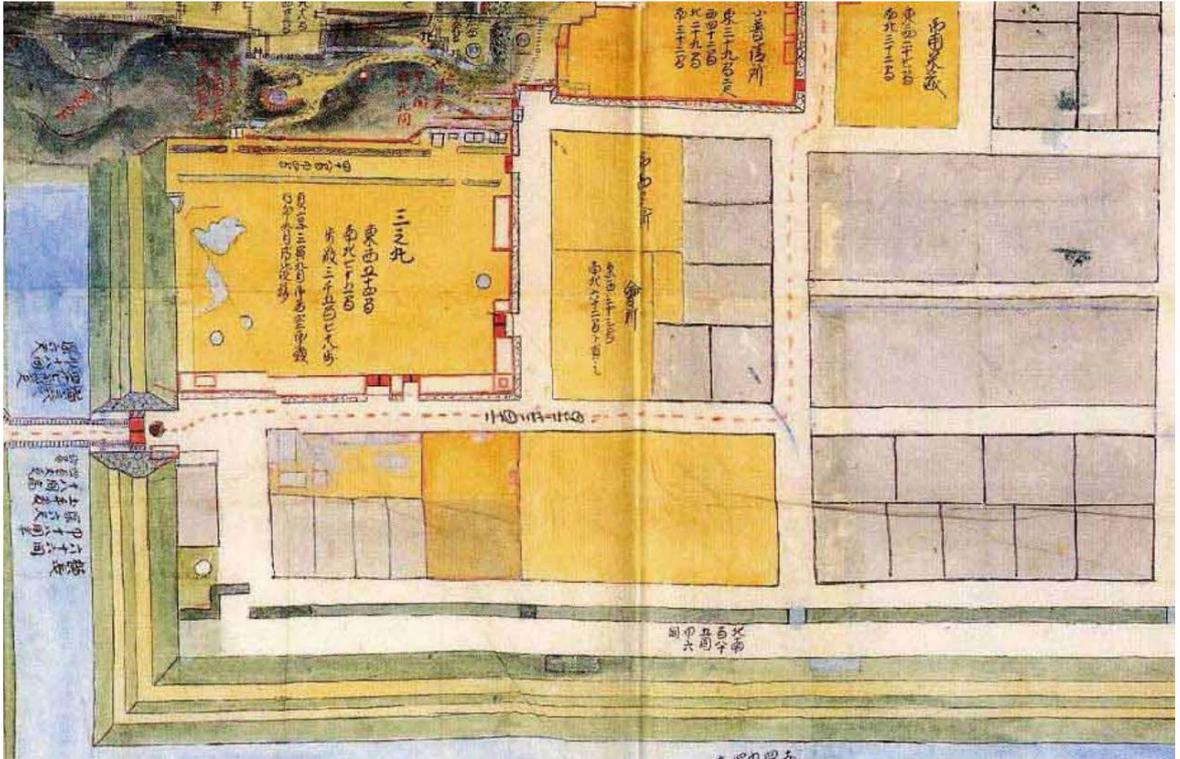


図4 亀郭城絵図（部分、伊予史談会蔵）



図5 松山城下図屏風（部分、愛媛県歴史文化博物館蔵）



写真1 18次全景（東北より）



写真2 18次馬場土手（北西より）



写真3 18次石組溝と橋脚（西より）



写真4 18次橋材固定加工痕（北西より）



写真5 18次宝篋印塔転用状況（西より）



写真6 19次全景（東より）



写真7 18次土堀基礎（北西より）



写真8 19次馬場土手（南より）



写真9 20次全景（北東より）



写真10 20次整備した馬場と遺構検出状況（北東より）



写真11 20次馬場土手断面（南東より）



写真12 20次馬場土手横断暗渠（南東より）



写真13 20次石組溝1（南東より）



写真14 20次石組溝1の北石組（南西より）



写真15 20次石組溝1の埋土（東より）



写真16 20次石組溝2と馬場土手（北東より）

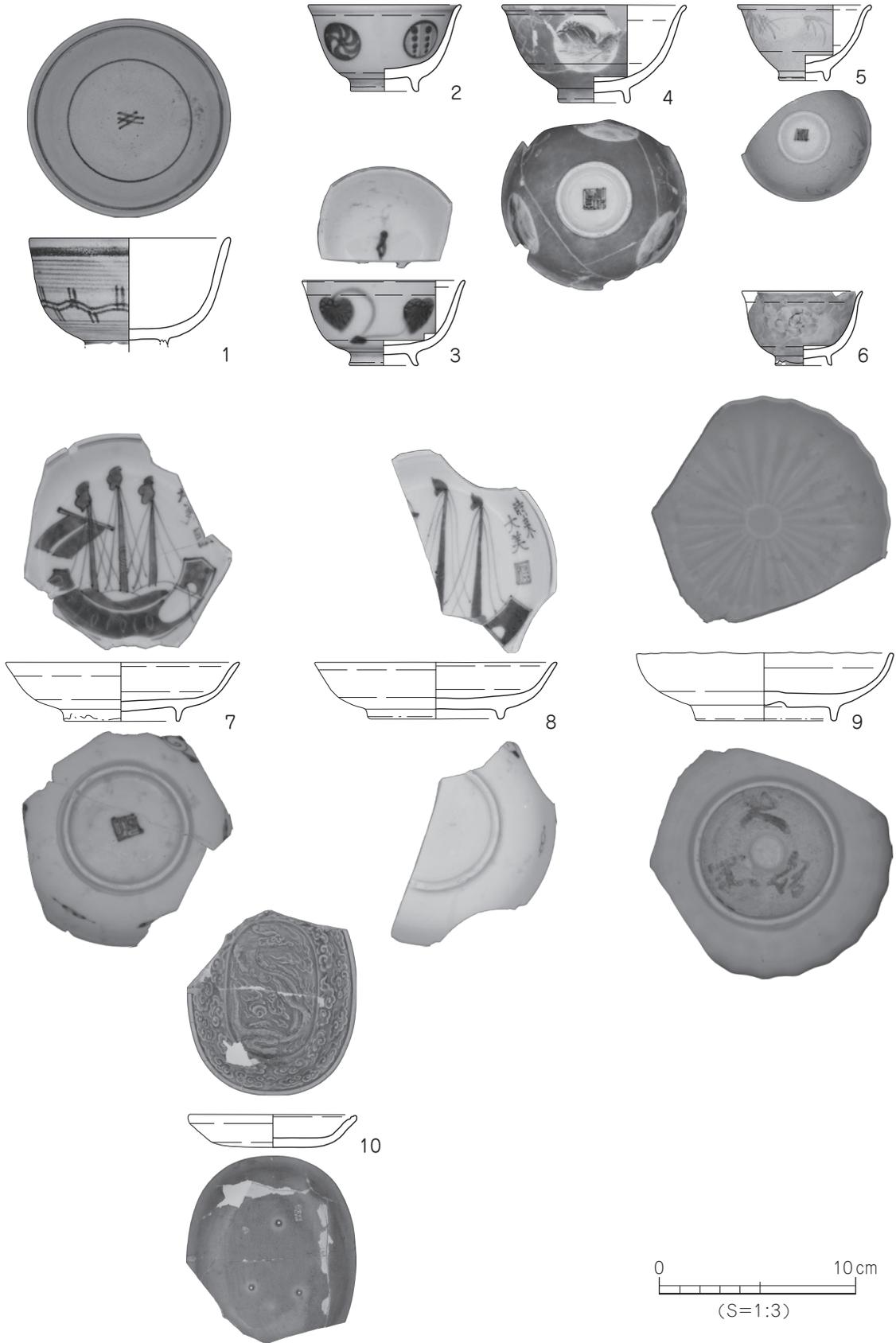


図6 三之丸跡 18次出土遺物実測図 (1)

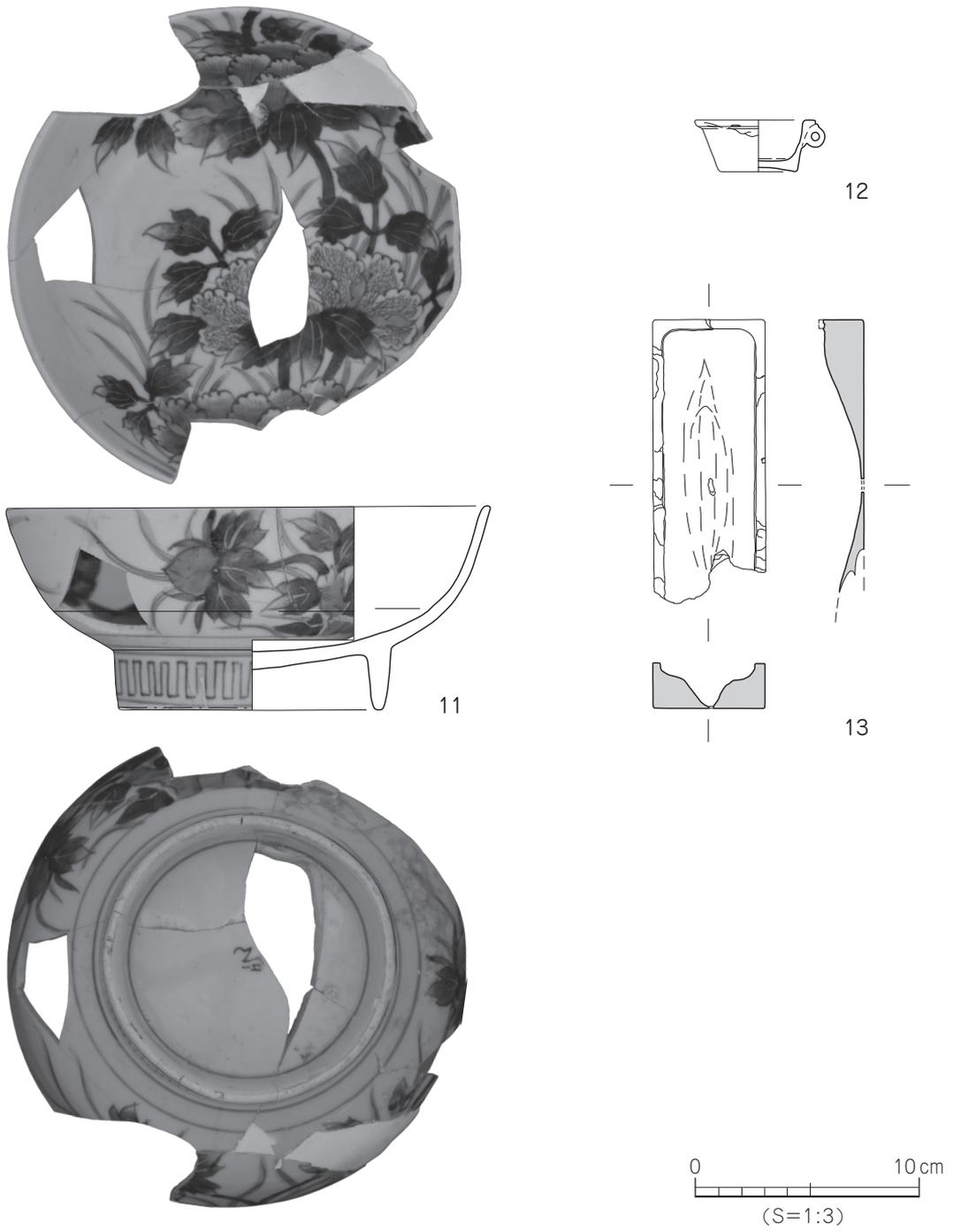


図7 三之丸跡 18次出土遺物実測図(2)

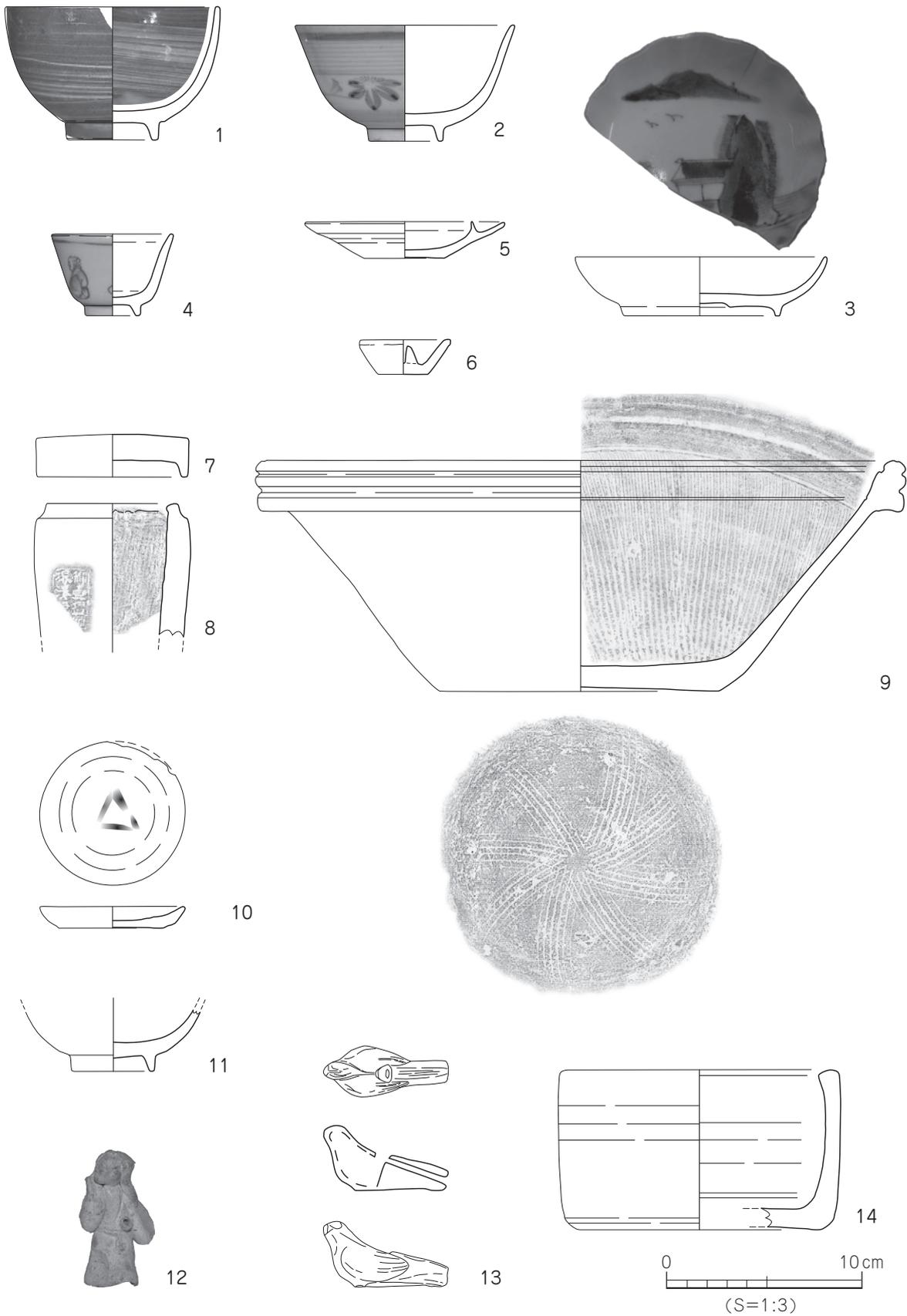


图8 三之丸跡 19次出土遺物実測図 (1)

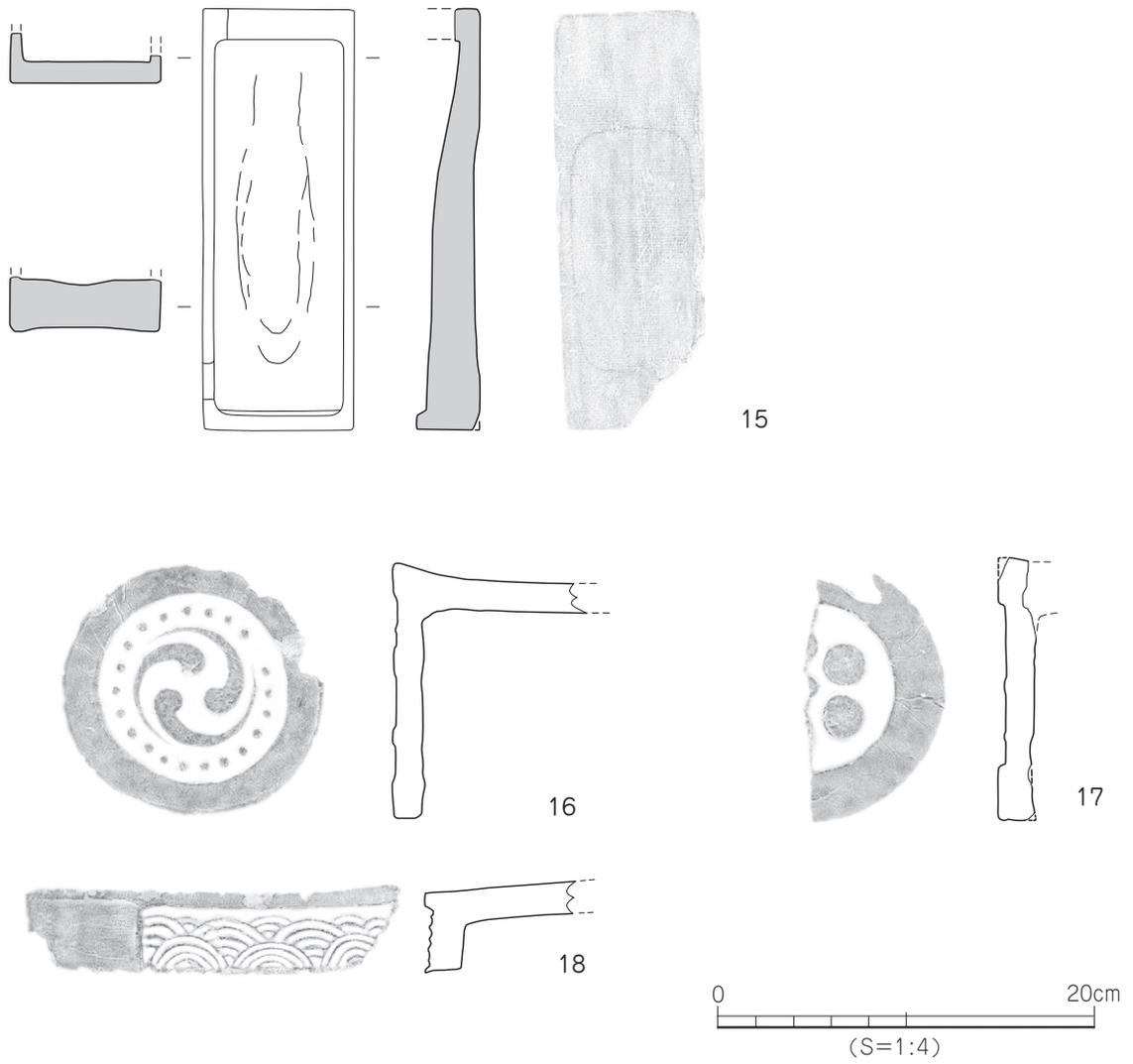


図9 三之丸跡 19次出土遺物実測図 (2)



图 10 三之丸跡 20 次出土遺物実測図 (1)

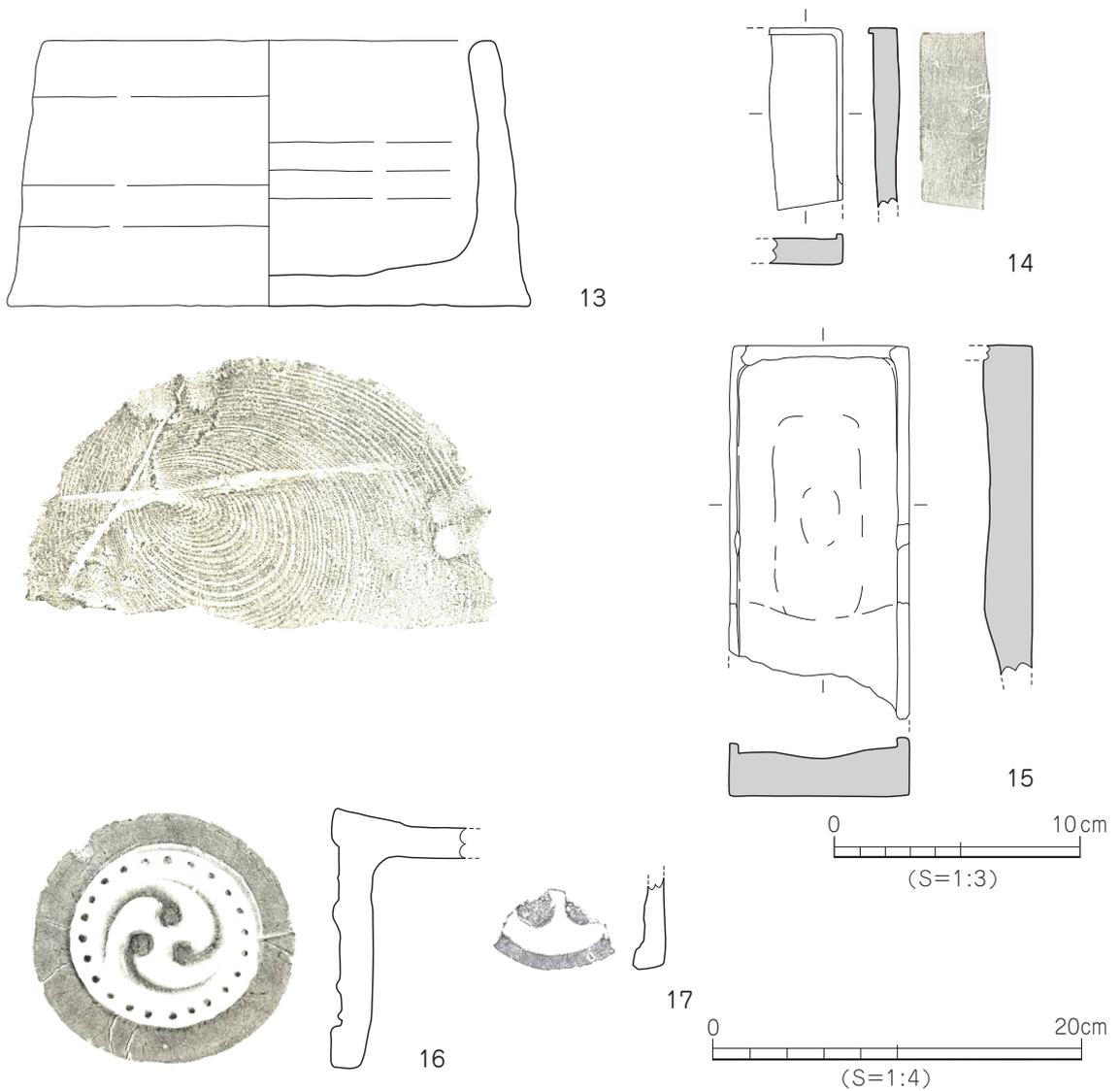


図 11 三之丸跡 20 次出土遺物実測図 (2)

表 1 三之丸跡 18 次出土遺物観察表 陶磁器 (1)

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	東西溝 5 層	磁器	碗 (端反)	10.1	[5.4]	—	透明	染付	砥部、亀甲文、重圈文、被熱
2	東 5 層	磁器	碗 (端反)	(7.8)	4.4	(4.0)	透明	染付	瀬戸、丸文
3	東 5 層	磁器	碗	(8.3)	4.4	(3.5)	透明	染付	瀬戸、葵文、口鏝
4	5 層?	磁器	碗 (端反)	10.4	5.0	3.5	透明	色絵	清? (十錦手)、山水文、口鏝、「□」銘
5	拡張 5 層	磁器	小杯 (端反)	6.7	3.9	2.5	透明	色絵	清? (十錦手)、笹文、口鏝、「□」銘
6	5 層	磁器	小杯 (端反)	(6.1)	3.8	(2.9)	透明	色絵	清? (十錦手)、花鳥文
7	5 層?	磁器	皿	(11.9)	3.0	5.9	透明	染付	瀬戸、黒船文、落款文 (大美 □)、「□」銘、「サ□」刻書 (高台)
8	5 層?	磁器	皿	(12.2)	2.9	6.7	透明	染付	瀬戸、黒船文、落款文 (時来大美 欄)、「ヲ?」刻書 (高台)

史跡松山城跡

表1 三之丸跡 18次出土遺物観察表 陶磁器(2)

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
9	5層?	磁器	皿(菊)	(13.0)	3.5	7.0	透明		砥部、輪花(型)、蛇の目凹型高台、「大賄所」墨書(高台)
10	東西溝5層	磁器	皿	8.5	1.6	3.8	緑		淡路(珉平)、龍文(陽刻)、窯道具痕(底部)
11	5層?	磁器	鉢	(21.5)	9.1	11.5	透明	染付	肥前、牡丹文、櫛高台(鍋島模倣)
12	南トレンチ5a層	磁器	餌入	5.4	2.3	3.4	透明		産地不明

表2 三之丸跡 18次出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
13	東5層	硯	粘板岩?	[12.7]	5.0	2.0	173.6	薬研に転用?

表3 三之丸跡 19次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	1区5層	陶器	碗	(10.8)	6.9	4.6	透明	化粧土	肥前(刷毛目唐津)
2	1区5層下	磁器	碗(端反)	(11.1)	6.0	3.8	透明	染付	砥部、草花文
3	1区4層	磁器	皿	12.7	3.1	8.0	透明	染付	肥前、輪花(型)、山水文、口鏝
4	1区5層下	磁器	小杯	(6.1)	4.2	2.7	透明	色絵	肥前、煎茶碗、人物文
5	1区3層	陶器	灯明受皿	10.2	1.9	4.0	灰		京信楽、割込
6	1区5層	土師器	乗燭	4.6	1.7	2.5			在地?、たんころ形、煤付着
7	1区5層上	土師器	塩焼壺蓋	7.7	2.2	—			堺?、布目痕(内面)
8	1区5層	土師器	塩焼壺身	6.6	[9.6]	—			堺、「御壺塩師堺湊伊織」刻印(外面)、布目痕(内面)
9	1区5層?	陶器	播鉢	32.4	11.9	14.3			堺明石
10	1区5層	土師器	皿	7.3	1.1	5.3			在地?、「△」墨書(見込)
11	1区5層上	陶器	碗	—	[3.1]	4.1	透明	化粧土	肥前(刷毛目唐津)
14	1区4~5層	陶器	火入	13.7	8.3	12.5			備前

表4 三之丸跡 19次出土遺物観察表 土製品

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			備考
				高さ	幅	厚さ	
12	1区5層?		土人形	6.9	3.6		
13	1区5層下		土笛(鳩)	3.4	6.4	2.6	

表5 三之丸跡 19次出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
15	1区5層下	硯	流紋岩?	16.9	6.0	2.5		「□」刻書

三之丸地区の調査

表6 三之丸跡 19次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
16	1区5層下	13.6	10.1	16	1.7	左巻三巴	22	0.6				
17	1区3層	14.0	8.8	24	1.9	家紋 (星梅鉢)	—	—				

表7 三之丸跡 19次出土遺物観察表 軒平瓦

番号	出土場所	法量 (cm)						色調	焼成	キラ粉	文様	備考
		瓦当幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁幅	瓦当厚					
18	1区5層	[19.6]	[4.3]	—	—	0.7	2.0				青海波	

表8 三之丸跡 20次出土遺物観察表 陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			釉薬	装飾	備考
				口径	器高	底径			
1	2区西トレンチ 石組溝跡青灰土	陶器	碗	—	[3.3]	4.0		化粧土	肥前、蓮弁文
2	2区西トレンチ 石組溝跡上部	陶器	碗	(10.4)	7.4	4.6	灰		肥前、底部露胎、砂目痕 (高台)
3	1区5層	磁器	碗 (端反)	10.6	5.9	4.0	透明	染付	砥部、斜格子文、重圏文
4	4区5層	磁器	猪口	(5.8)	2.8	2.2	透明	色絵	瀬戸、江戸絵付、扇面に王将将棋文
5	3区5層	陶器	皿	24.5	5.5	12.7	白	鉄絵	瀬戸美濃 (馬の目皿)
6	4区5層	陶器	蓋 (土瓶)	10.8	2.4	3.5	灰	化粧土	産地不明、亀形取手
7	3区5層	陶器	灯明受皿	7.5	1.8	3.3	灰		京信楽、刳込
8	1区5層	陶器	灯明受皿	11.5	2.7	4.1	灰		京信楽、刳込
9	4区5層	陶器	乗燭	4.2	3.8	2.7	灰		在地?、たんころ形、煤付着
10	4区5層	土師器	塩焼壺蓋	6.7	1.5	—			堺?、布目痕 (内面)
11	4区5層	土師器	塩焼壺身	(7.4)	9.4	(6.1)			堺、「御壺塩師堺湊伊織」刻印 (外面)、布目痕 (内面)
12	3区5層	土師器	塩焼壺身	7.1	7.2	4.1			堺?
13	3区5層	陶器	火入	(18.0)	10.9	(21.1)			備前、回転糸切痕 (底部)、未使用?

表9 三之丸跡 20次出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法量				備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
14	4区5層	硯	凝灰岩 (赤間石)	[7.4]	[3.0]	1.2		赤間、「赤間」刻書
15	1区5層	硯	砥石	[15.0]	7.3	[2.0]		砥部

表10 三之丸跡 20次出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	出土場所	法量 (cm)				主文様	珠文数	珠文径 (cm)	色調	焼成	キラ粉	備考
		瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚							
16	4区5層	14.1	10.3	$\frac{上16}{下19}$	1.9	左巻三巴	23	0.5				
17	4区5層	—	—	0.8	1.7	家紋 (星梅鉢)	—	—				菊瓦?

第Ⅳ章 まとめ

本丸地区

今回の本丸地区での調査等による主な成果は以下のとおりである。

まず、5次調査や本丸防災設備等整備事業に伴う工事立会で、本丸内の本壇北東側を中心に築城段階の本壇（天守曲輪）石垣の裏込と考えられる栗石層が確認されたことである。近年、絵図や石垣の構築技術から、現在の本壇は、松平定行による寛永年間の改修によって築かれて以降のもので、加藤嘉明による築城段階の本壇は、現在のものと形状・位置が異なっていた可能性が一部で指摘されていたが（楠 2009、宮尾2014等）、考古学的に裏付けられたのはこれが初めてであり、松山城の歴史観を一新するような成果となった。現状では、築城段階の本壇は、当該栗石層が確認された場所や絵図等に記載された石垣の寸法から考えて、現在の本壇よりも北東に位置し、一回り大きく、形状は異なっていた可能性が高い。このような違いが生じた理由については、7次調査で確認された本壇南西部の斜面（谷筋）の忌諱（＝安定地盤の確保）、縄張りに対する考え方の変化、石垣構築技術の進展等、様々な可能性が考えられるが、当該栗石層の確認は極めて限定的であり、範囲といった基本的な情報すら明確ではない現段階においては、これ以上のことを述べるのは困難である。今後、当該栗石層の確認を目的とした確認調査を行い、その詳細を把握していくことが必要である。

これ以外でも、中ノ門跡の礎石（6次）や、待合番所跡の石垣改修痕跡と鍛冶遺物廃棄土坑（6次）、本壇石垣南西裾の腰巻石垣の根石列（6次）、本壇石垣東裾の水受けと石組排水溝（6部）、石垣改修に伴い破壊された本壇中庭の枳形池（6次）、天守再建時の足場跡の可能性のある天守周囲の柱穴列（8次）、東雲神社の土塀基礎の石垣（東雲口登城道）等が確認されたことに加え、芸予地震での地割れ等の被災箇所での試掘調査において、地割れ等が全て昭和期の修理範囲で発生していた一方で、被害が発生しなかった江戸期の盛土でも過去の地震による地割れ痕跡が確認されたことなど、不明な点の多い松山城の歴史を考える上で重要な成果が数多く得られた。また、文禄・慶長の役に参戦した大名の居城を中心に出土することが知られている滴水瓦（5次）や、寛永期以降の城主である久松松平家の家紋瓦（星梅鉢、5・6次）が出土したことなど、松山城らしい成果も得られた。

二之丸地区

今回の二之丸地区での調査等による主な成果は次のとおりである。

まず、二之丸跡4次調査で、解体した石垣の背面基盤層から城の内3号墳が確認されたことである。当該古墳は古墳時代後期の横穴式石室を伴う円墳で、石室の床面付近から双龍環頭をはじめ多数の副葬品が出土しただけでなく、石室は中世後期の遺物を含む土が版築状に厚く堆積していたことから、当該古墳が、築城に伴う石垣普請の際に、普請が影響する羨道部は破壊された一方、普請が影響しない石室等は石垣の内部に残されただけでなく、石室については丁寧に埋め直されたことが明らかとなった。全国的に極めて希少な事例であるだけでなく、石垣普請の様子やそれに携わった人々の心性をも今に伝える、たいへん重要な成果となった。

これ以外でも、芸予地震の災害復旧に伴う槻門跡 1～3次調査で、北続櫓台石垣の変形の主因が地震ではなく継続的な内部への雨水の流入であったことや、同石垣が後世に東側に1間（約2m）拡幅されていたことが明らかになったことに加え、石垣普請で用いられたと考えられるノミが出土したことなど、また、石垣修理に伴う黒門跡1～4次調査で、西石垣の変形の主因が槻門跡と同様に継続的な内部への雨水の流入であったことや、同石垣が江戸後期や近代に改修されていたことが明らかになったことに加え、全国でも類例のない、普請の安全を祈願した可能性が考えられる「地蔵」の文字と「地蔵」や「侍」の絵が墨書された栗石が出土したことなど、不明な点の多い江戸期の石垣普請等を考える上で重要な成果が数多く得られた。

三之丸地区

今回の三之丸地区での調査等による主な成果はりである。

まず、3次から16次までの調査によって、三之丸の道路や三之丸御殿をはじめとする施設の区画をほぼ特定できたことである。多くの古絵図により、三之丸内の道路や区画の位置は概ね掴めていたものの、近代以降の陸軍兵営やスポーツ・文化施設などの設置によって、遺構が残っていない可能性があったが、予想以上に残存していたことは幸いであった。

道路は幅約8～9mで、軸線が真北から東へ約1度傾いており、基本的に両端に排水のための側溝を有している。道路側溝は役所及び侍屋敷の石垣や石積と道路の路肩の石積からなる石組溝で、幅は約2尺（≒60cm）である。しかしながら、役所周りと侍屋敷周りでは、石材の大きさや種類が異なり、役所周りは必ずといっていいほど花崗岩が使用され、底に石が敷かれる。三之丸御殿に至っては、城石垣そのものであり、溝の幅も倍近い。一方、侍屋敷は周辺で調達できる砂岩や礫岩が使用され、石積は簡素で、もちろん石は敷かれていない。屋敷は侍個人のものではなく藩より付託されているものであるから当然ではあるが、こういった場所にも封建社会が具現化されている。また、道路側溝に流れた排水は、北から南、東から西へと流れ、5次調査で確認した南西隅の貯水池に集水される仕組みとなっている。貯水池は2本の暗渠を通して外堀とつながっており、水戸を管理することで常に水の量を調整していたと考えられる。降水量の少ない松山ならではの工夫ともいえ、1次調査で西之丸に井戸が3つ確認されたこともやはり水に対する意識の高さが伺える。

その西之丸は、幕末は井戸のほか茶室や池などがある山里曲輪（庭空間）で、近代以降に大きく地形が改変されたものの、区画を示す石組溝は残っており、西の三之丸御殿との境であることが近年の調査で判明しつつある。また、他の調査地と異なり17世紀の遺物が多く出土することから、絵図にも描かれている通り、加藤氏や蒲生氏の時代には居住空間として利用された可能性がある。

このような絵図や文献資料との整合は、道路幅や三之丸御殿などの役所敷地の数値のほか施設の描写でもみられ、特に馬場土手の設置と変化は、出土物の時期も辻褄が合っており、当時、排水と馬場を両立させようとした当時の努力を窺い知れる。また、13・15次調査で導き出された屋敷地の面積は、過去の調査成果と概ね一致しており、屋敷地に一定の規格があることを示唆している。あらためて「松山城下図屏風」を熟覧すると、確かに建物の配置が同じ屋敷地がいくつか見られる。

屋敷地からは多くの陶磁器や瓦、鉄製品、銅製品などが出土している。陶磁器は様々な器種があり、産地も肥前を主として瀬戸美濃や京焼、備前、堺などの他地域のほか砥部や西岡などの在地のものも僅かながら出土している。また、煙管や酒器、植木鉢、果ては美術品などの嗜好品の類、土人形やま

まごと道具などの子供の玩具、獣や魚の骨などの食物残滓は、侍とその家族の生活を浮彫りにしている。3次調査で出土した「値段の墨書された土瓶の蓋」や7次調査で出土した「俳諧と個人名の刻書された硯」は、まさしく個人の生活の一端に触れることのできる遺物である。これらの遺物は、そのほとんどがゴミ捨て穴（廃棄土坑）からの出土物であるが、ゴミ捨て穴は敷地内だけでなく道路内でも検出されており、道路内からの遺物は概ね19世紀のものが多い。明治維新になって急に三之丸を立ち退かざるを得ず、廃棄した遺物と推測される。今後の史跡整備は、この場所に居た侍たちとその家族の暮らしを浮き彫りにできればと思う。

【主要参考文献】

(論文・書籍・図録等)

- 石岡ひとみ2008『掘り出されたえひめの江戸時代－くらし百花繚乱－』愛媛県歴史文化博物館
井上淳2014『松山城下図屏風の世界』愛媛県歴史文化博物館
江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
大橋康二1994『古伊万里の文様』理工学社
景浦勉1985「(資料紹介)松山城郭資料」『伊予史談 第256号』伊予史談会
河合勤1985「松山城に関する古文書を読んで」『伊予史談 第257号』伊予史談会
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
楠寛輝2009「松山城石垣の解体と調査」『第6回全国城跡等石垣整備調査研究会記録集』第6回全国城跡等石垣整備調査研究会
開催地事務局
楠寛輝2009「松山城にみる石垣構築技術」『金沢城研究 第7号』石川県金沢城調査研究所
楠寛輝2012「加藤嘉明と藤堂高虎にみる石垣構築技術」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
下中弘編1984『やきもの事典』平凡社
瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』
瀬戸市埋蔵文化財センター2003『江戸時代の美濃窯』
富田和気夫・西田郁乃2020「城跡等から出土した石工道具の検討(1)」『金沢城研究 第18号』石川県金沢城調査研究所
西村直人2017「見えてきた伊予松山城の歴史－近年の発掘調査から－」『四国の近世城郭』岩田書院
平井誠2008『愛媛と戦争』愛媛県歴史文化博物館
松山市2019『史跡松山城跡保存活用計画』
松山城編集委員会編1994『松山城 増補第五版』松山市観光協会
三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂
宮尾克彦2014「加藤期における伊豫松山城－本丸・本壇、惣構、西ノ丸の構造について－」(伊予史談会平成26年6月例会
発表資料)
山崎信二2008『近世瓦の研究』同成社
山本典男2001『松山藩ゆかりの西岡焼』重信町教育委員会
(報告書等) ※地区・年代順
①本丸地区
栗田正芳ほか2003「松山城本丸跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報15』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
栗田正芳2004「松山城本丸跡3次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報16』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
武田尊子2006「松山城本丸登城4次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
岸見泰宏2006「松山城東雲口登城道整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・
松山市埋蔵文化財センター
楠寛輝ほか2006「松山城東雲口登城道整備工事に伴う埋蔵文化財試掘調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・
松山市埋蔵文化財センター
武田尊子2006「城の内古墳群2・4・5号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
西村直人2012「松山城本丸跡5次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報24』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
西村直人2013「松山城本丸跡6次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報25』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
西村直人ほか2016「松山城本丸跡7次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報28』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
山本健一2016「松山城本丸跡8次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報28』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
②二之丸地区
栗田正芳ほか2003「松山城二之丸跡4次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報15』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
楠寛輝ほか2006「松山城櫓門跡1・2・3次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
楠寛輝2007「松山城黒門跡」『松山市埋蔵文化財調査年報19』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

まとめ

楠寛輝2008「松山城黒門跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
楠寛輝2008「松山城黒門跡3次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
楠寛輝2009「松山城黒門跡4次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報21』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

③三之丸地区

土井光一郎ほか2000『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』愛媛県埋蔵文化財調査センター

西村直人ほか2004「松山城三之丸跡（県営ラグビー場跡）」『松山市埋蔵文化財調査年報15』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2004「松山城三之丸跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報16』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

岸見泰宏2005「松山城三之丸跡3次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報17』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

岸見泰宏ほか2006「松山城三之丸跡4次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

岸見泰宏ほか2006「松山城三之丸跡5次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

岸見泰宏2007「松山城三之丸跡6次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報19』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

吉岡和哉2007「四国がんセンター解体工事に伴う事前調査」『松山市埋蔵文化財調査年報19』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人ほか2008「松山城三之丸跡7次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人ほか2008「松山城三之丸跡8次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2008「松山城三之丸跡9次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2009「松山城三之丸跡10次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報21』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

加島次郎2009「松山城三之丸跡11次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報21』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

高尾和長2009「松山城三之丸跡12次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報21』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2010「松山城三之丸跡13次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報22』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2010「松山城三之丸跡14次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報22』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2011「松山城三之丸跡15次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報23』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

吉岡和哉2014「松山城三之丸跡16次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報26』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

河野史知2015「松山城三之丸跡17次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報27』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

河野史知2016「松山城三之丸跡18次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報28』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

河野史知2017「松山城三之丸跡19次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報29』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

橋本雄一ほか2018「松山城三之丸跡20次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報30』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

西村直人2019『松山城三之丸跡－13次・15次調査－』松山市・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきまつやまじょうあと
書名	史跡松山城跡
副書名	史跡整備等に伴う遺構確認調査等総括報告書（平成13～29年度）
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第207集
編著者名	楠寛輝 西村直人
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2022（令和4）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつやまじょうせき 松山城跡	松山市丸之内 松山市堀之内	38201		33°50' 27"	132°45' 58"	20071210 } 20180202	約 9,700 ㎡	史跡整備 災害復旧
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松山城跡	史跡	江戸時代	石垣、土塁、道路、貯水池、門跡（礎石等）、井戸、堀跡（柱穴列等）、石組溝、馬場土手、竪穴式石櫛、横穴式石室		中近世陶磁器、土器、土製品、瓦、鉄製品（釘ほか）、銅製品（煙管ほか）、ガラス製品（筭ほか）、石製品（硯ほか）、木製品（漆椀ほか）		三之丸御殿跡 小普請所跡 御用米蔵 元小普請所跡	
要 約	<p>史跡松山城跡の史跡整備及び災害復旧に伴う遺構確認調査、試掘調査及び工事立会の概要をまとめた報告書。調査の結果、本丸跡ではこれまで絵図でしか知られていなかった築城時の天守の遺構が発見されたほか、二之丸では、石垣裏の古墳や門の石垣の改修跡が確認された。また、三之丸跡では、道路跡や馬場、侍屋敷跡などとともに武士の生活道具が出土した。</p>							

松山市文化財調査報告書 第207集

史跡松山城跡

— 史跡整備等に伴う遺構確認調査等総括報告書（平成13～29年度） —

2022年3月31日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
〒791 - 8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923 - 6363

発 行 松山市
〒790 - 8571 松山市二番町四丁目7番地2
TEL (089) 948 - 6546

印 刷 株式会社ハラプレックス
〒799 - 1594 今治市喜田村1丁目2-1
TEL (0898) 48 - 5511 (代)
